
大富豪同好会の軌跡

川田章吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大富豪同好会の軌跡

【Nコード】

N1122G

【作者名】

川田章吾

【あらすじ】

とある高校に存在する闇の派閥、大富豪同好会。博打やゲームに励む一方、生徒達の依頼に1000円で全ての範囲の悩みまで解決する先生受けは悪く、生徒受けは良い、大富豪同好会の奮闘を描く。

前半は直接、物語とは関係がないので、時間のない方は2ページ目の「クラス名簿」から読むことをオススメします。

登場人物紹介

とある高校に不気味な同好会が存在した。

その名も大富豪同好会。

響きはいいかも知れないが、活動内容は劣悪だった。

部員たち、否、会員達はトランプの大富豪やUNOで博打をしていたり、学校が禁止している麻雀はもちろん、学校のパソコンでゲームまでする有り様だ。

この同好会は正規な同好会ではない。先生受けが良くないのは当然だが、生徒達からは羨望の眼差しが向けられた……………

登場人物

吉田…17歳。身長169センチ。体重52キロ。大富豪同好会会長。カポエラの達人。最強のゲーマー。博打も人一倍強い。内職として株をやっている。親は離婚し、どちらにも着かなかったため、独り暮らし。女子に対する免疫が汁ほどもない。得意科目ー化学。苦手科目ー英語。

田子…17歳。身長174センチ。体重61キロ。大富豪同好会副会長。吉田並みに博打が強い。ライフル銃の使い手。得意科目ー数学。苦手科目ー地理。

後藤…17歳。身長165センチ。体重49キロ。大富豪同好会書記長。ポーカーフェイスで博打も強い。アーミーナイフやグルカナイフの使い手。得意科目ー数学。苦手科目ー英語。

大野… 17歳。身長181センチ。体重74キロ。大富豪同好会会計。体格の割に内気で、博打には向かないが、女子の人気は絶大。柔道の達人。得意科目ー物理。苦手科目ー現国。

山口… 17歳。身長163センチ。体重46キロ。大富豪同好会会計長。大富豪同好会内唯一の文系。テコンドーの達人。得意科目ー世界史。苦手科目ー数学。

水上… 17歳。身長172センチ。体重58キロ。大富豪同好会の唯の会員。吉田並みのゲーマー。得意科目ー数学。苦手科目ー英語。

黒澤… 17歳。身長164センチ。体重42キロ。バリバリの体育系の女子。顔や声は女子らしく、決して男勝りではないが、下手な男子より、格好いい。得意科目ー物理。苦手科目ー現国。

海老澤… 17歳。身長171センチ。体重53キロ。スポーツ万能、頭脳明晰な男子。誰よりも体力は勝る。体育嫌いの激しい大富豪同好会とは、仲が悪いように見えて、実は仲が良い。得意科目ー英語。苦手科目ー地理。

岩本… 17歳。身長162センチ。体重40キロ。スポーツや学力は人並み。美貌とまではいかないが、なかなかの美少女。大富豪同好会に親近感を抱いているが、大富豪同好会特有の女嫌いのため、近寄れないでいる。得意科目ー数学。苦手科目ー化学。

金子… 17歳。身長170センチ。体重66キロ。海老澤の親友。吉田の席の隣の人物。よく他の生徒に茶化される、いわば、いじられ役。得意科目ー物理。苦手科目ー英語。

井坂…大富豪同好会が健在する高校の生活指導部の部長。特に吉田には人一倍きつく当たる。年齢46歳。

大体の登場人物はこんな感じ。新しい登場人物はその都度説明します。

第1章 始まりの夜

2007年の11月だった。大富豪同好会の部室はなく、代わりに吉田が属している、将棋の部室でいつも通りトランプやUNOで博打をしていた。

「ウノー！」後藤が青の2を出しながら、周りのプレイヤー3人を見た。

大野は出せる手札が無いので、山札からカードをひいたが、出せる手札はなかった。田子は青の7を出した。

「上がりだな。」後藤の右側の吉田はそう言つと、青、赤、緑の2の三枚を一気に出し、上がった。

他の3人は呻いた。

吉田は3人の前においてある、100円玉を全て取った。

今日は定期試験の終わった日ということで、4人は伸び伸びと賭博をしていた。

「最近、依頼はありませんね。それだけ平和なのは、良いことなんだろうが、俺達は退屈だよ。」後藤がだるそうに言った。

吉田は苦笑しながら言った。

「まあ、確かにな。僕は変化のない毎日は飽きたな。」

「井坂も最近部室の見回り来ませんね。忙しいんでしょうか。」大野は山札をきりながら、言った。

「どうだか。あいつは、理想が高いからな。ここ（この高校）を規律正しい所にするんだろ。」後藤がまただるそうに言った。

そう言つと、大野は、カードを配り始めた。

「そりゃそうと、吉田のクラスは定期試験期間会えなかったから聞いてないけど、何か変化はあったか？」カードを配りながら聞

く大野は、若干、赤くなっていた。

「別に。」吉田は冷たく言った。どこか撥ね付けるような言い方だった。

沈黙が訪れた。

大野がカードを配り終わると、それまでずっと黙っていた田子が「勝つ。」と言いながら、100円玉を机の上に置いた。そのわきには碁石があり、何回勝ったかを示していた。田子の隣には7個。後藤が6個。吉田が11個。大野が4個だった。

結局、今日は4人しか来ませんでしたね。18時を時計が指した頃、吉田たちはようやくUNOをやめた。

14時の頃の碁石は、様変わりし、吉田が27個、後藤が19個、田子が18個、大野が9個だった。

「フムフム、3500円が利益か。満足だな。」吉田がニヤリと笑いながら言った。

「俺は、300円か……………」

「私は、100円の損害。」後藤と田子は顔をしかめた。

「俺…………俺…………」大野は財布を見ながら呻いた。

「3700円の損害。」

「まあ、今日は運が良かったからな。」吉田が冷たく言った。

「これからクラスで食事なんだ。」大野はまだ財布を見ながら言った。

「そういやそうだ。田子君。行くよね？」後藤が田子に言った。田子は頷いた。

「じゃ、俺ら集合場所が体育館前だから。」

後藤が吉田に言った。

吉田はどうでもいいと言わんばかりの様子で頷いた。

「お疲れ。」大野が言った。

「ああ、お疲れ。」吉田はそう言うところとは違う方向にある

きだし、駅を目指した。

校舎はシーンとしていた。今日は定期試験終了日だから、皆は解放感に溢れ、家に帰った。若しくは、部活だったため、校舎側に来ると、急に静寂が訪れた。

吉田は成績は上の下、運動神経は下手な運動部員よりも良いのに体育を嫌い、頻繁にサボっていた。性格は冷酷非情で世間体を気にしない、規則は真っ向から破った。

吉田は、

「人に迷惑をかけずに社会反抗をする『悪』になる。」とよく言っていた。

例えば、授業を取り上げれば、授業中に私語するのはよくない。何故なら五月蠅くて迷惑が他人にかかるから。

しかし、携帯をいじったり漫画を読むのは本人の頭が悪くなるだけなので、他人に迷惑はかからないから、良い。といった感じで、先生受けは全く良くなかった。但し、吉田が通う高校は県内でも1番偏差値の高い高校で、その中でも吉田は上の下だったので、先生は黙殺している部分もあるようだった。これは大富豪同好会会員全員に当てはまることだった。

大富豪同好会の会員達は全員自虐的でもあった。大野はかなりモテる方だったのに、自分の金目当てで、俺の魅力ではない、と何人も振っていた。

今日は軟式野球部に行っていた山口や卓球部の水上も何人にも告白されていたが、自分達が有名だから、という理由をこじつけ、振っていた。

吉田は告白されるような事はなかった。何しろ女子に対する免疫が微塵もなかったからだ。女子と話すときは、敬語になり、まともな目を合わせない、バレンタインデーの存在を中3の冬に知ったぐらいだ。吉田が普通の人間ならやらない、若しくはやれない事を平気でやったり、別にウケを狙ったわけではないのに、クラスメー

トは笑った。

そんな吉田に今日、転機が訪れるとは誰も知らなかった。

第1章 始まりの夜2

吉田は駅前の本屋に立ち寄った。

無造作に数学のチャート式の問題をめくりながら、参考文献を探して時間を潰していた。吉田に両親はいない。否、離婚していたのだ。吉田はどちらにもつかないことを決め、父親が生活費だけを振り込んでいる、独り暮らしだった。母親は、吉田が9歳の時に交通事故で死んだ。離婚したのは、7歳の時でそれ以来、独り暮らしだった。吉田は本屋をゆつくりと後にした。近くのマクドナルドからは良い香りが漂っていた。駅近辺には腕くみしたカップルが多かった。道行く人は吉田を見てバカにしたように笑った。

元来世間体を気にしない吉田は、ようやく、駅に入った。

入った瞬間、異様な光景を目撃した。

背の高い茶髪の子が数名、駅員達と言い争っていた。吉田はかなり遠くから聞いていたが、男達の怒鳴り声は聞こえてきた。

「だから、誤解だつてんだろが！やってねーもんはやってねーんだよ！」男はどこか不良くさが漂っていた。

「嘘！触りました！いきなり後ろに回り込んで……………」見るとかなり背の低い女性が泣いていた。

痴漢騒ぎのようだ。

「とりあえず、署の方へ……………」駅員がそう言うと、不良の男は逆上した。

「何で俺が行かなきゃならなんだよ！やってねーつてんだろが！しばくぞつコラッ！！」不良の男が軽く駅員の顎を小突いた。

「素直に……………認めなさいよ……………自分が触りましたって……………」

女性が言った。吉田はその声を聞いてビクリとした。

（まさか……あの声、あの身長は……）

「何や

ってんの？その人？ああ？警察呼ばうとしてんの？」不良グループの一人が側にいた男子に声をかけた。男子は怖れおののき、声が出なくなつたようだった。駅内は静まり返り、警備員が一人やつてきた。

「何の騒ぎだ！何をしたんだ、お前達は？」警備員は年齢がいつていたが、堂々と言った。

「ポリ公か。何かねこのねーちゃんが、俺が痴漢したつて言いがかりつけんだよ。」

「言いがかりじゃありません……」

「じゃあさ、聞いてみようか。誰か、この人が、痴漢するの、見たひとオ？」三人目の不良が言った。誰も反応しない。

「誰も見てないつて。言いがかりの賠償してもらおうか。」三人目の不良が女性の細い腕を掴んで、連れ去ろうとした。

「待て！……！まだ話は……」グガアア「警備員は制止し

ようとして、今まで一言も発していなかった四人目の不良に殴られ、伸びてしまった。駅員2名も同じ目にあつた。

「助けて！助けて！涼……！」女性は泣き叫んだ。

涼と呼ばれたのは先程電話をしていた男子だった。一応男達に向かつて行った。結果は見るも無惨、失神させられた。

「涼！涼！誰か……！」女性は最後の望みをかけるように叫んだ。

「ねーちゃん、暴れんなよ。その綺麗な顔を二度と見れなくてやろうか？」

不良グループはせせらわらつた。

それでも女性は諦めない。その時だった。

「誰か……だれ……」

女性と吉田の目が合った。

「……吉田……君……？」

吉田は今まで壁に持たれていたが、冷たい表情で、不良グルー

プに近づいた。

不良グループは女性が多くなったので、こちらを向いた。

「おう、兄ちゃん、何かようかい？この子の王子様かい？」不良のリーダー格の人間が聞いた。

.....

「どうした？ねーちゃんの彼氏かい？？」

.....

「何とか言え!!! コラァ!!!!!!」

.....

「……ッのッッ！」

不良は吉田の肩を殴った。吉田は若干動いたが、口を開いた。

「先に手を出したな。愚民が。カスが。これで僕がやることは全て正当防衛だ。」

「何いってんだ？兄ちゃん？自分かな……ギャアアアア」

「ア！！！！！！！！！」不良は途中で目から血を流し、その場にうずくまった。

左目失明しちゃったかな？まあ、どうせ、目が有ったって、

化学ができるわけでも数学ができるわけないもんなあ？」吉田が冷たい笑い声を出した。

「てめえ！！！！！！」不良は巨漢二人係で、吉田を攻めた。が

「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！」

! ! ! ! ! ! ! !

先程より派手な悲鳴が上がった。

吉田は二人のうち、一人の足をレスリング技のように抱き抱え、もう一人の巨漢に体当たりし、階段の角に頭をぶつけさせた。軽い脳震盪を起こしたらしい。

「さて」吉田が振り返った。

「分かったこの女は返す、だから来るな……！」不良の最後

の一人は恐れをなしたようだ。

「ああん？人に物を頼むとき、ってそんなだっけ？」吉田が残酷な声を出した。

「すみません。許して下さい！！！！」

「失せるボケ！！！！」吉田がそう叫ぶより早く、不良達は逃げ出した。

吉田は荷物を拾いあげるとそのまま去ろうとした。

「待つて……………」後ろから先程の女性の声がした。

吉田は振り返った。

「確か……………君は……………同じクラスの……………」

「山口です。……………忘れちゃったの？」

少女が涙を拭きながら言った。普通の男子なら間違いなく見られるだろうが、吉田はあっさり目を反らした。

「それより……………いいんですか……………あれ？」

吉田は彼氏と思われる男子が立っていた場所を見つめた。

「……………いない。逃げちゃった……………た？」

山口は失望したように言った。

「そうですか。じゃ、今日は、これで。」吉田はあっさり駅のホームに行こうとした。

「ちよつと……………待つて下さい！」

「はい？」吉田は面倒くさそうに言った。

「あの今日はありがとう。吉田君、喧嘩強いんだね。」

「はあ……………」吉田のこえにもういいだろ、と言った感じがした。

「あの……………私、彼にはガッカリしました。」

彼とは、彼氏の事か？何故そんなことを自分に言うのだと吉田は訝った。

「もし、良ければ、吉田君の仲間になってください！！」普通なら何の事はないセリフを山口は赤くなりながら、言った。

「……………僕の対人感情は、『親友』『友達』『仲間』『知り合い』『クラスメイト』『その他』『敵』ですからね。仲間……………ですか。」

「私……………もう怖い……………でも吉田君なら私を護ってくれそうだから……………お願いします。」山口は右手を出した。その真摯なセリフに射たれたか、吉田は手を握り返し握手した。

「新しい仲間が増えたした。よろしくお願いします。」
「こちらこそ。」山口は涙を拭き、笑いながら、そして手をふりながら去っていった。

吉田は軽く一礼した。

第2章 稀有な依頼

新たな

「仲間」が増えてから、一夜が経過した。

吉田の自宅は高校から電車で40分の所にあるスラムに近い場所だった。

吉田はパソコンの前から少しも動こうとはしない。

大富豪同好会は学校のパソコンを用いてゲームをしていた。これは教室でやらなければ出来ないことなので、教師に見つかる可能性が大富豪やUNOに比べると高かった。パソコンでそんな事が出来るなんて、だとか懐かしい、だとかで生徒受けは相当良かった。

吉田は勉強を済ましてから、パソコンのゲームやインターネットをやっていた。今日は休みだから、それほど予習する意味はないので2時間だけ睡眠をとっていた。平日は趣味の時間がなくなるということで、勉強をしたのち、時刻が午前1時を過ぎていても、眠らず、パソコンを朝までやっていた。そんな訳で日頃から吉田は寝れていた。

正午になった頃、吉田はパソコンを閉じた。伸びをしたのち、新聞を読み始めた。自分の県の欄に、駅員と警備員に対する暴行を働いた4人組が一人を除いて、何故か重傷で見つかった、と書いてあった。吉田の脳裏を昨日の山口の笑顔が過った。

吉田は顔をしかめ、無理にそういった雑念を降り飛ばした。彼が、恋愛を嫌う理由。というより大富豪同好会が女性に免疫がない理由。

恋愛を優先させて学力が充実している輩は一人もいなかったからだ。それだけの理由で、イケメンな水上や、大野は彼女がいなかった。

週末が明けた月曜日の朝。いつも通り吉田はクラスに一番に着き、パソコンの電源を入れた。其処へバスケット部の金子がいつもより、1時間ほど早くやって来た。吉田は金子の存在には気付いたが、例のごとく、無視した。すると隣の席ということもあり、金子は話しかけてきた。

「おはよう。吉田く噂がたってるぞ。」金子は吉田を苛つかせる笑みを口に浮かべながら言った。

「？……………何のだ？」

「お前、山口さんを不良から守ったんだろ？」

「……………」これだ。吉田は金子に背を向け、

舌打ちをした。まさに危惧していたことだった。金子に噂が回るくらいなら、大富豪同好会の会員達が知らないはずがない。吉田は会員達が、どんなやり方で自分をからかうか、慎重に考えた。

「下心見え見えだぞ」でも山口さんな、彼氏持ちだ。残念だったな。「金子はしたなめずりした。」

「……………」

吉田が回想に更ける間、金子は色々恋愛を成就させる方法や、女子の対人感情を話していた。吉田は全く聞いている様子がないので金子の最後の止めを刺すためのものだった。「何か、山口さんを見捨てて逃げてたけどな。」吉田は他のことを考えながら言った。

「えっ？」金子が素頓狂な声を出した。金子が口を開こうとした時、教室のドアが開き、5、6人入ってきて吉田との対談は中断された。

その日の放課後――

吉田は大富豪同好会会員数人達と、エミュレータ（パソコンでのゲーム）をしていた。スーファミのボンバーマン5で皆懐かしがって、色々な民間人がやっていった。

「今日は山口さんとはどんな感じだったんだ？」同じクラスの

小橋が吉田に聞いた。

「別に何も。一言も話してないな。それこそいつもどおり。」
吉田が冷たく言った。

「そうか。そりゃ良かった。吉田が恋愛に目覚めたのかと思っちゃ………ウワァ………！！」小橋がそう言った時、吉田が情け容赦なく、小橋を殺した。

「これで3タテだな。」吉田が不敵な笑みを浮かべながら言った。

「ハハ……恋愛に目覚めてたらこんな強さは誇れないな。心情の変化は即、活動に表れるからな。」端で見ていた田子が言った。

「………いい加減からかうのは止めてくれないか？しかも彼女を助けたのは同好会の仕事を如実に表したと思ったが。」吉田が冷たく言った。田子と小橋は突然黙った。吉田の声には変化はみられなかったが、小橋や田子には僅かにそして、激しい怒りを感じられたのだ。

カーン、カーン、カーン。予鈴がなり、校舎ロックの時間が来た。

「移動するか。」田子が荷物を取り上げた。

吉田は頷き、パソコンの電源を落とした。

「今日は昨日より遥かに少ないですね。」部室で待機していた後藤が言った。小橋は用事があると言って帰ったため、田子と吉田、後藤の三人しかいなかった。

「まあ、11月だし、暗くなるのは早くなるし、寒いしな。」

「三人で賭けるのは愚の骨頂だな。」田子が頷いた。

「もう、帰りましょう。」後藤がそう言って立ち上がった時だった。

ドンドンドン………！！！！！！

激しく扉を叩く音がした。

三人は硬直した。

第2章 稀有な依頼2

「……………9から7」後藤が扉に向かって言った。

「7から5」扉の向こうで合言葉をすらすら言う声がした。吉田がよく知り、他の二人はキョトンとしている。

「大丈夫だ。入れよう。先公ではない。金子という僕の仲間だ。」
吉田が言った。

後藤は頷いて、扉を開いた。やはりそこには金子がいた。しかし一人ではなかった。

「吉田……………厄介な事になった。」金子は後ろの女子生徒を見ながら言った。女子生徒に関しては、その場の3人全員が1年生の同じクラスだったので知っていた。

「……………黒澤さん……………」後藤がボソツと言った。

そうだ。金子と幼馴染みで部活も一緒という、冷やかしの為に存在するような関係だった。

しかし今の金子は深刻な表情だった。黒澤は泣いてはいなかったが、震えていた。

「なにが……………」吉田はこう言おうとして、やめた。部室棟の大富豪同好会会室から少し離れたところで、複数の声を聞いた。

「顔を見られちゃったか？」

「間違いなく見られた。電灯のちかくだったしよ……………」

「じゃ拉致るしかねーな。」

複数の低い声が聞こえた。

カタンカタンカタンカタン。

複数の足音が聞こえた。階段を上がってくるようだ。

「自販機荒らしの奴等だ！！見つかる！」金子が言った。吉田は状況を素早く理解した。

「田子、電気を消せ！」

田子が音を発てずに明かりを消した。

「出窓の死角に移動しよう。もし、ドアを開けたら、不法侵入で一気に取り押さえる。」後藤が早口に言った。

「……………誰もいないぜ。」

「もう、警察に通報されてるかもな。」「ヤバイな。今日はもうバクレようぜ。」

「だな。」ガサガサという音と共に、階段を下りる複数の足音がした。

金子がドアを開け、飛び出そうとした。が、かなわなかった。吉田が金子の足に自分の足を絡ませて、転ばせた。

「止める。捕まえたとしても何の証拠もないぞ。」

「そうです。それより、何があつたか話してください。」後藤が吉田の意見に同調した。

「……………俺は、瑞穂に会ったのは、瑞穂が逃げるところだったから何も……………」金子が言った。瑞穂というのは、黒澤の下の名前だ。

「何があつたか詳しく聞かせて下さい。」田子は黒澤を椅子に座らせながら聞いた。

黒澤は深呼吸して語り始めた。

「はい……………私が帰ろうとしたら偶然、自販機荒らしにあつたんです。ビックリしてかくれようとしたら、後ろから美樹に声をかけられて……………それで自販機荒らし達に気付かれて、追われたんです。」黒澤は一気に言った。

「美樹って誰です？」吉田が言った。金子はせせら笑って言った。「蛭原さんの下の名前だよ。まあ、お前が女子の下の名前を覚えてるはずがないしな。」

「じゃ、蛭原さんはどうしたんです？」

「連れ去られました……………たぶん。」

一瞬間が空いた。

「何だと？じゃあ、依頼ってそれ？荒らし達から守ってもらったじゃないのか。」金子は呆れたように言った。

「荒らし達が来たのは全くの偶然。お願い……………美樹を助けて……………」

吉田が考えながら口を開いた。

「蛭原……………さんは本当に連れ去られたんですか？その瞬間をあなたは見たんですか？」

「見ました……………そこで助けを大声で呼んだら、バールの様なものを持ちながら、走ってきて……………逃げ出したところを偶然匠に会って……………」

「金子って下の名前匠だっただけか？」吉田が言った。金子は呆れたように頷いた。

「……………では、蛭原さんは本当に連れ去られた。」田子が納得できないといった感じで言った。

「だが……………」吉田が口を再び開いた。

「さつき、階段を上がってきた時は誰かを連れている感じではなかったな。黒澤さん……………君が見た犯人グループは何人組でした？」

「私を追ってきたのが二人、美樹を押さえてたのが、一人……………です。」

「そういえば、最近、三人組の自販機荒らしが出没してると聞きましたよ！！」後藤が思いだし、歓喜して叫んだ。

「確かにそんなポスターを見たような……………」吉田が言った。

「でもさつきの奴等は三人だったよな？」金子が、誰かにというより、自分を安心させるために言うような口調で吉田に聞いた。

「声は3通りだった。間違いない。」答えたのは吉田ではなく、田子だった。

「ああ。黒澤さん……………」吉田は初めて黒澤の目を見ながら話した。黒澤が若干頬をピンク色に染めた。

「はい……………」

「恐らく、蛭原さんは何とか抜け出したんだと思います。携帯で確認を……………」吉田が促した。　「あつ……………！！私どうかしてる……………そんなことに気がつかないなんて……………」黒澤は携帯を取り出すと素早く電話をかけた。

10秒は経つたろうか、応答があつた。

「もしもし、私だけど、美樹、無事？」黒澤は必死の様子で言った。

「お前は……………フンフン黒澤瑞穂というのか。俺たちを見ていてタダで済むと思うなよ……………あの女なら、逃げちまった。足の速い女だ……………それに……………」

「ヒッ……………」黒澤は電源ボタンを連打した。

「携帯を取り上げられたんですね……………それより……………」後藤が言った。　「非常にまずいですよ……………奴等の顔を見たのが君だつてばれましたよ。声も聞かせちゃったし……………」田子が深刻な表情で言った。

「……………奴等は瑞穂を殺しに来るのか？」

「それはないな……………今は……………。何時かは殺しに来ますよ。不利な状況を見られたんですからね。」吉田が言った。

金子は心配そうな顔で黒澤を見た。

「私……………怖い。どうすれば……………」

「そうだ……………！！！！依頼を変える……………！！！！瑞穂を保護してくれよ。奴等が捕まるまで。」

「後藤も田子ももう各人保護しなければならない人がいるんだ。」

吉田が言った。

「じゃ吉田。お前が守ってくれ。」金子が素早く言った。

「お願いします。きちんと代金も払うから……………」黒澤が言った。
「依頼ですからね。分かりましたよ。犯人が捕まれば終わりですね？」

「ああ。」金子が言った。

「黒澤さん、これから帰るときは、複数で帰って下さい。これさえ守れば、大丈夫です。」吉田が言った。

「分かりました。ありがとう。吉田君……………」

…………… 第3話に続く

第3章 最凶の転校生

黒澤をしつこく追い求めた犯人グループは、12月の下旬に逮捕された。何でも、地元の男子校を狙ってしまい、数人がかりで捕まえられたらしい。

冬休みが明けると、学校が変化し出した。否、変化がおおっぴらになった。入試に関係ない授業中に机の上で堂々と漫画を読んだり、携帯をいじったりした。

昼休みはパソコンでエミュレータ（ゲーム）をしたり、モノポリーをしたりと、良くない風習が広がった。但し誰も、人に迷惑をかけるような事はしなかった。

吉田や金子、その他の大富豪同好会会員達がどんどん、同好会のモットーを説いたからだ。無論、先生受けがいいはずがなかった。そして、自由な県トップの学力を誇る高校に正義の手がのびようとしている事に、誰もきずかなかった。

ある日、吉田の幼馴染みである、小林が深刻な面持ちで吉田に言った。

（小林：身長177センチ。体重61キロ。サッカー部所属の格好の良い男子。成績は学年一桁順位。体力テストはAランク。吉田と対極にたつ人物だが、幼馴染みということで、吉田は唯一完全に信用している人間。吉田には喧嘩の相性が良く、負けたことがない。）

「貴司、まずいぞ。井坂が放課後、進路指導室に來いだとき。」

「来たな。また逃げるか。」吉田がせせら笑った。

「それなんだよ、問題は。」

「あん？」

「授業終了と共にお前を待ち構えているらしい。」小林がニヤリと笑った。

「それは廊下でか？」

「普通はそうだろ。さあ、どうするんだ？」

「あれだな。」吉田はベランダを指差した。

「……また、大胆な事を。好きだなあ、貴司は。」

「まあね。小林はあまり僕と居るところを見られない方がいい……

……ほら」

吉田がそう言つて、指差した先に、複数の女子が小林を見ていた。

小林は謙虚な笑い方をした。

「大丈夫だ。貴司を見ている女子も少なからず居るようだ……

……。」小林はそう言いながら、女子の方に視線を走らせた。黒澤や山口は素早く視線を反らした。

無論吉田は気付いていない。

「まず小林が僕にそれを伝えたことを感謝します。」吉田は最後に笑った。

（芯は優しい奴なのに……中学校の記憶はああいう物にしちまうもんだなあ。）小林は密かにそう思い、微笑んだ。

「分かった。クラスの下に置いとく。荷物はあらかじめ、部室に置いていた方がいいな。」田子が何やら口頭で、吉田にアドバイスをしていた。

「よし、分かった。井坂がどんな顔をするか楽しみだな。」

「それにしてもどうやって、井坂の巡回の話を知ったんだ？」

「小林が教えてくれたのさ。掃除場所が進路指導室で昨日サボった罰として、昼休み逃げないように、廊下で待っていたんだ。小林はあっさり捕まった。で、進路指導室を掃除している最中に井坂が、数人と僕について話していたらしい。」

「同じ手を使うかな？」田子が言った。

「いや、更に厳しくなるだろ。校門とかを塞いでいるらしい。」

「イカンな。それじゃあ、進路指導室に行かなくなつて、帰れ

ないじゃないか。」

「フン。僕が孤児だということを忘れたのか？いざとなったら、部室に泊まってやるさ。」

「

分かった。じゃ準備しておく。」

「ああ、頼んだ。」吉田は通話を終了した。

カーンカーンカーン。予鈴がなり、授業終了を告げた。

吉田は横目で廊下を見た。曇りガラスを通して、井坂のような人間を確認した。

吉田は迷わずベランダに飛び込んだ。ベランダの柵を跨ぐ。

「吉田……こっち……！！！」田子、後藤、大野の3人が、マットを用意していた。田子は気をきかせて、走り高跳び用の柔らかいマットを用意していた。

吉田は迷わず飛び降りた。無事着地すると、部室棟に素早く駆け込んだ。後藤達はマットをサツと片付けてしまった。

「何？逃げられた？」進路指導室の部屋に校長の冷たい声が響いた。

「はい。……すみません。」

「謝って済む問題ではない。」

「はい。」

「これが何だか分かるか？」

校長は井坂の前に紙をヒラヒラさせた。『退学手続き』……

「有効なのは今日までにサインした場合だ。本人が逃げたら、また県教育委員会に証拠の提出から始まるのだ！！！」校長が激しく言った。

「すみません。隈無く探しましたが、部室棟にも駅近辺にもいませんでした。」

「もう手遅れだ。減給とする。」校長が立ち上がった。

「この高校もこのままでは、まずいぞ。」

「待って下さい。校長。」

「何だ？」

「ある計画があります。」

「それは何だ？」

「今お見せ致します。おい入って来い。」井坂は突然、廊下に向かって叫んだ。

ガタガタと音を発てて学ランを着こん男子生徒が9人入ってきた。
「何だ？こいつらは？！」

「転校生です。防衛大学附属高等学校の。こいつらに、吉田達を叩かせましょう。」井坂はニヤリと笑った。校長は身を乗り出した。

「作戦を聞こうじゃないか……………。」

第3章

最凶の転校生2（前書き）

新登場人物
がつよい。

小橋：一年からの吉田の仲間。他人に依存する傾向

第3章 最凶の転校生2

「おい、聞いたか貴司。」

「あん？」小林が挨拶もせずに入ってきて、パソコンのゲームに小橋と共に熱中している吉田に言った。

「今日からこのクラス……いや、2学年全体に転校生が来るらしいぞ。何でも、全部で9人だとか。」

SEGAのぶよぶよで吉田が10連鎖を下し、25勝10敗ときりのよい数値になったとき、吉田は言った。

「一クラスだけ2人だな。うまく、文理別れた場合は。」

「だね。で、名前は？」小橋が聞いた。

「知らん………全員男子らしいが。」小林が残念がる振りをした。

「何でまた、今の時期に。小林はどうしてそう情報通なのかね。」

吉田が

パソコンをカチツと言わせて、今度は桃鉄を始めた。

「いや、サッカー部の顧問と井坂は親しいんでね。でも確かに、何で今の時期に何だろうな？」

「しかしなあ、どんなやつ何だろうな？」吉田は心にも無いことを言った。

吉田達が通う高校は朝のホームルームはなく、いきなり、一時間目の授業となっていた。授業は朝の8時35分からだった。吉田の座席は最後尾で、左隣に蛸原、右隣に金子だった。ちなみに前はボクシング部の鈴木、左斜めに女子のクラス委員長。右斜めに金子と同じバスケット部の海老澤がいた。吉田のクラスは41人編成で縦×横が6×7だった。

A B C D E F G

1
2
3
4
5
6 上図のようになっていた。吉田はC6、A6は一席余りのため、
空席だった。

カーンカーンカーン。授業開始5分前の予鈴が鳴った。
今日は珍しく、吉田は早めに切り上げることにし、電源を落としジ
ョイパッドを片付けた。それは正解だった。

「よし、みんな席につけ。」そう言ったのはクラス担任の川島だ
った。

金子と海老澤がバスケット部の朝練のため、まだいなかった。鈴木
が吉田の方を向いた。

「何だ？今日は朝のホームルーム有りか？」

「らしいな。どうやら転校生が来るらしいぞ。」

吉田は数学の三角関数の問題をすらすら時ながら言った。

「転校生？本当かそれ。」

吉田がシツという音を出した。

「三倍角の公式忘れちゃった……教科書、教科書……」

「人の話を聞いてくれよ。」鈴木が苦笑いしながら言った。

「うん？質問何だっけ？」吉田は数の教科書を捲りながら聞いた。

「転校生が来るってのは、本当か？もし来るなら、何処に座るん
だ？」

「本当だ。小林が嘘をついていない限りはな。座るなら空いてる
そこじゃないのか。」吉田が二つ隣の席を左肘で指した。

隣の女子は吉田を見たが、鈴木も吉田も目をあわせようとしない
ので、前のクラス委員長と話始めた。鈴木は口を開いたが、担任
によって声を出すことを阻まれた。

「静かに。今日は転校生を二人紹介する。」

「！！！！二人だと？」体を半分こちらに向かせて、鈴木が言った。

「入っていいぞ。」川島が言った。

ガタガタガタ。二人の生徒が入ってきた。
教室は静まり返った。

二人は迷彩服を着、水筒をぶら下げ、双眼鏡を肩にかけていた。しかし、この二人の話し方に比べればまだこの異様な格好も序の口だった。上図のようになっていた。吉田はC6、A6は一席余りのため、空席だった。

カーンカーンカーン。授業開始5分前の予鈴が鳴った。

今日は珍しく、吉田は早めに切り上げることにし、電源を落としジヨイパッドを片付けた。それは正解だった。

「よし、みんな席につけ。」そう言ったのはクラス担任の川島だった。

金子と海老澤がバスケット部の朝練のため、まだいなかった。鈴木が吉田の方を向いた。

「何だ？今日は朝のホームルーム有りか？」

「らしいな。どうやら転校生が来るらしいぞ。」

吉田は数学の三角関数の問題をすらすら解きながら言った。

「転校生？本当かそれ。」

吉田がシツという音を出した。

「三倍角の公式忘れちゃった…………教科書、教科書……………」

「人の話を聞いてくれよ。」鈴木が苦笑いしながら言った。

「うん？質問何だっけ？」吉田は数学の教科書を捲りながら聞いた。

「転校生が来るってのは、本当か？もし来るなら、何処に座るんだ？」

「本当だ。小林が嘘をついていない限りはな。座るなら空いてるそこじゃないのか。」吉田が二つ隣の席を左肘で指した。

隣の女子は吉田を見たが、鈴木も吉田も目をあわせようとしないので、前のクラス委員長と話始めた。鈴木は口を開いたが、担任によつて声を出すことを阻まれた。

「静かに。今日は転校生を二人紹介する。」

「！！！！二人だと？」体を半分こちらに向かせて、鈴木が言った。

「入っていいぞ。」川島が言った。

ガタガタガタ。二人の生徒が入ってきた。

教室は静まり返った。

二人は迷彩服を着、水筒をぶら下げ、双眼鏡を肩にかけていた。しかし、この二人の話し方に比べればまだこの異様な格好も序の口だった。「俺の名は、服部進二だ。前は防衛大学の付属高校にいたが、この学校の体たらくを直すため校長に『雇われた』。だから、生徒ではない。お前ら、生徒よりも権力は上だ。敬意をわきまえる事を勧告する。以上だ。」服部の話が終わっても誰も拍手しない。二人目が語り出した。

「俺は、保坂翔平という。服部が俺の言いたいことは話してしまった。一つだけ追加しておく。俺たちはお前らが他人から見られても優等生だと思われるようになるまで、何処にも転校しない。お前らを優等生に『調教』することが校長の指令だからなあ。以上だ。」

二人の話が終わるが早いか、川島は席を二人に案内した。川島は特別、二人に驚いている様子はない。あらかじめ、何の目的の転校生か知っているに違いなかった。

「じゃあ、服部は蛭原の左隣。保坂は……………」

「教官。私は校長より、『監視員』8人の監督を任せました。ここで授業を受けません。」保坂は畳み掛けるように言った。

「分かった。じゃあ、みんなよろしくな。おっとこれはいけない。」既に一時限目の数学担当の柴田が来ていた。川島と保坂は柴田に頭をさげ出ていった。

ガラガラガラ……………海老澤と金子と黒澤がバスケ部の活動を終えて入ってきた。

「ふう、ヤバイヤバイ。」金子は急いで席に付いた。しかし海老澤はゆつくりと後ろの座席の生徒と会話をしている。

「もう授業は始まつてるぞ。座れ。」吉田とは違う新種の冷たい声がした。吉田の声はただ冷たいだけが、服部の声はどこか楽しむような冷たさだった。海老澤が固まった。

「座れと言ったはずだが。」

「お前だれ？」海老澤がうざそうに言った。

「言葉を慎め。俺はこのクラスの『監視員』の服部だ。」

「監視員？」

「ああそうだ。この学校の体たらくを直すため、校長より指名された。お前みたいに、授業開始の時刻を無視してやって来たりな……」

「……………」普段誰にも優しく、スポーツ万能で女子に人気の高い海老澤が激しく怒っていた。

だが、何も言わずに座り、その場は収まった。休み時間、服部はいち早くクラスを出ていった。

「次何だっけか？」金子が吉田に聞いた。

「化学。」吉田は今度は指数対数関数の問題をすらすら解きながら言った。「家庭科だよ！！」吉田の返事を聞いた海老澤が苦笑いした。

「なにそれ。美味しいの？僕は内職するから化学で間違いないんだがな。」吉田が言った。

「しかし、何だあいつ。転校生か？偉そうな奴だなあ。」海老澤が言った。

「ウザイなら喧嘩すりゃよかったのに。」吉田は数学の教材から

目を上げずに言った。

「吉田や小林みたいに喧嘩強くないからね。自信ないよ。」

「嘘つけよ。彼女守るために、ゴロツキを1対2で倒したんだろ。十分つええよ。」鈴木が言った。

「まあ、吉田は山口さんの気を惹くために、1対4で勝ったんだろ。しかも無傷で。」

「……………」肯定も否定もせず、吉田は数学の教材を閉じた。
「鈴木だって、ボクシング部の連中と共に、地元の不良根こそぎ倒したんだろ。」

「7対7だからな。」

「でも、そのうち3人は鈴木が倒したんだろ。」

「……………」

「鈴木 of 彼女、志帆と友達だからな。」海老澤が言った。志帆と
いうのは、海老澤の彼女の名前だ。

カーンカーンカーンカーン。

予鈴が鳴った。

服部が入って来ても家庭科は静かにならなかった。

家庭科担当の女性教師、浜田が起立と言っても、全員は立ち上が
らなかった。その時、ドーンドーンドーンという銃声がした。

生徒達が振りかえると、服部がデザートイーグルを天井に放っ
ていた。

「教官の命令は絶対だ。全員、今すぐ立て。」

泣き出す女子や震える男子が現れた。浜田はニヤリと笑った。

家庭科の授業は何時になく静かだった。

服部が銃をもっているの、吉田や海老澤、小林も鈴木も金子
も手出しがでなかった。恐怖による沈黙も続かなかった。

吉田の隣の女子の携帯のバイブが鳴った。

その瞬間、服部が机の中の携帯を奪った。

「何するの?! 返しなさい!」蛭原が叫んだ。

「授業の妨害になるものを排斥するだけだ。」

「コノオー！」 蛭原は服部の手首に掴みかかった。ところが、服部は簡単に蛭原を突き飛ばした。辛うじて、吉田が受け止めた。

「てめえ！！！」 叫んだのは吉田ではなく金子だった。

金子が勇敢に服部にとびかかり、床にねじ伏せた。

「謀反だ。応援を頼む！！！」 服部が襟のマイクに向かって冷静に言った。

「コノヤロ……………ウワアアアアアア！！！！！！！！！！！」

防衛大学付属高校出身だけあって、簡単に跳ね起き、金子を投げ飛ばした。ドアがガラガラと開き、4人が応援にきた。そのとたん、小林、鈴木、海老澤の3人が立ち上がった。

一方服部は銃を金子に向け、一発撃った。僅かに金子をそれた。二発目は……………撃てなかった。吉田が得意の力ボエラで、服部の手首を器用に蹴った。服部の手首が曲がり銃が飛び、開いていた窓から、落ちた。

「小橋、取ってこい！！！！」 吉田は小橋に向かって叫んだ。

小橋は戦いをぬって、非常階段から外に抜けた。

殆どどの生徒がこの格闘を見守った。鈴木は転校生に馬乗りにされてしまった。小林は一人を気絶させ、新たな敵と戦っていた。海老澤は転校生の保坂の繰り出すぬんちゃくの攻撃に手を出せずにいた。

服部がアーミーナイフを取りだし、蛭原を捕まえ、喉元に突きつけた。

「戦うのをやめろ。さもないと、こいつを殺す。本気だ、許可されてる事だ。」

一瞬、海老澤と小林は気を抜いてしまった。

その途端、各々の相手が強烈な一撃を鳩尾に食らわした。二人とも動けなくなってしまった。

金子が力を振り絞り、服部の腕をこじ開けた。 蛭原が脱出したが、金子は突き飛ばされ頭を打って動けなくなった。

「吉田！！！！」小橋が、吉田の命令通り、銃を取り、吉田に投げた。

吉田は普段からエアガンには慣れていたが、銃を撃つのは初めてだった。

吉田は誰もが啞然とするなか、小林、海老澤、鈴木を倒した転校生達に向かって発砲した。弾は一発も外れず、敵の脚や、腕に当たった。

敵は痛みから回復した小林達に押さえられた。しかし、その途端、吉田左肩に激痛が走った。服部がアーミーナイフを深々と吉田に刺したのだ。鮮血が吹き出した。

吉田はそれにも関わらず、服部の腹を撃った。服部は痛みには動けなくなった。

鈴木達はフラフラと教室を出ていった。

吉田は服部の持っていた携帯を奪うと、持ち主に返した。肩の重傷のためか動きがぎこちなかった。海老澤と二人で金子を担ぎ上げようとして出来なかった。後ろから何か柔らかく細い物にしがみつかれた。

「……………ありがとう。瑞穂だけじゃなく私も助けてくれて……………」

……肩の傷……………ごめんなさい……………貴司……………君……………」
「蜷原は泣きながら言った。吉田はビックリするあまり、動けなくなった。海老澤はニタアと笑って言った。

「盛んだな……金子は俺に任せてごゆつくり。貴司君。」
「海老澤はニヤニヤしながら出ていった。

その後、転校生達は作戦を立て直すため、手負いにも関わらず、進路指導室に呼び出された。まだ戦いは始まったばかりだった。

第4章 新たなる感情

「ひどくやられましたな。」転校生と戦った日の放課後、吉田が棋道部に行くと、後藤が吉田の着替えも手当てもしていない、血まみれの左肩を見て言った。

「まあな。意外に強くてな。さすがは防衛大学付属高校出身だけあって、一筋縄ではいかなかったぜ。」吉田は痛みに堪えるのを表情に出さぬよう努力した。

「さて、来たばかりで悪いんですが、依頼がありますよ。」後藤が吉田に手紙を渡した。吉田は器用に右手だけで封を開けた。

「フムフム、これはごつつあんのクラスメイトからか？」

「そうです。岩本さんからです。」

「また？本当にトラブルに巻き込まれる回数が多いよな。」

吉田が手紙を読み始めた。岩本というのは、黒澤と同じく、1年の時のクラスメイトで美少女であった。初めて吉田と話したのは、彼女の最初の依頼で、ストーカー行為を止めさせた時だった。

「なになに。『こんにちは。また新たな依頼で申し訳ありません。今日お手紙をお渡ししたのは、メールでは、携帯会社に記録が残り、直接話せば、誰かに盗聴されるからです。今回の依頼は私の弟の身辺に起こる、怪奇現象の数々を解いて欲しいのです。詳しい内容は今度の月曜日の放課後お願いします。』か。」

吉田はポケットからライターを取り出して、手紙を燃やした。

「だいぶ、彼女も危機管理が身に付いて来ましたね。」後藤が言った。

「まあな。はたからみれば、気持ち悪いけど、死にたくなければそうするのが得策だからな。」

「死に至るかどうかわかりませんが、俺達みたいに、世間体を気にしないなら大丈夫ですよ。岩本さんは世間体を気にしないんでしょうかね。」

吉田は肩をすくめた。

今日は二人しか来ないのか。

吉田はノートパソコンとジョイパッドを取り出した。

「さあ。二人しかないんだから、パソコンでゲームをする以外手はなかるう。」吉田は不気味な笑みを浮かべながら言った。

数時間が経過した。ぷよぷよのカウントを見ると48対31…

……吉田が後藤をやや圧倒していた。

「間に合うか?! …………… シャアアアアア!」吉田が後藤の9連鎖を11連鎖で返ししながら叫んだ。

80戦目が終わり、49対31となったところで、二人ともゲームを止めた。その時、ドアをトントントンと3回叩くものがあった。

吉田と後藤は顔を上げ、依頼人が初めてでない人物であることを悟った。

「どうぞ。」後藤は顔を下げながら言った。

「……………失礼します。」静かな声と共に、海老澤が入ってきた。後藤にしても海老澤は1年の時、同じクラスだったので、面識があった。

「ごっちゃん久しぶり。」海老澤は何故かドアを閉めなかった。

「久しぶり。今日は連れがいるんですか？」後藤はドアを見やりながら言った。

「ああ、吉田。」ここで海老澤は吉田に向き直った。吉田は海老澤を直視したが、何の反応もしなかった。

「君の居場所を教えてくれ、とせがまれた。俺は、『奴は警戒心の塊のような人間だ。無用心に近づいたら、怪我させられるだけだ。』」と忠告したが、『このまま何も言わずに黙っているくらいなら殴られた方がマシです!』なんと、必死に言われるからさ、教えちゃまった。やはり駄目だったか？」海老澤は一気に言った。

「……………そんなに強い意志がある人か……………それにしても、『このまま何も言わずに黙っているくらいなら殴られた方がマシです』なんて誰が言うんだ？」吉田が顔をしかめた。

「それはそれとして、その方は何処にいらっしゃるのです？」

後藤はドアを見やりながら言った。海老澤はくるりと後ろを見た。

「入って大丈夫だよ。」いつになく、真面目な声で海老澤が言った。

静かな足音と共に入って来たのは、蛭原だった。吉田の目は今まで冷たかったが、少なくとも、感情のこもった目に変わった。後藤にしても同じバドミントン部だという事で、知り合いだった。

一瞬沈黙が訪れた。

だが次の瞬間、蛭原は地面に膝まづいた。

「ごめんなさい！！！！貴司君、方の傷は…………？」

「……………大丈夫です。それより顔を上げて……………」

「本当にごめんなさい……………私はあの場であなたに助けてもらえなければ負傷していたかもしれないのに。」

「……………少し大袈裟ですよ……………顔を上げて……………」

「何とお詫びしたら私を許してくれます……………？」蛭原は演技でなく泣いていた。

吉田と後藤は目配せした。海老澤がニタニタ笑っていた。悪意は感じられないが、冷やかし笑いだとはつきり分かった。

「蛭原……………さん。ですよね？」

「……………はい。覚えてないんですか？」

蛭原は吉田を上目遣いでみた。世間ではかなり告白もされているが、興味がなくて、全部断っていることが、後で分かった。にもかかわらず、吉田は顔を少しも変えなかった。

「……………正直に言つと、記憶が曖昧で……………あの様な場合は普通、一般人は何も出来ません。君のように、動かないのが、最も懸

命です。……………もう、いい加減顔を上げて下さい。土下座なんて、
やすやすするものではありません。」

「……………はい。」まともな返事が効を奏したか、蛭原は立ち上
がった。

「なあ、吉田。」それまで黙っていた海老澤が吉田を見た。

「ん？」

「弘毅が（鈴木が）足を骨折しちまって、明日から休みだと。」

「そんなに激しく戦ったんですか？」後藤は驚いて言った。

「まあ、素手同士では互角だったな。海老澤なんて、鳩尾入れ
られてたからな。」吉田がフツと笑った。

「え？海老澤君も……………」蛭原が立ち上がったまま、硬直した
のち、海老澤に向き直った。

「蛭原さんは、内罰的すぎ。さっき吉田が言ったでしょう。一
般人には致し方ない事だと。」海老澤が言った。「蛭原さんも
怪我してるじゃないですか。その類。」吉田が言った。蛭原はパッ
と手当てをしていない傷を隠した。

「大丈夫です。傷はちゃんと洗い流しましたし、傷痕が残るほ
ど深くありませんから……………」

「はい。」後藤が素早く包帯とテープをちようどの大きさに切
り、蛭原に渡した。

「ありがとうございます……………」蛭原が素直に受け取った。
その場の空気がいつになく和んだ。

第4章 新たなる感情2

次の日、吉田がいつも通りいち早く教室に入って来た。

吉田は教室のパソコンの電源を入れ、USBを差し込んだ。ジヨイパッドをインプットし終わったその時、小林が入って来た。

「よう、貴司。怪我は大丈夫か？」小林があまり深刻な面持ちをしていない。

「ああ。」吉田はパソコンから目を離さずに言った。

「まあ、それだけ動かせるってわけだからな。それはそうと、貴司。」小林は吉田の隣に椅子を持ってきて、ドカッと座りながら言った。

「今日のHRは臨時学年集会だとさ。」

「は？どこで手に入れた？その情報。」

「電光掲示板に書いてあったさ。お前が登校してから変わったのかな？」

「……………そうか？それにしても、生活指導に関する事じゃないか？わざわざ、転校生を送りつけて来たり、学年集会を設けたりだとかさ。」

「何でも、校長がこの高校を批判された……………というより、茨城県の県教育委員会で結構問題になっているらしい。この間の数学の時間……………ベクトルの授業なのに、貴司は数列やってたんだろ。」小林は別に責めるような口調ではなかった。

「まあ、三項間漸化式が分からなかったからね。何せテスト前だったじゃないか。お前あのテスト何点だった？平均は38だけださ。」

「74だった。しかし話をそらすな。お前あの時、お偉いさんが授業の査察に来てたじゃないか。それで、貴司はお偉いさんに『君はもうベクトルは終わったの？』なんて聞かれてたよな？」

「そうか……………74か。僕は72だったから久しぶりに勝ったかと思っただがな。」

「質問に答える。」

「……………聞かれたさ。だから、『まあ、そんな所です』って言った。」吉田は薄ら笑いを浮かべた。　「あのな、あのお偉いさんは、茨城県教育委員会の差し金なのさ。俺が校長室に盗聴器を仕掛けたのは知ってるよな？」

「ああ、知ってるさ。校長室で、教育委員会の奴等が、お叱りをしてたのか？」

「……………ああそうさ。でも弱冠違うな。その会話のテープが部屋にある。昼休みに取ってきてやるよ。」

「ほう。何を校長にふきこん……………」

吉田は突如黙った。教室の後ろのドアが開いたのだ。エミューレータの音や、小林との会話をしていたとはいえ、いつもは些細な物音を聞き分けられるのだ。吉田の中に今日は土曜日だから朝早くは誰も来ない。との油断があつたのかも知れない。
入って来たのは黒澤だった。

「おはよう。」「小さい声がしたが、小林も吉田も僅かに会釈しただけだった。」

「オッス！」海老澤と金子が入ってきた。吉田と小林は完全無視を決め込んだ。

「……………あの……………貴司君？小林君？」黒澤が静かに聞いた。

「はい？」吉田がやがて言った。

「……………あつ……………え……………」

「何だい？」小林が代わりに容赦なく聞いた。

「吉田。お前と蛭原さんは付き合ってるのか？」金子が聞いた。小林は黒澤から目を放して、金子をマトモじゃないという目で見た。

「あん？何で？」

「こいつがさ、写真見してくるからさ……………」金子は海老澤を見やりながら言った。

「ほら。」海老澤はニヤニヤしながら、吉田と小林に携帯を見せた。

そこには、蛭原が吉田に泣きながらしがみついている姿を捕らえた写真だった。

「いつ撮った？携帯のシャッター音は消せないはずだ。」吉田が顔をしかめながら言った。

「まあ、全力でスピーカーを指で塞いだけだ。いつ撮ったかは、あの闘いときだよん。」海老澤が楽しそうに言った。

「それだけで？しかもあの時、蛭原さんは人質にされただろ。恐怖から解放されたら、誰が相手でもいいから、抱擁したいんだな。」

小林が言った。

「真面目に答えんなよ。」金子が言った。

「じゃあ……………美樹の好き？」黒澤が聞いた。

「……………」

「ねえ……………」

「えっ僕ですか？」吉田は本当にビックリしたように言った。

「はい。」

「そんなこと言われても、人を好きになるとどうなるか分からないから、答えられませんよ。」「またまた。意味深なこと

言って誤魔化そうたってそうはいかねーぞ。」海老澤がやはり楽しそうに言った。

「いや、貴司の場合は有り得る。」

小林はせせら笑いを浮かべながら言った。

「何故かはどうでもいいとしてだな。貴司。」

小林は吉田に向き直った。吉田はパソコンの電源を落としていた。

「蛭原さんに抱きつかれた時、ドキドキしたか？」小林が言った。金子と海老澤が吹き出した。

「…………あの時は……いや、そんな気持ちはしなかった。」

「じゃ、どんな感情がした？」

「早く退いてくれと思った。」吉田は即答したと思った。

「マジか？俺も抱擁は緊張するんだぞ。」海老澤が言った。海老澤は好少年だったので、既に彼女持ちだった。

「ふーん。だってさ、金子。吉田が蛭原に好意を抱いている訳じゃないことを理解できたか？」

「じゃあ、貴司君と美樹の関係は何なの？」黒澤が聞いた。

「『仲間』ですよ。」吉田が自ら答え、ゴシップは完全に終わった。

「貴司、いい加減初恋をしたらどうだ。心の成長には必要だし、得られる物もあるんだぜ。」小林が言った。

「…………ハイハイ。」吉田が聞いているふりをしていることが、小林には分かった。乱戦となるその日の朝はこうして終わった。

第5章 誘惑

土曜日の最初の授業が始まる直前、左隣の蛭原が話しかけてきた。

「貴司君？おはよう……………あの、もう少し右によつていいですか？」蛭原は何かに怯えているようだった。

「何故？」吉田が撥ね付けるような言い方をした。

「仲間になったんだぜ」つれないこと言うな。折角美少女が寄り添うのにさ。」やり取りを見ていた、右隣の金子が茶化した。蛭原は下を向き、吉田と金子がよくやるように、筆談するために紙に何かを書き始めた。

「はいこれ。」蛭原は吉田に手紙を書き終えると、渡した。

『隣の転校生が嫌なだけです、また内職したりして襲われた時、貴司君達に守って欲しいから。』

「……………分かりました。」吉田は金子に手紙を見せた。

「守って欲しいから……………か。何かベタなセリフだね。まあ、

蛭原さんも真面目なんだろうね……………」金子が吉田に言った。

転校生がその様なやり取りの5分後に入ってきた。転校生が入ってくると、教室は若干静かになった。転校生の服部は席に着くと、吉田と蛭原が机をやたらと近づけているのを見て、鼻を鳴らした。

1、2、3時限が終わり、昼休みになった。吉田達が通う高校は65分授業であった。蛭原はささと友達の方に行ってしまった。服部は昨日撃たれた腹を気にしつつ、教室の外に待機していた仲間たちと合流した。

吉田は基本、昼食をとらなかった。1日2食。それすらも少ないほうで、食事を時間の無駄と考えているらしく、日常からガムや飴で胃を満たしていた。

「ほら貴司。約束の品だ。」と言いながら、iPodを持ってきた。

「ああ、そう言えば、そんな約束したな。早速聞かしてくれ。」
小林はガサゴソやりはじめ、吉田にイヤホンを渡した。

「よし、じゃあ流すぜ。」小林は吉田がイヤホンをつけ終わると言った。吉田が頷いた。

「『校長。査察の結果を言います。私たちが見た所、皆さん真面目に授業を受けているようです。』」

『それに、実技科目も手を抜かずに授業を受けているようです。』

『そうですか。嬉しいことです。』

校長の声がした。

『誠に残念なのは……2年E組です。言い直しましょう。2学年全体です。授業中に他のことをしている、生徒や寝ている生徒がいました。E組については、緊張感というものが感じられませんでした。』

『……また、あのクラスが……』

『校長、また、ということとは、以前にもこのような事があったのですか？それを知りつつ、今日に至るのであれば、校長の責任とされても文句は言えますまい。』

『私個人としましては、あのクラスの担任と副担任に戒告しました。』

『では、こちらが力を貸しましょう。何人が優秀な生活指導員を派遣するのです。』

『本校の井坂教諭は20年以上のベテランです。県北地域の劣悪な高校を優れた柔道術を生かして制圧してきたのです。』

『ほう、では違う作戦を……プログラムを行うのはどうですか？恐怖心を植え付けるのです。』

『中には全く無実な生徒がいます。プログラムを強行したら非

難どころか、逮捕されます。』

『なるほど、ではそれは最終手段として、近頃休暇になった防衛大学付属高校の生徒達に規則の大切さを教えさせたらどうでしょう。』

ザーーーーー……………。

音声が砂嵐になった。

「終わったぞ、小林。何か最後砂嵐になったが。」吉田がイヤホンを取り外しながら言った。

「まあ、録音してる最中に先公に指名されたからな。分かるだろ、普通に考えて盗聴器に録音の予約なんてできないんだ。査察が終わる時間を見計らって、盗聴してたんだ。まだ、授業が終わってなかったからな。」小林は押さえつけるような言い方だった。

「……………そうか。これを聞くかぎりには、真の犯人は県政府だな。しかし、この査察したやつが言ってる『プログラム』って何だ？」吉田が小林にというより、自分に問いかけるように言った。

「さあ？何か逮捕とか非難とか言ってたけどな……………」小林は肩をすくめた。

「これどうも。学年集会『また』サボろうかな。」吉田がイヤホンを小林に返しながら言った。

小林は聞いていなかった。何やら机を見ていた。

「なあ、貴司。」

「あん？」

「何で蛸原さんの机がこんなにお前側に寄ってるんだ？拐かす気か？」

「拐かす？意味分からんぞ。僕は何もしてない。向こうから近寄って来たんだ。」

「ほう。モテるな貴司。」小林はバシリと吉田の肩を叩いて去

っていった。

昼休みが終わり、5時限目になった。吉田が通う高校は65分を1時限として考え、5時限までだった。臨時学年集会をサボるのは吉田の十八番で見つかることなく出席しないことも頻繁にやっていた。だが、今日は話が違った。4時限目の物理が終わるなり、担任の川北が入ってきたのだ。

「今から皆さんを体育館へと引率します。私語はしないように。」川島は重苦しく言い、吉田、金子、海老澤、鈴木、小林の順に睨み付けた。

仕方なしに吉田達は立ち上がった。小林は明らかに反抗的な顔をしていた。

10分後……………2年生全員が集められ、学年主任の話が終わると、校長が入ってきた。

校長と同時に、防衛大学の生徒達も入ってきた。海老澤が隣の吉田に身を乗り出し毒づいた。

校長はついに口を開いた――――

第5章 誘惑2

「みなさん、こんにちは。こちらの転校生の皆とよく仲良くしてくれている、と聞いています。これからもよろしく。皆でこの高校を良くしていこう。さて、新たな仲間も増えたばかりなんだが、さらに、もう一人転校生が来るんだ。E組に入ることになっている。皆、仲良くするんだぞ。」

「さらに強力なのを送り込んできたってことか？」海老澤が金子に囁いた。

「それと。進研模試の学年平均が全国100番割れだつてね。皆いくらなんでも、弛み過ぎじゃないかね。全国で……」校長がここで言葉を切った。「校長。発言権を私に。」井坂が生ぬるい、という表情をした。

「……何かな？井坂先生？」校長は重苦しく言った。

吉田は校長が演技している事を早くも見破った。

「100番割れではありません。110番割れです。それは、皆の普段の学校生活からしたら当然の結果だよな！」井坂は体育界系を剥き出しにした。最後の言葉は生徒の方を向いた。

金子が居眠りを始め、小林は携帯をいじり始めた。遠くにいるからとはいえ、この反抗的な行動が井坂の鼻息を荒くした。

「先生ね、現状を色んな人に見て欲しくてね、デジカメで撮ったんだよ。」井坂はそう言いながら、体育館のスクリーンを出させ、自分はプロジェクタの方に歩いて行った。

「盗撮だよな？吉田……まさか……」海老澤が吉田に真剣な表情で言った。

「心配するな……奴がカメラを何処に埋め込んでいたか知らない訳ではない。」吉田が不気味な笑みを口に浮かべた。

「何処かに仕掛けてあるのか？」海老澤が憤慨した。

「それは、違うね。監視カメラみたいに固定した訳じゃない。」

吉田は井坂が画像を映し出す準備をしているのを見ながら言った。

「じゃあ、持ち歩いてた？でも、井坂が廊下を歩いているときにカメラを持ち歩いてるのを見たことないぜ。ましてや、隠せるような物もないし、服には膨らみもなかったし。」海老澤が思い出しながら言った。黒澤が山口と私語をするのを止め、称賛の目でこちらを見た。

「なかなかだ。海老澤。なかなかだ……………奴は授業用に黒板用のコンパスを持ち歩いてただろ。」吉田は海老澤を誉めたわりには、冷たい声を出した。

「コンパス……………コンパス……………あ、ああ。あの棒か？1年の時から持つてる。」海老澤が顔をしかめた。井坂は1年の時、吉田の担任だった。海老澤、黒澤、小橋などもだ。

「そう。あれのチョークを挟む部分だ。いつか見たとき、その部分が光った。チョークが光るわけないから、何だと思って……………」

吉田の声が井坂のマイクで拡大した声によってかき消された。

「はい。じゃあ、皆。よくみておくんだぞ。」井坂は体育館の照明を何時の間にか落とさせ、スイッチを押した。

画面に『2年D組』と映った。途端に任天堂DSを授業中に机の下でやっている生徒が映った……………顔付きで。

「おい！！」E組の隣の列の男子が立ち上がった。しかし……………ダーン！！ダーン！！2発の銃声。転校生グループが男子に向かって発砲した。

「座れ。お前に起立の権利はない。」服部がデザートイーグルを構えて言った。

「何だと！！！！」

「やめろ！！！！」男子の周りから手がのび、無理やり男子を座らせた。

「あれは、デザートイーグル……………」吉田がボソツと言った。

「えっ？」海老澤が聞き返した。しかし吉田は首を振って黙らせた。

「次に……」井坂はニヤニヤ笑いを増させた。校門を仲良く手を繋いで歩く男女。

「なっ……………!!」A組から男子の声が上がった。

「これは生徒会長のO君だよ……………いい模範だよ……………」井坂は呟いた。

「まだまだあるよ……………ホラア。」井坂はこんな調子で、生徒達の現実を暴いた。しかし、吉田や海老澤などのE組と大富豪同好会の写真は1枚もなかった。

「聞いたか？生活習慣を改めないと、もっとプライベートに干渉するとき。」海老澤が言った。　「何で俺達は1枚もとられてないんだ？」　金子は安心したような、不思議がるような何とも判断し難い声を出した。

「奴は数学の担当だけど僕らのクラスの数学の担当は井坂じゃないからな。」吉田が言った。

「それじゃ答えにはならないな。井坂は俺達のクラスを一度も授業しなかったわけじゃないぜ。俺達の担当が休んだとき、代わりに来ただろ？それに、頻繁にクラスに来たじゃないか。」

「フムフム。」金子の指摘を受け、吉田は満足そうに冷酷な笑みを浮かべた。

「いいか、金子。」吉田は、周りが昼休みで弁当を楽しそうに食べているなか、話した。

「僕達の授業を担当したのは、3回だった。そのうち、カメラをつけた後に授業したのは1回だ。その時、小橋が一番前に座ってたよな。」

A B C D E F G

1

2

3

4

「ああ……D1に座ってたっけか。」金子は遠い目をして思
い出しながら言った。

「その時、小橋に命じて、歯医者なんかがよく使う小さい鏡を
置かせたのさ。後で映像を見たら、自分自身が映っているという寸
法さ。」

「じゃあさ」今まで吉田の説明をただ聞いていた海老澤が口を
開いた。

「巡回の時に俺らが映ってなかったのは、何故だ？」

「……磁石だな。」

「あん？」

「金子、海老澤。二人とも僕と同じ東北大学のオープンキャン
パスに行ったんだよな？」

「ああ。工学部だけど……」海老澤が言った。吉田が頷いた。

「僕は今は農学部志望だがな、あのときは、工学部、理学部と
他も見たんた。」吉田が言った。

「この際、それと井坂とどう関係あるんだ？」

金子が言った。

「良いから、黙って聞け。その時電磁石の実験をしてなかった
か？」

「……覚えてないよ。いくらなんでも……」

「いや、待てよ。そういうやそんなのがあった。何だかこの装置
に近づくなら、携帯やら時計やらをしっかり鞆にしまえと言われた。

「金子が思い出せないのを、海老澤が救った。

「それさ。田子に作ってもらった電磁石で井坂が廊下を歩く際、
攻撃したのさ。」

「すごいぜ！！！！盗撮からE組を救ったんだ。」

金子が叫んだ。

吉田は肩を竦めた。

「皆、席につけ。さっきの学年集会であつた通り、転校生をも一人紹介する。入りなさい。」

川島が言うと、転校生が入ってきた。

「転校生の坂本愛です。慣れない事が多くて、色々大変ですが、一日も早くこのクラスに慣れたいので皆さん、よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします!!!!」日頃から浮いている右端の男子が叫んだ。

坂本愛はかなり美少女というより、美女だった。右端の男子に限らず、多くの男子が目を向けている。

「さて……席だが……おう、黒澤の隣が空いてるな。底に座りなさい。」川島がてきぱきと指示した。

「はい。」坂本は凜とした声で、返事をした。よくある小説のように、転校生が隣になり、教科書やら何やらを貸すうちに、親しくなるという法則は無効だった。

第6章 合流

新たな転校生は直ぐにクラスに馴染んだ。服部は、月曜日に吉田と肉弾戦をし、応援が間に合わず、気絶させられた。

「ちっ、口の中が切れたな……………」吉田は倒した敵に馬乗りになっていた。が、応援が駆けつけてきたので、吉田はどくことにした。

「服部！！どうした！？これは……………」保坂翔平が急いで入ってきた。

「殺したな！！吉田！！この人殺しが！！」

バシャッ！と音がして、海老澤が服部の顔に水を叩きつけた。モゾモゾと服部が動き出した。

「服部？生きているじゃないか。応援が必要だったのか？」保坂が言った。

「ああ、もう必要はない……………」服部は血走った目で吉田を見た。

「何だ？まだやるか？」吉田は残忍な笑いを口元に浮かべながら言った。

「そうだ！！」服部は吉田に向かって走り出したが、海老澤が後ろから足をかけた。服部は横転した。

「貴様！！」保坂が海老澤を殴ろうとした。

海老澤がかわし、逆に蹴りを入れた。保坂はそれをかわした。そこへ声が割り込んできた。

「やめて！！！！！！何やってるの？！！」凜とした声であった。

吉田は服部と襟首を掴みあったまま、海老澤と保坂が蹴りあいを止めて静止した。

坂本が体を震わせてそこにいた。

「……………」

4人はお互いに離れたが、黙ったままだ。

「海老澤君？貴司君？」後ろから静かな声がした。見ると蛭原が見慣れているからかシャキツとしたまま聞いた。

「何でもないよ。ちよつと行く過ぎただけ。」海老澤がそう言う最中、服部と保坂は大腿で出ていった。服部は出ていく際、吉田にわざとらしく肩をぶつけた。

吉田は何も言わずに、唇を手の甲で拭った。

「まったく、朝からのケンカは止めて欲しいぜ。」金子が言った。今までただ黙って吉田達の戦いを見ていたのだ。

「ああ？敵前逃亡した奴が何いつてるんだ？」吉田は金子を睨み付けながら言った。

「見てる側も結構不愉快なんだぜ。」金子はひかなかった。吉田は金子から目をそらした。

「先に手を出したのは、服部だぞ。」吉田が言った。

「ケンカは先に手を出したかどうかなんて関係ないよ。両方が悪くなって起こることだよ。」凜とした声が割り込んできた。

「君は知らないのさ。先制攻撃されたら、自分の身を守ろうとするのが当然だろ？」海老澤が坂本に言った。

「正当防衛はやりすぎると、過剰防衛になって犯罪になります。」

坂本は臆する様子なく言った。

吉田と海老澤は顔を見合わせた。

「とにかく、吉田君は服部君に謝らなきゃ駄目だよ。」
「そうですね。後でそうしておきます。」吉田はそう言ったが、海老澤も金子も単に口うるさく言われるのを終わりにするためだというのがわかった。それでも、坂本は満足したようだ。

「あのさ、俺思っただけど、服部と坂本はできてるんじゃないか。」右隣の金子が今日の授業が全て終わり、帰りのHRの川北の話の最中に筆談で話しかけてきた。

「わからない。だが、多分面識はないはずだ。授業中だって、普通に注意を受けてたぜ。」

「つるんでるかもしれないぜ。」

「……………調べてみる。今話し合っても埒が明かないから、もうヤメにするぞ。此を読んだらもう一度僕に戻せ。」

金子はやり取りを終え、吉田に返した。

H R 終了後、吉田はポケットからライターを取り出すと、紙を燃やした。

「貴司。約束通りね。」吉田が部室に行くと、茶髪だが背の低い女子が話しかけてきた。

「……………で、岩本さん。今日は何の依頼です？」吉田は荷物をドカッと下ろし、ろくに岩本の顔も見ないでパソコンを開きながら言った。

「ええ。弟のことで、依頼だと、後藤君に渡した手紙に書きましたよね。あれは、瑞穂が……………黒澤さんが近くに來たので、第3者向けに書いたもののなの。私に關しての依頼です。」岩本はわざわざ吉田に分かるよう、黒澤の名前を出しながら、苗字に変更した。

「ほう？」吉田はパソコンにUSBをさしこみながら言った。

「依頼内容は尋ね人なの。」岩本は鞆をがさがさ言わせた。

「尋ね人？岩本さん、貴方は確か何処かの会社社長の娘なのでは？自分で探すくらいできるでしょう。」吉田はパソコンから顔を上げ、冷たい視線を岩本に向けた。

「だって1000円で貴司は解決してくれるんだよ。」

安上がりで良いじゃない。

「岩本は楽しそうに言った。」

岩本と吉田は1年の時同じクラスだった。いつから貴司と呼ぶようになったのは、定かではないが、単に気まぐれで呼んでいるらしい。社長令嬢なのも事実だが、良い子を演じるのに疲れ、世間体を気にしない大富豪同好会に憧れ、髪を染めたらしい。それ以来、衣服は

普通になり、打ち上げでファミレスに積極的に行っていたようだ。

「はいこれ。」岩本は吉田に写真を渡した。それはとある

男子の横顔だった。吉田はそれを見て、固まった。

「貴司？どうしたの？」岩本が驚いて聞いた。

「……………」

「貴司？貴司？」岩本は吉田を揺すった。

「！！ああ……………すいません。この人を何故探しているのですか？」吉田は自分を取り戻すと、岩本に聞いた。

「うーん。サッカー部の人らしくてね、B組の女子みんなでサッカー部の県大会の試合の応援に行ったときに、相手チームのキャプテンらしくて……………格好よくて……………」岩本が語りだしたので吉田は写真に目を戻した。岩本は結局、ただ単に格好がいいから惚れたみたいな事を周りにくどく言った。

「この人、知り合いなの？」

「いや、全く。心当たりは有りません。」

「そう。じゃ、よろしくね。いくらになるの？」岩本は立派な財布を出しながら聞いた。

「捜査できるのは僕一人ですから1000円で結構ですよ。」

吉田は写真をしまいながら言った。

「分かった。はい。よろしく……………」岩本は代金を渡すと出ていった。

岩本が去った後、吉田は携帯で電話をかけ始めた。長い呼び出し音の後、相手が出た。吉田は簡単に二言三言言つと、相手は暇だから大丈夫な事を言った。

吉田の通う県内トップの高校がある大都市から、特急が一応走る電車で30分の中都市の駅で吉田は降りた。吉田は中都市のスラ

ムに住んでいたので自宅は更に10分ほど進んだ所にあつた。小林も同じ地区に住んでいる。

駅を出ると、早速スラムのある中都市と、観衆を唸らせる出来事が起こった。

「おい、兄ちゃん！！白い服の兄ちゃん！！今、肩ぶつかつたよー！！」

「悪いな」吉田は不良の呼びかけに対して、即答した。

「ああ？悪い？てめえ、俺をナメテンのか？痛い目見たくなかつたら、金だしな！！」不良が言った。

「……………」吉田は無言で立ち去ろうとした。

「待てコラァ！！」不良が中柄の吉田より遥かに有利な巨体を突進させながら言った。

「グワ！！！！！！！！！！」不良は言葉では表しづらい悲鳴を上げた。

吉田はいきなり、相手の股間を蹴りつけた。

「て、てめえ！！！！」その行為に頭にきたか、不良はまた吉田に襲いかかった。

ダーン。

吉田は不良の数メートル左の壁を服部から奪ったデザートイールで撃った。不良が止まった。

吉田は銃口を不良に向けた。

「待つてくれ！！撃つな！！」不良は必死に言った。

「じゃあ、有り金を全部おいていけ……………」吉田が低い声で言った。

だが不良は逃げたした。全力疾走する不良を吉田は深追いすることにした。

ダーン！！ダーン！！吉田は銃で相手のショルダーバックを撃ち抜いた。不良は恐れをなして止まった。

「さあ、有り金を……………」

「ちょっと待て!!!」

吉田も不良も振り向いた。そこには新たな第三者がいた……

……

第6章 合流2

「……………萩谷か。」吉田は銃口を不良から反らして言った。
「また、不良から金を巻き上げてんのか？」萩谷と呼ばれた男子が言った。

「まあな。ウラッ！！」そう言いながら、吉田は不良の足を蹴り、不良を転ばせると、ポケットの膨らみに手をつけた。不良は恐怖からか、身動きもしない。

「携帯か。じゃあこつ……………ヒット！！」左のポケットの携帯を放り投げ、吉田は右のポケットの財布を取り出した。

「ほらよ！！！」吉田は不良の財布から現金だけ奪うとカード類の残る、財布を投げ返した。不良はその瞬間、走りだし、携帯を拾うと逃げて行った。

「全部で2万3000円か。高校生にしちや持ちすぎだな。」

吉田は不良から奪った金を自分の財布にしまった。

「あの制服からすると工業の奴だな。」萩谷が言った。吉田は萩谷を見た。

萩谷は吉田や小林の幼なじみだった。

学力も吉田と匹敵していた。

特に、中学校時代、1位が小林、2位が吉田、3位が萩谷という機会がよくあった。萩谷は身長が180を越えており、169の吉田より頭一つ大きかった。萩谷は、サッカーが強い、吉田達の住む中都市の一番の進学校に行った。電車で10分の距離だし、自由な校風であった。吉田や萩谷の通う高校は制服がなかった。

萩谷は格好が良い。サッカー部のキャプテンであった。だが、忘れてならないのは、吉田達の友達だということだ。世間体を気にしないのはもちろん、萩谷の手には煙草があった。

「いい加減、禁煙しろよ。」吉田が煙草を見ながら言った。

「お前がパソコンに金を注ぎ込むように、俺はこれに注ぎ込むんだ。お前も吸うか？」萩谷は声がまだ高かった。女声ではないが、テノールとも言いがたかった。

「ああ、吸う。」吉田は保健の教科書のように、上手に断るような事はしなかった。

「ワイルドフさ。新銘柄だぜ。」萩谷は煙草を渡した。

「サンクス。いや、ライターはある。」吉田はそう言いながら、ライターで火をつけた。

「……………どうだ？」

「萩谷……………」

「……………？」

「うまい！……！」吉田が言った。吉田の目がギラギラと光った。

「そんなに喜ばれるとはな。これ、お前にやるよ。」萩谷は鞆から未開封の箱を吉田に投げた。

「うええええい！……！じゃ、遠慮なく！……！」吉田はワイルドフを鞆に入れた。

「それはそうとな、貴司。」萩谷は煙草をくわえたまま苦笑し、吉田の名前をこの場では初めて呼んだ。

「分かってるさ。今日君を呼んだのは、君に会いたいと言う人がいるからさ。」吉田も煙草を吸いながら言った。

そう、岩本が写真を見せた時に、既に分かっていたことなのだ。吉田は岩本が一目惚れするような人間で無いことは知っていた。となれば、萩谷が岩本に何か良い行いをしたことになる。吉田は岩本が去った後、萩谷に電話をして、会う取り決めたのだ。

吉田が一人で捜査すると言い出したのも、萩谷が喫煙家であることを知っていて、萩谷が自分以外に喫煙をすすめるのは好ましくないと考えたからだ。

「俺に会いたい？」萩谷が首を傾げた。

「女子だがな。」吉田が言った。

「しかし、妙な話だな。仲介を頼むにしても、小林を使えばいいじゃないか。俺と同じサッカー部なんだぜ。」

「いや、単に1年の時同じクラスだったからさ。1年の時特別話したわけではないがな。」 「ふーん。でどんな人だ？」

「こんな人だ。」吉田は1年の時の4月に撮った写真を渡し、指で指しながら言った。

「うん……………？よく見えないな。茶髪の子か？」

「ああ。」

「ほう。なかなか綺麗な人じゃないか。」萩谷が言った。

「……………この人に、何か助けになるような事はしなかったか？」

吉田は相変わらず煙草を吸いながら言った。

「……………いや。話してすらいらないし、こんな人を見ていない。

何て名前？」萩谷が写真を吉田に返しながら言った。

「岩本さんだよ。」

「下の名前は？」

「……………さあ。」

吉田が言った。萩谷は嘲るような視線を吉田に向けた。

「お前、1年の時同じクラスだったんだよな？忘れたのか？知らないのか？」

「知らん。」吉田は冷たく言った。

「出たよ。」萩谷が言った。吉田は中学校時代から女子の名前を覚えていなかった。特に酷いときには顔と名前が一致していないらしく、プリントを返す役を頼まれた時など、違う人にプリントを渡したりした。

「よく、そんな奴に依頼できるな。岩本さんも。」

「物好きなんだろ。」吉田が言った。

「そうか？貴司……………」萩谷が吉田を正面から見た。中柄な体、冷たい目、全くとかしていない髪、服装は安そうで、終いには

煙草である。ファッション感覚などゼロどころかマイナスだ。

（まあ、それでも鼻は高いし、脚も長いし結構格好いいんだがな。喧嘩も強いしな。）萩谷は一人回想に耽っていた。

「さて、いつ会うんだ？」吉田が言った。萩谷は現実に戻って来た。

「そうだな……………てか、俺が会いに行くのか？」萩谷は吉田に問いかけた。

「普通、常識から考えたら岩本さんが来るべきだな。会いたいと言いつ出したのは、彼女なんだから。」レディファーストの考えの欠片もない吉田が言った。

「……………ていうか、初対面の人にいきなり会わせられてもな。何で向こうは俺に会いたいんだ？」

「サッカーしてる姿に惚れたんだとき。」

「ふうん。」基本、萩谷は吉田や小林とは違いモテたので、別に驚かなかった。ただ、外見だけで判断されたのかと思うと無性に腹が立つ気がした。

「まあ、いつ会うかは僕を仲介して話してくれ。」吉田が言った。萩谷は不承不承な様子だったが、頷いた。

「今日はそれだけの事なんだ。わざわざ呼び出して悪かったな。」

「別に暇だからな……………最も、あと15分くらいで予備校が始まるが。」萩谷は駅の近くのなかなか大きいビルを指した。

「そうか。じゃあな。」吉田は大腿で歩き去った。

萩谷はしばらくその姿を見ていた。

「……………貴司……………お前は未だに無理矢理感情を押さえ込んでいるのか……………だがな。貴司、小林が言うには、結構お前と話してみたい、勉強を教えて欲しい、もっと彼を知りたいと思ってる女子がいるんだぜ……………」萩谷はそう呟いた。フツと笑うと、その場を去った。

その二人を今まで監視していた人物がいたことに、吉田や萩谷ですら気づいていなかった。

第7章 誘拐

火曜日、つまり明くる日吉田はいつも通り徹夜をしていた。パソコンでエミューレータをやりながら、何やら叫んでいる。近所迷惑も甚だしい。朝刊がポストに入る音がした。3時30分を回っていた。

吉田は、ちょうどきりのいい所で止めて、朝刊をとりについた。吉田は朝刊を取り、早速広げた。

「ほほう。」

WBCで日本がキューバに6-0！流石、松坂！！」吉田は昨日の試合を朝5時から起き出して見ていたが、それでも読売新聞独特のスポーツ欄を見ると、何故か満たされた気分になった。吉田は、スポーツとしては、相撲と野球が好きで、野球は巨人ファンであった。金に汚い吉田らしいと言えば吉田らしい。

「対した記事は無しだな。」吉田はそう言っていると、新聞を放り投げた。

パソコンを再びやりはじめて、5時になったところ、吉田の携帯がなった。メールではない。バイブが鳴り響いた。

吉田は携帯を開いた。

「ニア」と書いてある。

「もしもし、しだ。」吉田は奇妙な事を言った。

「ニアです。番号は369」

「9から7。」

「7から5。」

吉田は奇妙なやり取りを終えた。

「さて、ごつつあん。朝早くどうしたんだ？」ニアと書いてあるのは後藤のことだった。

「すみません。実は凄まじい事件になって……………」

「？……………凄まじい？どんなことだ？」

「金子君の妹さんが失踪したんですよ。」 吉田はパソコンから目を離した。

「何だと？金子の妹？」

「はい。夜には既に帰宅しているにもかかわらず、朝3時にガラスが碎ける音で目が覚めた母親が、部屋を覗いてみると、もぬけの殻でした。」

「…………ヤバいな。今すぐ、金子の身内の人一人をこちらによこすのだ。」

「それには及びません。兄である金子君がそちらに向かっています。駅に着いたら私に電話するよう言いましたが、あとゆづに25分はかかりますな。」

「何か妹さんの身の回りの物をもつてくるよう言ったか？」

「言いました。」

「よし、では駅に迎えに行くさ。ごつつあん、妹さんが見つかり次第、迎えに行けるか？」

「はい。私以外には誰もいません。」

「…………そうか。気をつけてな。」

「はい。では一旦切ります。」 ブツツ。電話を切ると吉田はパソコンを閉じUSBを抜いた。

(…………誘拐か、それとも単に家出なのか…………後者の場合はわざわざ、家族を起こすようなガラス割りをするか？誘拐にしてもそれは言えるが…………) 「考えても始まらない。」 吉田はそう言うのと、ガムをポケットに何個も入れ、戸締まりをしっかりとして家を出た。

11月のうえに、5時だから、物凄く寒かった。だが、吉田は暑がりなので、普通よりはずっと薄い服装にフード付きのオーバーを着こんだだけだった。そのまま黙ってチャリに乗ると、駅まで10分の距離をこぎだした。

10分を切るタイムで吉田は、駅に着き、自転車の鍵をかけ、

鞆を背負った。

だが、その時、茂みから何者かの足が吉田を狙った。

「?!うおっ!?!」吉田はギリギリでかわしたが、バランスを崩し倒れた。何者かは吉田を踵落としをやるうとした。

吉田は得意の力ポエラで器用に転んだ状態から立ち上がりながら、踵落としをよけた。銃を取り出したその時……

「やめな。まだまだ甘いぜ、貴司。」

吉田は何者かが声をだしたので銃を向けるのを止めた。

「小林……」

吉田を襲ったのは小林だった。小林は服に着いた葉を落としながら言った。

「油断し過ぎだな。貴司君よ、そんな守りで俺を防げるわけないだろ?」 「偉そうに言うな。奇襲してくるとは最低な奴だな。」

「吉田は銃をしまいながら言った。」

「もし俺が服部だったら死んでたな。」

「……………」吉田は黙りこんだ。小林に未だに劣ることを思い知らせたからだ。 「悪かったよ、貴司。こんなに朝早く貴司がいるということは金子の事を聞いたからか?」

「はあつ。小林も金子の妹の件で?」

吉田は黙りこむのをやめ、小林を見た。

「そうさ。次の電車に乗るぜ。」

「駄目だ。金…………」

「物品を持ったまま、乗車した駅から6番目の駅で降りるよう指示した。一刻を争うのに、こんな所で駄弁ってどうするんだ?」

「……………」 そうだな。現場検証をしないと。 「こうして5分くらい小林と話していると、更に新たな男子が来た。」

コツコツコツコツコツコツコツ。

足音がして、吉田と小林が振り向いた。

「はーぎじゃねーか。何でこんな朝早く?」小林が久しぶりの再会に歓喜した。暗闇から姿を現したのは萩谷だった。

「貴司……達也……朝早くお揃いでどうした？」

「実はだな……ン？電車がきちまった！！！急ぐぞ小林！！
！萩谷、悪いが急ぐからこれで！！！」

吉田と小林は走りだし、Suicaを叩きつけるように認識すると、ホームに行った。

「待てコラァ！！！」萩谷が不良口調で叫びながら吉田達を追った。

ガタン！！萩谷がドアを膝を入れて無理矢理止めた。車掌が鋭く笛を鳴らしたが、萩谷はそれを睨み付け、ドアを蹴り開けるようにしながら乗車した。中では吉田と小林がのほほんと座りながら、萩谷を見ていた。

「フー。さて、何故こんな急いだのか教えてもらおうか。」萩谷は始発のため、ガラガラなのを良いことに、靴を脱いで、席に横たわった。

「ちよつとした刑事事件さ。」吉田が、小林と2人分席を空かし、自分の荷物をドカッと席に置き、挙げ句の果てにふんぞりがえりながら、対面にいる萩谷を見ながら言った。

「刑事事件？依頼か？」萩谷が面白そうに言った。

「ああ。依頼ではなく、もう友達の妹を助けに行くのさ。」小林が言った。

「ほう。誘拐？」

「そうと決まった訳じゃないけどな。2つ目の駅でそいつと合流するんだ。」

「面白そうじゃないか。俺くそ暇だから、朝散歩してたんだ。昨日、貴司に久しぶりに会った後にこんな事があるなんて、偶然とは怖いな。」

萩谷が自分の掌にパンチをしながら言った。

「面白いつて、来るのか？誰も知り合いがないのに気まずいぜ。それに学校はどうするん？」

小林が言った。

「へっ、もう1年の時に風邪ひいてから、皆勤賞なんて気にしてねえよ。1日休んだから何だと言っただ？」萩谷が目をギラギラさせて言った。吉田の冷酷な目の光に似ていた。　「来たけりや来るがいい。ケンカできるかもよ。」吉田が、萩谷の目を見ながら言った。

「そうさせてもらう。但し、事件がどうなってるのか、教えてくれないと。」

「それは金子を合流させてからじゃないと。二度話すのは手間だしな。…………ウラツ、あと一駅だ。」小林が言った。電車は吉田達に乗った駅よりは幾分大きい駅で停車した。

「金子？」萩谷が言った。

「ああ、依頼人さ。まだまだ知り合ったばかりだが悪いやつではない。」吉田が唸った。

誰も乗る気配を見せず、電車は再び動き出した。

ブーブーブーブーブー。

吉田の携帯が鳴った。吉田は面倒くさそうにダホダボのジープパンのポケットから携帯を出すと、確認し、電話に出た。

「はい？」

「ニアです。番号は369。9から5。」

「7から3。」吉田が先程とは若干違う合言葉で対応した。

「…………妹さんの居場所が判明しました。我々の高校にある体育館4階体育職員室だそうです。」

「何故分かったんだ？犯人は誰だ？」

「保坂翔平と名乗る者でして、集団で誘拐したと。」

「保坂…………か。ニア、妹とは僕との会話用だろう。本当は誰が連れ去られた？」

「金子の恋人、黒澤瑞穂です。」

「…………今ニアはどこだ。」

「金子と同じ駅で一緒に待っています。…………ああ、今しが

乗っている電車が見え始めましたよ。」

ニアがそう言っていると、電車が速度を落とし始めた。会話を聞いていた、小林には緊張が走り、萩谷には新たに吉田の会話を聞いて暗号の多さに疑問していた。

第7章 誘拐2

ガタン。電車が止まり、無表情なニアと真つ青な顔の金子が乗車してきた。金子は冷たい目で携帯をいじる吉田、ふんぞりがえる小林を見た。萩谷を見ると驚いた顔になった。

「ニア、助っ人だ。同じクラスの小林に、中学校時代の3強の1人の萩谷だ。」吉田が言った。電車のドアが閉まり、動き出した。

「そうですか。後藤です。電話での盗聴対策にニアと電話では呼ばれています。吉田の1年の時に同じクラスだったものです。」後藤はそう言うのと、手を出した。

小林も萩谷も慌てて握手し、自己紹介した。態度が悪いが、口調は実に落ち着いた、丁寧なものだった。

「俺が金子です。小林君と吉田と同じクラスです。」

「小林がよく話してくれましたよ、君の事を。バスケをやらせたら、ピカ一だとか。」

萩谷は金子と握手しながら温かく言った。金子は僅かに青ざめた顔を赤くした。 「そんな……………それより同じバスケ部の瑞穂が服部たちに誘拐されてしまった。何のために……………」

「陵辱目的か？」金子の質問に最悪なパターンの答えを萩谷が言った。

「ない、ない。」小林が手を振りながら言った。

「何でそう言える？」萩谷が少しムキになった。

「考えて見ろよ。陵辱してる場を見られそんな事をするか？わざわざ場所まで指定するなんて。これは俺達を誘き寄せるための餌さ。」

小林が答えた。吉田と後藤が頷いた。

「……………誘き寄せてどうする？殺すのか？」萩谷が言った。

「それもあるが、俺達を学校に乗り込む事を見込んでるんだ。恐らく、校舎に不法侵入するところを、現行犯逮捕……………いい忘れてたけど今日は創立記念日なんだ。」小林が萩谷を見ながら言った。

「……………現行犯逮捕って……………退学じゃないのか？お前らそんなに『悪』なのか？」萩谷が呆れたように言った。

「もちろんだ。」吉田が誇らしげに言った。

「流石は鉄面皮だな。もし、俺らが来なかったら奴らはどうするんだ？」

「彼女だけを不法侵入として、警察につき出すんだ。それは言ってた。」金子がげっそりと言った。 「証拠がでっち上げじゃないか。警察は……………」萩谷が言い出したが、吉田が手を振って制止した。

「萩谷にや分かっちゃいないさ。警察とは名ばかり。実際は防衛大学付属高校なんだから、警察学校とグルなのさ。それに、こっちが学校の規則を破ってるのは事実だしな。」

吉田が言った。萩谷は納得したように言った。

「分かった……………達也や吉田の危機管理の凄さの事だ。恐らく、写真やビデオと言った確実な証拠が無いんだろ。現行犯以外ない訳か。」

「そうだ。恐らく、俺達を捕まえれば、退学は勿論、もしかしたらムシヨに送れるかもしれないんだ。そして、自分は県内トップ校を浄化したと称えられるのさ。だが……………」小林が言っている途中で金子の携帯が鳴った。

~~~~~

「電車はマナーモードが基本だぜ。人様に迷惑だぞ。」吉田が金子に冷たい目線を向けながら言った。

「わ……………悪い。知らない電話番号だ。服部達か？」  
プチ。

金子が電話にでた。

「もしもし。」

「もしもし、服部だ。金子か？」

「服部……瑞穂は無事か？」

「無事だ。彼女を助けに来ないのか？」

「今、行くからな……瑞穂は関係ない。俺が身代わりになるから解放してくれ。」

「……今、何処にいるんだ？早くしないと、管理人に見つかっちゃうぜ。」服部はたんと言った。

「元はと……」金子が言い出したそのとたんに、吉田が携帯をもぎ取り、電源を落とした。そして小林に投げると、小林は素早く携帯を黒い箱に入れた。

「何すんだよ！！！」金子が激怒した。

「馬鹿！！逆探されてるんだよ。何で、金子に電話をしてきたかと言うとだな、この場で逆探が出来る携帯は金子のだけだからだ。奴らは、金子が手助けを求めるであろう人をよんでるな。」

「逆探知？」小林が何時になく必死なので、金子が狼狽した。

「ああ。でも電車の中だと気付いてしまった。幸い、たくさん話してたら30近く経ったからもう着くけどな……」

「スピードが落ち始めましたね。」

小林の言ったように、電車はホームに入り始めた。窓から見ていた後藤がそれを認めた。ガタン。それから間もなく、電車が停車した。

5人は一斉に降りた。萩谷は追加料金を払わなければならなかった。時間がかった。

「待ってくれー」萩谷は吉田達を追いながら言った。吉田達は友達と一緒にでなければトイレにいけないような馬鹿共とは違うので萩谷を待つような優しい事は決してしなかった。

「学校はここからどれくらいだ？」萩谷が言った。

「10分からんぞ。」

「吉田は入股はや歩きだからな。萩谷の歩行速度なら15分くらいだな。」吉田の発言を退けながら、小林が言った。

15分後……………

「ここが達也達の学校か。暗くてよく見えんが。今何時だ？」

「……………5時50分だ。」携帯を取り出しながら金子が言った。

「その女子は何処にいるんだ？」萩谷が言った。

「さあ……………とりあえず昇降口まで行きましよう。」 後藤

がそう言った時、目の前に突如、縛られた女子を連れた、背の高い黒いマントを被った男子が現れた。

「来たか。それで全員か？」声が言った。

「そうだ。瑞穂を早く放してくれ。」金子が呻くように言った。

「約束だ。放してやれ。」また新たなマントを被った男子が現れた。声から服部だと分かった。

「ああ。」最初の男が、マントを脱ぎながら言った。しかしどいう訳か、その男は昇降口のドアを開け、縛られた女子をほどき、猿轡を取りながら、突き飛ばして、中に入れた。

「さあ、どうぞ。」服部はニヤニヤしながら言った。

金子は迷わず歩き出した。しかし、小林がその手を掴んで止めた。

「待て。罠かもしれない。」小林が言った。

「そんなことないぜ。ありや本物の黒澤さんだ。」吉田が、探知機のような物を倒れたままの女子に向けて言った。

「そうだ。罠なんかじゃないぜ。少なくとも今お前達を傷つけるような事はしない。」服部は落ち着いて言った。

「……………」小林はまだ何かを考えるようだ。

「俺達が何かすると思うなら、そうだな、下がっていよう。石田！」 「あいよ。」 石田と呼ばれた男子が昇降口から離れた。 「……………貴司、あいつらから目を離すな……………バラバラになると危険だ。全員で行こう。」 小林が言った。

全員が歩き出したが、服部達は何もしない。

後藤がふと気付いて小声で言った。

「なんか、服部達は無理に笑ってません？何か体が震えているようにみえるんですが……………何かに怯えてるように。」 吉田は後藤の言葉を聞いて、二人を見た。確かに張り付いたような笑顔だ。恐怖を無理矢理押さえつけるかのようなうだ。

ついに、一行は黒澤のもとに着いた。金子がかがんで、脈をとった。異常はない。

小林が金属探知機を出し、爆弾等が仕掛けられていないか、確かめたが、何もない。 「よし、大丈夫。気を失っているだけだな。」 金子が黒澤を抱き抱えようとしたが、気絶した黒澤は普通に遙かに重く、出来なかった。

「俺で良ければ。」 長身の萩谷が進み出た。やっと事件に関われた、というような表情だ。

「ああ、頼む。」 金子が言った。

ガシャン！！！！

凄まじい速さでドアが閉まった。

「?!なんだ、何のつもりだ？」

金子が叫んだ。

「ク……………これは、もしや？」 小林がガラスを割ろうとして止めた。 いや、そのまま倒れた。

「小林!!!!どうし……」吉田がいかけで同じように倒れた。

バタバタ。何かが倒れる音がした。外の転校生二人も倒れていた。

後藤が、ナイフを取りだし、ガラスに叩きつけた。しかしガラスはびくともしない。萩谷、後藤が倒れ残った金子もあつという間に倒れた。

## 第8章 廃校

「……………し君！！！！……………し君っ！！！！」

しばらくして吉田は自分が何者かに激しく揺すられることで目を覚ました。

「！！！！！！貴司君っ！！！！！！」驚いたような、安心したような声がした。

吉田はガバツと起きた。

「！！……………ここは？！」吉田はふと周りを見渡した。右隣に小林と金子、萩谷が倒れていた。

「良かった……………貴司君！！！！」吉田は気付かなかったが、蛭原がすっかり吉田の手を握りしめていた。

「蛭原さん。ここはどこです？何故君が？」吉田は蛭原を認め、左を見た。黒澤、後藤。そして海老澤までがいた。どうやら、全員が寝ていたらしい。

「分からない……………木造校舎みたいで……………そこにドアが有ったから開けようとしたけど、外から鍵が……………」蛭原はドアを指しながら言った。

「ハーン。またか……………」吉田が苦笑いした。

蛭原が吉田を見た。

「何か分かったの？」吉田が返答しようとした時、小林がガバツと起きた。

「いつの間に寝ちまった？……………貴司！！！！」小林は起きたのちしばらく首を回していたが、吉田を認めると、吠えた。

その大声に皆が動いた。

「う、うーん？」

「……………一体何があつたんだ？」

「ここはどこ？」色々な声がした。

教室は様々な人間がいた。制服の生徒や、吉田達のように私服

だったり、明細服だったりだ。

「貴司……………もしかこれは又……………」小林がそう言うと、返事も待たず、萩谷をたたき起こした。

「起きろ！萩谷！！」小林に揺すられ、萩谷は目を覚ました。萩谷が目を覚まし、小林と何かを早口に語り始めた。その時だった。

ガラガラガラ。 教室のドアが開いた。

全員がドアを見た。

「はいはいは……い。」

パンパンと手を叩きながら男が入ってきた。

「皆、目が覚めたようなので、説明します。」男が入ってきた後から、明彩服を着た兵士が6人ほど入ってきた。肩にはライフル銃を持っている。

「何、あのおっさん。」

「さあ？」

こそこそとしたやり取りがあちらこちらから聞こえた。

「はい。え……今日から皆さんの新しい担任になりました、嘉門総一です。よろしくね」

「……………」

「……………」

吉田や小林は沈黙している。場は水を打ったように静かなので、嘉門は歩き出した。

「今日皆さんに集まってもらったのはあるゲームをしてもらう

ためです。このゲームはとても興味深いもので、色々な人がでちやいます。」

「…なんだよ、ゲームって……………」

「さあ？」

「仲間を作る者、仲間を裏切る者、信用できる者、信用されない者、孤独になる者、ああそう。中には狂っちゃう奴もいるんだゾオー。すごいだろオ……………」

「つうまア……………」

ここにいる40人の皆さんで学校対抗の……………」

「殺しあいをしてもらいます。」

嘉門はたつぷり間を溜めた後でいい終えた。

「はっ？」

「わけわかんねエ。」

「つまんねーよ。」

様々な声があがったが、快い反応は一つもない。嘉門はウンウン、と楽しそうに聞きながら、したなめずりをした。

「おーい。入ってきてくれ。」嘉門は楽しそうに兵士を呼んだ。

ザッザッザッ。兵士が三人ほどでかなり大型なテレビを持ってきた。



嘉門がズボンから何かのスイッチを出し、ボタンを操作した。

「皆、よく見てろよ。」

「くそがア、覚悟し……………」男子の言葉はズゴンという音に飲まれた。そして、バタリと倒れた。

「皆、もう分かったよな？」嘉門は死体に歩みより、生首を持ち上げた。

生徒は絶叫しながら教室の後ろに後退した。

「はい、ではルール説明するからな。私語したり、歯向かったら大変だよ。」

嘉門は生首を放り投げ、黒板に向かった。

「ええ。ここは島です。周囲12キロの島です。ここで殺しあいをしてもらいます。」嘉門は黒板に島の形を書きながら言った。

「電気は使えませんが、水道とガスは無事です。建物の中に入るのも自由です。こういう時は一ヶ所に隠れて居ればいいもんな。」

何人かがホツとした様子だ。

「但し、そんなことしたら、戦いになんなんかいから、私達はこのようなエリアを設けました。」

A B C D E F G 1

2

3

4

8 7 6 5

「ええ、例えば先生がDの3が危ないって言ったら急いでそのエリアから脱出してください。そうしないとだなっ……………」

嘉門はここで初めて黒板から目を離し、生徒を見た。

「そのエリアにいつまでも居ると、その首輪が爆発するぞ！！」

「え、全島放送は1日4回。午前3時、9時、午後3時と午後9時です。」

生徒はぶるぶると震えだした。

「禁止エリアは2時間ごとに増えます。一度禁止エリアになれば、解除はされません。それと君たちが戦おうとせず、24時間の間に一人も死んだものが出ない場合には全員の首輪が爆発します。首輪には探知機もついているので、島から泳いで脱出したりしたら、また首輪が爆発します。」 「それから……………一番大事な事だがな、これは高校対抗です。」

嘉門がニヤニヤしながら言った。

「何？」

「えっ。」

「殺しあい高校対抗です。自分たち以外の高校生が全員死んだら、生き残ることができます。どうだ？少しは戦う気になったか？」

誰も何も言わない。兵士がスポーツバッグが大量に入った籠を

押してきた。

「これは皆さんに支給されるものです。中には若干の食糧、水、会場地図、コンパス、懐中電灯、そして戦うための武器が入っています。武器は銃器から刃物まで様々です。これは、力の無いものにも戦わせる意欲を沸かせるためです。」

嘉門が全員を見回した。

「よろしい。では、皆さん、20分後に『プログラム』を始めます。それまで各校話し合いをしてください。まだ殺しあいにはするなよ。皆さんが全員出た10分後にこのエリアは禁止エリアになるからな。」

吉田と小林が頷き合い、生徒を集め始めた。

## プログラム参加者名簿

### M高校

|     |         |
|-----|---------|
| 岩本  | 怜衣      |
| 海老澤 | 弘毅      |
| 蛸原  | 美樹      |
| 金子  | 匠       |
| 黒澤  | 瑞穂      |
| 小林  | 達也      |
| 後藤  | 謙介      |
| 萩谷  | 悠斗（転校生） |
| 山口  | 麻里      |

K 高校

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 横山 | 馬淵 | 保坂 | 服部 | 坂下 | 木田 | 川村 | 大原 | 遠藤 | 石田 |
| 圭介 | 涼太 | 翔平 | 進二 | 晋吾 | 正人 | 一雄 | 光一 | 聡  | 宣之 |

B 高校

|    |    |    |                  |    |    |            |    |    |    |
|----|----|----|------------------|----|----|------------|----|----|----|
| 水野 | 林田 | 長山 | 富永               | 高藤 | 瀬谷 | 今野         | 加藤 | 岩田 | 安達 |
| 欄  | 準  | 舞  | 度 <sup>わたる</sup> | 一樹 | 梨花 | 大輔<br>(死亡) | 啓子 | 良介 | 春彦 |

S 高校

|    |
|----|
| 吉田 |
| 貴司 |

|    |                      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----------------------|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 山本 | 元木                   | 新井田 | 仲谷 | 照山 | 国信 | 桐山 | 太田 | 宇野 | 安斎 |
| 学  | 棗 <small>なつめ</small> | 千佳  | 一晃 | 志帆 | 美佳 | 文哉 | 直人 | 彰  | 弘  |

## 第8章 廃校2

「廃校の最上階」

「いよいよ、始まりますね。」兵士の一人が教室に戻ってきた嘉門に言った。

「まあな。井坂先生、どうしてまた進んで自分の高校を推したんですか？他の高校の教師達は話のわからない人ばかりでしたよ。」嘉門が体格のいい男を見ながら言った。そこには、小林達の高校の進路指導担当の井坂がいた。

「何か困ることがあるのか？」井坂が唸るように言った。

「いえ、何も。」嘉門は落ち着いて言った。

「それで政府の防衛省の優勝予想は何処に懸ける？儲かりそうなのは……何処だ？」嘉門がしばらくしてから言った。

「はっ。やはり自分は……B高校かと……」

「B高校か……ま、大本命だな。何しろ、運動神経は抜群だし……川村の父親は防衛省の幹部なんだろ。」

「はい、そうです。しかし、私はM高校かと思いました。」

また新たな兵士が言った。

「それはないな。」井坂が短く言った。

「どうでしょう。小林はサッカー部のキャプテン。さらに、ケンカは人一倍強い。転校生として参加した、萩谷はH高校のサッカー部のキャプテン。さらに吉田はT中学校3年1組プログラムの優勝者です。」

嘉門が調査報告書を見ながら言った。

「吉田は中学校の部の優勝者か……まあ、何人も殺してそうだけだな。蛭原は吉田が殺人者だと知ったら見る目は変わるかな？」

井坂が言った。

「蛭原？今回のプログラムに参加した、M高校の女子ですか？」

「ああ。吉田は全くきづいてないが、蛭原は明らかに吉田に好意を寄せているみたいだ。」井坂はニヤニヤしながら言った。

「本当ですか？調査報告書によると、吉田は……いや吉田に限らず、萩谷や後藤もですが、冷酷非情、女子に対する免疫はない。ケンカは凄まじく強く、不良達から金を巻き上げたりしています。」

「B高校の服部が蛭原を襲った時、偶然居合わせた、吉田が肩に重傷を負いながらも服部の足の骨を折り、全治2ヶ月の怪我を負わせた挙げ句、気絶させたらしい。その時、蛭原は戦いを見守っていて、終わった時、吉田に抱きついたらしい。」

「服部を破るとは……これは面白い事になりましたね。」

「しかし、S高校やK高校はどうですか？」

兵士が言った。

「ふん、バカかお前は。本来プログラムはクラス単位でやって、一人しか残らないルールなんだぜ。それをわざわざ高校対抗にしたのは、M高校とB高校を戦わせるためなんだ。単に二校を無差別に選んだだけだ。あつというまに殺されちまうだろ。」

井坂が冷たく言った。

「……………ですね。作戦会議がそろそろ終わる頃じゃないですか。嘉門様、用意した方が……………」

兵士が言った。嘉門は立ち上がると、タバコをポイと吐き捨てた。

「だな。いよいよ、はじまるぞ。」嘉門は楽しそうだった。

（廃校の1階）

「じゃあ、これで2度目なの？」黒澤が驚いて聞いた。

「そう。俺達は貴司から聞いていたが、まさに同じような状況

だったから、度肝をぬかれたよ……………」　小林が萩谷とウンウンと頷きながら言った。

「！！！！貴方は……………」ここで岩本は萩谷の存在に気づき言った。

「彼が君の依頼した探し人の萩谷悠斗です。」吉田がさりと言った。

岩本は黙って萩谷を見ていた。いつまでも見つめられて、萩谷は苦笑した。

「彼は誰なんだ？」海老澤が小林に聞いた。

「俺達の幼なじみさ。全幅の信頼がおけるやつだから。金子の恋人の……………」小林はここで一旦言葉をきり、黒澤をニヤニヤした目で見た。

「彼女を助けようとしたところ、駅で偶然会ってそのまま着いてきたのさ。」

「ふうん。小林がそう言うなら安心だ。よろしく。」海老澤が握手を求めながら言った。

「ああ。よろしく。」萩谷は真面目な顔になり握手した。

「で、どうします？」後藤が言った。

「やはり、バラバラになるのは危険だろう。数人でまとまっ……………」

「いや、駄目だ。」金子の発言を退けながら吉田が言った。

「何で駄目なんだ？」金子の顔が少し険しくなった。

「目立ち過ぎる。狙われるいい対象になるぞ。別に1人1人バラバラに行動する訳じゃないぜ。何班かに別れた方がいいと言ったんだ。」　「全滅を免れるためか。確かに有効だな。積極的に殺し合いに参加するきにはならんが……………」小林が言うと、場が静まり返った。シラケたと言うより、真剣に受け止めたと言う方が正しいだろう。

「うん…………じゃ、何班に分ける？メンバーはどうする？」金子が聞いた。

「3班か、4班…………いや、やはり3班か…………敵は恐らく総出で攻めてくるぜ。3人くらいいないと、食い止められない。」吉田が誰にと言うより、独り言のように言った。

「じゃ、どう分けるか…………」小林が言った。メンバーをぐりで見回した。

「ま、萩谷は俺と一緒に行動した方が良くない？みんなあまり慣れてないから。」

「じゃ、私とその班に入る。」山口がそう言うと、他のメンバーを見た。どこか挑戦的だった。誰も何も言わないので、小林は話を続けた。

「貴司は……………そうだな後藤君と組めば問題ないよな……………女子は誰が入る？」小林の問いかけに岩本が手を挙げた。そして、赤面しながら蛭原も手を挙げた。蛭原の感情を恐らく理解している小林はニヤニヤしながら吉田を見た。吉田は後藤と何やら話していて、気付いてない様子だった。

「じゃ、最後に…………バスケット部軍団。」小林がせせら笑い出した。

金子がもう少し、真面目にやれ、と言うところで、教室のドアが開いた。「はいはいは…………い。ミーティングは終わります。B高校から全員荷物を持って退出してください。5分後にS高校それ以後5分置きに行くから…………。」

B高校の生徒達が動き出した。

戦いがいよいよ始まるのだ。

「はいはいは~~~~い。ミーティングは終わりです。B高校から全員荷物を持って退出してください。5分後にS高校それ以後5分置きに行くからな~~~~。」

B高校の生徒達が動き出した。

戦いがいよいよ始まるのだ。

B高校の生徒は中身を確かめるなり個人ごとに、武器を出した。

全員が銃器類だった。

吉田はもう理不尽なゲームだと思い知らされた。

B高校は最後に、小林達をバカにしたような目で見て立ち去った。

続いてS高校、K高校と移動した。

遂に吉田達の番になった。

吉田は荷物から武器を出して見た。

『レミントン31 ショットガン』 添付の説明書を読んだ。

後藤が吉田の武器を見て安心したように、ため息をついた。

「俺はアーミーナイフでした。あまりB高校の奴等に役にたつようには見えませんな。」

「俺は当たり前かな？」小林が武器を見せびらかしながら言った。

『デザートイーグル』

「オートマチックの最高峰か。」吉田は武器を鋭い目で見ながら言った。

「私……私……こんなの使えない………」  
「蟋原が吉田と後藤に  
すぎるように言った。」

『S & W 357口径』  
スミス・アンド・ウェッソン

「今時リボルバーとは。自分の命を守るために役に立ちますよ。」  
「吉田が言った。」

「リボルバー？」蟋原が聞き返したが、吉田は首を振って黙らせた。

「さ、君たち、武器を確認するのは良いが、早く出ないと首から上が吹っ飛ぶぞ……」嘉門は楽しそうだった。

全員が頷くと、誰もいなくなった教室から班ごとに出ていった。

## 第9章 信用

くエリアCー3く

慌ただしい足音と共に、森に数人の男が入ってきた。

「ふう、ついに始まったな……………」巨漢の男が言った。

「俺は早くやつを葬りたいんだかな……………何なんだ、坂下？」

「奴等はバラバラに別れて行動しているようだ。俺達もバラバラに別れて潰しに行かないか？」

「……………大丈夫なのか？」最初の男、遠藤が言った。

「なに、こつちにはマシンガンがある。いざ、闘いになって負けるはずあるまい？」

「正論だな。俺から言い出すつもりだったが、特に言う必要もなくなった。」

「だろ？」ボスとも言える保坂の指示を得られ、坂下は有頂天になった。

「分かったが、どう分ける？」遠藤が言った。

「三人ずつに別れてじゃんけんだな。それで1位のチーム、2位のチーム、3位のチームにすりゃいい。」服部が言った。

「チームつて……………スポーツかよ。」保坂がせせら笑うと、その場の全員が残忍な笑い声を出した。

くエリアFー3く

「よし、ごつつあん、張ってくれ。」吉田の凄まじく小さい声がした。

「OK。」後藤が緊迫した表情で糸をピンと張らせた。

「……………よし、蛭原さん。缶を窓枠の上に……………」吉田はじつと作業を見ていた少女に言った。

「はい。」緊張感に押されながらも、慎重に窓枠に缶を置いた。後藤が糸を張り巡らし終えた家の鍵を岩本のアメピンで開けようと格闘し始めた。

「貴司。これで効果はあるの？」

「まあ、こういう場合は一ヶ所に留まって迎え撃った方が良いでしょう。但しB高校の連中はそれを知りながらも、積極的に殺しあうべく、生存者を探し回るでしょうな。」

「どうしてわざわざ……？あの人たちだってバカじゃないはず。」岩本が吉田の返答に難色を示した。

「奴等の支給武器は全員が全員、マシンガンでしたから……自信があるんですよ。不正があるのが無かるのが……」後藤がドアの鍵を慎重に回していた。今にも開きそうな気配はある。

「やっぱり不正なんだ。全員が全員、マシンガンだなんて。」岩本が怒ったように言った。

「そういえば、岩本さんの支給武器は？」吉田が辺りを警戒しつつ聞いた。「あたし？そういえば見てなかった。」岩本が鞆をガサガサやりだした。

「自分の身を守るのに武器を出さないなんて……ちつと抜けすぎじゃないですか？」後藤が顔をしかめながら言った。岩本は苦笑いを浮かべた。

「これは……ブーメラン？」岩本がブーメランを握りながら言った。

「外れですね。出ましたよ、インチキが。やはり複数で行動して正解でしたな。」後藤が呆れたように言った。

「こんなもので何をしろって言うの？！」岩本が激怒して言った。

「声が大きいですよ。静かにしないと見つかりますよ。とりあえず、家に入りましょう。」後藤がドアをピッキングし終わったの

を見て吉田が言った。

エリアG14

「じゃあ、小林君と吉田君に次ぐ学力だったのに、勉強時間を確保するために、地元のH高校に行ったんですか？」澄んだ声がして、家の中で防犯装置を作っている小林の隣の煙草を吸っている男子が動きを緩めた。

「誤差が……勉強時間を確保するためというよりサッカーがしたかったからです。」煙草を吸っている割には紳士的な対応だった。

「小林君と吉田君達と同じように喧嘩も強いんですか？」山口が言った。萩谷が苦笑した。

「山口さん、萩谷は初対面なのに随分饒舌だね。よく未成年で煙草を吸うようなやつを信用できるな。」小林が言った。「煙草は吉田君も吸ってるけど、いい人だし、信用できる。それに小林君だって煙草を吸う二人を信用できるでしょう？」山口は淡々と言った。

小林は一本取られたと言う表情になった。

「そういえば、達也の武器は何だった？俺は探知機……みたいなもんだった。」萩谷がゲームボーイのような物をポケットから出しながら聞いた。

「ふんふん、俺は防弾チョッキだった。何だか守りに入ってたっか……山口さんは？」

「ウチ？ウチはアイスピックだった。説明書が入ってなかったら名前も分からなかったと思う。」

「ろくに戦えないな。素手に持ち込むしかないな。」小林は無念そうに言った。

「でも、防弾チョッキは色々使える……とりあえずは……」

えーと、山口さんに着せるべきだな。ようし、これで大丈夫だ。」  
萩谷が言った。

「案じてくれてありがとう。二人の足手まといにならないよう頑張ります。」山口が言った。

小林と萩谷は山口の強い表情に力強く頷くことで応えた。  
エリアF16」

「よしつ。」海老澤がベレッタ（拳銃）の手入れを終え、小さく呟いた。

金子はズボンの右側にアーミーナイフを携えたまま、座りこんでいた。3人は近場の家に入り込み、身を潜めていた。プログラム開始から2時間が経過していた。今は午前1時30分。金子達が連れ去られたのは朝方だった。夜になるくらい遠く離れた県の島に違いなかった。

「3時になったら放送入るよな？」 「ああ。禁止エリアもそこから増えるわけだよな。ここが禁止エリアにならなきゃいいんだが……」

「だな。お前の婚約者がぐっすり寝てるしな。」

「瑞穂は昨日の夜から事件に巻き込まれてたんだから。」

金子はフンと鼻を鳴らした。

「恋ばなが出たついでに言うが、蛭原さん、貴司と同じ班になったな。」 「蛭原さんで貴司の事が好きなのか？初耳だな。」

「まあ、彼女の行動を見て判断したことだけだな。貴司に服部から守ってもらった時からだな。蛭原さん、可愛いから貴司も少しは恋愛感情があるはずだ。」海老澤がにべもなく言った。

「ふうん、貴司と蛭原さん、かあ。お似合いじゃないか。片方は喧嘩の鉄人、冷酷非情。片方は温厚で優しく、か弱い。お互いを支え合う要素があるな。」

二人の話し声は、寝室の黒澤の耳にも届いていた。

「美樹、貴司君の事が好きなのかな……………」これが終わったら聞こう……………」大丈夫。皆で力をあわせれば……………」黒澤は再び深い眠りについた。

## 第9章 信用2

エリアF13

家の防備を完全にした吉田達は、交代交代で寝るという選択肢をとった。

吉田は体力はかなりある方でシャトルランで120を超える回数を叩き出していた。夜に関しても、普段からパソコンで二コ動やようつべを見ているため、目が冴えていた。岩本も起きて、何やら携帯をいじっていた。後藤と蛭原は別室ながらも近い部屋で寝ていた。

「……………はあ。貴司、駄目みたい……………電話は回線自体が駄目で、メールすると、自分にエラー通知メールが来るよ。」岩本が携帯を閉じてイライラと言った。

「一番近い中継局を抑えられたんですよ。」吉田が当たり前だろ、という口調で言った。

「あのさあ、思うんだけど、逃げ出さないように首輪がついてんだよね。」

「???そうですけど……………」 「これ、外せないの?」岩本が首輪を回しながら言った。

「無理です。爆弾が内蔵されててそれだけでなく、危険なんですから。」吉田が言った。岩本は吉田が微妙に緊張しているのが分かった。何故か疑問には思ったが問わなかった。

「じゃあ、脱出は無理?」

「ですね。他の生徒が死ぬのを待つしか……………」

「言わないで!!!!」吉田の返答を岩本はほとんど絶叫しな

がら遮った。すると今まで堪えてきたものが崩壊するように泣き出した。

「貴司はいつもそう。あ……あたしがどんな思いをしてるか、みんながどんな思いをしてるか分かってない！！一番正しい答えを導き出せても、人の感情を無視したら台無しだと思っけど！！」  
岩本は涙に濡れる目で吉田を睨んだ。

「……………岩本さんの言う通りです。でも、それ以外に道はないんです。学校対抗と言う時点で、僕は自分が生き残るためには自分の高校を優勝させなければならぬ。だから岩本さんを助けるためにも……………皆を助けるためにも。」吉田は久々に動揺しているように見えた。岩本が赤くなった。

「あたしを助けるために……………ね。うまいこと言うね。あたしは貴司の事、嫌いじゃないけど彼氏いるから。」重苦しい空気を打開すべく岩本は言った。

「何でそういう話にもってこうとするんです？」吉田が呆れ顔で聞いた。岩本はいたずらっぽく笑った。

「別に。貴司は恋愛とかに興味なさそうだけど、恋愛は自分だけの問題じゃない事を言おうと思っけね。」

「はい？」吉田の声の調子は冷たくはないが、取り合おうとしない感じだった。

「恋愛は一人じゃできないでしょ？そう言うこと。」

「相手を好きになるかならないかは、自分でできるんじゃないですか。」

吉田は珍しくこの手の話についてきた。

「そうかもね。でも自分が好かれることは自由に選択できない。例え、好かれても気付かないことは結構あるんだよ。鈍感なんじゃないくて、期待はしているんだけど、違った時の反動があまりにも強いから……………」

岩本は力説しながら笑い出した。吉田とこんな話をする日が来るとは思いもしなかったからだ。吉田が首を振った。

「貴司は気付いてないと思うけど、貴司の事が好きな人がいるんだよ。」 「へえっ。誰ですか。」 吉田はあっさりと聞き返した。

「それくらい自分で気付きなよ。あたしは教えないもんね。」 岩本はそっぽを向いた。

吉田は肩をすくめた。

岩本は泣き止んだ。吉田はおもむろにノートとシャーペンを取り出し、何かを書き始めた。

「何してるの？」 岩本は暇潰しに聞いた。

「日記を書いてるだけです。」

「こんな状況で書かなくても……」 岩本があきれた。

沈黙が支配する世界。以前の二人にはよくあつた事だが、今の二人は夜が明けるまで話し続けた。

～エリアG-4～

山口が一人眠り、萩谷と小林が見張りについていた。二人は小声ながらも若干落ち着いた調子で会話していた。

山口は陸上部で体力がないわけではないので、眠らずに二人と話し合いたかったらしいが、小林に勧められて、体力温存を選んだ。

「しかし、よく寝てるな。男子が2人、女子が1人なら少しは考えた方がいいんだがな。」 萩谷が言った。

「まあな。確かに強姦されるかも……とか考えないのかな。信用されてるみたいだが……」 小林が低い声で言った。

「裏を返せば、異性に興味がないのが丸分かり……達也、お前変わらねーな。」

「黙れよ。これでも3人に告白されたんだぜ。」 小林がやり返

した。

「マジか？俺も3人だ。でも告白されても付き合っていないだろ？」

「ああ。何か文句あるか？」

「全く。そういう理由で山口さんにも信用されてるんだな……」

「……」 萩谷が苦笑いした。 小林は山口を見た。

「この人、陸上部なんだよ。」 「そうは見えねーな。うちの

の陸上部はKJばっかだから……」

「KJ？『キモい女子』のことか？」 小林がせせら笑った。

「なきにしもあらず。俺が考えたのは『可愛そうな女子』なんだがな。」 萩谷は吸い殻をビニール袋に捨てながら言った。

「その分、山口さんはJKって感じるけどな。」 小林は真面目に言った。

「ほほう。確かに可愛い方だが…… 戦闘向きにゃ見えねーな。」

「萩谷が苦笑いした。」

カコン！！！！

仕掛けの空き缶が落ちた。

「！」

「！」

萩谷と小林は素早く窓枠の下部分から目を出して辺りを見回した。 「そうは見えねーな。うちの陸上部はKJばっかだから……」

……」

「KJ？『キモい女子』のことか？」 小林がせせら笑った。

「なきにしもあらず。俺が考えたのは『可愛そうな女子』なんだがな。」 萩谷は吸い殻をビニール袋に捨てながら言った。

「その分、山口さんはJKって感じるけどな。」 小林は真面目に言った。

「ほほう。確かに可愛い方だが…… 戦闘向きにゃ見えねーな。」 萩谷が苦笑いした。

カコン！！！！！

仕掛けの空き缶が落ちた。

「！」

「！」

萩谷と小林は素早く窓枠の下部分から目を出して辺りを見回した。

「……………」

「……………」

銃を構え、それぞれ緊張した面持ちで辺りを見回した。  
やがて、

ザッザッザッ。という足音。  
一人分だった。

「山口さんを起こせ。俺が見張ってる。」萩谷が言った。小林  
は匍匐前進で隣の部屋に移動した。

午前2時48分。最初の放送まであと12分。

## 第10章 融解

ザッザッザッ。

萩谷は緊張した面持ちで銃を構えた。萩谷達が隠れている家の鍵を開ける際にガラス戸を微妙にわってある。しかも割れたまま、放置してある。もしそれに気付いたなら通過するか乗り込んでくるかである。

後者の場合はあからさまに、プログラムを『やる気になっていく奴』である。萩谷は容赦はしない考えである。萩谷が持っている銃は彼が広島に旅行に行った際、ヤクザに喧嘩を売られ返り討ちにした際、入手したものである。支給された武器ではない。

ピピピピッ。

萩谷のポケットの探知機が鳴った。萩谷が急いで見た。

『4番』 『B高校』

萩谷は更に緊張の色を顔に浮かべた。

B高校は防衛大学の附属高校だろう、と小林と吉田が言っていた。

間違いなく戦う事になる。

「どうだ？姿を確認できたか？」小林が戻ってきた。

「静かにしろ！！！！15メートル圏内に入った。B高校の4番

だ。  
」

「山口さんは、隠れさせた。Bの4番……………川村、川村一雄  
って野郎だ。」小林が、配られた名簿を見ながら言った。萩谷は窓  
枠に相手から見えないよう、小物を置き、その隙間から外を見た。

ガサガサガサ。草を踏み分ける音が次第に大きくなった。  
ガサガサ……………

音が止まった。

萩谷は視界に、小柄でマシンガンを片手に掲げる男を確認した。

川村一雄、その人だ。防衛大学付属高校の男子だった。

川村は一瞬、ドアを見、続けて割れたガラスを見、そして窓を  
見た。

パラパラパラパラ！！！！！！！！！！

男が、マシンガンを乱射した。

「出てこい、ここにいるのは分かってる。どうせ死ぬなら、殉  
死の方が良いだろ……………！」

「チッ。」萩谷は手前のガラスを粉砕し、川村を狙った。  
川村はそれに気付き、マシンガンを向けた。  
ズダン、ズダン。

2発とも、萩谷の銃から正確に川村に飛んだ。川村は咄嗟に身を伏せ、乱射してきた。

サッと、萩谷が窓枠の下に隠れた。

「マズイ。マシンガン相手じゃ分が悪い。このままじゃマズいぜ……………」

パリン！！ゴトン！！

マシンガンが家具や、時計を粉碎し、萩谷達に落ちてきた。

「マジか？！」小林が直ぐに避け、苦渋の表情を浮かべた。

「仕方ない。一か八か、賭けよう。悠人……………」小林が萩谷に耳打ちした。

萩谷は息を呑んだ。

「ダメだ。顔に当たったらどうする？」

「山口さんを守らないといけねーだろうが。」小林は不適な笑みを浮かべた。

パラパララ……………カコツカコツ。

マシンガンがたま切れになった。

「今だ！！！！」小林はそう叫び、玄関を開け放った。川村が振り向いた。

たま切れでマガジンを入れ換えるのと、小林が先に川村を失神させるのどちらが早いか……………

パラパララ……ドサッ。

答えは前者だった。何発もの弾を浴びた小林はバタリと何も言わずに倒れた。

「達也！……！」萩谷が叫んで、銃を撃った。

川村はそれを避けた。

「なに？銃弾をよけただと？」萩谷が歯を食い縛った。

川村はマシンガンを乱射した。萩谷が、家の壁で身を守った。

「ケケケケケ。最期が近づいて来たようだな？三剣士のお二人さん？」

川村は下品に笑い、マガジンを取り替えた。萩谷も急いで替えた。

「何故その言葉を？」

萩谷が壁に身を隠し、聞いた。

「……………」川村は何も言わない。

パラパララ……マシンガンを撃ちながら萩谷と距離を詰めてきた。

萩谷は思いきって、飛び出し、銃を撃った。

パラパララ……カタン！

ダンダンダン……グッ……ポタポタ……

萩谷が撃った銃弾が敵のマシンガンを直撃、破壊した。その代



血が吹き出して、川村はグルカナイフを取り落とし、倒れた。

「な、な、何故……………」

川村が意識を失うまいとして言った。

「ヒビヒビヒ……………」萩谷が玄関から現れた。

「何故、撃たれたのに生きてるか？」「小林は残忍な笑みを浮かべながら、上着を脱いだ。

「……………テメエ……………防弾チョッキ……………」

「そういう事だ。」萩谷がグルカナイフを拾った。

「ナア、質問するぜ。変な真似したら……………分かってるな。」

萩谷が銃を向けながら言った。

「……………」

「貴様らは、このプログラムで不正をしてるな。」

「……………いや、はつきりとは……………本当だ！……………だが俺自身はテメエの言う通りだと思う。」

「これに召集されたのは、強制的にか？」

「そうだ……………気が付いたら、ここにいた……………全部は保坂が知ってる……………俺らの高校の……………」

「そうか」

ズガン！！！！

萩谷の銃から、川村の頭目掛けて、銃弾が放たれた。

脳味噌がぶっ飛び、川村は、何も認識できずに死んだ。

「誰が、正直に話したら、殺さないと言った？」萩谷がせせら笑いを浮かべた。

「確かにな。」小林が言った。

「しかし、こんなに派手にやっちゃったら、もう此処には居れないな。場所を移そう。山口さんももう出てきて大丈夫だろう。」

小林は割れたガラスや、銃弾のめり込んだ壁を見ながら言った。

萩谷は短く頷くと、川村の死体を坂道まで足で蹴って動かし、しまいには坂道から一気に転がり落とした。

## 第10章 融解2

午前3時。

プンツツツ!!

「午前3時になりました。担任の嘉門です。みんな元気にや  
ってるかア？報告を始めます。」

「禁止エリアは今回はありません。プログラムはまだ始まった  
ばかりですからね。死亡したお友達の名前言うぞー!!」

「S高校、全員死亡!!!!!!」

「K高校、全員生存!!!!!!」

「M高校、全員生存!!!!!!」

「B高校、出席番号4番、川村一雄。」

「以上です。また、朝に会おうな~~~~~。」

エリアF16

海老澤と黒澤は部屋の片隅で、本を読んでいた。

「ねえ…………海老くん…………」黒澤が呼び掛けた。  
「なに？」海老澤は本から顔を上げて言った。

「聞けるときに聞いておきたいんだけど、海老くんと貴司君って、初めて話したのはいつだった？」

「何で、そんなこと？」  
「いいから」

黒澤はバシッと言った。下手な男子より格好いいだけはある。

「……………あれは、話すと長くなるよ……………いいの？」

「うん。」

「そう……………なら言うけど……………」

\*\*\*\*\*

一年半ほど前だった。

季節は5月。県トップの高校に通っていても、慣れてしまうと、生きがいがなくなってしまうた。日常………が続いて退屈だったが、バスケット勉強は両立させた。いつか、身を結ぶと信じて。

さて、今日は日曜日。彼女にデートに誘われた。退屈しのぎには十二分だ。

彼女と、朝学習館で勉強し、昼にはマクドナルドに行き、午後は、カラオケに行った。とても楽しかった。

帰り道だった。

「電車、海老くん何時？」彼女は黒澤と同じように、海老澤をそう読んだ。

「17時12分。北口まで10分もあれば着くから、ゆっくりで大丈夫だよ、松本さん。」

海老澤の彼女の名前は松本といった。

「ありがとう。新しいクラスはどう？」

「まだ話せない人が多いけど、恐らくいいやつらばかりだよ。松本さんは？」

「うん、まだ全員は分からないけど、みんな好人だよ。」松本はニツコリして言った。海老澤は笑った。

他愛もない話だが、楽しかった。北口まで話は途切れなかった。アイツと会ったのは、北口でだが、その前に絶対に不可欠な要素が

あった。それがなければ、今アイツとは初対面かもしれない。」

北口に着き、駅内に入った時だった。

「きゃー！！！！」松本が何かに躓き、転倒した。 「イテッ  
ッッ！！！！」続いて男の声。

「何しやがる？！！！！」その男が松本の下から言った。

「ごめんなさい！！！！」

海老澤が振り返ると、松本が男から退くところだった。

「こいつ、いきなり俺に倒れかかってきて、あゝあ、缶ジュース服かかっちゃったよ。」男が松本が躓いたと思われる足の男に言った。

「マジないわゝゝクリーニング代出せよ。」男が松本に言った。

「そんな……………あなたが、私を引つ掛けたんじゃないですか？  
！」松本が怒った。

「ああ？何だと？因縁つけるきか？？おう？」そう言うと、足を出した金髪の男が松本の肩を押した。

「待ってくださいよ。」海老澤が割って入った。ケンカは人一倍強い。自信があった。

「だれだ、テメエ？」

「俺が誰かはどうでもいい。これ以上、友達に関わるのは止めてもらう。」

そう言つと、海老澤は松本の腕を引っ張つて歩き出した。

「テメエ、待てよ。」金髪の男が海老澤の肩に手をかけた。海老澤はそれを振り払った。

「テメエ、やる気か？」今の、行動で完全にキレたらしい。

「そつちがその気なら。」海老澤は楽しむように答えた。

「そうかい……………じゃあ、遠慮なく……………!!……………!!」男が叫んだ。海老澤は、振り返った。

数分後……………二人組の男は地面に倒れ、腕を押さえていた。

「さて、行こうか……………って、松本さんに今の見せたかったな……………

……………電車も行つてしもた……………また1時間待ちだぜ。」

その時だった。

「おう、大丈夫か？充？」海老澤が振り返ると、さっきの金髪の男に5人ほどが、群がっていた。

「ボス……………あいつです。」

金髪の男が海老澤を指差した。「ボスだと……………？」

海老澤が頭を振った。

「坊主、充を可愛がってくれたみたいだな。久しぶりに楽しめそうだ。」

そう言うが早いか、ボスは海老澤につかみかかった。猛烈に力が強く、海老澤が投げようとするのを防ぎきり、海老澤を投げ出した。

ドサツ。海老澤が倒れた。外傷はないが、背中を打ち付け、咳がでた。

間を空けずにボスが飛びかかってきた。海老澤はそれをかわした。

が、着地した場所に回り込んでいた不良がいた。

「しまっ……………」海老澤は遅いと知りつつ、パンチを受け止めようとした。

ドタツ。海老澤は倒れていない。鈍い音と共に不良が倒れていた。

「お前……………」同じクラスの吉田?」海老澤が驚いた。

「……………」吉田は肯定も否定もせずに、黙って不良を蹴り飛ばした。足元を切り込みを入れるようにして蹴り、不良を転倒させたのだ。

「仲間か??」ボスが新たに登場した男子を見ながら言った。

吉田はやはり何も言わない。ボスは襲って来なかった。

「まあ、今日はこれでドローにしてやる。だがな、忘れるなよ。」

今度、俺の仲間に手を出せば……………今日のようにはいかないぜ。」  
ボスは落ち着き払って言った。吉田は、じっとボスを睨み付けていた。

やがて、ボスを先頭に不良達は去っていった。

「フ……………。危なかった。サンキュー、吉田君。」

吉田は海老澤を見た。

（うわ、なんて冷たい目だよ……………）海老澤は心の中で呟いた。

「どういたしまして。君に助けはいらなかったかも知れませんか。」  
吉田は言った。

「いや、吉田君が来てくれなかったら、着地した時にケガしてたよ。危なかった。」

「フン、そうですね。いや、何か女性の為に君が闘うのを見てたんですが、僕は守るものを持ちながら、ケン力で勝った人を見るのは初めてです。」

「そりゃ、どういう意味？」

「要するに、ケン力は守るものを持ちながらやるのは不利なんですよ。人質にされたら終わりですし、さっきみたいに複数の時は彼女だけが痛い目を見る。それを君は勝った。」

「吉田君……………」

「何ですか？」

「モテないでしょ？」

「はい。」

海老澤は傷つけたかと思ったが、吉田があっさり返答したことから、別に傷ついてる訳ではないと分かった。

「新しいクラスで好きな人できた？」

「いや、できません。」

「可愛いと思う人は？」

「まだ、顔と名前が一致しないんで、誰の事も分かりません。」

吉田に開き直ってる様子や、謙虚さが見えない。どうでもいいと思  
つてるとしか考えられない。

「そう………もういい疲れた………」。「海老澤がため息をつい  
た。

吉田は海老澤をずっと見ている。

「何だ？」海老澤が言った。

「いや、何も。」吉田は何かを隠すような言い方だった。

海老澤は吉田に軽く手を挙げると、そのまま去っていった。

\*\*\*\*\*

「ふーん。そんな乱暴な出会いだったの？吉田君で何であんな  
ケンカ強いのかな？」黒澤が一通り、海老澤の話を聞き終え、ソフ  
アーに深く座りながら聞いた。

「あいつの中学校が県内で有名な不良校だからな。毎日ケンカ  
して生きてきたらしい。アイツの手………」

「そう言えば、ことあるごとに、血まみれになってるね。席が  
隣だった時、不意に出血しだして、驚いちゃった。」

「傷があちらこちらにあるんだな……高校に入っても、そういう輩を呼び寄せちまうんだろうな。煙草は吸うし、目付きは悪いし……身なりもだらしないし。」

「でも、悪い人ではないよね。」黒澤が不安そうに聞いた。

「まあ、極力他人に迷惑をかけるような事はしないからな。」

海老澤がそう言いながら、窓の外を見た。空が白み始めていた。

# 心の傷

エリアフィス

「あのう、貴司君？」

岩本に代わり、蛭原が見張りを吉田としている時だった。好きな男子に声をかける勇気が湧いたのは、ある意味緊迫感から来るものの、影響かもしれない。

「何ですか？」吉田は椅子に深く座り、本を読んでいた。

「さっきの音って銃か何か？」

蛸原は冷静に言った。

「マシンガンですね。連続的な音でしたし。でもさっきの放送でB高校に死者が出ました。誰かと戦って負けたのでしょうか。」

「誰と戦ったのかな……瑞穂や、麻里じゃないといいな……」

「……………」吉田は黙って本を読んでいた。表紙には『アポロ月面着陸の真実』と書いてある。

「……………」  
一方的に会話を途切れさせられてしまった。

姥原は不憫に思ったか、自分も本を読み始めた。

パラパラパラ……

「うがああああアアアアアアアアッッッッッッ！！！！！！！！！！」

絶叫がしらみ始めた夜空を突き抜けた。

吉田はガバツと立ち上がると、窓枠から僅かに目を出して、外を伺った。

蛭原は訳が分からず、震えていた。

「……………」吉田がショットガンを持ち、緊迫したかおで此方を向いた。

「ヒッ。」蛭原がその形相をみてますます怯えた。

「ごっつあん達を起こして来て下さい。」吉田は冷たくはないが、優しくない口調で言った。

「はい。」

「それには及びません。」後藤が、蛭原が一步も動かないうちに居間に入ってきた。

「美樹！！！！」岩本が来て、蛭原にしがみついた。蛭原が抱き止めた、まさにその時

ズダーン！！ズダーン！！

パラパラパラパラララララ……………

「アアアアアアアああッッッッッ！！！」

また声がした。

「近場ですね。何処だ？」後藤が窓枠から外を伺った。

「分らん。家のドアは割れてないよな？」

「はい。普通なら、ここは見つかりませんが……………」  
……  
ねえ、今の悲鳴は誰の？まさか……………」  
……  
「蛇原が言った。」

「違いますよ。僕たち側ではありません。恐らくは……………」  
……  
K 高校の誰か……………」

ガサツガサツ。

目の前の茂みが揺れ、男が3人現れた。手には全員がマシンガンである。

「……………」  
……  
「後藤が息を殺して見守っていた。」

やがて、男達は何かを話し合ったあと、家をまじまじと見た。

そして……………こちらに向かって歩いてきた。

「……………まずい。早くテーブルの下に……………」  
……  
「後藤が小声で指示した。」

「何で隠れるの？ばれてないでワッ。」  
……  
「岩本が何か言おうとするのを吉田がハンカチを通して口を無理矢理ふさいだ。そして、威嚇するように睨み付けた。」

「ヒッ。」  
……  
「岩本は吉田の剣幕に息を呑んだ。」

やがて、何かに見られているような気配を感じた。どうやら、窓から覗き込んでいるらしい。

「いないな。」  
……  
「やがて外から男の声がした。」

「この声……………服部？」蛭原が言った。吉田は黙って頷いた。

「次行こうぜ。」服部が言つて、足音が小さくなつて行つた。

「ムグ……………ムンンンンン……………」岩本は吉田に文句を言おうとしたが、それを察知した吉田が岩本の口を殊更に強く抑えた。「行つたふりをしただけでも知れませんかよ。」その様子を見ていた後藤が緊張した声で言つた。

吉田は携帯を出し、テーブルの下からそろりと出した。

どうやら反射するのを利用しているらしい。

「……………居ますね。」

吉田は携帯を戻した。

「大丈夫ですよ。すぐ去ります。何しろ何処にも壊された箇所が無いんですから。」

後藤が言つた。

痛い沈黙が続いた。やがて、なるべく静かに去ろうとする足音が三人分聞こえた。

それでも、吉田は黙っていた。後藤が大丈夫と言つたのは、10分後だった。

「ちよつと、苦しいよ！！！！小声で言ってくれば良いのに！！！」岩本は吉田をキツと睨んだ。

「貴方が、説明したら余計に動転すると思ったので。行き過ぎがありましたら、すみませんでした。」吉田が一応謝罪した。

岩本はまだ吉田を睨んでいたが、やがて立ち上がった。

「また寝て大丈夫よね？余計に疲れたかも……………」岩本は後藤に聞いた。後藤が頷き立ち上がった。

「じゃ、し。よろしくお願いします。」後藤がそう言うと、部屋奥の奥に入って行った。

「ああ。」吉田がそう言うと、また本を読み始めた。  
蛭原が吉田の正面に座った。

「あの！」蛭原が言った。

「はい？」吉田が本から顔を上げた。

「あの……………えっと……………」

「？」

「その……………」

「言いにくい事ですか？」吉田が冷たく言った。痺れを切らしたらしい。

「貴司君に聞きたい事があるの……………」

「はい。」吉田が本に目を戻した。

「……………貴司君って付き合ってる人いる？」

「いません。」

「……………！」即答に驚いた。吉田が一発で蛭原が言った事を理解するとは思えなかった。『付き合う』の定義を知り、かつ、返答に少しはユーモアを混ぜるのが普通である。

「そう……………」

「……………」

「じゃあ……………好きな人とかは？」

「いませんよ。」

「貴方に告白する人が現れたら付き合います?」

「いいえ。」

「……………」

「もう、いいですか?」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………… 蛭原さん?」

吉田が本から目を開けた。蛭原は吉田に背を向けていた。

「怜衣の言った通り…………… ねえ、中学校で何があったの?」

「聞きたいですか?」

「はい。」

即答に即答。まるでケンカのようなうた。

「そうですね…………… 蛭原さん…………… どうして、そんなに僕

の過去を知りたいのですか? 君は小林にも聞いたそうですね……………

何を企んでるんですか…………… ?」吉田が冷たく言った。

蛭原は真つ赤になった。

「どうして…………… 小林くん…………… 言わないって約束したのに……………」

「別に小林は君との約束を破ってはいませんよ。言わない対象は僕ですから。彼は萩谷に言ったんですよ。で、萩谷が僕に言った。簡単でしょう?」

「……………」

「質問に答えて下さい。」

「酷い…………… 酷いよ。吉田君、貴方はもう知ってるのに、私

に言わせるんですか？」

「何をです？」吉田の声から冷たさが消え、無機質になった。  
困惑しているようにも見える。

「好きなのに……………」

蛭原は突如、大粒の涙を流し始めた。

「はい??」吉田が珍しく動揺している。小林や萩谷の話術で動揺した事があっても、女子に動揺させられるのは初めてだ。

「吉田君……………貴司君の事が好きだから……………あの時からずっとお……………」蛭原はしゃくり上げた。

「僕をですか？」吉田が呆れた声を出した。

「駄目？」

「君の自由だと思います。」吉田がそう言つと、蛭原にティッシュを箱ごと寄越した。 「それなのに……………貴司君は私の気持ちを……………無視して……………応えてくれない……………」

「……………」

「小林くんに私の気持ちを打ち明けた時、小林くん真剣に貴司君を……………貴司君を称賛してたんだよ。でも過去は自分で聞けつて……………」

「それで、勇気を出して聞いた訳ですか。」吉田が言った。判断しがたい口調だった。

蛭原は答えなかった。代わりに正面に座っていた男子の隣に座っただけだった。

「分かりました。君がそこまで努力したなら、僕はそれに応えます。」

吉田が言った。

蛭原には、果たしてそれが、自分の告白に対して応えてくれるのか、自分の質問に答えてくれるのか、わからなかった。

## 第11章 心の傷2

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「どういう奴等だ？転校生とは？」そう言う小林は今よりずっと背が低い。小林は中学校の学ランをきている。だが、ボタンは全開である。堅苦しい制服を嫌っているのは明らかだ。

「滅茶苦茶さ。他人の給食は奪うわ、授業中は騒ぐわ、とるとこなしだな。」吉田はそう答えた。吉田もボタンは全開である。不良くさが漂っていたが、不良ではない。

「奴等に目をつけられないようにな。」

「僕がそんなじめじめした生き方をすると思うか？」吉田は挑戦的に言った。

「俺よりは弱いからな。」小林は臆する様子もなく答えた。

吉田は何か言いたげだったが、授業開始のチャイムが鳴り、小林も吉田も教室に戻った。

吉田は教室に入ると早速、目を細めた。

「ム力つく目してやがるぜ。構わねえ、気失うまでやっちまえ。」

そんな声がした。確かに不良達が暴れまわっていた。誰かをリッチしている。

「なあ、そろそろ先公来るぜ。続きはこいつの部室でやろうぜ。」取り巻きの一人が言った。

「そうだな。オイ、お前ら脚を持て。」不良達のリーダー、渡辺が言った。

一人一人が四肢をそれぞれ支え、渡辺は手ぶらなのでグループは5人だった。

渡辺、柴田、豊田、五十嵐、小川だ。

5人はベランダ（3年の教室は1階だった）からさっさと出ていった。

吉田は軽いため息をついた。別に止めようとしなかった。誰だって自分に矛先が向いたら嫌だ。吉田は確かにケンカは強かった。『人体解剖学』と言う、図書館の禁書の棚から引っ張り出した物を読んで以来、一発で敵の意識を数秒飛ばしたり、動きを止めたり出来るようになった。

それでも、現実には甘くない。1対5ではなかなか勝つのは難しいだろう。不良だとは言えバカではない。人質をとるやら、寝込みを襲うだとかもやるのだ。

よく、恋愛小説で主人公が女の子を不良グループから守って縁になる話がよくある。

主人公が空手や柔道をやっていた、ならまだ分かるが、何でもないただの男子がケンカだけは強い、などと言う理屈は現実世界では一切起こらない。その手の小説を書く著者は決まってケンカも気も弱く、小さく小説で不良に復讐しているわけである。吉田はその手の小説をことごとく時間の浪費と考えている。

小林はスピードがあつたので、素早く相手を倒す技もあつたし、不良が得意とする接近戦をさせなかった。

萩谷はスピードは小林には劣るが、体格の良さが際立っていた。

中学生で既に180を越えている。それでいて、サッカー部の主将である。

ぼんやりしていると、数学教師がスタスタ入ってきた。

結局、彼らはその日戻ってこなかった。

吉田は樂觀視していた。どうせ適当にボコった後に、放置して家に帰っただけだと。

だが。

次の日、吉田が学校に登校すると、小林が待ち構えていた。

「聞いたか？」

「あん？」

「高橋の件だ。」

小林は今と変わらず挨拶もろくにせずに話しかけた。高橋というのは昨日虐められていた生徒だ。

「死んだとか？」

「そう。何だやっぱり知ってたか。」

吉田は小林の返答に面食らった。吉田は冗談で言ったのだ。

「交通事故らしい。だが、交通事故だけではできない外傷が遺体にあつたから、疑惑の事件だな。」

「交通事故だけではできない？そりゃ渡辺達が暴れまわっていたからな。」吉田が答えた。

「やつぱり！！じゃあ渡辺達が車道に押し出したんだ。」小林が言った。

「あるいは、意識がないのを車道に投げ飛ばしたか……………」吉田は靴を履き替えながら言った。

「警察につかまるのも時間の問題だな。」小林は真相に対する論拠を自分で立てていて、吉田の意見を聞いて確証へと迫ったのだ。小林は教室に戻って行った。

しかし、証拠が余りに少ない事も事実だった。奴等の暴力は誰にも目撃されていないし、渡辺達が移動するシーンをとらえた監視カメラが一台もないのである。

1ヶ月後、渡辺達は留置所から出てきた。

さて、肌寒い11月の中旬に事件は遂に起こった。長い事吉田を苦しめる事となる……………

その日、珍しくも渡辺達は学校に来ていなかった。誰かを虐めるために必ず来るのだが……………今日はどういう訳だろう。

教室には笑顔が溢れていた。普段にはない緊張感のない笑みだった。吉田は渡辺が居ようが居なかるうが、関係なく、ひたすら自習していた。

その日の昼休み、小林が吉田の所に飛び込んできた。

吉田は給食を食いながら、本を読んでいた。

「貴司、大変だ。俺らのクラスの長谷川が奴等に連れ去られた！！目撃者が何人も……………学校に苦情入れがあつて、今先公達が行っている。」小林は一気に言った。吉田は豚肉の生姜焼きを渡辺達の分もぶんどつて食っていた。

「なら、大丈夫だろ？先公達が行つたんだろ？それで、神永いないのか……………」吉田は樂觀視していた。

「先公達が勝てると思うか？奴等は市内でも最強の部類に入る不良だぜ！！！」

「何処で何をしているか分からないのに、僕達にはすることは無い。」吉田が冷たく言った。

「どっかの空き家らしい。しかも5人で長谷川1人、女1人だぜ！！！」

「何、まさか強姦してると？」吉田はあつさり言った。

「長谷川には借りがあるだろう、俺達。」小林は静かに言った。

「えー、うん……………」吉田は微妙に理解したような顔で頷いた。中学1年の時、吉田、小林、萩谷の三人を何の委員会に入らなくとも済むように等の事をしてくれたのは、彼女だ。なかなかの美少女でもある。

「今すぐ行くのか？」吉田は小林に言った。

「夕方の方が良いだろ。先公達に会わないし。悠斗もつれていこう。」

「場所は分かつてんの？」

「ああ。」

「最後の質問。お前、イライラしてるストレス解消のためにはケ

ンカしに行つてないか？」

「何の事やら。」小林はすつとぼけた。

\*\*\*\*\*

「で、渡辺達には……負けたの？」蛭原は恐る恐る聞いた。

吉田は首をふった。

「ふうん、じゃ……何の不都合も……」

「あつたんですよ、勝ち方に。」

吉田は蛭原を見た。無垢な瞳に、光と感情のある目だった。

「続きを聞かせて下さい……」蛭原が言った。

自分をせつかく好きだと言ってくれた少女に話すのは少し抵抗があつた。しばらく吉田は蛭原をじつと見ていた。

「吉田君……？」蛭原が言った。吉田はそれでも視線を外さない。

「な、何……」蛭原は赤くなり、下を向いた。

「すみません、何でもありません。」吉田は答え、話し始めた。

## エリアH-5

「じゃあ、吉田君の過去には……だからあんな風に……信じられない……そこまで……」真実を萩谷から聞かされた山口はもうしどろもどろだ。

「真実です、全て。だからといって、貴司は俺の大切な友人ですし、達也にとってもそうです。それとも、貴司と一緒にの教室にいるのも、嫌になりましたか？」萩谷が言った。あのエリアを引き払い、新たな家に潜伏していた。

「そんな事は……………」

「俺だって貴司と同じ……………ですから。」

「……………始めに聞きました……………」

「……………通報するつもりがおありですか？このプログラ  
ムが終わったら？」萩谷は深みのある声で聞いた。

「……………どう判断していいか、分かりません……………」

山口の目には涙が光っていた。やがて、萩谷は見張りの位置を  
変えるために立ち上がった。

## 第11章 心の傷3

夕方、萩谷と小林と吉田は走っていた。小林は何故か情報通で、拉致現場を知っていた訳だが、しばらく走っていくと、ある工場の駐車場に入り口に人だかりが出来ている。説明するまでもない。

「やはりな、進入禁止のテープが張り巡らされている。警察が来ているに違いない。」小林が顔を曇らせた。いくらなんでも、警察の真ん前でケンカするのは間が抜けている。

「警察がテープを張り巡らした所を見ると、渡辺達は長谷川を人質にとっているのかね？」萩谷が言った。

「そうか、そういえばそうだな。説得の最中とか？」小林が唸る。吉田が徐々にサッカー部二人から離され始めた。

「貴司い。しっかりしろお。」萩谷は勘に障る声を出した。

吉田は答えず、走り続けた。すると、小林は人だかりの手前で右折した。

「この先に柵が破れた所がある。そこから侵入しよう。」小林が言った。

三人が工場の前にたどり着いた。

「む、あれは……」萩谷の指差した方向に、警察官が7人ほどいて、一人は拡声器で話していた。

「いつまでも意固地にならず、出てきなさい。お腹も空いたろう。」

この説得から判断するに、萩谷の言うとおり、籠城の構えなのだろう。

「しかし、説得の対象が小学生みたいじゃないか。やつらを甘く見るとヤバイぜ。」吉田が言った。

警察と先生達がいるので、吉田達は茂みに隠れたままだ。萩谷は双眼鏡で工場の窓から、渡辺、五十嵐を確認したと言った。

かれこれ1時間が経過しても、説得は続いた。

「……………強行突入しちまえよ、まどろっこしい。」萩谷が唸った。

「人質がいるんだぜ。」小林が言った。

「バカな。人質がいても居なくても、変わらん。」吉田がバシツと言った。

「じゃあ、お前は大事な人……………がいたとして、目の前で羽交い締めになれ、ナイフを首に突きつけています。さあ、どうする?」

「ふん、それで『こいつの命がどうなってもいいのか?』とか聞くんだろ?そしたら、『僕の欲しいのは人質の命ではなく、お前の命だ。』

『的な事を言う。

武器を捨てると言われても絶対に捨てない。逆に武器を捨てたら考えを変えてやらなくもない、と言う。普通はそういう奴等は人質に重きを僕らが置くと思うから、そうでないことを匂わせれば、簡単さ。まあ、人質を解放した後、そいつをどうするかは気分次第だな。」吉田が小林の質問にハキハキと答えた。

15分くらい雑談したころ、夜を貫く絶叫が聞こえた。

「ああああああああああああアアアアアア!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

そして激しい銃声がし、直後に悲鳴が聞こえた。

小林はガバツと立ち上がった。

警察と渡辺達が戦っている。しかし、渡辺達の奇襲で、警官達は銃を奪われ、銃殺されていた。

「至急おうえ……」そういいかけた、警官にたちまち何発もの銃弾が浴びせられ、通信機と共に倒れた。

「行くぞ！……！」渡辺達が叫んで、吉田達の真ん前に向かって、走り始めた。渡辺以外はたま切れらしく、銃を捨てていた。渡辺、柴田、豊田、小川、五十嵐である。長谷川はいない。

渡辺が茂みのすぐそばに来たとき、小林が踊りかかった。不意をつかれ、渡辺と小林は地面でもつれあった。

仲間達は直ぐ様何が起こったかを認識し、参戦しようとしたが、吉田と萩谷が応戦し、乱闘になった。

小林は銃を奪い、渡辺に向けた。渡辺は素早く建物の陰まで走り、銃弾を避けた。小林は深追いした。

「ふんっつー！」萩谷がフルスイングした右握りこぶしを、豊田の鳩尾に入れた。豊田は苦痛に呻き、倒れて踞った。

残された柴田は引かない。萩谷の腹に強力な蹴りを入れようとした。しかし、萩谷がそれを受け止め、軸足の左足を切れ込みを入れるように蹴り、転倒させた。起き上がろうとするところを萩谷が馬乗りになり、顔に鋭い殴りを何発も入れていた。

吉田も五十嵐と小川を相手に戦っていたが、ただ避けているようにしか、見えない。しかしやがて、吉田は五十嵐のパンチをかわすと、足を素早く、振り上げた。電光石火、吉田の右足が五十嵐の鼻に命中、あっさり骨が折れ、五十嵐は気絶した。

「何で……………」小川は仰天している。吉田が極めて冷酷な視線を向けると、小川は素早く逃げた。

渡辺は小林と戦って、何処かに行ってしまった。

「小林ー！。」吉田が小林を探して、建物の陰に近づくと、足が吉田の腹を強打した。

「??」吉田は反動で、壁に叩きつけられた。

見ると、渡辺が銃をこちらに向けている。小説に有りがちな、悪人が善人を殺す寸前に話しかけてきて、何とか救出が間に合う……そんな筋書きは通用しなかった。

渡辺は無言で吉田めがけて撃った。吉田は身を屈めながらも無駄と分かっていた。最期か……………

一か八か、吉田は胸ポケットから、アーミーナイフを出し、あらんかぎりの力で投げた。

1発目が外れ、2発目を撃つのと同時だった。

ドサッ。

倒れたのは……渡辺だった。

額からアーミーナイフを突きだし、血まみれで倒れていた。

吉田は目の前が真っ暗になった。

「そんな……僕は手を狙ったんだ……」

「貴司……大丈夫か?!?!銃声がしたが……」萩谷と小林だった。

二人は吉田を見、渡辺を見た。二人は息が止まった様に見えた。

「殺しちゃったのか? 貴司、殺したのか?」

「そんなつもりは……」

「息してない!!!! 心臓も止まってる!!!!」

「人殺しだな。」背後で冷たい声がした。三人は振り返った。顔をアザだらけにした、柴田がいた。

「助けてくれ……!!!!!! 人殺しだ……!!!!!!」

柴田が絶叫し、応援に来た警察と観衆にあっという間に囲まれた。

\*\*\*\*\*

「それからは酷い生活でした。確かに、長谷川や警官達を殺したのは渡辺だと工場の監視カメラがとらえてましたし、僕が殺されかかり、正当防衛も証明されました。」

「……………」 蛭原は恐怖からか嫌悪からか、涙を流している。

「アーミーナイフを所持していたのは、銃刀法違反でした。しかし、警察が止められなかった殺人を僕が止めた事、正当防衛などを全て換算した挙げ句、一応は起訴しました。しかしながら、裁判で検察側は情状酌量の余地があるとし、執行猶予付きの、懲役10年を課しました。僕は控訴せず、検察も控訴せず、判決は下りました。全てが終わったら11月になってました。」 吉田は無表情では無く、自虐的な笑みを浮かべていた。

吉田は蛭原を見た。

「これが僕の正体です。それでもまだ僕の事を好きでいられますか？」

吉田は聞いた。

「……………」 蛭原はただ泣いているだけだ。

「家に帰ってみると、以外にも何もされていませんでした。しかし、帰った次の日からは近所の目が酷くなりました。

例えば、家の塀に、『殺人者』とか『人でなし』とか書かれたり、

外を歩くと石を投げられたり、窓を割られたり……その度に僕は  
そういった連中を……殆んど子供でしたが、何歳児だろうが、  
女の子だろうが、情け容赦なく、打ちのめしました。すると、親が  
乗り込んでくる。親は決まって僕につかみかかってきます。僕には  
もはや良心が無く、それをも打ちのめしました。酷いときには、骨  
折させたり……そのこともあり、漸く近所からの攻撃は収まりま  
した。学校では、小林と萩谷以外は話しませんでした。その二人で  
すら、僕は話しかけるのを躊躇いました。当然、彼らにふりかかる  
からです。」

「……………」

「この高校に受かった時、本当にうれしかったんですが、実際  
受けるのも大変でした。」

内申書に悪行の数々をかれ、警察の公式記録に残っています。  
受験票を受けとる際には、担任に何度も志望校を変えろと言われま  
した。しかし、なるべく地元の奴等が来ない高校を僕は優先しまし  
た。それから、大富豪同好会を立ち上げ、今ここに至るわけです。  
ちなみに、大富豪同好会会員はこの事を知っています。「吉田は話  
しながら、時計に目をやった。6時10分前だ。」

「話すことは、全て話しました。」吉田が言った。

「……………」可哀想。「蛭原がポツリと言った。」

「えっ？」

「貴司……………君は……………身を守るため……………なんでしょう。そ  
れに……………中学校の時に、プログラムを……………一度してるのに、  
……………また参加させられて……………酷すぎる……………」

「そう言えば、プログラムについて、話してませんでしたね。プログラムは12月の下旬にやらされました。僕は、もう良心を完全に無くしてしまい、人を探し回るような事はしませんでしたけど、目の前に来たヤツを次々と手にかかけました。そして気が付いたら、自分が生き残りだったわけです。」

「貴司……君。」

「はい。」

「私には貴方が……悪い人か、良い人かは判断できない……でも……貴司君は……貴司君は……」

その後の言葉は嗚咽により出てこない。

しばらく二人は無言だった。

やがて、吉田は口を開いた。

「君がこの話を誰にするのも自由です。」

恐らく、今の僕を見てきた人なら、その話を信じてしまうでしょう。だからといって、僕は君を口封じに殺したりはしません。

はつきり言っておきますが、僕がよく不良から狙われるのは……

実名と顔写真が渡辺を殺した時に新聞に出たからです。

小林に聞いたところ、渡辺は中学生ながら、高校生よりも実力や権力があり、強者だったのです。

彼を倒した僕を倒せば、更に名声が得られる訳です。

学校の中にも知っている人はいるかもしれませんが。県内の範囲で報道されたに過ぎませんが……そして何より、僕を好きでいてくれるのは君の、自由ですが、連中は人質に君をとれば僕が屈服すると考えるでしょう。僕はもう、引き返せない所まで来ているのです。

唯一の償いとして、善人を不良から守る手伝いをしているのです。」

「一方的に話さないで……それは、私にもう、自分に近寄るなど言ってるの？」

「そうは言ってません。君の自由だと思います。」

「私は告白しました。プログラムが終われば、付き合ってくださいか？」蛭原はストレートに聞いた。目にはいつもの守って欲しい、と言わんばかりの光はなく、強い眼差しが向けられていた。

「……付き合ってどうなるんです？僕を好きだと言ってくれたのは君が初めてで何も分かりません。」

「……そう言えば何故だろう。高校生同士が付き合いって結婚まで行く例がないわけではないが、殆んど進学なり、就職なりで別れてしまう。それなのに、何故？楽しいから。嬉しいから。悩みを解消できるから。蛭原はさんざん考えた挙げ句、答えた。

「貴方の心の傷を癒して、自分に自信が持てる人間になって欲しいから。」

「……」吉田は黙っている。蛭原をじっと見た。

「おかしいかな？」蛭原はいつも即答する彼が黙ってしまったので、変に不安になった。

「……心の傷？」

「はい、それを癒してみせます。」

「心の傷とは具体的にどんなものですか？」吉田は無表情になっている。さっぱり訳が分からないらしい。

「貴方の中にある『根』を取り巻く邪念です。

貴方の根は真つ直ぐで長い。だから貴方を失いたくない……………多分私だけではありません。小林君も、萩谷君も、金子君も、海老澤君も……………もちろん色んな人が……………貴方はこのままでは、自分の『根』を出せないまま、きつと本来の力を出せません。」蜷原はスラスラと言った。こういう意見を聞いた事があり、受け売りだ。

「蜷原さん……………」

「な、何？」蜷原は赤くなりながら聞いた。久しぶりに名前を呼ばれたからだ。

「君は、僕が思っていたより、強い人かもしれませんね。」吉田は言った。そして……………屈託のない笑みを浮かべた。

「た、貴司君……………」蜷原は見たことのない彼の表情に浮わっていた。

「君がそこまで本気なら、このプログラムが終わったら……………友達になれるでしょう。」

「うん……………」蜷原はしくしくまた泣き出した。彼にとって『友達』は『親友』の次に信頼がおける関係になることだ。小林が前にそう聞いた事がある。その小林、萩谷の次の位置につけた事へのとりあえずの安心感があった。

朝日が差し込んできた。

「全く、君って人は涙腺の脆いひとですね……………」吉田は言  
った。蛭原は涙を吹きながら頷いた。

一人の美少女と一人の冷酷な少年の心が少し近づいた。

## 第12章 脱出

エリアF-6海老澤が眠り、金子と黒澤が見張っている。他愛もない世間話のようで、緊張感を欠いていた。時刻は午前7時を回っている。

「そう言えばさ、瑞穂は蛭原さんが何故、連れてこられたか知ってる？」金子が出し抜けに聞いた。

「連れてこられたかって、プログラムに？」黒澤が言った。

「そう。そもそもどうして、山口さんも……………い、い」

「岩本 怜衣のこと？」

「そうそう。岩本さんも。どうして、連れてこられんだ？俺が助けを求めたのはここにいる男子全員だけだぜ……………」金子が首を捻った。

「知ってるはずないでしょ。私だって、美樹に聞いたけど、分からない、気付いたら見知らぬ教室にいた、って言ってたもん。」

「そうか……………」金子は深い溜め息をついた。

「岩本さんって、俺はよく知らないんだが、一体どんな人なんだ？」金子が聞いた。

「……………」そう言われると、ねえ。まあ、社長令嬢で、秀才でハンドボール部に所属するからいんだから、運動神経もすごいんでしょっね。」黒澤が考えながら言った。

金子はそれ以上追求しなかった。若干ではあるが、黒澤が妙に刺々しかったからだ。

再び沈黙が訪れた。

エリアH-5

萩谷から吉田が殺人者であることを知らされた山口はショックを隠せない。

山口本人としては、吉田の事が好きな訳でも嫌いな訳でもなかった。自分を助けてくれたのは事実だし、優しくはなくても、必要があれば勉強等は協力してくれた。だが、クラスの中の女子をほとんど無視するような場面が多々あったのだ。ツンデレには到底見えないし、かといって女子を憎んでいる訳でもなさそうだ。取っ付きにくいのだ。

それに、目の前にいる小林や、奥で眠っている萩谷すらも何かしらの犯罪者だ。萩谷は17で煙草は吸うし、吉田もたまに吸う。小林は不良達から金を巻き上げて財政を潤している。なのに、嫌悪を感じない。何故なのか？

と言った感じの事を小林にしつこく聞いた所、小林は答えた。

「山口さんに迷惑がかからない程度の犯罪ですから。」

「ふーん。」山口は納得しそうになり、踏みとどまった。

「理由になってなくない？人に迷惑をかけなければ何をしても良いってことにはならないもん。」

「山口さんが言うことはイチイチ正しい。しかし、大富豪同好会が何故生徒受けが良いか分かります？」小林は淡々と言った。

「分からない……………」

「生徒を助け、不良にのみ犯罪行為を犯すからです。犯罪者に手をだすのも犯罪だなんて、きれいごとですからね。」

「大富豪同好会がどんな活動をしているか分からない。」山口は言う。

「では、この『記憶』を見ましようか？」小林はクリスタルの瓶を取り出した。

「憂いの篩。ハリー・ポッターシリーズの中にでて来ましたね。その試作品ですよ。見てみますか？」

「誰の記憶に？」

「岩本さんの彼氏である、大野君のものです。必要に応じて借りました。本人は自由に見てくれて構わないと。」小林はすらすらと言った。

「それを見れば、活動内容が分かるの……………」

「はい。見るなら一人で見てください。俺は見張りをしなければならぬので……………瓶をこめかみに押し付けばいいだけです。」

「……………」山口は無言で受け取った。そして、無言でこめかみに押し付けた。

\*\*\*\*\*

山口はふと目を覚ました。眠っていたらしい。ここは……………どこ……………？そんな疑問と共に、辺りを見回す。

もし、ここが憂いの篩の中なら、自分の存在は記憶の中の人達に気付かれはしない。霧が目の前に立ち込めている。それは1分ほどして、晴れた。

「あれ…………学校だ。」山口は自分の通う高校の一教室にいた。ホワイトボードの日付は…………月までしか書いてないが、2007年11月。

「あれ、…………岩本さん？」山口がふと左を向くと、岩本が何やら落ちつかない様子で、教室のドアを見ている。

『はあ。』岩本が溜め息をついた。それから机に突っ伏して動かなくなった。

5分くらいしても何の変化も起こらない。山口は退屈し、外の世界は大丈夫かな、とか思いながら教室の掲示物を眺めていた。

ガラガラガラ。ドアが開く音がして、大柄な男子が入ってきた。途端に、岩本は起きた。顔を不満そうに歪めて男の方を向きながら言った。

「待ちくたびれたよ……ナルチのばか……」

ナルチと呼ばれた男子をよく見てみると、大富豪同好会会員の大野正人である。柔道の達人だとか。

「ごめん、部活で遅れて…………で、何の用。」大野は体格からは全く想像できない声で言った。大野は萩谷よりは小さいが、横幅は恐らく萩谷よりは太い。ラグビー部所属と言うのも頷ける。

「ふふん。1週間後は何の日でしょう……?」岩本は楽しそうだ。

「ええ、岩本さんの誕生日でしょ。」大野はスッパリと言った。

「そう。だからあ、あたしの家で毎年誕生会するんだ……是非来てね。うん、もちろん友達も誘って良いよ……プレゼントは何でも良いから思い出に残るようなものちょうだい。」岩本がそう言つと、鞆を持ち上げた。

「うん、わかった。必ず行くよ。何時から？」

「忘れてた、忘れてた。ええと……何処に閉まつたっけな……これかな……？そう。これだ。はい、招待状。10枚あげる。友達の分ね。それがないと、多分入れないから。」岩本は淡々と言った。

流石は社長令嬢だが、傲慢さや腹黒さといったものが無いところがよいのである。

「ありがとう。じゃあそうさせてもらつよ。」大野がそう言つと、岩本は何人もを虜にしそうな笑顔を向けた。  
場面が変わつた。

山口は辺りを見回した。

すると、狭い部室であつた。吉田と後藤がいた。大野から招待状を受け取り、顔をしかめていた。

「で、僕達を誘うわけ。もっとましな奴等を誘えよ。岩本さんの誕生日なんだろ。」吉田が言つた。

「ですね。岩本さんの誕生会となれば、有力な人脈を持つ人なんか来るでしょうよ。わたくし達が行けばいい面の皮ですね。」  
後藤も容赦がない。

「俺が岩本さんと付き合い出した時、フアンクラブに何されたか覚えてるか？」大野が珍しく声を荒げた。

岩本や蛭原や山口などの美少女を崇めるフアンクラブなるものが、高校には存在していた。山口は顔をしかめた。フアンクラブはパパラッチのようにしつこいし、じろじろ見るし、良い思い出がない。

「未遂だろうが。ああいう事がまた有れば良いのに。」吉田はあっさり一蹴し、残忍な笑みを浮かべた。

「ストレス解消でしたね……あれは。」後藤は表情を変えずに声色だけ楽しそうだ。

フアンクラブから、毎日のように

「岩本様に近寄るな……！」だの

「高嶺の花も大概にしろ」だの罵倒文書が大野の下駄箱に入っていたのだ。ある日、岩本が大野と一緒に昼飯を食べた事でフアンクラブの逆鱗にふれたらしい。不良5人組を倒した空手部の主将や、剣道部の主将を初めとする20人以上の人間にリンチされそうになった。大野自身は強く、吉田や後藤や海老澤が援軍に来るまでは持ちこたえた。

しかし、あれ以来フアンクラブから嫌がらせを受け始めたのは言うまでもない。陰湿なものばかりでいい加減、嫌気がさしてきていた。

「考えたんだが……」ある日の部室で吉田が大野から事情を聞いて溜め息をついた。

「岩本さんの誕生日会には、もっと厄介な奴等も招かれているはずだ。行かない方が得策かもしれんぞ。岩本さんが模木（大野の

偽名）を好きなのは知ってるさ。だがな、聴衆の前であからさまな好意を示されれば、君が逆恨みされるぜ。」

「……………せっかく誘ってくれたんだ。断るのも、申し訳ない。」大野が言った。

「まあ、模木さんが行かなければ、岩本さんは悲しむでしょうね。」後藤が言った。

「……………僕達も行くかね？ごつつあん？」吉田は頼りになる副官に聞いた。

「私はどちらかと言うと、行きたいですね。ご馳走なんかが出そうじゃないですか。」後藤がフツと笑って言った。

「そうか。模木よ、岩本さんに我々の出席を伝えてくれ。」

再び場面が変わった。

山口は吉田の隣に立っていた。

「岩本邸か……………大きい。広い。」吉田が溜め息をついた。スラム生まれの自分には無さすぎる。

「それに人も多いな……………」大野は周りを見ながら言った。

周りは金髪の外国人や碧眼の女性がいたりして、多くの人が集まってきたようだった。

「何だ、あの3人？」

「不審人物だ。SPに知らせよう。」

「……………キモッ。」

近くにいた、金髪の男子、あとは純粋な日本人らしい。最後の一言は片言で、曖昧に覚えた単語なのだろう。

大野は、正装……卒業式なんかで着る、ジャケットといった感じ。

しかし吉田は完璧な普段着。ジーパン＋パーカー。パーカーは羽織るようにしているため、少し歩くだけでマントのように靡いたおまけに、緑色のタオルで口と鼻と耳を隠している。異質なこと極まりない。

後藤はバドミントン部のジャージである。それだけだが、パーティーには明らかにそぐわない。

その時。

「ナルチ~~~~」凜とした声がした。

3人が振り返ると、岩本がいた。吉田と後藤は礼をした。大野は固まっている。

「貴司？後藤君？二人とも毎日夜更かしするほど仕事があるのにわざわざ来てくれてありがとう~~~~」岩本は後藤と握手し、吉田とも握手した。

「どうしたの？タオルなんか巻いて。」岩本は吉田を見上げた。

「すみません、答えられませんね。」吉田はまた頭を下げた。

「そう、ごめんね。お節介が過ぎちゃった。」岩本はエヘへと笑い、大野とも握手した。大野は岩本に見いつている。

岩本は深紅のドレスを着、肩を出して高価そうなハイヒールを履き、胸元も開いている。妙に大人らしく、妖美で、綺麗だった。

「ナルチ、どうしたの？」

「え、え……いや、何でも。誕生日おめでとぅ。」大野が言った。

「うふふ。ありがとう~~~~」岩本は嬉しそうに言い、また後で、と3人と別れた。

「岩本さん、キリリとしてましたね。」

「うん、何だかスラム生まれの自分が少しだけ悲しくなった。」

吉田はタオルを戻し、言った。

「……………」大野は黙ったままだ。

「しっかりしろよ。まだパーティーは始まって無いのにボーイフレンドがそれでどうする？」吉田が言った。

「オイッ。お前ら。」不意に声がし、3人は振り返った。

振り返った先には先程とは違う、いかにもお坊っちゃんと言う感じの3人と同じくらいの男子が5人の仲間を引き連れて立ち、傲慢な笑みを浮かべていた。

## 第12章 脱出2

吉田は冷たい目で連中を一瞬だけ見、周囲に目をやりながら近くのテーブルのオレンジジュースを飲んだ。後藤もそれに倣う。

「オイコラ、シカトすんじゃねえ。」男がまた言った。

「何の用だ？」大野がおもいつきり嫌な顔を向けて言った。

「ふん、何だその態度に格好は。その二人も。何処のホームレスだ？」

男の声に周りの取り巻きが大声で笑う。大野は赤くなったが、吉田と後藤はオレンジジュースを飲みながら、人間観察に忙しいようだ。

「何処のホームレスかは知らんが、間違つて入ってきたんじゃないんだろ。鉄面皮もいいところだ。それに増して、怜衣様に馴れ馴れしくタメ口を聞いてみたり、セクハラしてみたり……………」

そこまで言うと、男は大野に唾をはきかけた。

「何するんだよ。」大野とて大富豪同好会の会員。それしきの事で、キレたりはしない。

「身分にふさわしい物をくれてやつただけだ。怜衣様のお側にお前のような……………む？」男は言葉をきった。

吉田と後藤がこちらを向いていた。

「君の話はイチイチ面白いですね。馬鹿と言うか、脳細胞が未使用と言うか……………鉄面皮どころか、鋼面皮ですな。」

「まあ、金で育ってきたボンボンだ。脳細胞があるかどうか怪しい。」

吉田と後藤は本人が目の前にいないかのように、振る舞った。

「貴様ら……………生意気言うな。今すぐ謝るなら許してやる。言つとくが、俺は少林寺拳法3段だ。それとも二度と口を開かない

ようにしてやるうか。」

吉田は黙って唾をはきかけた。

「ウワツ！……！てめえ……！」男は吉田につかみかかった。取り巻き達も動き、後藤と大野に襲いかかる。

確かに少林寺拳法は強かった。先手をとったのは男で、吉田を見事に張り倒した。しかし、そこから力ポエラで飛び起きた、吉田は鼻を蹴りあげ、鼻を折り、あつという間に気絶させた。

取り巻き達は驚き、男を担ぎ上げると、一目散に告げ口しに言った。

「大変なこととして………」批難するような、誉めているような声がした。

新たな登場人物に3人はバラバラに振り向き、辺りを探す。

「ナルチ、こつち。」先程とは違う岩本の声だ。3人は一点を見た。

「もう………」岩本は一人ではなかった。隣に緑のドレスを着た美少女がいた。大野と吉田はじつとその女子を見つめた。女子は吉田を熱心に見つめ返す。見つめ合う二人が成立したが、恋愛めいたものではなく、興味本位らしい。

「あれ？蛭原さん。」後藤は女子を見つめて言った。

「後藤くん。貴方も来てたんだ。こんばんはー。」その女子は後藤に向かって手を振った。

「知り合いの方か？ごつつあんよ。」吉田は女子から目を離し、後藤を見た。

「ええ。同じバドミントン部の部員で、蛭原さんです。」

「蛭原美樹です。はじめまして。」蛭原は礼儀正しく、吉田と大野に頭を下げ、吉田にすりりとした手を伸ばした。

「僕は吉田です。はじめまして。」吉田は目の冷たさを抑え、握手に応じ、頭を下げた。

「よろしくね。貴司君。」蛭原はニコニコしながら言った。

「！」吉田は少なからず驚いたようだ。名を名乗らないのに何故分かった、と。

蛭原は大野と握手していた。

「岩本さんが呼ぶところに居合わせたのか……」吉田は首をひねる。

「あいつら、あたしにしつこく告るんだよね。」岩本が言った。  
「なんでも、あたしに釣り合うのは自分だけとか思ってるみたい。あたしには分かる。それに多分狙いはあたしじゃなくて、財産の方だよ。全く腹が立つ！」威勢よく岩本が言った。

「貴司君には感謝しちゃうかな。私もナンパされたことあるんだ。あいつに。あいつ、うちの高校の3年なんだ。しつこくて、しつこくて。」

蛭原が顔をしかめた。

「ああ、そうだ。正式な式が始まる前にお祝いを渡さしませんと。」後藤は思い出したように、紙袋をガサゴソやりだした。

「えっ……」岩本が何故か驚いた表情をした。

「はい、17回目の誕生日おめでとうございます。これをどうぞ。」後藤は細短い包みを渡した。

「ありがとう……後藤くん、開けていい？」

「無論です。気に入ってくれると良いのですが。」後藤は屈託のない笑みを浮かべた。

岩本はゆつくりと包みを開き、箱を開けた。中には万年筆が入っていた。

「太宰府天満宮でお祓いをしてもらったのです。ちょっと早いですけれど、大学の合格祈願と無病息災をいのって。」後藤が言う。岩本はしげしげと万年筆を見つめ、

「ありがとう……」と消え入るような声を出した。

「僕からもです。」吉田はそう言うと言ランタンを取り出した。

中では小さい群青の炎が燃えている。　「グレイオスシ안의火です。月光を各所で虫眼鏡で集めて、紙の一点を焼いて作りました。その火は何をしても消えません。月光は元々聖域なもので、あらゆる危機から貴方を救ってくれるでしょう。満月の月の日が快晴でなかったら作れませんでしたよ。貴方の永遠の火（日）をねがって。」  
吉田は頭を下げた。

岩本は身動きもしない。

やがて、慌てたように

「ありがとう」と呟いた。

「次私から！！はい。」

蛭原が岩本に直接渡したのはマフラーだった。

「私が編んだんだ。これから寒くなるから、必要になると思って。赤にしたのは、後藤ちゃんと被っちゃうけど、勝利の赤ってことで。誕生日おめでとう。」蛭原は満面の笑みで言った。岩本は蛭原を見つめることなく、受け取り、また「ありがとう……………」と呟いた。

「俺からも。」大野はズイと進み出た。

「はい、誕生日おめでとう。」大野はそう言っ、岩本にヘアピンを渡した。

「金属採集から、鉄還元から、加工から何から何まで一人でやったんだ。何とか間に合って良かった。大事にしてな。」大野から岩本はヘアピンを受け取っても岩本は何も言わない。

「しかし、あのうるさい音はヘアピンを作ってたのか……………」  
吉田は気付かなかったらしい。

「……………流石に分かりませんでした。てっきり音からルアーを作ってるのかと。」

「大野君、頑張ったねー！」蛭原も感嘆する。  
突如。

「うえーーーーーん!!!!!!!!!!」岩本が地面に崩れ落ち泣き出した。

「何だ?!」吉田が目を細め、後藤が微笑を驚きに変え、大野はしどろもどろになり、蛭原は岩本に駆け寄った。「どうしたの?? 怜衣、怜衣ってば!」蛭原は岩本の肩を抱いたが、岩本は何も言わない。

すると、何処からかイケメン集団、若しくは御曹司軍団が現れた。

「貴様ら、怜衣様に何をした!!」

「なんだ、この無粋なものは?」

「まさか、このような低俗な物を怜衣様に……………」

イケメン集団は自分達の手で自分たちの怒りを煽り立てている。普段は無表情な吉田と後藤が怒りに顔を歪めた。

「怜衣様!!!! 大丈夫です。私達がついてます。危害を加えるような事は一切させません。事情をご説明下さい!!」イケメンの一人が言った。

「うう……………うう……………違うの……………その人達は悪くないの……………」

「?!」イケメン集団は息を呑む。

「ただ……………手作りの誕生日プレゼントなんて初めてで……………それも皆人一倍忙しく最中に作ってくれたなんて……………ありがとうね……………ありがとう……………」岩本は大野、吉田、後藤を順に見、蛭原にしがみついて泣いた。

「納得がいかない。どう見たって、俺らの方が怜衣様にふさわしい!!!!」イケメン達は吉田達を外に呼び、ケンカ腰で文句を言い始めた。吉田達はストレス解消を狙い、あっさり応じた。「

単細胞が……金の力の限界が分かったか？岩本さんは要するに、君達など眼中にない。ここにいる大野が彼女が選んだ人材だ。いい加減諦めろ。嫉妬深い負け犬ども！！」吉田が罵倒する。

「貴様……………！！」

「てめえ、控えろ。我ら宮本グループを甘く見るな。パパに頼めばてめえなんて直ぐに東京湾に沈めることだってできるんだよ。それに……………」

「パパかあ、哀れだなあ……………自分では何一つ、ケンカすらできない。無駄に財産を使うだけが能か。死ね。」後藤は自分より対等、若しくはそれ以上以外の人間には敬語口調でなくなる。

「てめっ……………」茶髪の男が後藤の襟首をつかむ。それを皮切りに次々とイケメン軍団は吉田達に襲いかかる。

確かにイケメン軍団は武道派だった。しかし、吉田達の例の神経だけを確実に攻めて失神させる技術には敵わない。全員があつと言う間に気絶する。

吉田達が戻ると、見慣れない大人が二人立っていた。片方は……岩本によく似ている。どうやら両親らしい。

「君達が大野君、吉田君、後藤君かい？」男性が言う。

「はい。貴方は…………？」

「怜衣の父親である、岩本浩二です。君達が怜衣をこんなにも喜ばせてくれたんだね。父親として礼を言う。」

吉田は面食らった。岩本の涙の真の意味を理解していたらしい。「いえいえ。友達ですから……………当然ですよ。」後藤がきびきびと答えた。

「ありがとうございます。今日は本当に怜衣の誕生日を祝う人が来てくれて。私からも礼を言います。」岩本母が自己紹介せずに言った。

吉田は岩本を見た。岩本は泣き止み、照れた笑いを浮かべた。すると、岩本は大野に近寄り、何か話始めた。後藤も岩本の両親と嬉々として話している。

すると、急に何かが袖を引っ張った。

見ると、蛭原が吉田を引っ張っていた。

「貴司君………ちよつとこつちに來てくれる？」

「はい？」吉田は警戒心を目に剥き出しにした。目がギラギラ光り、蛭原を見据える。

「違つて。ちよつと恥ずかしいからここでは………貴方をどうしようって事じゃないの。それに貴司君は私が知ってる人の中では誰よりも強い、そうでしょう？」蛭原は言う。

「………小林は僕よりも上です。奴が最強でしょう。」

「それよりも」蛭原はそう言うと、外に出たので足を止めた。

「貴司君、実は私は貴方に会つのは初めてじゃないの。最初に会つたのはいつだ分かる？」蛭原が言った。

「はい？」吉田は警戒心を目に剥き出しにした。目がギラギラ光り、蛭原を見据える。

「違つて。ちよつと恥ずかしいからここでは………貴方をどうしようって事じゃないの。それに貴司君は私が知ってる人の中では誰よりも強い、そうでしょう？」蛭原は言う。

「………小林は僕よりも上です。奴が最強でしょう。」

「それよりも」蛭原はそう言うと、外に出たので足を止めた。

「貴司君、実は私は貴方に会つのは初めてじゃないの。最初に会つたのはいつだ分かる？」蛭原が言った。

「はい？」吉田は警戒心を目に剥き出しにした。目がギラギラ

光り、蛭原を見据える。

「違うつて。ちよつと恥ずかしいからここでは……貴方をどうしようって事じゃないの。それに貴司君は私が知ってる人の中では誰よりも強い、そうでしょう？」蛭原は言う。

「……………小林は僕よりも上です。奴が最強でしょう。」

「それよりも」蛭原はそう言う、外に出たので足を止めた。

「貴司君、実は私は貴方に会うのは初めてじゃないの。最初に会ったのはいつだか分かる？」蛭原が言った。「はい？」吉田は警戒心を目に剥き出しにした。目がギラギラ光り、蛭原を見据える。

「違うつて。ちよつと恥ずかしいからここでは……貴方をどうしようって事じゃないの。それに貴司君は私が知ってる人の中では誰よりも強い、そうでしょう？」蛭原は言う。

「……………小林は僕よりも上です。奴が最強でしょう。」

「それよりも」蛭原はそう言う、外に出たので足を止めた。

「貴司君、実は私は貴方に会うのは初めてじゃないの。最初に会ったのはいつだか分かる？」蛭原が言った。吉田は首を振る。

「貴方が私が男二人組に絡まれた時、助けてくれたの。お礼を言うまでもなく、スタスタ行っちゃって……………」蛭原は赤くなり下を向いて言った。

「……………」

「だから、お礼をずつと言いたかった。ありがとだね、貴司君。」

「はあ……………」

「これからも学校でよろしく。」

「はい……………」吉田は啞然とした表情で赤い頬をした蛭原を見た。

「美樹……………！！一緒にケーキ食べよう……………！！」岩

本は泣き止み、元気に蛭原に飛び付いた。岩本は「美樹――なんか酔ってるみたいに赤いよ――」。なんて言いながら、蛭原を引っ張って行った。

### 第13章 後藤と吉田

記憶はそれで終わりだった。山口は無言で記憶を小林に返した。

「どうです、感想は？」小林が聞いた。

「……………彼らは、結構変わり者だね。」やっとそれだけ言った。

「奴等は変わり者処か変質者レベルですよ。まあ、人に迷惑をかけませんが。これで吉田達を変な目では見ずに、冷静な目で見れるといいですね。」小林は朗らかに言った。

エリアF-3見張りが交代となり、蛭原と後藤が見張りについた。

二人は気まずい訳ではなく、押し黙っていた。後藤はナイフを磨いでいたし、蛭原は吉田に借りた「アポロ月面着陸の真実」を読んでいた。

10分くらいしただろうか、後藤が突如蛭原に言った。

「蛭原さん、先程しと何を話したのですか？」と。

「え……………別に、特別な事は。」蛭原は何とか動揺を押さえながら言った。しかし、大富豪同好会の序列3位で万能な吉田の副官である後藤にはそれで十二分だった。

「もしや、しに告白したのですか？」からかいや冷やかしではなく、あくまで推量。

蛭原は本を取り落とした。

後藤はナイフを置いた。

「返事はどうでした？」てきぱきと後藤は要所をつく。

「……………え、そんな……………え……………」蛭原は動揺して何も言えない。「しが了承するとは思えませんが。でも、気にかけていた蛭原さんの気持ちを踏みにじるような事はしないでし

よう。」

「ここであつやく、蛭原は声を取り戻した。」

「ちよつと何なの?! 私は……………私が貴司君に告白したなんていつ言つた? ましてや……………」

「貴方の表情が常にそう言っています。」

「……………」

「岩本さんが、さつき見張りをしていた時にそれらしき事を言つてたんです。これで確信しました。」

「後藤君、性格悪くない?」蛭原は皮肉つた。

後藤は苦笑する。

「初めて言われました。誰にも言いません。」

「全く……………どうせ、貴司君から後藤君に言つてでしょう。」

「ないです、それは。」後藤が即答する。

「え?」

「Lの場合、性格的にそういう事は隠したがるタイプですから。」

「

「ふーん。」蛭原はそう言いつつ、後藤に気になつてた事を言おうとした。

「後藤君は貴司君と何でそんなに仲が良いの? 出来れば、最初の出会いから教えて欲しいな……………」少々、恥ずかしいのか蛭原は下を向いた。

「Lと? ふむ……………1年以上前ですよ。」

そつだ。後藤にしては初だ。自分が喧嘩で負けたのは……………」

\*\*\*\*\*

2007年(この話をしているのは2008年)の4月、後藤

は県内の進学トップ校に入学した。

県庁所在地出身で地元の高校に行くので、それほど、新しい仲間との出会いはなかった。

自分は1年H組、最後尾のクラスだった。

一方で吉田も入学式の日。

「俺、B組。貴司は？」そう言うのは小柄な男子。

「H組だ。校舎すら違うな。飯沼、新しい生活を楽しめよ。」

飯沼と呼ばれた男子は吉田を見つつ、苦笑した。彼は、吉田のスラム時代を過ごした中学校と同じ市内にある、O中学校の生徒だ。かなり優秀で1学年が200人いて、そのなかで、4位以内だとか外見はまあまあで、運動も普通。但し、吉田のように冷たいと言うよりは、自信に道溢れた態度で、なかなか友人も少ない。少なくとも、吉田とは、同じ卓球部で試合などでちよくちよく会い、塾も一緒に、既に小林、萩谷に次ぐ信頼関係の持ち主だ。

吉田は飯沼と別れ、自分のクラスにつくなり、寝始めた。緊張感は全くなく、新入生らしくない。

H組のクラスには、岩本、海老澤、大野、黒澤、小林、後藤、田子、吉田などがいた。

小林はC組。萩谷はH高校。

吉田の仲間なことくいなかった。

最初の出会いは喧嘩である……とは書いたものの、直接対決をしたわけではない。

5月13日

その日、後藤は自転車で早めに帰路についた。今日はバドミントン部もなく、委員会に居るわけでも無かった。

帰路について間もなく、学校から800メートル位の所で後藤は何やら揉めている集団を見つけた。

「姉ちゃんよ！ぶつかってそりゃないよ……………」

「謝ったはずです。何度も何度も！！！」　そう言うのはよく見ると同じバドミントン部の蛭原だ。

男は、後藤とあまり変わらない年代に見えた。

そのうち、どういう成り行きかは神のみぞ知ることだが、男は蛭原を投げ飛ばした。

「あいたつ！！！！うつうつ……………」　泣いてはいないが動けなくなったらしい。その場に踞る蛭原に男は冷たい怒りを刻んだ顔で近づいた。

平手打ちを食らわそうとする男子の右腕をガシッと抑えた。

「！」

「は……………後藤君……………」

二人は固まった。男は、後藤を見ると冷静なまでに言った。

「どちら様です？我々に関係のない方には首を突っ込まないで

貰いたい。」

「彼女の友人です。さもやりすぎなのでは？」後藤も冷静に返す。

「うむ、今日で同じ様な事が5回目。聞いてみると、皆M高生の生徒だ。何かのいじめかと思い、堪忍袋の緒が切れました。」そう言つと、男は、後藤の腕を振りほどいた。

そして……………後藤の腹に蹴りを入れた。後藤は不意をつかれ、そのままぶつ飛び、大の字に倒れた。

後藤は立ち上がると、間合いをつめ、鳩尾めがけて殴りを入れた。

しかし、男は避け、後藤に回し蹴りを入れる。後藤がかわす。

お互い、まるでスタントマンのように、戦いながら徐々にスタミナを消耗する。

「！！」後藤が遂に避け損ねた。鳩尾に蹴りが入り、踞つた所を抑えられた。

「参った。」後藤は素直に言った。

「そうですか、では少々いたい思いをしてもらいましょう。」

男はそう言つて、腕を振り上げる。

だが――

「渡辺、そこまでだ。」冷たい声がした。

後藤は首を傾げる。蛭原が絶句する。渡辺と呼ばれた男子が血の気をなくす。

「吉田……………！！」渡辺は後藤から離れた。

「やめとけ。今はやり合いたくない。」吉田は暇そうにそう言った。

渡辺は完全に吉田に脅え、立ち去った。

呆気にとられる後藤と蛭原。蛭原は後藤に走りより、助け起した。

「貴方は……………」後藤が吉田を見て言った。

「僕？」吉田は後藤を見ながら、自分を指差した。

「クラスで一緒の吉田君？！」後藤は冷静さを失っていた。

「ふん、そうです。渡辺は中学校の同級生で……………少林寺拳法の達人で……………普段は温厚な奴ですが、一度奴と授業の柔道で倒して以来、肉弾戦はしてません。大丈夫？えと……………」

「後藤です。」後藤は吉田の考えを読み、素早く言った。

「後藤君。随分と激しく戦ってましたね。どちらが勝つか、影から見てましたが、奴はどうやら無理矢理戦ってたみたいで、今頃死んでるかもしれません。」

吉田は底意地の悪い笑みを浮かべた。

後藤は問い返す。

「どういう事ですか？」

「後藤君が首を殴った時、首の骨に何らかの損傷……………があつたんですよ。にも関わらず、彼は戦い続けた。時間差で彼は後藤君の次に倒れたはずですよ。後藤君の様に、気絶するか、首の内出血が酷くて死ぬか……………まあ、早めに割って入ったんで前者だとは思いますが。」

「なるほど。」後藤は立ち上がった。蛭原も慌てて立ち上がった。

「助けてくれてありがとうございます。」後藤は握手を求めた。  
吉田は驚いたようだったが、握手に応じた。

## 第13章 後藤と吉田2

9時になった。

プンッッ！！！！

「全島の皆さんおはようございまーす！担任の井坂でーす。  
死亡したお友達の名前言うぞー！！」

「S高校、全員死亡！！」

「M高校とB高校は新たな死者は誰もいないぜ。  
んじゃ、禁止エリア！」

10時からF13

12時からD15

14時からB16

以上だ！！今日も1日頑張ろうー！！。」

プンッッ。放送が切れた。

エリアF13

「とまあ、こんな感じですね。」後藤は一通り話して蛭原を見た。

「へえ……………じゃあの時が、初めて……………」そう言いながら、

何故か赤面する。

「さて、禁止エリアにここが指定されたから、移動しませんとそろそろ仲間と合流すべきです。」

後藤は立ち上がり、ナイフをポケットに入れ、バッグの準備を始めた。 蛭原もそれにならう。

部屋の奥から、吉田と岩本が姿を現した。

「禁止エリアになっちまうな、ここ。ごつつあん、何処に移動するね？」吉田が緊迫した声で言う。

「私には考えはありませんが……………」

「そう。じゃ、海老澤達がいるF16に行こう。彼処なら安全だ。金子はともかく海老澤は機転が利くしな。」吉田はあっさりと言う。

「分かりました。10分したら家を出ましよう。」後藤が落ち着いて言った。

「貴司君、しっかり美樹を守ってね……」岩本がにつこりと魅力的な笑顔を吉田に向ける。吉田は一瞬岩本を見て、無視を決め込み、蛭原は岩本に絡み付いた。

「怜衣……からかうな……緊迫した状況なのに……」蛭原は脇をくすぐる。

「わひゃわひゃわひゃわひゃわひゃわひゃ。やめて、やめて……ごめ……ん」撥られて悶絶する岩本。

後藤と吉田は肩をすくめて苦笑した。

## エリアF12

「首輪の電波が何故か途絶えたままだな……………」B高校の遠藤が言った。

「わからん。電波は鉛の箱にでも入れない限りは、遮断できんはずだ。何がどうなってる……………」そう答えるのは服部。

「どうする？このまま進撃するか？奴等移動を始めた頃だろ。奇襲にはもってこいなんだがな。」今度は巨漢の坂下が言う。

「別に、奴等の居場所が分からずとも、此方が奴等の奇襲を受けなければ良い話。またどっかの家に入られたら面倒だぜ。」遠藤が言う。

「いや、駄目だ。奴等首輪に何かしたかも知れん。吉田は経験してるし、首輪くらい簡単にはずしてるやも知れん。」服部がそう言うと、坂下がイライラと言う。

「じゃ、どーすんだよ。」

「本部に連絡して、移動の軌跡を辿らせる。今はそれしかないだろ。」服部は肩を竦めて言った。遠藤が携帯を取り出し、コールし始めた。

エリアF-6黒澤と海老澤と金子は全員が起き、緊張感のない表情で静かに談笑していた。

「学園祭……またやりたいな……」黒澤がふと言った。どうやら学校行事について話していたらしい。

「ああ……このクラスで何かするのは学年末のクラスマッチぐらいかね。」海老澤が言う。

「青春だなあ、海老澤よ。松本さんと一緒のクラスでなくて残念だったな。」金子はヒツヒと笑う。

「まあな。言ってるよ、それ。でも俺はG組の恋愛模様を見るだけで楽しかった。」

「へええ……？例えば誰？」黒澤が言う。

「小林とか……貴司とか……それに……君達……！」

海老澤が大袈裟に言った。金子は顔をしかめた。そんな、良い雰囲気だったのか、という顔をした。

\*\*\*\*\*黒澤と海老澤と  
金子は全員が起き、緊張感のない表情で静かに談笑していた。

「学園祭……またやりたいな……」黒澤がふと言った。どうやら学校行事について話していたらしい。

「ああ……このクラスで何かするのは学年末のクラスマッチくらいかね。」海老澤が言う。

「青春だなあ、海老澤よ。松本さんと一緒のクラスでなくて残念だったな。」金子はヒツヒと笑う。

「まあな。言ってるよ、それ。でも俺はG組の恋愛模様を見るだけで楽しかった。」

「へええ……？例えは誰？」黒澤が言う。

「小林とか……貴司とか……それに……君達……！」  
海老澤が大袈裟に言った。金子は顔をしかめた。そんな、良い雰囲気だったのか、という顔をした。

\*\*\*\*\*

6月の下旬。最終週の土日にM高校の学園祭があった。県庁所在地にある県一の進学校ということだが、無駄に生徒たちはテンションが高くなり、来場者は6500人程がくる。

5月28日。2年G組は出し物について話し合い。

クラス委員の黒澤が何のジャンルが良いか、希望を言え、と言う。無駄にテンションが高い男子連中から女子連中までが一斉に喋りだす。

「喫茶がいい……！」

「アトラクションほど客を集めるものはないだろ。」

「お化け屋敷が季節に会う。」などの感情的な意見から冷静な意見まで複数ある。

吉田は教室の端で、読者している。カバーがしてあるので、ジヤルは分らない。

「なあ、貴司。貴司って今回有志に出んの？」軟式野球部の岩崎が吉田に聞く。

「そ。棋道でね。一般客と対局するんだと。」吉田は読書したまま言う。

「俺らも2日目は招待試合なんだ。クラスに出れんのはやだな。」岩崎は真人間だ。

「青春の学園祭を将棋で過ごす！愚行ではないが、賢いとも言えないな。」吉田も少し楽しんでるようで、いつもより、目に温みがある。

すると吉田の右隣の海老澤はひよひよと笑う。

「棋道部が有志で大賞とれっかね。クラスで出れば、可能性は高いかもよ。」海老澤が言う。いい忘れてたが、学園祭の実施中に来校者にはパンフレットが配られ、裏についている、投票券で、一人三票で団体に投票できる。クラス対抗のM高大賞。部活、委員会、同好会対抗の有志大賞。この2つが主で、1年の時は、M高大賞は3年生のクラスで、有志大賞は吹奏楽部がトッタ。

「ちよつと待て。貴司よ、その『トッタ』ってのはどういう意味だ。」

海老澤が妙なテンションで言う。

「吹奏楽部の場合、人数が多いじゃん？親来るじゃん？たくさん入るじゃん？んで組織票。だから、取ったは赦しがたいし、盗ったが正しい気もするけど、一昨年も吹奏楽部だから奪った訳じゃないし、獲ったは大賞でも何も無いから、トッタにしたのさ。適格な漢字がない。」吉田が言った。そう、大賞と言ってもトロフィーが

貰えるだけで、部費が上がるわけでも設備が整う訳でもない。ムダな名譽のためによくテンションがあがると吉田は思う。

吉田達が駄弁っている間に、話し合いは終わっていた。結局、ジャンルはアトラクションに決まりだ。

「だから、去年はほとんどこっちに来なかったんだ……」女子が数人集まって、どんなアトラクションをやるか具体案を出す話し合いの最中、議論していた。

「ええ……有志を重視してたから……？」山口が信じられないという口調で聞いた。

「うん。打ち上げにも来なかったんだ……」1年の時に、黒澤や岩本と一緒にだった丸山が話していた。

「ふうん。じゃ今年もかな？少しは参加してくれないと……有志多いよね？このクラス。」山口は心配そうに言う。

「協調性がないんだよね、貴司君。小林君とは対極にある存在なのに仲良いよね、あの二人。」丸山が言う。

「協調性は無くは無いんじゃない……多分照れてるんだよ。」蛭原が言う。

「どうだかね。打ち上げに来ないのはおかしいじゃない？彼、結構カラオケに行くみたいだし。」丸山が言う。

「そうなの？貴司君が歌ってる所とかなかなか想像できない……」山口が最もな事を言う。

「休み時間になると歌ってるよ……小さい声で。何処かで聞いた曲ばかりなんだけど、曲名は分からない……」蛭原が言った。

3人の議論は黒澤が話し合いに参加してない事を咎めるまで続いた。

## 第14章 開戦

移動中の先頭の吉田が突然伏せた。後藤が、蛭原と岩本に素早く伏せるよう指示した。茂みに踞る。だが、しかし。

「そこらにいるのは分かってる！！くらえ！！」服部が、近くの森から姿を現し、サブマシンガンを乱射した。

「奥に！！」後藤が素早く蛭原と岩本を森の奥へと押しやる。

「いたぞ！！3人いる！！手伝え！！！」服部が叫ぶと、遠藤と坂下が姿を現した。

パラパラパラパラ……サブマシンガンの銃声が響いた。

吉田と後藤は岩影に隠れた。

「そこか！！」遠藤が吠え、吉田達が隠れる岩に乱射する。

「ち」吉田が舌打ちをして、飛び出した。

「いたぞ！！あそ……」ドガン！！！！吉田がショットガンで遠藤の顔面を吹っ飛ばした。

とは言え、吉田を遮る物は完全にはない。

「うらあ！！！」坂下がしっかり狙いを定め、乱射する。

吉田は次の木の根本にダイブし、奇跡的にかわす。

「うぐっ……」後藤は服部が撃った弾を4発浴びたが堪える。蛭原と岩本に家に立て籠るよう指示した時に、狙われた。後藤は急いで伏せたが、相手はそれをよんでいた。

「さあて、諦めがついたか？それともまだ撃たれ足りないか……」

……」服部が低い声で笑う。

「くそっ……………」後藤は冷静さを欠いていた。焦りの余り、汗だくで、息も荒かった。やってはいけないことに、後藤は立ち尽くした。

「直ぐに済ませてやろう。せめてもの慈悲だ。」服部が低い声で笑いながら、後藤の胸を拳銃で撃った。後藤はそのまま倒れた。

「そこかつっ!!」坂下が乱射する。サブマシンガンの特性を生かし、吉田に弾を変える時間を与えない。

「うりゃっ!!」坂下が今度は手榴弾を投げる。

吉田は次の木に移動。

坂下がサブマシンガンで攻める。吉田の体力が先に尽きる。そこを攻めれば良い話。しかも、弾が大量にあるハンデがデカすぎる。吉田は顔をしかめた。

5分も逃げては撃たれ、撃たれては逃げを繰り返していた。

その時、吉田の足元に手榴弾が投げ込まれた。

飛び退く暇は与えられないように、スイッチが地面につきささった。

足元が爆発する。吉田は吹っ飛ばされ、木に頭から突っ込んだ。服部が低い声で笑いながら、坂下に加勢していた。

エリアH-5

見張りについた小林と萩谷が欧州C-1について議論していたが、小林が突然、顔をあげ、窓の外を見た。

「どうした?」萩谷が伸びをしながら聞いた。

「今、銃声が微かに聞こえた。」

「どんな。」

「衝撃波みたいな音。マシンガンじゃない。ありゃライフルか……？」

「貴司はショットガンが武器だからな、多分奴だ。」

「何で、知ってる？俺達武器の見せ合いしたか？」

「いや。ただ、鞆にしまってたからな。輪郭は見えた。レミントン辺りのショットガンじゃないの。普通のショットガンとかライフルは鞆に収まるわけないだろ。」  
「なるほど。ま、貴司だけじゃなく、後藤君もいるんだし、死にはしないさ。」

「なあ、悠人よ……」

「ああ？」萩谷がワルサーP78をいじりながら問い返す。

「何故に、山口さんに貴司の事話したんだ？」小林の口調は攻めでもないければ、探りを入れてもない。

「言われたからさ。『吉田君は中学生の時に……その……何か悪いこと……しちゃったん……でしょ……』って。」

「口調は真似んで良い。気色悪い。その口振りはまるで確信してるような……」

「俺もそう思った。貴司が彼女に思わせ振りなこと言ったとかは。」萩谷が自分の発言に自信がないのをあからさまに分かる口調で言った。

「ないだろうな。」小林は断言した。

「ま、良いけどよ。達也も……」萩谷が言葉をきった。注意していれば聞こえる程度だが爆発音がした。

「今のは聞こえたか？」萩谷が言う。

「聞こえた。」小林がそつと窓の外を伺う。爆発音はそれきりしなくなり、夜の静寂が訪れた。

「爆弾なんて支給されるか？」萩谷が言った。

小林がしばらく考えていたが、急に深刻な顔になり、立ち上がった。

「どこに行く？」萩谷が小林を見ながら言った。

「うつかりし過ぎたようだ。助太刀に行かんと。」小林は探知機を確認した。

その瞬間言葉を失う。萩谷が小林どうした、と問う間があればこそ、小林達の隠れる民家の窓が粉々に割られた。

外には、不適に笑う見慣れた姿――「保坂だ……！！」  
小林は青ざめた。

「見つけたぜ……………」保坂の隣に立つ、馬淵涼太、石田宣之が舌を出して笑う。

「石田が何でここにいる……………！！」萩谷が煙草をくわえ落とし、冷静さを欠いていた。

対峙する、小林・萩谷組と保坂・石田・馬淵組。両組の間には数少ない残された窓ガラスが1枚。      エリアF16

海老澤がまずそれに気付いた。爆発した方向を凝視し、緊張感を高めた。隣の金子が立ち上がった。

「誰か死んだか……………」どうもよく見えならしく、目を細めたりしている。

「わからない……………でも煙出てないよ……………」黒澤が言う。

「夜だからよく響いただけで、手榴弾かもな。こちら側で誰か持ってたっけ？」海老澤が言う。

「知らない。」金子がそう言った時、呻き声が聞こえた。

「今のは！！」金子が叫んだ。

「静かにしろ！！貴司かな……………」海老澤が考え込む。

「そんな……………貴司君、死んじゃったの？！」黒澤が言う。

「助けに行かねえと！！」金子が我先にと動く。      「やめろ。

今のが本当に貴司なら、奴ですら敵わない相手なんだぞ。標的が一人増えるだけだ……！」

「見過ごせるわけないだろ！」海老澤の制止を振り切るうとす

る。

「待て！！俺がそう言ってるのは、貴司達の所までどれだけあるかって事だ！行き着く前に殺られたらどうする？」

「んな、事知るか！」 「お前が死ぬのは勝手だけどな…

…残された、黒澤さんが死ぬ確率がぐつと高くなるぞ！！それもわからないのか！」

「俺は……………」

ズバーン。

銃声が響いた。

そこでようやく自分たちがどれほど大声で議論していたか分かった。

「見つけたぜ！こっちにいるぞ！！」そう叫んだのは大原光一。B高校の生徒だ。やがて、応援である、木田正人、横山圭介が現れた。

「遺言はあるか？」木田が言った。

「……………」海老澤達は銃を真つ正面から向かえる恐怖に耐えながら、ジリジリと後退した。

「待ちなよ。この距離なら逃げ出した瞬間撃つてやるから下手なこたあ、考えるなよ……………」

木田が言う。海老澤がそろそろと尻ポケットの銃に手を何気無く動かす。

「それ以上手を動かすな。今は殺るつもりはない。後々だ。」横山が言う。そして黒澤を見た。

「なかなか上玉だな。しかも、処女に見える。楽しませてもらうぜ……………」横山がヘッへと笑う。黒澤はビクツとした。

3分もした頃。

3人は背に巨木を押し当てている。逃げ場がなかった。

## 第14章 開戦2

エリアF16

クラクラする頭を振りながら吉田は立ち上がった。急いで近くの茂みに隠れる。

「いたか？」服部の声だ。

「いや、いない。」坂下の声もする。二人は慎重だった。吉田が隠れた場所から反撃することを考えてだろうが、吉田のショットガンは爆発で見失ってしまった。

「そこか！！」坂下が叫んでサブマシンガンを乱射する。吉田は肝を冷やしたが、坂下は明後日の方向に撃っている。

「いないな。」マガジンを取り替える坂下。

服部は油断なく周りを見渡す。こうなれば、撃たれる前にマシンガンを破壊するよりない。マシンガンを蹴り上げて何処かに飛ばすのも無くはないが、2対1では、拾われてアウトだ。

素手ならまだ……

そう吉田が考えていたら、坂下が不意に前に出た。坂下はマシンガンのある茂みに向けた。

吉田は坂下のその行動の意味を悟った。坂下は周りにまんべんなく撃ち出した。

吉田が隠れている茂みにも例外なく撃ち込まれ、吉田に弾が情け容赦なく襲った。

既に先日服部に教室で撃ち抜かれた左肩を命中。右腕に命中。背中に2、3発喰らった。脚はセーフ。歯を食いしばって、叫びを堪える。叫べば、居場所を悟られる。

坂下と服部は辺りを見回したが、もっと先に逃げたと思ったらしく、吉田の前を通りすぎて行った。吉田に闘う気力はなかった。

乱射の瞬間、吉田は頭を抱えて伏せたが、坂下は低い位置をしっかりと狙っていた。脚を撃つつもりだった事がよく分かる。おかげであっさり傷口を開いた、左肩からはどっぷりと血に浸かっている。左手になかなか力が入らない。吉田は血を吐き、フラフラと茂みから顔を出す。坂下と服部の後ろ姿が見えた。

ショットガンがあつたとしても、右腕に負傷を負った吉田に狙いを定めて撃つことは至難の技だった。手は震え、吐き気と目眩に襲われて肉弾戦をしたところでまず勝てない。

吐血したのち、吉田は左肩を庇いながら、家に急いで戻った。血の跡を残さないよう、血が垂れたら素早く右手ですくった。

エリアHー5

パシンっつっ！！

「てめっ！！！！」萩谷が茂みから飛び出し、石田のマシンガンを持つ左手を蹴りあげた。

マシンガンに萩谷が飛び乗り、破壊する。マシンガンは弾切れで、替えのマガジンを持たない萩谷にとっては、ただの時限爆弾にも似ている。

萩谷は石田と一騎討ちを選び、民家から飛び出した。案の定、石田のみが萩谷を追ってきた。石田はナイフを取り出し、萩谷を襲う。萩谷はまたしても右腕を蹴りあげ、ナイフを落とさせ、拾い上げる。

素手なら萩谷が圧倒的に上だ。

ここで、萩谷は容赦しない。石田めがけて脱兎のごときスピードで突っ込む。石田は何とか避け、手榴弾を取り出す。

手榴弾を投げる寸前、萩谷がナイフを石田めがけて投げた。

ドコッ。

鈍い音がした。

萩谷の強靱な肩から飛び出たナイフは石田の額を直撃。

血と血以外の何かが飛び散り、石田は倒れた。

急いで手榴弾を没収。

そこで、萩谷は石田に追われた際、マシンガンで数発撃たれた背中を再び庇う。顔をしかめながら、萩谷は石田から5メートルほど離れ、石田に向かって手榴弾を投げる。手榴弾が爆発し、石田の体は破裂した。血が雨のように降った。萩谷は小林と元へと急いでむかった。

馬淵と保坂が小林を探していた。時より、マシンガンを茂みに放ち、反応を伺う。

「一体どこに消えた？あの傷では遠くにはいけないだろ。」

「ああ、途中までは血だまりも血の跡もあっただけだな。」

保坂が答える。

小林は二人に真つ向勝負を選んだ。萩谷から借りた銃を撃つ。

マシンガンは何十発も小林に命中。

保坂は左腕を、馬淵は右肘と胸のど真ん中を撃たれた。

小林が防弾チョッキをきていた事に気付いたのは戦闘開始から20秒程だった。已む無く、二人は脚を撃った。右足の股に命中し、勝負あつたかに見えた。しかし、小林は驚異的な速さで近くの茂みに飛び込み、姿を消した。

「木の上とか、大岩の陰にいるかもしれん。気をつけろよ。」

保坂が言った。

二人はさらに奥深い茂みに入っていった。

本部

「遠藤、石田の両名が死にました。」兵の一人がモニタを見ながら言った。

「情けない。と言うより、吉田と萩谷がすごいのか。」そう言う嘉門は余裕の笑みだ。

「結局、M高校に懸けたんでしたな。」兵の一人が言う。

「ふふん、ふふん。そうだよ。」嘉門は舌舐めずりしながら言った。

「しかし、なぜウチの生徒達を生け捕りに？」

井坂が表情を変えずに言う。

「井坂先生ならそんなこと言わずとも知っていると思いました。」嘉門は少し驚いたようだ。

「まあ、検討がつかないわけではない。」井坂が言う。

「やはり。M高校の生徒は強い復讐心など持っておりません。

萩谷や吉田、小林は身内に対する攻撃は殆んどスルーします。もし、一人でも殺してしまつては戦意を無くし、抵抗も弱まつてしまう。それでは目標が達成できない。」

嘉門が言う。井坂はフンと鼻を鳴らす。「どういふ事です

か？目標とは。」先程の兵が割り込んだ。

「言つてなかったけ。このゲームの目標は服部達をM高校生達に殺させて、勝った風に見せて、M高校生達も消すことさ。」嘉門が言う。兵が驚愕する。

「B高校生達を始末するため？何故そんなことを。」

「B高校生？なんの話だ。B高校はあるが、奴等は真の学生じゃない。」井坂が言う。何処か残忍な笑いを浮かべている。

「話が分かりません。では奴等は何なのです。」

「ふん。H少年院で非行を繰り返す奴等でな。少年院の中で、リンチするは、レイプするは、看守を暴行するわで、手の施しよう

がない。他の少年院に移しても変わらん。でも死刑は確定まで裁判なんていう面倒な物がある。だから司法取り引き、M高校生を全員『生け捕りにできたら釈放』だとな。このプログラムの主旨はM高校生に恐怖心を植え付けることと、言っている。」 H少年院は吉田達の住む県では1番大きな少年院だ。県庁所在地ではなく、H市にあるからそう言う名前になった。

「よく信じましたね。そんな話。」

「まあ、前金をいくらか渡したからな。高校生……それもあんな連中だ。深い考えはできないんだな。」 嘉門が煙草を取り出しながら言った。

「ではM高校生を殺す意味がないのでは？」 兵が言う。

「だめだ。」 井坂が短く言った。

「！！何故ですか？」 兵が狼狽しながら聞く。

「それはだな、奴等はM高校の風紀を乱しているからだ。」 井坂が言う。嘉門は苦笑し、兵が啞然とする。

「それだけで、ですか？」 何とか声を出す。

「それだけだと？ あいつらの所業の責任を負わせられて、失職するところなんだぞ。殺す必要はないかもしれんが、嘉門が。」 隣の嘉門を見る。

「その方が、井坂先生も復讐されないで済んで良いでしょう。」 嘉門が笑った。

「まあ……確かに。」

井坂が答えた所で、死亡者がでた事を表すサイレンになった。兵がモニターに戻り、井坂は腕を組んだ。

「さあ、次は誰かな？」 嘉門は最後まで楽しそうだった。

## 第15章 激化（前書き）

川田です。

読んでいただきありがとうございます。評価して頂けると、参考に  
なりますので、よろしく願いします。

## 第15章 激化

### エリアF - 3

海老澤、黒澤、金子の3人は捕まり、きつく縛られていた。大原が銃の手入れをしているだけで、横山、木田の姿はない。

3人は猿轡を噛まされ、会話を遮断されていた。腕もきつく器用に縛られていた。

海老澤は銃をパンツの中に隠してから、投降した。横山は3人を別々にしようとしたが、木田が見張りが大変と言った。それでもなお、横山は3人で分担すりゃ訳ない。じゃ俺はこの女を……と、黒澤の腕を掴んだら、横っ面を大原が張り飛ばした。意外に紳士である。

大原はその後、二人を搜索に行かせた。横山はブチブチ文句を言っていたか、結局折れた。3人は必死に脱出の方法を模索していたが、いい考えは浮かばなかった。

### エリアF - 6

吉田が何とか民家に辿り着いたのは、全身を撃たれてから、10分ほど後だった。

サブマシンガンの弾なので、致命傷はないが、出血多量が本格的に来ていた。死地を乗り越えてきた吉田といえども、銃器で撃たれたのは数少ない。マシンガンで全身を撃たれたのは初めてだ。

激痛に顔をしかめながら民家に入った。

すると、陰から何者かが飛び出してナイフが自分の喉元に突きつけられた。吉田は度肝を抜かれたが、ナイフはすぐに離れた。

「無事でしたか。近くで爆発があつたんで殺られたかと思いましたが。」後藤だった。

吉田はフラフラとベッドに倒れ込む。話し声に反応してか、奥から誰かが忍び足で様子を窺う気配が感じられた。

「貴司！！よかつたあ、無事……………っ！！」岩本が駆け寄ってきたが、表情が安堵から氷のように青ざめた顔になった。

「ちよつとどうしたの？！それ！！血まみれじゃない！！」岩本が吉田を揺すりながら叫ぶ。

「止めて下さい。怪我が酷くなりますよ。」後藤が警告する。

後藤も無傷ではない。腹と右腕と左脚に計4発喰らっていた。腹を布で巻いていた。

「貴司君！！！！」さらに大きな叫びがして、蛭原がきた。後藤はやれやれと首をふる。

「静かにしてください。僕は大丈夫ですから……………」吉田が表情を変えずに言う。

「大丈夫だって？！自分の状況わかってんの？グロいよ！！」岩本が叫ぶ。

「静かにしないと2人が戻ってきます。」吉田は威圧する目で岩本を見た。岩本は憤懣やる方ない顔をしていたが、左肩の血を拭き取り、民家にあつた包帯を巻き始めた。蛭原が慌てて吉田の右腕の手当てをした。

よく見ると、後藤の脚はズボンが妙に膨れている。恐らく包帯がしてあるのだろう。後藤が二人にふきこんだらしい。

手当てされている間、吉田は疲労から瞼が重くなった。蛭原が心配そうに見ているのを、何故か岩本が不機嫌な顔で見ている。

突如として、吉田の腕時計が鳴った。

後藤がゆっくりこちらを向く。吉田がゆっくり目を開ける。

「ありがとうございます。蛭原さん、岩本さん。」吉田がふいに立ち上がった。

「え？どうかしたの？まだ終わって……」

「あと10分でこのエリアが禁止エリアとなります。」後藤が遮った。　「急がないと、首から上が無くなりますよ。」吉田が言った。二人が青くなる。

「急いで出ます。準備はさっきのままですよね。」

後藤の問いに二人が頷く。吉田が肩を回して、痛みに顔をしかめた。

「じゃあ、行きますよ……」後藤が扉を開けて、走り出す。怪我を負いながらよく走れる。蛭原と岩本が続く。

吉田がショットガンを持って出る。

刹那。

パラパラパララ………長い発砲音と共に、マシンガンの弾が飛ぶ。

「……………」蛭原が驚いてかがみこんでしまう。

「いた……早く撃て坂下……」服部が叫ぶ。

「任せろい……」坂下が蛭原めがけてマシンガンを撃つ。だがしかし。

後藤が素早く蛭原を抱き抱えた。

弾が1発、後藤の右足の指に当たった気がしたが、靴の上から  
 だ。気にせず、後藤が走り出す。

追おうとする巨漢の坂下は吉田に気付かず、あるうことが、真ん前を通過する。怪我人とはいえ、チャンスを逃す吉田ではない。

ショットガンが放たれ、坂下の首に命中。

威力がマシンガンの弾より遙かに上回るショットガンの弾は例え腹に当たろうが、脚に当たろうが、熊さえも死ぬ。

坂下は人間、それ以前に首。首が胴体から離れ、坂下（胴体）はバタリと倒れる。吉田がさらにショットガンを服部に放つ。服部も吉田に向かって放つ。

相討ち。

ならまだ良かった。

吉田のショットガンは外れ、服部のマシンガンの弾が吉田を襲う。

吉田は声もなく、倒れる。

[illegible]



「まあな。別に殺しても変わらないとは思うが、無難に行くか。」保坂は深い茂みを見つけ、乱射する。何の音沙汰もなかった。二人はさらに森の中を移動して行った。

ボタン。

民家の扉が開いた。直後に、包丁が侵入してきた男の肩を狙った。

男は包丁を持つ手をとめゆっくり首を振り言った。

「細くて綺麗な腕ですね。」萩谷の声と顔が確認できた。

「なんだあ、ノックぐらいしないと……」山口がホツとしたように言う。

萩谷は無言で扉を閉め、何故か山口に背中を見せないようにして移動した。蟹歩きのような歪さが山口を不安にさせた。

「何隠してるの？」山口が聞くと萩谷は無言になった。

時計のカチコチという音がヤケに大きく聞こえた。二人は見つめあつたままだ。

「小林君は？」山口がやっとのことで声を出す。朝10時を伝える鐘がなった。

萩谷は答えない。

小林と萩谷が安全対策のためカーテンを雨戸を閉めたため、室内は異様に暗い。外が曇ってなかったとしても、ここまでは暗くない。

山口は妙な胸騒ぎを感じた。

「小林君は?!」今度は怒鳴る。

萩谷が近づいてきた。

「い、嫌……」山口は後退り壁にぶつかった。

「達也はまだ闘ってます。」萩谷がやっと言った。どういう訳か、口は笑っているのに目が鋭い。山口は一度その目をみた事があった。

駅で不良に絡まれた時に助けてくれた吉田君の目。不良を見る目は爬虫類のように冷たく感情がない。見られただけで山口は倒れそうになる。山口は声を振り絞る。

「何で萩谷君だけ帰ってきたの？」

「……………」萩谷は何も言わずに距離をつめ、ついに手が届く範囲に来た。

相変わらず、右手を背に回したまま。

「ねえ……………」山口はとうとう泣き出した。恐怖が喉を締め付けた。

「達也は生きて帰ってきますよ。でも約束したんです。」

「何を……………」

「約束はあることが成り立てばでした。」萩谷は口すら笑いを失い始めた。

「な……………」

「貴方が俺達の手助けをするか否かに懸かっていました。」

「……………」話が見えたような気がした。途端、恐怖のあまり崩れ落ちた。大粒の涙が頬を伝うが、萩谷は容赦しない。

「君が助けてくれれば、君を守る。」

「……………」

そして

「君が傍観しているようなら……………」

足手まといになるようなら……………」

断罪。

「お別れする」萩谷はゆっくりと背中から石田が持っていたワルサーP77を山口に向ける。

山口は何も出来ず、硬直していた。

数秒後、民家に銃声が響き渡った。

## 第15章 激化2

エリアEー4

走りに走った後藤は服部が追ってくる気配が無くなってから停止した。

岩本がゼイゼイ言いながら、スポーツドリンクを飲んでいた。社長令嬢とはいえ、ハンドボール部に入っているから、何とか後藤に着いてこれた感じた。後藤は蛭原を肩から下ろした。

「美樹、怪我してるんですよ。手当てしないと……」岩本が息を整えながら言う。1分程でもう落ち着いている。後藤は内心感心しつつ、言う。

「どこも怪我してません。気を失っているだけです。」

「え？ そうなの？ さっきと言ってる事が違くない？」岩本が言った。

「はあ。私が気絶させたんですよ。蛭原さんが危険を省みず、服部を倒そうとしたんですよ。」

「美樹が？」岩本は今は寝息を立てている蛭原をみた。

ポツリ。

朝なのに明るくないと思えば雨が降ってきた。後藤は近くに民家がないか搜索しようと立ち上がる。

「ねえ、後藤くん。貴司とはぐれちゃったけど大丈夫なの？」

岩本が言った。後藤が固まる。

「どうし」

「うーん……」蛭原が岩本の言葉を遮って起きた。寝てた

わけではなく、どうやら氣を失った状態から回復する段階だったらしい。  
後藤が硬直する。

姥原が目を後藤にやり、岩本にやり、周りを素早くみた。

後藤が何か言おうとしたが、蛭原は意外にも頂垂れて、声もなく泣き出しただけだった。

「ちよつと美樹?! どうしたの? どっか痛いのか?」 岩本がすくに駆け寄る。

蛸原は首を振り言った。

「ゆ…………夢じゃ…………なかつたんだ…………なかつたんだ。」

岩本が混乱していると、蛸原は膝に顔を埋めた。

「う~~~~~貴司く~~~~ん。う~~~~~  
う~~~~~号泣する蛸原を抱き締めながら、岩  
本は後藤に聞いた。

「ねえ、何があったの？貴司は？！まさか、美樹に何かしたんじゃない……」

盛大な勘違いだ。後藤は目が細くなった岩本を見ながら、やや呆れた表情になった。

「何もされてないの……貴司君が、貴司君が……死んじやった……死んじやったんだよ……」言葉にして言つとますます現実味が増した。

岩本は当然混乱した。

蛸原ではなく、後藤に聞く。

「貴司が……死んだって?! 嘘だよな?! 間違いだよね?!」  
 だって……貴司は、貴司はいつも死をスレスレで凌いだし……」  
 「マシンガンで撃たれたんですよ。倒れたのを見ました。」後藤が断言した。

絶句する岩本。 姥原の泣き声でした。

岩本の目からも涙が溢れた。

「そんなこと信じられるわけじゃないじゃん！　噓に決まってる！　貴司は死んだりしないもん！　後藤くんも美樹も撃たれたのを見たかも知れないけど、致命傷にならなかったかもしれない！！！！」

岩本はどうだと言わんばかりに後藤を見た。

なかなかの説得力だ。しかし岩本は大事な事を忘れていた。

「岩本さん……私だってそう信じたい……でもダメなんです」

後藤が沈んだ声で言う。岩本は激昂する。

「何で！！そんなに貴司を殺したいわけ？！」

「岩本さん………何でさっき全速力で走ったと思います？」

しばし岩本は黙り込み、答えた。

「服部から逃げるため。違う？」

「……………」  
後藤は黙って首をふった。

「違うの……？」

[illegible]

「絶叫と言うより、絶望の余り、頭を抱えて座り込む。」

「あそこは……………禁止エリアだったんですよ……………」後藤もまた天を仰いだ。

## エリアF16

大原が見張りを始めてから、2時間が経過した。まもなく正午だが、雨が降り始めたら、大原は意外にも3人の縄を解き、銃を突きつけて、民家のカーポートの下に移動させた。縛り直さずに、3人に壁を背に、体操座りさせ、自分は距離を少しおいて面と向かう感じで、立っていた。

その手前の林の中から突如、絶叫がしたのは移動後、10分も経過していない時だった。3人はもちろん、大原も林を見た。

小林は足の腿を撃たれたが、掠めた程度ではや歩きなら出来た。

しかし、馬淵と保坂から逃れるのに忙しく、銃も失ったあの時、小林に逃げる以外の選択肢はなかった。

小林は打ち合わせておいた通り、エリアF-6の金子らと会う予定だった。すると誰かに銃を突きつけられて、移動している3人を見た。

小林が慎重に林をぬけようとした時、後ろで小枝が折れる音がした。

小林はすぐ振り向いた。

服部がまさにマシンガンに向け、撃たんとしていた。

小林は駆け出す。

服部がニヤリとして、マシンガンを撃つ。

パラパラパラパラパラ.....

のはずが。

パ  
ラ  
ン。

1発だけで弾切れ。服部が驚き、マガジンを変えようとするが、小林が余りにも速すぎた。

小林が服部の両足を抱え込むレスリングの一本技を繰り出す。マシンガンに頼っていた服部はなすすべなし。

小林は情け容赦せず、服部を押し倒す。

そして

包丁を出し、服部の眼球にぶっ刺した。

耳をつんざく絶叫を服部が出した。文字では書けない。

小林は躊躇せず、服部の首を包丁を横にして刺す。



## 第16章 真相と決着

### 本部

「死亡者は石田、坂下、遠藤、服部の4人になりました。仲間割れで、山口が死亡。吉田も死亡しました。」

「ふん、わざわざ奴等がいた場所を禁止エリアにした甲斐があった。1日でおわりそうだな。」井坂が言う。

「仲間割れをM高生達が起こしていますからね。意外と言えば意外ですね。」嘉門が楽しそうに言った。

### エリアD-6

萩谷が禁止エリア近くを歩いていたのは正午から10分ほど経過した時だった。

突如人の声がし、急いで茂みに隠れた。

パラパラパラパラパラ。

そいつらはマシンガンを乱射し茂みから飛び出して来ないか確かめている。

萩谷は急いで木に登った。十のマガジンを入れ換える。

やがて、保坂と馬淵がやってきた。

パラパラパラパラパラ。足元の茂みにマシンガンで弾が放たれる。

特に何の反応もせず、二人は去っていく。

二人が十分に歩き去ってから、萩谷は地面に降りた。

そして、2発撃つ。

1発は馬淵の脳天を直撃。頭の中身がどつと出る。あっさり決着がついたかに見えたが、保坂には当たっていなかった。

「てめっ！！！」

保坂がマシンガンを乱射しながら、萩谷に突進する。

「ぐっ！」萩谷の背中に2発命中し、鮮血が走る。

萩谷は必死に茂みに入り逃げる。マシンガン相手では歩が悪い。距離を詰められればおわりである。

「待てや、コラァ！！！」保坂が全力で追ってくる。萩谷は暫く走り、茂みにまた隠れた。

だが、しかし。

「ここまでで途切れてる。さあ！出てこい！！！」マシンガンを乱射する。木の上にも。

やがてマシンガンの音が途切れる。

保坂はマガジンを取り替え、ニヤニヤしながら血の後を仰視した。

萩谷は茂みから飛び出した。真ん前の獲物を見つけ、保坂は狂喜の笑みを浮かべ、1歩踏み出した。

その刹那。

ドゴン………！！

小さな爆発音と共に、保坂の首と胴体は永遠の別れを告げた。

エリアH-5にて。

萩谷が、それを確認した。

「ふ」萩谷はそれだけ言っと、何かを投げ捨てて去っていった。

それは

萩谷の首についているはずの、首輪の残骸だった。

エリアEー6

横山と木田が民家に入り、水を飲み駄弁っていた。

「あの偽善者めが！！」そう言うと、横山は民家の置物を手にとり、壁に叩きつけて破壊した。

木田は何も言わず、こつくり、こつくり出した。

横山が空の水のペットボトルを放り投げた。

まさにその刹那。

パラパラパラパラ……マシンガンの音がした。

二人は飛び起き、床に伏せた。そして、相手の弾切れを待ち、窓ごと外に向かって乱射する。

呻き声がした。

そして、這っていくような衣擦れの音がした。

二人は顔を見合せ、慎重に外に出た。誰もいないが、血溜まりがあった。

血が森に向かって延びている。

二人は急ぎ足で追う。

やがて、足を引きずり、肩を庇いながらあるく男子を見つけた。

「とまれ！無駄なこた止める。この距離なら外さねえ！！」横山が言う。

すると突如、男子は走り出した。

「待て、コラア！！！」横山と木田が追う。

距離はあっという間に縮まった。

だが。

ズボツ！！！！！バシャーン！！！！

派手な音が響いた。

男子が振り向いて戻ってきた。

横山と木田が干し草で隠されていた井戸の真上を通過し中に転落していた。

もう這い上がる高さではない。

男子は、何の音もしない井戸の底にマシンガンを乱射した。

止めがさされた。

その男子は、首輪を井戸に投げ入れた。

井戸の上に干し草を置いたのも、

吉田だった。

エリアF-3

小林が拘束された3人の前に現れた。

その途端、大原は溜め息をついた。そして、何故か小林に向かって頷いた。

それからおもむろに3人に近づく。

「な、何を……………」金子がいいかけたが、大原は首をふり、ポケットから折り畳んだ紙を出して開き見せた。

『俺はお前たちの味方だ。何があっても声を出すな。今から首輪を小林と共に外す。』

3人は唖然としていたが、次の瞬間、大原は黒澤の首輪に奇妙な針を入れ、30秒程度で、外した。

小林も加わり、海老澤、金子も外した。

「もう話していいぜ。」首輪から20メートルはゆうに離れた所で大原は言った。

3人はフーーーーーと長い溜め息をついた。

「何で助けってくれるんだ？」海老澤が言った。

「何でって……あ、そうか。悪い、悪い。仮面外してないな。」大原はそう言つと、ルパン三世のように、顔を剥ぎ取った。

「えええーーーーー!!!!」黒澤が叫んだ。

ボクシング部の鈴木だった。

「何で話しちゃ駄目なの？」金子が言う。

「あの首輪には盗聴器が付いてるんだよ。これから島を泳いで脱出するぞ。嘉門達は俺らが死んだと思ってる。『大原』が生き残つてな。」

「俺の首輪には盗聴器が付いてないのさ。」鈴木が言う。

「他の皆は？」黒澤が不安そうに聞いた。

「大丈夫。貴司と萩谷はきちり仕事をするさ。」

エリアEー4

後藤が見張っているだけで、起きているものはいない。蛭原と岩本は泣きつかれたのか、すやすやと眠っていた。

カラン。

後藤の目の前に空き缶が飛んできた。前もっての合図なので、後藤は慌てず騒がず、グシヤリと潰した。

すると茂みから吉田が出てきた。

二人は頷くだけで、すべてを伝えあい、吉田は寝ている二人の首輪を外し、後藤のも外し地中に埋めた。

後藤は二人を起こした。

本部

「全員死亡した。生き残ったのは相討ちや裏切りのために大原だけですな。」兵士が言った。

「意外は意外だな。まあ、厄介払いもこれですんだ。大原は？」

「まもなくこちらに来ます。」

井坂の問いに兵士が言った。嘉門は黙ったままだったが、突如叫んだ。

「何か匂わないか？」

嘉門の問いに答えられたものはいなかった。

鈴木が用意していた爆弾により、校舎もろとも、井坂達は灰塵に帰した。

呆気ない終わりだった。

山口はあの時、萩谷が空砲を放つのを見た。

『絶対に声を出さないように。』萩谷が山口に紙を見せて首輪を外した。

奇跡な事に、M高に死者は誰も出なかった。

そうして彼らは警察に保護され、無事回復し、日常生活に戻った。

## クラス名簿（前書き）

フィクションは以上です。ここからは完全創作ではなく、既成事実に基づき、書いていきます。読んだかたの中に、もしかしたらこの高校、あそこかとも思い当たるかもしれませんが、それは気のせいです。気のせいにしましょう。

尚、新しい小説なのですが題名は変わらないため、別小説に分けませんでしたが、題名はCHAPTER 1というように表します。

## クラス名簿

### 2年G組

1番 赤松春彦

1年H組出身。 相当な秀才で、あまり目立たないタイプの生徒。 学年偏差値78、平均順位4番。（320人中）

2番 秋山大介

赤松の親友。 同じように秀才である。 体格のよい男子で温厚な人間。 新聞部所属。 学年偏差値77、平均順位5番。

3番 浅藤涼矢

クールなふりをする、いわばナルシスト。 軽い性格で、雑な面が多い。 学年偏差値48、平均順位200番。 軽音部所属。

4番 石塚 真子

誰とでも打ち解け合える、明るい性格の持ち主。 軽音部所属。 学年偏差値55、平均順位135番。

5番 石山大地

体はクラス一でかいが、内気で気弱な人間。 地理研究会所属。 学年偏差値54、平均順位140番。

6番 伊藤大輝

クラスの中でも最も北にあるT市に住む、生徒。ファッション雑誌を好んで読む。学年偏差値46、平均順位215番。

7番 入江 圭介

なかなかのイケメンだが寡黙で、物静かなタイプ。伊藤の親友でお互い部活には所属していない。学年偏差値50、平均順位160番。

8番 岩崎 隆洋

軟式野球部の4番バッター。野球に対する知識と意欲は誰をも凌駕する。6月に留学していたアメリカバージニア州から帰国予定のため、4月地点ではない。学年偏差値、平均順位と共に不明。

9番 内山 一也

弓道部に所属する、真面目な生徒だが、短気でなかなかのケンカのやり手である。彼女持ち。学年偏差値61、平均順位70番。

10番 海老澤 弘毅

前編で語られた通り、バスケット部所属の抜群の身体能力を誇る。B組の松本の彼氏であり、充実した校内生活をする一方、恋愛の助言などもしている。学年偏差値65、平均順位58番。

11番 蛭原 美樹

前編の語りとは少し、違っており、4月当初にはC組生徒と付き合いっていた。バドミントン部所属の美少女。真面目な生徒な一方、型にはまりすぎるのを嫌う傾向あり。学年偏差値52、平均順位14

7番。

12番 大高 勇気

ヤンキーな外見とは裏腹に真面目な生徒で、模範生。ハンドボール部所属。学年偏差値51、平均順位159番。

13番 大塚 悟

サッカー部所属の男子だが、体育会系ではない。飄々とした性格だが、髪型をしょっちゅう弄ったりと、世間に反抗的な一面を見せる。かなりの秀才。学年偏差値77、平均順位6番。

14番 金子匠

バスケット部所属の生徒だが、自分の運動神経に不安を抱いている。鈍感でひどく内罰的な男子。風貌は海老澤には劣るが悪くはない。学年偏差値48、平均順位170番。

15番 黒澤 瑞穂

金子の幼なじみ。バスケット部所属の女子。持久走では、一般男子より遥かに早い。可愛いより、格好いいの言葉が似合うタイプで、女子からの人気も根強い。何気無くM気質である。学年偏差値51、平均順位158番。

16番 小橋 純平

軟式野球部の三塁手。大富豪同好会会員である。風貌が完全にオタクだが、中身は健全な男子である。物理は学年でもトップを争う。学年偏差値61。

平均順位70番。

17番 小林 達也

サッカー部のキャプテン。イケメンで運動神経抜群、さらに学年偏差値80、平均順位2番という成績で女子からの人気が凄まじい。本人に恋愛の興味はなく、だらけた生活を送り、青春とは無縁の日々を過ごす。ケンカの遣り手であり、出身地の中都市北部では対抗でくる物はいない。

18番 清水 凜

オタクな女子で、のほほんとした性格の持ち主。美術部の部長であり、絵画では、県のコンクールで最優秀賞を3度受賞するなど、立派に部長を務め、富士見ファンタジアをこよなく愛する。学年偏差値55。平均順位135番。

19番 白玉 宣之

ずんぐりした体系で身長とウエストのどちらが長いかよく議論されている。小林とは対局の存在で学年偏差値は29、平均順位は文句なしの最下位である。体力テストでは、上体起こし0回（腹が邪魔）50メートル走15秒などの記録を次々打ち立て、最下位をとったオタクであり、廃人。性格は温厚でお人好し。

20番 杉川 美保

陸上部のエース。50メートル走を6秒3と男子並みの速さがある。努力家で無口なタイプで常に一人でいる。浮いている訳ではないが、友達付き合いが苦手。学年偏差値50、平均順位164番。

21番 鈴木 隆徳

ボクシング部と軟式野球部を兼部している。風貌が良く、女子からの人気がある。本人は小林同様、恋愛に興味はなく、他人に従うタイプ。学年偏差値64。平均順位50番。

22番 園部 悟

無口な男子で杉川に似たタイプ。無所属であるが、中学時代は野球部に所属していた。学年偏差値57、平均順位118番。

23番 大地 奈津美

弓道部のエース。寡黙なふりをするゴシップ好きな女子。世にいうツンデレだが、最近の傾向はヤンデレとも取れる。学年偏差値55。平均順位125番。

24番 高潮 光樹

放送部部长。機械に滅法強く、学園祭における映画を監督したりと、なかなか技術の高い人物。数学が大の苦手。学年偏差値60。平均順位75番。

25番 館 信二

サッカー部の影のキャプテン。チャラチャラした性格とは裏腹に恋愛にはウブな一面がある。学年偏差値45。平均順位200番。

26番 田中 真実

吹奏楽部所属。大人しい性格で、あまり目立たない存在だが、人目の無いところで徳を積むタイプのG組では一番人格が形成されている。学年偏差値58、平均順位80番。

27番 成井 由美

テニス部員。生真面目な性格で、学級委員。その一方で周りに合わせてテンションを上げ下げしたり、空気を読むタイプ。学年偏差値60。平均順位75番。

28番 西野 慎二

テニス部員のなかでもイケメンな方で、彼女持ち。何気無くアニヲタ。ポケモンを語らせると右に出るものはいない。学年偏差値66、平均順位25番。

29番 春日 涼

G組一、と言うより学年一背の高い男子。191センチもの身長があり、バスケのリングに肘を届かせる事が出来るが、テニス部員。学年偏差値59、平均順位78番。

30番 藤田 志穂

合唱部所属。見掛けによらず、かなり猥談をするので、クラスメイトの大半はひいている。学年偏差値44、平均順位215番。

31番 古川 夏歩

卓球部所属。真面目な努力家でツンツンなタイプだが、おつちよこちよいな一面を持つ。かなりの秀才。学年偏差値76、平均順位20番。

32番 細谷 圭

テニス部主将。強面な一面を持つが、実は照れ屋だったりする。学年偏差値42、平均順位230番。

33番 堀江 隆弘

合唱部所属。中学時代は軟式野球部所属。かなりの秀才。学年偏差値77、平均順位15番。

34番 松下 彰

放送部員。理知的で温厚な外見。温厚ではあるが、難しい言葉で外面を装うという、卑怯な一面を持つ。学年偏差値37、平均順位300番。

35番 丸川 佑香

弓道部所属。美少女ではあるが、腹黒な一面を持つ。騙してきた男は2桁になるという。学年偏差値51、平均順位150番。

36番 皆川 亜美

陸上部所属。長距離では学校一早い。授業は基本的に寝ている。学年偏差値55、平均順位135番。

37番 山口 結香

G組一の美少女。陸上部所属。運動も勉強もでき、性格も良いとされるが、彼氏は一人も持ったことがない。女子の小林的存在。学年偏差値70、平均順位80番。

38番 山田 直樹

バドミントン部所属。背の高い男子で春日の次にクラスでは高い。クールな一面や派手な一面があり、掴み所のない男子。

39番 吉田 貴司

棋道部所属。大富豪同好会会長。冷酷非情な男子で協調性に欠けている。中学時代に正当防衛の殺人により、懲役8年、3年間の執行猶予を受けた。父親と別居。母親は死亡しているため、独り暮らし。小林の幼なじみ。学年偏差値75、平均順位30番。

40番 渡辺 沙希

無所属であるが、ときおり、ダンス同好会に顔をだしている。なかなかの美少女。性格は女王様気質なようで、かなりのドS。学年偏差値55、平均順位120番。

41番 和知 亜紀

吹奏楽部所属。物静かで沈着冷静なタイプだが、音楽の授業では人が変わるらしい。学年偏差値52。平均順位148番。

担任 川北 典昭

地理担当。理系であるG組の担任。物凄く温厚でかなり規則に緩い。授業中に携帯をいじろうが、寝ようが、漫画を読もうが、他人に迷惑をかけなければ、許すらしい。32歳と若い教師だが、G組の信用度は高い。  
他クラス

## B組

岩本 怜衣……………社長令嬢で美少女な生徒。堅苦しい生活がきらいで、大富豪同好会に憧れを抱く。ハンドボール部所属。学年偏差値60、平均順位90番。

後藤 謙介……………大富豪同好会書記長。吉田の副官で、器用なうえに、万能人。剣術や棍術を得意とする。バドミントン部所属。学年偏差値61、平均順位85番。

大野 正貴……………大型な男子でラグビー部所属。大富豪同好会書記。岩本の彼氏。体に似合わず性格は内気。学年偏差値63、平均順位75番。

## D組

飯沼俊也……………吉田の悪友。ケンカが滅法強く、不真面目な一面を思い切り表に出す。その為、嫌われものだが、分別はある。学年偏差値55、平均順位112番。

## CHAPTER 1 新学年

2008年の4月、某県の県庁所在地にある県一の進学校であるM高………県庁所在地とは名前が一致しないという、都会風の名前がつけられた高校も今日が入学式だった。

入学式と始業式は同じ日に行われる。朝6時でまだ寒いが、昇降口の前に新クラスの発表の紙が貼られ、それを見ている2学年の男子が二人いた。

「ぬるっ。」クラス名簿を見て、小林達也がフン、と鼻を鳴らした。

「何がだよ。」そう言っ、隣の男子、吉田貴司が小林を冷たい目で見る。

「さあ？」小林はすつとぼけて、昇降口で靴を履き替える。6時なので誰もいない。校舎はしんとしている。

二人は割り振られたG組にたどり着くと、教室の一番後ろ、小林が廊下側、吉田がその隣に座った。

二人が早くきた理由はこれだ。M高は自由な校風が売りで、席すら自由である。普通テストや、最初くらいは五十音順だが、そんな事は気にしたら負けであり、テストはこの形で受ける。

小林は欠伸をすると、机に突っ伏して眠り出した。吉田は立ち上がって、リュックを背負って教室を出た。

棋道部室を開け、荷物をドサリと置いた。基本的に部室で朝や昼休みを過ごしている。吉田は部室に横たわり、眠り出した。

7時を回る頃、昇降口は人でごった返していた。

「また同じクラスだーよろしくー」とか、

「女子少くない？」とか、

「ハズレだ……」とかいう声が聞こえる。

海老澤弘毅は新しいクラスの一覧表を見て、舌打ちをした。隣にいた同じバスケット部員の金子が海老澤を見た。

「不満か？」金子が言う。海老澤はすぐに表情を取り繕い、首を振った。

「知らない人ばかりだ。1年A組出身は俺以外で3人かよ……」金子が首を傾げた。

「……」海老澤は何も言わない。ぼんやりとB組の名簿を見ていた。金子はそれを見て、ようやく察した。

「これか。」金子は小指を突き立てた。

海老澤は肩をすくめさっさと歩き出した。

海老澤と金子は教室のドアを開ける。1年H組出身の生徒が軽く手を上げた。海老澤は軽く受け流して、座席表を見た。半分ほど

埋まっていた。

金子と海老澤は前から3番目の席に座り、駄弁りだした。

8時になると、教室はにわかに騒がしくなった。生徒達は再会を喜んだり、自己紹介をしたりと楽しそうであった。

あと6秒で鐘がなると言うときになって、吉田が部室から帰ってきた。小林もそれがトリガーらしく、跳ね起きた。

鐘がなると、全員が席についた。

担任の教諭が入ってきて、直ぐ様自己紹介を始めた。

「皆さん、進級おめでとうございます。担任の川北です。教科は地理を受け持っています。理系の皆さんは入試でも使うでしょうから、頑張りましょう。」平凡な挨拶を済ますと、川北先生は今日の日程を黒板に書き出した。それが済むと、生徒達に自己紹介をさせた。

席順なので、出席番号はカオスになった。

4番目の白玉は

「ただの生徒に興味はありません。宇宙人……………（以下略）」などと言い出した。度胸はすばらしい。現に白玉の前の赤松や隣の秋山も笑ったし、他にもケラケラ笑う声があったし、吉田すら苦笑した。しかしそれ以外はポカンとしている。ネタが伝わらないとは。

海老澤が15番目に自己紹介を始めるために立つと、女子が一齐に無駄話をやめた。海老澤は面倒くさそうに自己紹介をした。

金子の番になると、立ち上がると男子から、下卑た笑いが聞こえた。

金子は不満げな顔で、自己紹介をした。

吉田の番には教室が静まり返った。まず第一に、明らかに目が冷たいのと、1年のころ他クラスの生徒とケンカして、半身不随にさせたと言っからその手では有名だった。女子はあからさまに怯えていたし、男子すら緊張していた。吉田がさっさと自己紹介を済ませると、パラパラと慌てたような拍手が起きた。最後に小林の番がやって来た。「えーっー小林達也です。1年C組出身です。1年間よろしくお願いします。」終わり。

小林はたったそれしか言わないのに、女子は見とれていた。小林はドサツと席についた。

川北はこの後の始業式までは自由にしてい、と言って教室を出ていった。

吉田が本を読んでいると、隣の小林は多くの女子に質問攻めにあい、メアドの交換をしていた。

すると、前に座っていた男子が吉田に話しかけてきた。

「また、一緒だな。隣の人、貴司の知り合い？」その男子は海老澤 弘毅といって、バスケット部長だ。吉田とは1年の時から知

り合いだった。

「そう。」吉田は無関心に言った。

「へえ、同じ中学校？」

「そう。」

「幼なじみか……………」

「……………」まあ、幼稚園から一緒だけどな……………」吉田はしぶしぶ言った。

海老澤は目を丸くする。

「何だって？幼稚園から？おまつ！！」海老澤は吉田を見た。

「何だよ。」吉田はようやく本から顔を上げて言った。

「女子じゃないのが残念だな〜」海老澤はニヤニヤしている。

「あのなあ、今読んでるラノベ的展開は、日常にはあり得んだよ。女子だしたら、何かあるとも限らんぞ。」吉田が言ったが、海老澤は隣の金子を小突いた。

同じバスケット部員の金子は自分が目立たないよう、黙って携帯をいじっていたが、金子は吉田を見た。

「二人は知り合い？」海老澤が言うと、二人は首を振る。

「そうか、金子はバスケット仲間だな、貴司は……………」ああ〜

吉田君は1年の時同じだったんだ。悪い人ではないから、安心しな  
「海老澤がぎこちなく仲裁に入ると、金子が吉田におずおずと話しかけてた。

「金子です。よろしく。」

「吉田です。よろしく。」二人は会釈する。

「金子は……………」海老澤が金子に何か言いかけたが、川北が入ってきたので、黙った。

始業式は名前の順でも何でもない適当な並びだった。

吉田と金子は駄弁りながら、やり過ごす事にした。

「地元出身なの？」金子が聞くと吉田は首を振る。

「H市出身。」吉田がそう言うと、金子は一瞬顔を曇らせた。

「あそこって、治安悪くないか？聞いた話だけど。」金子はためらいがちに言うと、吉田は顔をしかめた。

「まあな。治安是最悪だ。駅と交番が隣接してるから駅前は何もないが、一歩道からそれれば、昼でも暗い道があるし、落書きだらけだし、公共物は壊れてるし、廃ビルは窓が全部割れてるしな。

3日前に絡まれたし。」吉田が淡々と言うので、金子は頭を抱えた。  
「で大丈夫だったのかよ。小林君も？」金子は楽しそうな顔をした女子と話している小林を見た。

「そ。だがな、小林は僕よりも遥かに強い。大丈夫さ。あそこに住んでりや怖いものがだいぶ無くなるもんだ。」吉田が言った。

式は校長の話に移っていた。

「金子はどこ出身？」吉田が聞いた。

「地元出身だよ。治安は普通だから弱い俺には助かる。」金子の言葉を聞いて吉田がフンと鼻を鳴らした。  
「ケンカが強いかどうかと、強いかどうかとは違うと思うけどな。まあ、いいさ。」  
吉田はうっーと声を出して伸びをした。

吉田は話すのをやめると、とたんに眠くなった。欠伸を隠そうともせずに、堂々と欠伸をする。

金子は、立ってるのが辛そうだったが、話はきちんと聞いていた。

10分もした頃、だんだん雑談が静まってきた。もうネタがないのか、さもなければ温かさにやられて、うとうとか……………

突然、吉田の前の女子が硬直した。

そして、ゆらりとする。慌てて隣の女子が肩を支える。

しかし、力の完全に抜けた人間の体は、少し体重より、重くなる。

前の女子がそのまま吉田に背を向けたまま倒れこんできた。

吉田は驚いたような顔をした。それでも、何とか女子を支えた。その女子、蛭原美樹は膝が曲がり、尻餅をつくように、地面についた。

「おい、どうした？」金子はびっくりして、蛭原を見た。蛭原の隣の黒澤瑞穂が手を上げて、近くの先生を呼ぶ。

「大丈夫ですか？立ってます？」吉田が呼び掛けた。冷たい声で

はないが、どこか乱暴さが伺える。

「……………大丈夫です……………ごめんなさい……………」  
……………」 蛭原はそう言うと、立とうとしてふらつき、今度は金子に倒れかかった。金子は吉田達のやり取りを見ていたので、しっかり受け止めた。 「貧血かね……………」？「金子は吉田を見ながら言った。

「多分。」 吉田が言う。黒澤に連れてこられた川北は蛭原に言った。

「大丈夫？保健室行こうか……………」？「川北は情に厚かった。

「いえ……………」 大丈夫です。「蛭原は微妙に顔が赤い。  
「無理しない方がよいよ。休んだら？」 黒澤が言った。 「  
そくだよ。別に誰も咎めやしないさ。「金子も助けに回る。

「うん……………」じゃあ、そうさせてもらいます。「蛭原は川北先生に言った。よしよしと川北先生は頷いて、黒澤に付き添うよう言った。

だが

「ちよつと待て。始業式中に何処に行くんだ?!」こんな声が言った。

体育館中が沈黙する。

見ると、何やら体格のいい男がこちらにやって来る。

蛭原と黒澤は萎縮し、金子はオドオドした。

「井坂先生。生徒が倒れたのですよ。保健室に行かせるだけです。」川北先生がその男に言う。

井坂と呼ばれた男が間近に来た。黒澤と蛭原は吉田と金子の後ろに隠れてしまった。

「今、式中だぞ。それも校長の話の途中に倒れるとは、何事だ!!!」井坂は怒鳴った。

「その通り。たるんでる証拠じゃねえか。」今度は後ろから声がする。見ると、黒澤の後ろに茶髪の男が立っていた。後ろに同じく茶髪の男子が二人。

「誰。」吉田が言った。

「生徒会長の大束だ。おおつか一般生徒が話しかけるときは敬語。」茶髪の男子が言った。

体育館中がやり取りを見守るなか、井坂が言う。

「お前。」蛭原を指しながら言う。

「後で体育館の掃除を生活指導部長の立場から任ずる。」井坂はニヤニヤしながら言う。

「そんな……………」黒澤は憤慨したが、蛭原が止める。

「井坂先生。度が過ぎますよ。」川北先生は井坂に向き直る。

川北先生はまだ若く細身だが、井坂と対峙し睨まれても怯む様子を

見せない。

吉田は感心した。

「忘れたんじゃ有りませんか。県からわざわざこの荒廃した、M高の生活指導部長に指名された事を。」井坂は口汚く言う。

「そして生徒会長からの命令。お前は、今から生徒会室でまず指導だ。さあ来い。」大東が言うと、後ろにいた茶髪の男が蛭原の腕を掴む。

「グハ！」

「ング！」

二人分の悲鳴が聞こえた。

小林達也が茶髪の男二人を地面になぎ倒していた。

「何しやがる！！てめえ！！」二人が小林に襲いかかる。小林はさりとかわして吉田に言った。

「貴司！！やるぞ！！」小林はそう言うと、二人と戦い出した。  
「金子。早く彼女を保健室へ。顔が真っ青だ。」

「分かった。」金子は蛭原をおぶり、黒澤と共に、体育館を出ようとする。

「させるか！！おい、サボりだ！！生徒会役員！！」大東が叫ぶと、何人かが金子達に躍りかかるうとする。

「イテッ！」吉田がつき出した足に躓き倒れた。

「貴様！！」そいつが吉田に襲いかかる。

「海老澤！！！！助けてやれ！！！！」吉田が海老澤に言った。海老澤は瞬時に頷き、隣にいたボクシング部員の鈴木と共に金子達を

井坂は飛び出そうとしたが、川北先生が前に出た。

公園ですか……？」  
川北先

「吉田——！！」大束は鋭い足を入れた。

「中国拳法の心得でたっぷり気合を注入してやろうか。」大東が笑う。

[illegible]

大束が吉田にまた蹴りを入れる。吉田に命中した。

頬が切れ血が出た。

しかし、吉田はがっちり大束の足を掴み、左手はコートの中から短刀を握った。

「なっ……………！！」大束が絶句する。

「ぐわあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

吉田が体育館から引きずって外に連れ出したため、目撃者はいなかった。

股とアキレス腱の辺りから大量出血していた。これではもう立てない。

大束はほふく前進で去っていった。

吉田は短刀を地中に埋めた。

海老澤と鈴木と小林はそれぞれ体育館の中で幾人もの役員を気絶させていた。

これでただで済むはずがない。

始業式が終わると、吉田、小林、海老澤、鈴木は校長に呼び出しを食らった。

川北先生は同行したものの、許しもせず、咎めもせずだった。

「もう2度とあんな事をしないと誓えるかね？」30分経ったころ、校長のそう言う声が聞こえ、4人とも骨電動スピーカーで音楽を聞くのをやめた。

「」「」「誓います。」「」「」

校長はそれに対し不快感を示したが解放した。

教室にもどると、大富豪同好会会員の小橋が聞いた。

「判決は？」

「無罪。」吉田は軽く答えた。

「何処が無罪なもんか。親に連絡が行くとさ。」海老澤が憎々しげに答えた。

「ふつ。」吉田は鼻で笑った。

「こいつ一人暮らしだからな。ダメージ0だぜ。」小林が言う。  
「それは良いけど、G組が早くも問題視されてんだが。」話を聞いていたテニス部の西野が言う。

「別にええやん。敵対視された方がいろいろやりやすい。」小林が答えた。

「友達に『個性的なクラスだね……………』って言われたぜ。あ  
りや、俺と友達やめたいって顔してたな。」西野が疲れたようにため息をついた。

ガラガラガラ。教室のドアが開き、金子と黒澤が戻ってきた。

「蛭原さんは？」海老澤が聞いた。

「あの後で熱が出てな。朝、微熱があつたのに無理して来ちゃ  
ったから、それがいけなかったかもな。」金子が言った。

「蛭原さんの体調とG組のイメージが代償……………」海老澤は  
ため息をついた。

G組は2学年の初っぱなから波乱の幕開けとなった。

## CHAPTER 2 クラスマッチ

6月の連休にクラスマッチがある。その内容を決めるため、各クラス1名、選出するきまりであった。

G組から選出されたのは、ハンドボール部の大高勇気であった。各クラスから3種目を提案し、1学年8クラス、2学年8クラス、3学年9クラスということで、25クラスの多数決、僅差の場合話し合いである。

大高はため息をついた。男女別な種目が一つずつと男女混合の種目をきめるのだ。

昨日の話し合いでは、女子はあつさりバスケットに決まり、男女混合はバレーと1分かつからずに決まった。

問題は男子種目だった。

「サッカーだろう！」サッカー部の小林が叫べば、

「バスケットに決まってる。サッカーなんて人数が多く必要だから、3年の姫クラはどうすんだよ?!」海老澤が怒鳴る。3年生の事を考えている訳ではなく、ただバスケットをやりたいから、理論的な事を言っただけ。ちなみに姫クラとは男子より女子の数が多いクラスのことである。

「ああ？バスケット？サッカー？技術持ちが独占してクラスマッチになんねーよ。合唱で争うべき！」合唱部に一時期所属していた堀江が吠える。

「中学校に帰んな。やっぱり体育館で一斉にできる、バドミントンだろう。」バドミントン部の山田が言う。

「バドミントンなんて、みみっちい。バドミントンの漫画とかが盛り上がるか？どうせやるなら盛り上がるもの………テニス！」テニス部の春日が叫ぶ。

「どうせなら、全員リレーとかは？」女子陸上部の皆川が言った。

「俺、休むわ。」50メートルを15秒で走る白玉が言った。

「やはり、サッカーだろう。全員で参加できる。試合時間を短くすれば効率もあがる！」

「2面しかないだろう。バスケットなら3面取れるし。雨関係なし。」

「は、笑わせるな。バドミントンなら9面だ。やはり効率の面からバドミントンにすべき！」

あーだこーだで決まらない。仕方ないので、女子の投票で決めてもらうことになった。

大高としては、当然ハンドボールが良いのだが、味方は自分一人だった。

そして女子の投票の結果……………

「野球」

になった。

軟式野球部の岩崎、小橋、さらにボクシング部と兼部している鈴木が春の地区予選のため、公欠なので、野球の意見は出なかった。ある意味、普通すぎるこの意見は、しばらく誰もを黙らせた。

大高は6月のクラスマッチのために何故、新学期早々、と思う。大高の認識が甘かった。岩崎は今アメリカに留学していて、5月31日に帰国予定。

それなのに彼は単なる公欠だと思っている。

放課後になると、会議室に大高は重い足を引きずり、参加しなければならなかった。

―同時刻の棋道部室―

初日を終え、吉田が棋道部室にやって来ると、同学年の部員の川又太一がいた。

「ちはー。」「川又は吉田に手を上げた。」

「うい。」「吉田は片手を上げてそれに応じた。」

「指そうか。」「

「ちよつと待った。弁当食い終わってない。昼休み本屋行つてたから。」「吉田は悪びれる様子がない。普通、学校を途中で抜け出すなどあり得ないが、M高では普通だった。」

「3分間待つてやる!!」

「速いな。てか、食いきれない。」「

「悔いきれない?」

「まあ、確かに食いきれないからね……悔やむ所もあるけどさ。」「吉田は棋道部室に来ると少し雄弁になる。」「嘘だ!!」

「事実だつつうの。またネタかよ。」「

「うるさい。うるさい。うるさあい!!!!」

「最近15巻辺りからそれ言っていないんだけどね。ていうか、電撃文庫の『灼眼のシャナ』（高橋弥七郎作）の宣伝だよな。」「

「いいんだよ、マリアンヌ。君のせいではない。」「

「川又君のせいだからな。確かに。」「

「うるさい。うるさい。うるさあい。」「

「まさかの、繰り返し? 斬新だね。」「

「そうそれ。」「

「……………えつと、エルメス?」

「そうそれ。」「

「微妙に会話になつてるような、なっていないような……………てか、読者分かつてます?」

「時間だ。答えを聞こう!!」

「まだ食べ終わってません!」

「君も男なら聞き分けたまえ!!」

「なんか、頭に来るなあ。よし、食い終わった。」吉田がやつと言う。

「おK。指そうか。」川又が言う。吉田はコンビニ弁当のからをゴミ箱に投げ入れる。

「はあ、何か疲れたよ。」吉田が後手になる。

「そう言えばさ、クラスマッチの種目何にした？」川又が聞いた。

「え……………え……………忘れた。」

「はあ、俺らのクラスは女子がバスケ、男子もバスケ。共同が野球」

「……………ふつ。」

「何か今、鼻で笑った?!」

「ナンノコトヤラ。」

「ごまかすつもりすらないのかよ。」

「ソナナコトナイヨ。二歩していい？」吉田が言う。

「何気無く反則しようたって、騙されないんだから!!」

「幼なじみみたいな反応しおって。」吉田は思案し始めた。

と、コンコンとドアを叩く音がした。

「ん」川又はドアを開けた。

小柄な男子が入ってきた。

「あの、すみません。棋道部に入部したいんですけど……………」

緊張しているようだ。吉田は将棋盤から目を離し、その子を見た。

「一年生？」

「はい。」川又の問いかけに、一年生が答えた。

「名前は？」

「大澤<sup>いちたい</sup>一代です。」一年生が言った。

「じゃあ、駄目。」川又が言う。

「駄目なんですか?!」素で驚く大澤。

「おK。入部を許可します。」吉田が言った。

「え……………何かあるんですか?」

「君のノリのよさを試したただけさ。早速指してみる?」川又が言った。

「あ、はい。お願いします。」

「ゆっくりしていつてね!!」

「ネタですか?」

「おお!」吉田と川又がニヤリと笑う。

「すばらしい!!最高のショーだと思わんかね?将棋わかる?強い?」

「わかります…………でもあんまり父親以外指したことないんで、強くないです。」

「まるでゴミのようだ!!!」

「え!!何かひどいです!!」大澤が嘆く。

「とまあ、ネタはこれくらいにして。じゃあ君、先手でいいよ。」

「川又が言う。」

「はい。お願いします。」

「お願いします。」

吉田はその対局を見守る。

「東方とかやる?ライトノベルとか読む?」

「やりますし、読みます。」大澤は吉田の問いに難なく答えた。

「イタイね。」吉田が言う。

「ぐはっ!…………でも…………先輩は……………あ、すみません。先輩のお名前は……………」

「教えて欲しいか?」吉田がヒヤヒヤと笑う。

「はい。」大澤は答える。

「ならば……………」

「膝まずけ……！命乞いをしろ……！」吉田が言った。

「なんか、名台詞ばかり………」

「何をボヤバヤしとる！」

「ネタだけで会話するなんて……！凄すぎる。」

「駄目だコイツ………早く何とかしないと………」今度は川又が言う。

「助けてください。」大澤がそう言ったところで、吉田はようやく自己紹介する。

「吉田。そちらは川又君。」呆気なく終わる。

「吉田先輩に川又先輩ですね。よろしくお願いします。」  
改めて大澤が言った。

サッカー部では、新入部員は見学するだけだった。

「達也、俺達の時って4月何人くらい入ったわけ？」同じG組の大塚が小林とグラウンドを軽く走りながら聞いた。

「えっと、10人はいたよな？合流したのは5月だけだし、うん。10人位だな。」小林が言った。

「じゃあれをどう思う？」大塚が顎でしゃくる。 「ふむ。  
面白くなってきたんじゃない？」

ずらりと30人くらいが並んでいた。

バスケット部でも新入部員は当然いる。      しかし、男子は0。それに対し、女子は4人。

金子と海老澤は終日ため息をついていた。

5時を回ってようやく、全クラスのクラスマッチ委員が集まった。

大高は委員の中には知り合いもないので、適当に携帯をいじっていた。

そのなか、委員長が声を張り上げる。「はい。静かに！！これから第1回クラスマッチ委員会を始めます。礼！！」  
そんな定型句で始まった。

翌日。

ボクシング部兼軟式野球部の鈴木がいち早く登校してきた。教室には誰もいない時期に来た。

鈴木は何もすることがないので、携帯をいじり始めた。

むなしく携帯をいじる音が響く。

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

10分もした頃、鈴木はふと視線を感じた。第6感的なもので、何かの気配を感じた。

視線を感じた後ろを確認するが誰もいない。

急いで周りも確認する。しかし、何も異常はない。

気のせいかな。鈴木はそう思い、携帯に向き直る。携帯は長時間動作をしてないので、暗くなっていた。ふと携帯を見て仰天する。

鈴木の後ろに何やら黒い紐の集合体があった。髪の毛に見えなくもない。

「む？」鈴木は冷静だった。

辺りを確認するが誰もいない。鼻を鳴らして携帯画面に戻る。今度は何も反射していなかった。

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

ミシリ……………

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

ミシリ……………

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

ミシリ……………

「……………」鈴木はイライラが高まった。何故か教室の床が軋んでいる。そもそも教室は新しい。軋む筈がない。

鈴木が周りを確認する。誰もいない。

鈴木が盛大にため息をつくとき、ようやくクラスメイトが何人か入ってきた。

その内の一名は、黒板にデカデカと文字を書き殴った。

クラスマッチについて

と題名を書いた。

女子…………バレー

男子…………野球

共同…………サバゲ

「ふう。」茶髪のその男子…………大高は、手についたチョークの粉を払い、席についた。

「なあなあ。」小橋がまず言った。

「うん？何だ、小橋。」

「サバゲって何？」

「サバイバルゲームの略。」大高はすらすら答える。

「いや、そうじゃなくて、何でサバゲをやるの？」

「クラスマッチだから。」

「逆だって。何でクラスマッチの種目がサバゲなんだよ。」小橋は慌ただしく言った。

大高は答えようとしたが、ドアの開く音に飲まれた。

「ういーす。わわわ忘れ物……………」白玉がネタを言いながら入ってきて……………」

「ぬおっ?!」ネタかと思いきや、黒板を見て素で驚いている。

「すまん。ごゆつくり!!」白玉はそのままで行った。

「何あれ?」大高が首を傾げ、小橋も分からないというふうに肩をすくめた。

「大高君。」鈴木が初対面なので、君付けで呼ぶと、大高は手をふった。

「大高でいいよ。で、何?」

「本当の本当にサバゲ?」

「そう。これ証拠。」大高はそう言いながら、書類をバンと机の上に置いた。

軟式野球部の小橋と鈴木は書類を凝視する。

## 第60回クラスマッチ

種目・開催日・会場・ルール・その他

女子……バレーボール・4月27日～28日・M高体育館・

1セット25点の1セットマッチ。40分の時間制限がある。トーナメント方式で行われ、準決勝・決勝は時間制限なし、3セットマッチとなる。ルールは日本バレー協会が定めているものにのっとる。  
・尚、バレー部員は参加を許されない。引退から3ヶ月を経ているば可。男子……硬式野球。・4月29日、5月3日、5月4日。

・N川大競技場・ルールは日本プロ野球連盟のルールにのっとる。

リーグ戦 ダブルエルミネーション方式で行う。

1R……リーグ戦(25クラス16クラス)

2R……ダブルエルミネーション方式(16クラス 8クラス)

2時間の時間制限がある。5回まで行う。3回の時点で15点差がついていればコールドとする。1Rでは、全クラスをくじ引きで8ブロックにわけける。2Rでは、4ブロックに分け、1位通過2チーム、2位通過2チームとし、初戦は1位通過と2位通過が当た

るようにする。ブロックはくじ引きで決める。

各ブロック上位2チームが3R進出。 3R：ダブルエルミネーション方式。（8チーム 4チーム）

3時間の時間制限がある。ゲームは7回まで行う。5回時点で10点差がついた場合はコールドとする。2Rと同様、2R1位通過と2位通過チームが2チームずつ入る。初戦は1位通過チームと2位通過チームがぶつかる。上位2チームが決勝R進出。 決勝R：トーナメント方式（4チーム 優勝）

3R1位通過チームと2位通過チームが準決勝を行い、勝者が決勝を行う。ちなみに、たすぎがけとし、ブロック1位通過×ブロック2位通過のように、違うブロック同士が準決勝を戦う。

時間制限とコールドはない。9回まで行う。

その他に1R、2R、3Rで時間制限が経っても、同点の場合、（失策の少なさ 安打数）で区別する。それで決まらない場合は、主審を抜いた5人でより多くの好守備がでた方を判断し多数決とする。硬式野球部の参加は認められないが、軟式野球部の参加は認められる。主審は自分のクラスに当たらないよう、硬式野球部員が行う。

共同種目：サバイバルゲーム・5月5日～5月6日・M市内全域・殺し合いではありません。怪我ならOK。・警察に捕まらないように。詳細は当日発表。

各種目優勝チームには10万円、準決勝チームには3万円、3位チームには1万円ずつが配給される。

（主に学園祭費用）

では頑張りましょう。

「これだけ？」小橋は企画書を裏返したが、何もない。

「やった。軟式野球部ならセーフか。バレーの企画書読んだときは肝が冷えたぜ。」鈴木が言った。読むのに没頭していたため、周りに人が増えた事に気がついてなかった。

周囲からは、野球かよゝとか、バレー3週間後だよ！とか聞こえてくる。こうして、クラスマッチが始まった。

## CHAPTER 3

### 女の戦い

「美樹ー！ー今日から学校行けるんでしょー早くー！ー！」  
外から声が聞こえた。

「今行くっ！」 蛭原は急いで、家を出る。

「お父さん、行ってくるから、戸締まりよろしくっ！」 蛭原が  
言うつと、若く見えるスーツ姿の男性がハイハイと言った。

「お待たせ。」 蛭原が言うつと、二人の女子が待っていた。

この二人は同じバド部の三次と松本という。二人はかなりの美  
少女で人目を引き付けていた。松本は海老澤の彼女でもある。

二人は同じ地区出身だけで、近場ではないが、倒れた蛭原の  
ためにわざわざ来たのだ。

「遅い。体調はもう良いの？」 三次が聞いた。

「うん、もう完璧だよ。」 蛭原は歩きながら言った。

「それは何より。でも初っぱなから2日も休むんで……」 三  
次が言った。

「うん……」

「え、ごめん。別に責めてる訳じゃないよ。美樹は何も悪くな  
いよ。」

「うん……」

「そうだよ、体調が悪くなるなんて誰にだってあるんだから。

美樹は誰かに迷惑かけた訳じゃないよ。」 それまで黙っていた松本  
が言う。とても物静かで、丁寧なしゃべり方だ。

「……………」

「どうしたの？」 松本が不審そうに聞いた。

「ううん、何でもない。早く行こっ。」 蛭原はそう促し、足を  
早めた。

教室では小林と黒澤が話していた。

「じゃあ、固定メンバーを決めて、それで交替選手を出すのね。」  
黒澤が念を押した。

「ああ。」小林がやって来なかった数学の春休みの宿題プリントを素早く解きながら答えた。

「じゃあ、固定メンバーはどうする？」

「それくらい自分で考えてくれ。」

「えっ……みんな自分が出た如果说って全然まともないだよな……」  
「じゃあ放課後にでも、体育館でやったらどう？」

「……部活あること忘れてない？」

「ふっ。」小林は嘲笑した。

「鼻で笑わないでよ!!」

黒澤が起こったが小林は意に介さない。

「体育の時間を利用すればどうです。」

「。」

「うーん、悪くは無いんだけど……今日の体育がバレーかどうか……」

「そうでした。むっ。」小林は唐突に立ち上がった。

そして教室から出ていく。

「ちよつと、どこ行くの?! 話は終わってないよ!!」黒澤が叫ぶが、小林は既にいない。

「もう……」黒澤が顔を曇らせた。

「それでは、昨日の夜にも現れたんですね。」

「そう……助けてよオ、貴司イ。」吉田の冷たい声に岩本がずがる思いで言った。

岩本怜衣。社長令嬢らしいのだが、堅苦しい生活が嫌いらしい。社長令嬢といえども、お小遣いは逆に厳しいらしい。

今日は4日前から続く心霊現象に耐えかねて、棋道部：大富豪

同好会に助けを求めて来たらしい。

岩本は人探しのような簡単な作業でも大富豪同好会に依頼しに来た。そのたびに千円払うのでありがたいのだが。岩本は美人の顔を思いつきり強調させ、吉田を見たが、吉田は逆に冷たくなつた。

「そもそも、そういう事が、岩本さんに起こるはず無いんですが。特に岩本さんは。」吉田の声は依然冷たい。

「別に、あたしのせいじゃないもん。」岩本は譲らない。

「ふん、そうですか。では去年君に差し上げた誕生日プレゼントはどこにやっただんです？」吉田は岩本を見ながら言った。とたんにぐつとつまる岩本。

「捨てたんですか？」

「そんな事はしないよ！」

「物置ですか？」

「はあ…………庭にある。」「あの湿地帯に？」

「どこが湿地帯よ！」

「ははん。それですよ、原因は。」吉田はため息をついた。

「え…………？」

「僕はあの時言つたはずですよ。『グレイオスシ안의火』（第12章参照）はありとあらゆる災難から君を守ると。」

「じゃ、効いてないじゃない。」

「曲解ですか。部屋に、その亡霊が現れたんでしょう。なら、部屋に火を置けば良いでしょう。」

「だってずっと燃えてるんだもん。危ないって。」

「ランタンを割らない限り大丈夫ですよ。第一あの火は悪影響を及ぼす物を吸って燃えてるんですから。」「本当に？」岩本がそう言つた時、予鈴が鳴つた。

「やってから疑ってください。」そう言うと、さっさと立ち上がる吉田。

「うつ……………いつになく、貴司が冷たい……………」岩本が急い

で部屋を出た。

吉田はしっかりと施錠すると、さっさと立ち去った。ちなみに、岩本が吉田を名前の呼び捨てで読んでいる事に、深い意味はない。

授業が始まる鐘が鳴ると同時に数学の柴崎先生が意気揚々と入ってきた。柴崎先生はG組の副担任であり、川北先生とも仲が良く、寛大な先生であつた。私語はさすがに注意されるが、内職、居眠り、携帯いじりは全面許可である。

柴崎先生による数学の対数関数の分野の説明が行われている。2年に入つたばかりだが、随分早いペースである。

小林はたえずニヤニヤしていた。問題を解いてはニヤニヤ、黒板を見てはニヤニヤである。

隣の吉田が冷たい目で小林を見てもニヤニヤが止まらない。

1時間目が終わると、海老澤が後ろの吉田に話しかけた。

「何か、女子が殺気立ってないか……」

「そうか？」吉田が生返事をする。するとニヤニヤ笑いをしていた小林がヒヒヒと笑いだした。

「誰だ貴様は。」吉田が冷たく言う。

「女子は一生懸命なんだよ。」小林はそう言つて、3時間目を指す。

そうしているうちに、生物の豊田先生が入ってくる。鐘はまだ鳴っていない。

M高は1時限65分である。

そして3時限目前の休み時間。鈴木がトイレにいち早く行つた。

鈴木が帰ってくると、女子が群れをなして、教室を出ていった。殺気立っている。

「……………」鈴木ですら、1歩引いた。

3時間目体育。

だが、始業の鐘がなくても、先生は現れない。そのかわりに、メモ書きがステージの上に置かれていた。

『体育館の中で自由』

「……………」読んだ、金子が呆れた。

「まじか？じゃあ、バスケやるか！！」海老澤は嬉しそうだ。

3時間目体育。

だが、始業の鐘がなくても、先生は現れない。そのかわりに、メモ書きがステージの上に置かれていた。

『体育館の中で自由』

「……………」読んだ、金子が呆れた。

「まじか？じゃあ、バスケやるか！！」海老澤は嬉しそうだ。

「どうせ先生いないし、外に出てサッカーにしよう！！」

「そんなのいつでも授業で出来るんだから、バドミントンにするべきだ！」

「コホン。」

金子を中心に勝手に騒いでいた男子連中は咳払いに振り返った。

黒澤が後ろに女子生徒を率いていて、こっちを見ている。

なんだろう。なんとも表現し難いオーラが黒澤が出ている。まだ新クラスになったばかりだが、新しいクラスメート達是不穏な空気を讀んで、すぐ黙る。金子が前にでてなんでしよう？と聞いた。

「あのね、女子は全員バレーやりたいんだけどさ、いい？」黒澤を始め、女子はニコニコしている。

ただし、美少女の見せる妖艶なものは一切なく、有無を言わせぬオーラがあった。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。じゃあ協力して欲しいんだけど……」

「好きなコートはどうぞ。」急いで金子が手を差し伸べた。

「そうじゃなくて。ネット張りたいんだけど身長足りなくて、協力してもらえる？」黒澤はクラス一の長身の春日を見て言う。

「分かった。」春日は同じテニス部員を何人か呼び、準備するべくステージから降りた。

「はあ……」金子がため息をついた。

「まだ終わりじゃ無いんだ。」黒澤が金子に言う。金子は微妙に青くなり海老澤を見た。海老澤は緊張しながら黒澤に聞いた。

「あと、手伝える事は？」

「私達のバレーのプレーを評価して欲しいの。」黒澤はニコニコしながら言う。その言葉にサッカー部の館と大塚が不満げな声を出した。

「じゃ、俺達は見てるだけか？」

「やってらんねーよ。」

「何か言った？」黒澤はフッフと笑いながら言う。目が笑っていないし、口調が冷たくなった。

「喜んで見学します。」館と大塚が声を揃える。やれやれと吉田が首をふる。

「ありがとう。実はクラスマッチのための選手選びなのよ。小林君に相談したら、固定メンバーをまず決めて、交代選手を出す方が良いつて言うから。まずはみんなでその選考をするために、体育を自由にしてもらったんだから。」黒澤は真面目な雰囲気になった。

吉田が紙をもう一度よく見る。後ろから赤松と秋山がのぞきこむ。

「なんか、字がぶれてないか？」

「まるで何かに怯えたかのように……」3人はため息をついた。

そうこうしているうちにネットが張られる。

「張れたぜー」春日が言うと、女子は片側のコート側に集まる。「さあ、大高。サーブして。」そう言ったのはテニス部の成井だった。

大高は、はあ。とやっぱりな、という感じでため息をついた。

大高は中学生の時はバレー部員だったのだ。同じ中学出身の成井はよく分かっている。

「手加減したら、酷いわよ。」成井が大高に言った。大高はハイと言った。

女子の考えた選考方法は下図を参照。

|   |   |   |
|---|---|---|
| ? | ? | ? |
| ? | ? | ? |
| ? | ? | ? |

コート後ろ側

大高が？の選手に打ち込み、3回で返す。それが終わると、？の選手が抜け、？に新たな選手が入る。？の選手は？へ。？の選手は？へ。？の選手は？へ。？の選手は？へ。？の選手は？へ移動し循環する。

一方男子には女子の名簿が配られ、項目ごとに10段階評価するらしい。ちなみに基準は黒澤のプレーらしい。

項目は、レシーブ、トス、スパイクとかはもちろん、滑り込みとか、フラインプレーとか、足技とかもある。

「じゃ、始めるよ。」大高が言う。

「さあーーーー来ーーーーーい!!!!」叫んだ。しかも相当な大音声で。何人かの男子が耳をふさぎ、聴覚が敏感なものは卒倒する。大高はフラフラしてたが、それでも、なんとかサーブする。吹奏楽部の田中がレシーブし、山口がトスし、黒澤はバシンと打つ。

「ぬおっつ!!」大高はスパイクをすんでの所で避ける。ボールはコートの外に落ちたが、際どく良いところをついた。

時間が経つにつれ、体育館には耳を塞ぐ男子と物陰に隠れる男子がいた。それはまだいい方で、気絶しているものが大多数だ。

ステージの上では、淡々としている吉田、落ち着いている鈴木、ニヤニヤしている小林しかない。金子と海老澤は卒倒した大高の代わりにサーブしている。

惨かった。

スパイクがまともに飛んだのは黒澤ぐらいで、他の女子は明後日の方向に神速で打ち込むのだ。

頭に当たろうが、顔面に当たろうが、腹に当たろうが、気絶してしまう。

しかも打つ瞬間、

「うおりややややあああああああ!!!!」とか、奇声を発するのだ。真剣なのは良いことだ。しかし、全員が美少女と言っても過言ではないG組女子の面子はあっさり壊れた。

15分後……

「ふう、どう集計できた？」黒澤は汗をタオルで拭きながら聞く。

「はい。今計算する。」小林が鈴木と吉田の書類と自分のを見ながら数え始めた。

「クラスマッチは男子はもう練習してるの？」G組一の美少女、山口結香が鈴木に聞いた。

「いや、それどころか誰が出るかすら決めてない。」鈴木は肩を自分で揉んでいる。

「早めに始めないと……」鈴木がポツリと呟いた。  
その時、もの静かな声がした。

「鈴木君、吉田君、小林君！」最後ははっきり言った。

鈴木と山口は声のした方向を向き、吉田は体育の時間にも関わらず、持ち込んでいた本から顔を上げ、小林も名簿の集計を中断する。

「あの、始業式の時、私のせいで迷惑かけて……ごめんなさい！」そう言ったのは今日久しぶりに登校した蛭原である。

「いや……えっと……体を大事にしてね。」1年の時、蛭原と同じB組出身の鈴木が言った。吉田は頭を下げて、読書に戻る。小林は手を上げ、集計に戻る。

蛭原は3人を最後に見た後、海老澤と金子の元へと向かう。

「知り合い？」吉田が鈴木に聞いた。

「まあ、1年の時同じクラスだった。何だ、興味あり？」

「なわけないだろ。」鈴木の問いに答えたのは小林である。

「ふっ、どっちにしる諦めた方が良い。彼氏持ちだ。」鈴木は立ち上がって、他の生徒の元に向かう。　「よしっ、終了……」

「小林が言っと、黒澤がやって来た。

「どれどれ、見せて。」黒澤が言っと、小林が紙を渡した。

スタメン……

（但し、小林はバレーの知識が並みでしかないので、先程の表で示す。）

先頭がスタメン起用である。

|     |          |
|-----|----------|
| ?   | 丸山、源     |
| ?   | 古川、田中、和知 |
| ?   | 山口、綿引    |
| ?   | 黒澤、杉川    |
| ?   | 成井、石塚    |
| ?   | 皆川、清水    |
| リベロ | 蛸原、藤田    |

抗議を覚悟していた小林だが、女子達は結果を見ても、残念そうな顔をする者はいたが、文句は言わなかった。

授業終了の鐘が鳴る。

すると、女子は全員で円陣を組み、

「優勝するぞー！」との黒澤の掛け声と共に「オーッ」と言った。

男子達は思わず拍手し、体育館を後にした。

3 時間目の後は昼休みである。

女子はさつきまでの気迫はどこへやら、「一緒にお昼食べようー。」とか「屋上で食べない?」とか急に女子らしい会話が増えた。

小林は購買に出かけ、海老澤と金子は疲労からか眠そうで、箸が止まっている。

鈴木と吉田は早弁をしているので、あつと言つ間に食い終わった。

吉田が教室から出て行くと小柄な男子が待っていた。

「行きますか。」

「ああ。」

二人は階段を降りる。小柄な男子の名前は後藤謙介といい、大富豪同好会の書記長であり、吉田の副官の一人である。万能という単語がぴったりで、1年の時に同じクラスだった。そして、ケンカで負けそうな所を助太刀したので、以来、吉田の副官となった。

ちなみに後藤は彼女持ちである。んが、何人もの彼女を渡り歩いている。告白される事が多く、受け入れては斬っているのである。最も大半は他校生からであり、M 高生は誰も知らない。本人が言ったので、吉田も知り得たのだ。

本人曰く、自分に合う人を探している、であり、決してプレイボーイではない。

「岩本さんが何か吉田君の悪口をグダグダ言っていましたよ。何かしたんですか?」 「何にも。どんな悪口?」 吉田が聞いた。

「人でなしとか、冷酷とか。」

「手厳しいね。鈍感とか言ってなかった？ライトノベルなんかで女子怒るときには必ず出てくる言葉さ。」

「吉田君は一体岩本さんに何を期待してるんです？ライトノベルの主人公は確かに優柔不断で鈍感で、成績、運動はダメ。唯一の取り柄が優しさ、ですけどね。吉田君の場合は唯一の取り柄であるはずの優しさが最もないかと。」 「ごつつあんよく知ってんねてか、あんな絵に描いた男子がモテるかね？」吉田が言う。

「モテやしませんね。第一……………岩本さんと言うより大野くんに失礼でしょう。」後藤はやや躊躇しながら言った。

「だな……………」吉田はそう言ったきり黙ってしまった。

\*\*\*\*\*

2007年の12月の事だった。

大野正貴は大富豪同好会の会員であった。体格の良さから、依頼者の護衛などもしていた。

12月のその日、吉田と後藤が棋道部の活動が終わり、6時からは大富豪同好会の活動をしている時に、依頼者が来た。

それが大野自身であった。

大野はいつになく焦って入ってきた。そして、こう叫んだものだ。

「頼む！！怜衣を、救ってくれ！！！」と。

吉田と後藤が事情を聞くと、大野の彼女である岩本怜衣が交通事故にあっただけらしい。

両親、弟共々である。

そこからは、岩本家のへりに乗り、病院に向かいながら聞いた。  
「母親と弟さんはもう息を引き取ってしまったらしい。だが、父親と怜衣はまだ生きている。でも時間の問題だと……………大量出血があちらこちらにあるらしい。」

へりは1分で病院に着いた。元々位置的にM高から病院が見えるのである。歩いて10分。しかし今は一刻を争う。

病院内を駆けながら、尚も言う。

「輸血が必要だが、誰もいないんだ。父親の財閥に人がいるはずなのに……………」

「頂点に君臨してんだろ。なら、没落したら良い気味と思うやつがほとんどさ。」吉田は言った。

「家の中のお手伝いさん達にも、いなかった。」大野が言うと、病室にたどり着いた。

病室に入る。途端、死臭と血の臭いが充満した。「この方達ですか？」それまで父親と岩本をみていた初老の男性が言った。格好からすぐに執事と分かった。

「はい。ドクター!!」

大野が医者と呼ぶと、医者は早口で話した。

「この方達の血液は極めて珍種です。娘さんは、血液型キメラ、父親はAB型のRh-です。」

「「ほう。」」

後藤はAB型のRh-である。Rh-は200人に一人程である。AB型となれば、稀だ。

吉田はA型とB型の血液型キメラである。血液型キメラとは、A型が98%、B型が2%といった具合の血液型が混同したもので

ある。

O型を輸血すれば良いように思えるが、微妙に偏った割合のため、どちらかが凝固するらしい。

岩本怜衣はA型とB型の血液型キメラだった。

70万に一人、と言われる血液型キメラ。

もはや、悩んでいる暇はなかった。

「ただ、大量出血を押さえるまでの時間を稼げばいいのです。二人の血を全て取るわけではありません。協力して下さい……………」

吉田と後藤は了承した。

結果、二人は一命をとりとめた。しかし後藤と吉田は、1週間の入院を義務付けられた。

それ以外は丸く収まった。

かに見えた。

入院4日後、患者達は大野が死んだ事を聞かされた。

大野は岩本達が助かった次の日、母と弟の命を奪った飲酒運転の犯人を監視カメラから調べ始め、ついに見つけた昨日、復讐を果たした。しかし、良心の呵責に耐えられず、自死したのだ。

吉田と後藤は信じていなかった。しかし葬儀で、大野の体を見、心臓に手を置いた時、現実を受け止めるしかなかった。

\*\*\*\*\*

「岩本さんに冷たくしてはダメですよ。吉田君に恩返しするために、自分が家族の代わりになろうとしてるんですから。」後藤が言った。

「わかりづら………ツンデレとは違うし………」

「大野が死んだ時、岩本さんも自殺を謀りましたよね。」後藤

が暗く言った。

「僕が岩本さんに冷たくすると、また自殺を謀ると？」

「吉田君と違ってタフではありませんからね。傷つきやすいですし、もう既に心に深い傷を負ってますから。」 「……………」

「さ、優しくですよ。」 後藤と吉田はいつの間にか部屋に着いていた。

中では岩本がiPodで音楽を聞いていた。それに何だか新人がいる。吉田はその女子の名前を知らない。

後藤がドアを閉めると、その女子が気付き、岩本を叩く。岩本もこちらを向くと、イヤホンを耳から外した。

「この人は？」 吉田は岩本に聞いた。

「三次志穂さん。私の体験したこと証人だから来てもらった。」

「はて？では、こちらの方は岩本さんの家に泊まったんですか？」 吉田は未だにその女子を直視しない。

「違うよ。学校で見た時一緒だったんだ。」 岩本が三次を見た。後藤が助け船を出す。

「三次さんもバド部で知り合いで、悩みがあるので相談したいと。内容はまだ知りません。」 後藤が言いながら、席に着いた。吉田と後藤ペア、岩本と三次ペアが向かい合う形になる。 「えつと…………… 三次志穂です…………… あまり人には話せない事なので……………」

でも、あなた達は信じてくれると聞いたんで……………」 顔を赤らめ、照れているのか？

下を向いたまま敬語で話す。雰囲気誰かに似ているが思い出せなかった。

「分かりました。しかし、誰から聞きました？」 吉田が言う。

「怜衣ちゃんから…………… 同じB組になったんで……………」 「三次がようやく顔を上げた。」

吉田は表情を変えないが、三次が相当な美少女であることに気

付いた。しかも、こうも大人しめだと、男子は一発で参ってしまうような気配がある。

「じゃあ、内容を詳しく説明して下さい。」後藤が言う。

「はい。始めに言いますけど、作り話ではないので……………信じして下さい。」

\*\*\*\*\*

つい、昨日のこと。それは、新学期早々やってきた。実はその体験は過去に3度も経験していた。

1度は、親友の松本と一緒にだった。残りの2度は自分だけだった。

バド部の活動が終わり、女子部の部室の施錠を週一で担当する役割があつた。

体育館の部活はバド部が最後まで残る。顧問の先生は世界史の教師でもあるので、来る日來ない日があつた。

2008年の1月下旬、夕方7時に部活はお開きになった。

しかし、部室の施錠を任されているのに、なかなか着替えずに駄弁る後輩が多く、イライラするも叱る勇気もなく、結局、自分が体育館部室の施錠をしたのは、8時を回っていた。体育館に誰も居なくなつたことを確認して、軽く掃除し、電気を消す。

三次は一連の動作を済ますと、非常口を示す緑色のランプと消火器の赤色ランプだけになった体育館内を小走りで移動する。急いで出て、体験館に南京錠を施す。真っ暗な校庭。真っ暗な教室棟。真っ暗な……………いや1箇所だけ明かりのついた文化部室棟。

三次は急いで帰った。

校門がようやく見えてきた時、三次は自分の足音以外の足音が聞こえている事に気がついた。砂の上で足を引きずるような音がした。オドオドしながら見回す。しかし、誰もいない。

怖くなり校門まで走り駅までひたすら走った。明るい場所に出たから辺りを見回したが誰もいない。

三次はひたすら急いで帰った。

\*\*\*\*\*

「なるほど、なるほど。」吉田は珍しく感心したようだ。

「でも、岩本さんが一緒だったのはいつですか？昨日？」後藤が口を挟む。

「はい。でも昨日は……………今までとは違っただです……………」三次が僅かに震える。後藤が先を促した。

\*\*\*\*\*

昨日は、新入部員のために張り切って部活をして疲れたが、6時に終わり施設役はバスケット部に回すことが出来た。

体育館を出たのは、6時10分。4月なので日は沈んだものの、明るかった。

三次は校庭で岩本に会った。

「怜衣ちゃんじゃない。部活今、終わったところ？」

「うん。一人？」岩本の問いに三次が肯定すると岩本は少し安堵した表情になった。

「ね、駅南のマック寄ってかない？お腹空いちゃった。」岩本が誘う。三次は今日は遅くなる事を親に伝えていた。差し支えもないので、行くことにした。

マクドから出てきた二人は真っ直ぐ駅に向かった。だが、しかし。急に例えようのない、悪寒が二人を襲った。人通りが急になくなり、車も通らなくなり、店の活気が急に消え、沈黙が支配していた。

その中、

コツッ、コツッ、コツッ……………

足音が近づいてきた。

二人が振り向くと、フードを被り、背の低い影が歩いてきた。

「変出者??やだ……………気持ち悪い……………」怯える三次の腕を岩本が引っ張った。

「志穂!!!!走るよ!早く!!!!」

「うん……………」階段をかけ上がる。改札にたどり着き、もう一度振り向くと誰もいなかった。

「何なのあれ?誰か知らないけど、気持ち悪っっ!!」岩本が激怒する。

「あっ、ちようどいい電車ある。悪いけどお先していい?」岩

本が三次をのぞき込む。

「えっ！！うん、大丈夫だよ……………じゃあね。」

「うん、バイバイ。」岩本が手を振り、6番線に消える。

三次は手を降ろし、少し起伏のある左胸に手を置く。

妙な胸騒ぎがしていた。

地元の駅で降りると、三次は早足で帰った。電灯は多い方でもなかなか通っていて、女性にとって危険な道ではないが、早く家に帰れと何かが警告していた。

家がある道に入る十字路に来たとき、それは現れた。

真っ正面から信じられない速さで三次に迫ってきたフードの間だつ。

「イヤああああアアアアアアアあああああああ！！！！！！」三次の絶叫が響いた。

\*\*\*\*\*

「それで気付いたら、家の中で、お母さんに寝かされていて……  
……詳しく話したら、日があるうちに帰って来なさいと……  
……」三次が言い終わった。

「それじゃ、駄目なんですか？」吉田が言った。  
「ダメです！！！！５月に入るとすぐ、総体の予選があるんです！！！！部活だけじゃなく、クラスマッチも！！！！選手として、練習しないわけには行かないんです！！！！」三次が吉田を見て真剣に言った。

吉田は珍しく気圧されたようで、後藤に「そういうもん？」と聞いて、後藤が「そういうもんです。」と言った。

「なんか、霊的な物は感じないんですがね。ただのストーカーかも知れません。」吉田が言った。

「だとしたら、ヤバいじゃない。もしかしたら、殺されるかも……………」岩本が言った。　「私、どうしたら良いでしょう？」三次が言った。

「そうですね。そいつの正体をちよつと聞きたいんですが……………身長はどのくらい？」吉田が言うと、三次は立ち上がり、自分の頭より、少し高い位置を示した。

「顔は見えました？」

「全然……………」

「ですよーー見えてたら警察に届け出ですよ。」

吉田はしばしば考えていたが、やがて言った。

「では、護衛を付けましょう。ごつつあん、よろ。」

「私は、ダメですよ。もうすでに護衛役は3人いるんですよ？」

「！」

「後藤……………」

「くつ……………駄目なものはダメです。三次さん、吉田君が護衛でも構いませんよね？」

「えっ？あ、ハイ。大丈夫です。私に選択肢は

……………」三次が赤い顔をしながら言う。

「まあ、三次さんが良いなら僕が付きますよ。」

「ありがとうございます。あの……………代金は護衛の度にですか？」

「ほう。総体が終わるまでに事件を解決できなかったとしたら、うん。三次さんに付きつきりでしょう。でもそれは、事件を解決できない自分たちの責任ですから。電車賃だけ払ってくれば良いですよ。」吉田は笑いはしないが、目の冷たさがなくなり、真面目な表情になった。

「ありがとうございます。何から何まで……………」三次はペコペコする。岩本が鼻を鳴らした。

「やたらと優しいわね。ひよつとして貴司……志穂に惚れたの？」岩本がむくれた。

「ちよつと怜衣ちゃん……………」

「そうですね。岩本さんよりは遥かに人格がありそうです。」

吉田が淡々と言った。「なっ?! どういう意味よそれ!」

「言っただまの意味ですが? 理解出来ないとは……………可哀想に……………」吉田がハアとため息をつく。

「むかつく……………!!」岩本がぶちきれてしまい、三次が宥め、後藤が苦笑していた。

チャイムが鳴り、一同は解散となった。

## CHAPTER 4

### 野球練習

小林達也はあっさりと、クラスマッチの男子リーダーになった。

早速、野球チームのスタメンを決めるのに、放課後20分でいいから残るよう指示した。

男子は意外な事に聞き分けがよく、承諾したので、全員がそろっていた。

「じゃ、まず出たい人挙手！！ホラホラ！！」小林は無意味な手の動作をしながら煽り立てた。

が、手を挙げたのは小林を含む4人。  
サッカー部の館と軟式野球部の小橋と鈴木。

しかし、小林はある程度は予測していたらしい。淡々と他の3人に、聞いた。

「ようし、隆徳。軟式野球部ではどこのポジションだ？」

「俺はセカンド。小橋はサード。」鈴木が淡々と答える。

「じゃ、決まり。館はどこのポジション？」

「そうだなあ。隆徳。俺はどこ守るのが良い？」館は鈴木を見て言った。

「館は肩ある？」鈴木が館のでかい体を見ながら言った。

「あると思う。」

「そうだな、サッカー部で足が早いなら外野だな。肩強いならライトかな。」鈴木がそう言うのと小林が首を振る。

「ライトは俺がやる。肩も足も俺が上だから。」小林が言うのと館は頷く。酷く傲慢に聞こえるが、事実を第三者の立場から言っている。

「うん、じゃあ……………どっちだと思う？」鈴木はそう言いながら小橋を見た。

「センターかね？レフトはある程度打球予測できっからな。」小橋が言うと、鈴木は頷いた。

「じゃ、決まりだ。館はセンター。あと5人誰かいらないの？」

小林が黒板の前に立ち、チョークを弄びながら言う。  
すると、合唱部の堀江が手を挙げた。

「あのさ、俺中学のとき、レフトやってたんだけど、誰もいないなら俺やる。」小柄で足が速い。肩は普通より上と言う。

「中学のとき野球部だったのか？」小林が聞くと堀江が頷いた。  
「中学のとき野球部か……………となると園部君どうよ？」小林がそう言うと、読者をしていた無口な男子、園部悟が顔を上げた。

「やってみない？」ちなみに小林と園部は1年C組で既に知り合いである。

「うー……………」園部が悩み始めた。そこに、C組出身のサッカー部の大塚が発言する。

「園部君、中学のときピッチャーだったらしい。」

「そうさ。」園部が言った。

「ほう、的確じゃないか。ちょうど良い……………なんキロぐらい出る？」小林が言うと、園部は顔を歪めた。

「120位だな。最近測ってないし、引退してから1年半以上経ってる。うまくいかないと思うけど。」園部が言うと、堀江が口を出す。

「120って中学で？」

「ああ。」

「それなら、結構速いほうだな。球種は？」

「ええと、ストレート、スライダー、カーブ、フォーク、シュートかな？」園部が言うと、鈴木が目を丸くする。

「シュート投げられたのかよ！完璧に先発要員だな。」

小林が思い出したように言った。

「クラスマッチってDH制？」

「違う。ピッチャーにも打撃は参加させるよ。ルールにや書いてないけど、日本じゃそれが主流……特に高校野球レベルは。だから常識として、書いてないだけさ。委員会ですう言つてた。」

クラスマッチ委員の太高が言う。

「ま、打撃は並みでいいんだよ？参加してくれるよな？」小林が言うと、園部が頷いた。

「まあ………できる限りはやるから下手でも起こるなよ。」

「分かつてるって。」小林が嬉しうに言う。      スパスパ決まるので大變機嫌が良い。

「他にピッチャーはいるよな？中継ぎとか抑えとか？あと2人は先発要員が欲しいな。合計最低でも4人。さあ、誰かいらないか？誰か一役は必ずやるんだぜ。」小林は言つた。これもクラスマッチ委員会が決めたことだ。

「俺は何やりやいいと思う？」そう言つたのは白玉だ。小林は白玉の4段腹を見ながら言つた。

「白玉は決めてある。」

全員が意外そうに顔をあげる。クラスマッチ委員会は全員が役割を持つ事を定めていた。

「監督だ！」小林が叫ぶ。

「ちょ。俺は細かいルールすら怪しいんだぞ。むりだつつつの。」

「形だけに決まつてんだろ。俺達が相談して決めたこと………

…例えば、代走とか代打を審判につたえりやいい。」小林はクラスメイトに対するセリフとは思えない事を言う。

「ただのパシリじゃん。」

「パシリは監督より上の地位だ。」小林はそう言うところクラスメイトに向き直る。

「あ、そうそう………コーチ4人いるんだよ。ピッチングコーチと打撃コーチと1塁コーチと3塁コーチ。これはそう単純じ

やないよな？」 小林が聞くと鈴木が答えた。

「3塁コーチは目利きじゃないとな。2塁から本塁に行くか行かないかの判断はモロにそうだ。1塁コーチは盗塁の指示とかも……だから、目が良くて状況判断ができるやつだ。誰か？」 鈴木が言つと、新聞部の秋山が手を上げた。

「俺、結構目良いからやらして。あんまり選手としては働けないから。」 体格のいい秋山が言う。

「視力なら1.8以上あるから。俺3塁コーチにさして。」 秋山の片棒の赤松が言う。

「うむ。この二人なら適任だな。」 小林が言つと、クラス全体が頷いた。この二人の頭のよさは知れてるし、何より状況判断などがテストの時間配分などに反映されている。

続いてピッチングコーチに入江、打撃コーチに飯島が任命された。

「さて、選手に戻るが……ファースト、さあ誰だ？」 小林が言つと、堀江が補足する。

「バントとか痛烈な当たりをとれるやつが良いな。あと、難球でも捕球すること。」

クラスが沈黙する。

30秒ほど続いた沈黙を破ったものがいた。

「……じゃ、俺がやる。」

と。

5人が一斉に手をあげていた。

ハンドボール部の大高、テニス部の西野、春日、細谷。そして、バスケ部の海老澤。

5人は一斉に譲合いを始める。どれもこれも、運動神経は普通なので、任せて小林は次に移る。

「さて、次にキャッチャーだが………一番負担だぞ。さあ、誰がやる？」小林の問いに小橋が手を上げた。

「岩崎君が空いてるよ。彼はキャッチャーだったと思う。」

「そういえば！岩崎がいたんだな。上手いか？」

「それはもう。盗塁は阻止するし、後ろにはそらさない。」

「しかし、帰国は間に合うのか？」小林が言う。

「……………いつ帰ってくるんだっけ？」小橋は鈴木を振り返る。

「あーっつと、5月1日に帰って来るんだよな、それが。」

「4月29日の第1Rと第2Rが駄目じゃん。替わりが必要だな。誰かキャッチャーやりたい人？」小林が全員を向くが、手を挙げる者はいない。

「じゃ、先にショート決めるか。貴司、やれ。」小林が断言すると、本を読んでいた吉田はあきれ顔になった。

「何だつて最後にしたんだよ。内野だろうが。」

「お前が断った時、人員不足のせいにするためだ。」小林は悪びれる様子は微塵もない。

「ちよつと待った。右打者が多いんだから、ショートは負担だぞ。大丈夫か？」小橋が遠慮なく言う。

「大丈夫だ！！！」海老澤がいきなり横から硬式テニスボールを投げた。

「何の真似だ！！」吉田はそう言いながら、顔に当たる寸前でキャッチする。

「な。こいつの中学時代の卓球部で培われた反射神経は伊達じゃないぜ。これで文句な痛え！！！」小林の唇に吉田の席からテニスボールが飛んできて当たった。小林は吉田を睨むが吉田は動じず、

「送球も一応自信が。」

「こにやる。まあ、いい。貴司は小学校時代は野球クラブだったんだよな。」小林の問いに、吉田が曖昧に頷く。

「小学校がありなら、俺がキャッチャーやります。」そう言いながら、バド部の山田が手を上げた。

「ほう。それは助かる。じゃ決まりな。」

そう言って小林はファーストのポジションを争う連中を見たが、すぐに連中の一人が言った。

「俺になりましたーじゃんけんで。」大高が嬉しそうに言った。

「じゃ、これで決まりな……ってまだ帰んな！全員に役割があるって言っただろ。代打とかも決めならんのよ。」小林はそう言い、一人ずつ足の速さや肩の強さを聞いて言った。 G組連中はイライラしながらも応対した。

「じゃあ、三次さん。帰りは気をつけて下さいよ。あと棋道部室をノックするときは、4回叩いて下さいよ。それ以外は敵と判断します。棋道部室は部室棟2階です。夜の7時まで活動してるのは棋道部くらいですから、明かりですぐに分かりますよ。一応看板もあります。じゃ、私は仕事がありますので。」後藤は一方的に話すと帰ってしまった。

「はあ……………」三次はため息をついた。新学期早々、色々な騒動を起こしてしまっている。三次は必要以上に自分を罵倒した。

体育館につくと、既に何名かが練習していた。1年生がもう見学に来ている。

「あ、志穂。ネット張るの手伝ってー」ネットを運びながら蛭原美樹が言った。

「分かった。」三次は元々ジャージに着替えていたので、部室に鞆を置くなり、蛭原の元に走って手伝った。

ネットが張れたので、全体練習が始まるまで、蛭原と待つ。

「はあ……………」始めて数分しか絶っていないのに、三次はため息をついた。蛭原が怪訝な顔をする。

何も両者が下手な訳でもないのに、ため息をつく理由がない。

「どうしたの？何か調子悪い？」蛭原が言った。

「どうして？そう見える？」三次は少し赤くなった。

「見えるよ。ため息ばかりついてる。まさか……………きついのか？（小声で）」

「違います！きつかったら休みます！！何考えてんの！」三次は思わず大声を出した。

「だって私の言うこと曖昧にしか聞いてないでしょ。心配するのは当然じゃないの？」蛭原も少し怒ったようで、目が細くなっていた。三次は恥じ入った表情になる。

「ごめん美樹。大したことじゃないよ。気にしないで。」三次

は急いで謝った。ところが蛭原はますます声を尖らせる。

「大したことだから、ため息ばかりついてんでしょ。悩み事？」蛭原はいつになく厳しい。普段ね蛭原は快活だが、うるさくは無く、試合に負けて悔しさと自分に対する情けなさで泣いてしまうくらい、真っ直ぐな人間だ。そして何より優しく、笑顔の似合う美少女という感じだった。

「そうなんだけどね。もう解決するから。」三次が言った。蛭原が少し和らぐ。

「ストーカーとか？」蛭原が言った途端、三次は目を丸くした。

「何で知ってるの？」

「え、そうなの？」蛭原はキョトンとしている。

「じゃあ、何でストーカーだと思うわけ？」三次が聞くと、蛭原は無言で顔を動かした。

その先には男子バド部の3年生がいた。

「あああ……………」三次は知っていた。

蛭原が弱味を握られて付き合わされている事を。

「最近、しつこくて。今週末もだし。」蛭原は無理に苦笑している。ちなみに、蛭原は三次にはちょっとしつこい先輩と付き合っていると言っていた。3年B組のその生徒は蛭原が見えることに気が付くと、笑いを浮かべた。

どこか、軽い薄いにやけた笑い方だった。

蛭原は会釈し、下を向いた。何やら、ぶつぶつ言っていた。

やがて顔をあげる。

「志穂大丈夫？警察に相談したら？」

「うーん、でも怜衣ちゃんがストーカー被害で警察に相談したら、危害を加えられない限り心配はないって言われて相手にされなかったって。だから大富豪同好会に解決してもらったって。私もそうする。」三次が言っていると蛭原はキョトンとする。

「そんな同好会あったっけ？」

「知らないよね。私も昨日怜衣ちゃんと電話してて知ったし。」

「大丈夫？なんか怪しくない？」

「大丈夫だって。知り合い多いし、昨日行ったら、何だかんだで頼りになりそう。今日も部活が終わったら行くの。」三次が言っていると、蛭原はしばし黙った。

「じゃあ、私も一緒に行く。大勢の方がいいでしょ。あ、舞も誘って。」

舞と言っのは、松本のことである。

「でも……………良いの？遅くなるよ？」

「大丈夫。じゃ、決まりだね。」蛭原が頷いた。

\*\*\*\*\*

「はあ、はあ。じゃ、これで、……文句、……ないな。」その頃、2年G組教室では、打順と全員のポジション&役割が決まり、黒板に書かれていた。

何故か息を切らした小林が言うと、これまた息を切らした群衆が頷き、賛成を示す。

小林が黒板を………かなり汚れた………例えば、黒板消しをいくつも書けたように白くなったり、チョークの赤とは明らかに違う赤色がついてたり………指した。

#### 打順

|    |        |
|----|--------|
| 1番 | 小林     |
| 2番 | 鈴木     |
| 3番 | 吉田     |
| 4番 | 岩崎（全員） |
| 5番 | 館      |
| 6番 | 小橋     |
| 7番 | 堀江     |
| 8番 | 大高     |
| 9番 | 先発投手   |

（全員）というのは、岩崎が帰国していない試合でスタメン以外のバッターをローテーションすることである。

#### 守備位置

先発投手……園部、高塩、大塚  
中継ぎ投手……伊藤、細谷  
抑え投手……西野

キャッチャー……岩崎、山田  
ファースト……大高、春日  
セカンド……鈴木、内山  
ショート……吉田、金子  
サード……小橋、海老澤  
ライト……小林、松下  
センター……館、浅藤  
レフト……堀江、入江

1塁コーチ……秋山  
3塁コーチ……赤松  
打撃コーチ……飯島  
投手コーチ……入江（兼）  
監督……白玉

代走、代打はスタメン以外の選手全員。

「じゃあ、大高。これ提出してくれ。お疲れー」小林が言っても、返事を返すものはいない。

当初は20分の予定が、1時間以上過ぎていた。

長かった話し合いが終わり、海老澤が急いで昇降口に向かうため、階段に通ずる2階ホールを走り抜けようとすると、

「弘毅……………」と静かな声が呼び止めた。

海老澤が振り向くと、小柄で物静かそうな美少女、松本が立っていた。

「ん？！舞？何で？何か約束してたっけ？！」海老澤が慌てる。松本は首を振りながら置いてある椅子から立ち上がった。

「別に……………待ちくたびれたけどね。何か『いつまで待たせんだア！！』とか『今日こそけりをつけてやる！！』』『望むところだ、貴司イ！！』とか聞こえたけど？何してたの？」松本の声は静かだが苛立っている事がわかり、海老澤は急いで弁解する。

「ごめん、ごめん。クラスマッチの話し合いでもめて……………こんな時間になりました。」

「はあ。全く、メールぐらいするんだった。私はただ弘毅にこれを渡しに來ただけ。」松本は海老澤に封筒を渡した。

「何、これ？」

「時間がないから家で見て。そしたらメールして。待つてるから。」松本は言うが早いかサツと行ってしまった。海老澤は訳が分からず、封筒を鞆にしまった。「わざわざ待っててくれたのにな。悪いことしたな。」海老澤が呟くと、金子が後からやって來た。

「そうだよ。せつかくのガールフレンドを失うよ。」金子が言うと、海老澤は鼻を鳴らした。

「フツ、そういうお前はとうなんだ。そろそろ彼女の一人でも作ったらどうだ？」

「は。工作じゃねえんだから。自由に作れるなら作ってるよ。」

「あ、そ。早くしないと、顧問がうるせえぞ。」海老澤はため息をついて、時計を見る。

しばらく歩き、体育館にまもなく着くと言ったとき、海老澤がふと言った。

「そついや、お前全然話し合いに参加しなかったな。クラスマッチ興味なし？」海老澤の問いに

金子は気まずそうに答えた。

「クラスマッチは興味ありだよ。賞金までついてるのなんて、そうそうないから。10万だよ、10万。」

「クラスでだろ。それは学園祭で消えるわ。」

「木材に変わるだけだ。」

「うまいこと言ったつもりか？そこで大賞なら50万。」

「で、10月の歩く会で全員完走なら一人10万。のべ410万円！！！！」

話が勝手に進んでしまったので説明！

まず、クラスマッチでは大高が持ってきた説明書の通り、優勝チームにはクラスで10万、準優勝で3万、3位で1万である。各種目で配られるので、最高額は30万。3位決定戦はあるかないかは当日に決まる。

で、それらは普通学園祭費用にまわし、大賞を狙う。大賞なら50万、準大賞で10万。有志大賞（主に部活）で3万。

で、普通は歩く会にまわる。『歩く会』の説明はその時が来たら説明します。

金子の言う通り、『歩く会』で全員が完走ならぬ、完歩ができたら一人10万。但し、M高の60年間の長い『歩く会』でクラス全員が完歩できた例はない。

ちなみに、当然、賞金は生徒がだしあつて集めたものである。  
負ければ一方的に損をします。

閑話休題。

「まあ、どっちにしろ……俺、あんま野球分かんないだよな。」

「ほう。ルールくらいは分かる？」

「基本的なのは。込み入ったのは分からない。」

「それは俺もそうだ。完璧な把握してるのは野球経験者くらいでしょ。」海老澤が言つと、金子は少し安心したようだった。二人はゆっくりと体育館に入つていった。

「軟式野球部」

小橋と鈴木は練習には遅れたが、軟式野球部は規律は緩いので誰も責めなかった。休むときでさえ、別に言わなくていいのである。来たい時に来て、帰りたい時に帰る。

現に今も、キャッチボールをしてる人間が何人かいるだけである。

小橋と鈴木はサツサと準備運動を終わらせ、キャッチボールをする。

10分もすると、二人は30メートル位離れて遠投しだした。

しかし、球は一度もバウンドせず相手のグラブに入る。送球は一定で無いものの、必ず、歩いて動いて取れる範囲に収まっている。本来なら外野手をするところだが、内野手になりうる、選手がおらず、泣く泣く二人はセカンドとサードを守っていた。6時を回ると、キャプテンはこれ以上やつても来ないと判断し、更には4月の夕闇が後押しして、お開きになった。軟式野球部員15人のうち、

今日来たのは、6人であつた。

ー女子バド部ー

「お疲れ様でしたー」

定型句ともいえる言葉を発し、片付けを始める部員たち。部長である三次は自ら率先して、片付けをするので、同級生からも先輩からも高く評価されていた。

「舞、言つてなかったんだけど。」 蛭原は一緒にボールを運んでいる女子に言った。

松本は何？と言いながらも、こちらを向かない。

「志穂が最後まで体育館に残つて施錠したり、戸締まりしたり掃除したりするのは知ってるよね？」

「うん。」

「夜遅くなつてから、帰るでしょ。」

「うん。」

「それで、昨日ストーカー被害にあつたんだつて。」 蛭原は躊躇いなく言った。

「え？」

「それでこれから相談に行くんだけど、一緒に来てくれない？大勢の方が安全でしょ。」

「どういうこと？ストーカー？警察に言った？」 松本が久々に焦り出した。同じ女子として……………心配なのか？

「何事もなかったけど。警察は何か暴行被害とかがないと捜査してくれないの。だから違う所に相談する。」

「違う所？どこそれ？」 松本が咳き込んで聞いた。

「それが志穂しか知らないの。志穂は大丈夫って言っけど、心配だから……………」

「わかった。一緒に行く。」

「良かった。」 蛭原は安堵した笑みを浮かべた。

ちなみに、三次が部長になったのは3月からで、松本も蛭原も部長の仕事を見たことがなかった。

まず、部室に誰もいないかを確認し、戸締まりをして、施錠する。それから体育館の使用した部分をモップがけし、2階……………（正しくは4階。下2階には外の部活の部室がある。）のカーテンを開け、戸締まりをし、体育館の電気を全て消し、外側の南京錠をかけ、ようやく終わる。ちなみにたまにバスケット部にたまに代わってもらうが、今日は、軟式野球部と同様、人の集まりが悪く、途中で終わってしまった。と言うことは、金子と海老澤は無駄足だった訳だが……………それはさておき、7時になって、ようやく帰れる。3人なのでいつもよりは早い。

3人は隣接する文化部室棟に足を運ぶ。後藤に言われた通り2階に行くと、明かりがついているのは一ヶ所だけだった。

……たーだ必死にしーがみつーいてたーら、君が目の前にあーらわれたーーへい、ユー、こーのビッグマシーンにー乗って行けーよーーーおっっ……………

「……………」 3人は沈黙する。

何やら音楽が聞こえてくる。しかも結構な音量で。三次は意を

決してあるきだし、ドアを4回ノックした。

すると中から間奏に混じって「いいとこなのに……」と不満げな声がいし、音楽が止まる。

そして、ドアが開かれた。

「大富豪同きょう会によっこそ！」そう言って吉田がドアを開くと、3人が吉田を見返す。吉田は「かんじゃった……」と横を向き、苦い顔をする。

「三次さん。後ろの人は誰ですか？」吉田が真面目な顔になり、冷たい声になった。

「はい。私の友達のみ……」蛭原さんと松本さんです。「三次は吉田が理解できるよう答える。蛭原と松本は礼をしたが、吉田は冷たい目のままだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あの、どうかしました？」

沈黙に堪えられなくなり、三次は聞いた。

「……三次さん、この人達は来る予定ではなかったですよね？」

吉田の声は冷たい。威圧されながら三次は、はいと答える。

「誘ったんですか？」

「一緒に来てくれると言い出したので……」

「ほう。」吉田は後ろの二人を見る。しかしすぐに三次に視線を戻すと言った。

「この人達は信頼がおけるのですか？」

吉田の質問に蛭原が割って入る。

「私達は友達ですから。志穂がストーカー被害にあつたから、心配して一緒に相談するのがそんなに变？」

「……………君は何処かで見たとような……………」吉田は冷たい目のまま言う。蛭原は憤慨する。

「酷くない？貴方の隣の席ですけど？それに……………」蛭原は何故か少し赤くなり言った。

「貴方に始業式るとき、迷惑かけちゃって謝ったんですけど。もしかして許して……………もらえませんか？」蛭原は少々、たじろいだ。吉田はやおら言った。

「どうやら怪しい人ではなさそうですね。入って下さい。三次さん、松本さん、……………」蛭原さん。「ドアから身を引く。

「今の間は何ですか……………また忘れたとか？」

「……………まさか。」吉田がようやく冷たい目でなくなった。

「松本さん、ドアを閉めてください。」

「はい。」ドアの近場に松本がドアを閉めるのを見て、三次が聞いた。

「舞と知り合い何ですか？」

「名前を知ったのは今日が初めてです。でも何回か海老澤と一緒にいるのを見たことがあるので……………」

吉田の言葉に松本が赤くなった。

三人が吉田と向き合う形で座る。蛭原は辺りを見回して、感嘆する。

棋道部室はどの部室よりきれいで、床にはビニールシートが引いてあり、砂等がすぐに処理できるようになっていた。しかもビニールシートが何回も使える型である。

将棋盤と囲碁盤が分けて積まれ、駒の入った箱は、正方形になるよう更に大きな箱に敷き詰められていた。本は、将棋や囲碁の本、更には麻雀雑誌やライトノベルが……………特にライトノベルが……………うじゃうじゃと但し、きれいに本棚に敷き詰められていた。で、

壁には12枚の国旗が張られていた。

そして、片側の壁には賞状がたくさん貼り付けてあり、扉の内側には張り紙がしてあって、『人に厳しく、環境に優しく!』と書いてある。沈黙が訪れようとしていた時、吉田が聞いた。

「三次さん、今日はその二人も地元まで帰るのですか?」

「はい。二人とも同じ地区出身なので。」

三次が答えると、蛭原が言う。

「志穂をつけ狙う犯人はどうするつもりですか?」蛭原が聞くと吉田は何やら書類を書きながら言った。

「もう二度とそんなことができないようにするんじゃないんですか?」

「具体的には何をするんですか?」

「どんな犯人かに寄ります。」吉田が淡々と答える。今度は三次が聞く。

「じゃあ、例えば凄い極悪人だったりしたら……………」

「そんな奴は、ストーカーなんてみみっちい事はしませんよ。」

いつそ三次さんを拉致して暴行するなり、なんなり……………まあ、多分、三次さんの事が単に好きなんでしょう。エスカレートしてますがね。だから三次さん自身がそいつに『つけ回すな。今度やつたら警察だ。』と言えばそれで良いんですよ。」吉田が書類を半分ほど書き終える。「でも、知らないんですか? M市の警察は汚染されてるんですよ!」蛭原が言うと、吉田はシャーペンを取り落とした。慌てて拾うが、芯が折れてしまっている。

「なんで知ってるんですか?」吉田は顔をしかめて言った。蛭原を真つ正面に見ながら言うと、また蛭原は少し赤くなりながら言った。

「怜衣ちゃんから……………聞きました。」と言うと、吉田は感心したような、イライラしたような何とも奇妙な表情になった。

「それで……………わざわざ僕達の所に。」

「じゃあ、本当なんですな。」三次が言うと、吉田は頷いた。

「そうです。警察の連中は今や中国の秘密警察みたいなもので、賄賂をもらえば、見逃してしまう、捜査をしないのが常識になりつつ有ります。てか、なってます。」

「じゃあ、怜衣ちゃんが相談したのに、被害がないのに捜査できないなんて行っただのは……………」

「そう言えば岩本さんを追い回していた奴は、警察官の息子でしたね。」

「その犯人はどうしたんですか？」三次が聞いた。

「とりあえず、二度と立てなくなりました。岩本さんに謝るよ。う言つと、僕が岩本さんの恋人だと勘違いして、嫉妬と焦りから、包丁で殺そうとしたんで。逆にそれで筋を切っただけです。殺したりはしませんよ。」三次がぶるぶる震えながら言っただけ。

「警察にはつき出さないんですか？」

「こつちが逮捕されます。まあ、『チクつたら今度は命だよ。』

つて言つたら何も有りませんけど。よし、できた。三次さん、ここに指印を押してください。どの指でもいいんで。」吉田はそう言つて紙と赤いスタンプインクを渡した。　「はい。でも何に使うんですか？」

「記録を収めるだけです。」三次は人差し指をペタツとつける。

「……………」あの、貴司君？聞いて良いですか？」蛭原が言つと、吉田は紙を受け取りつつこちらを向いた。

「何で、名前を知ってるんですか？」

「名前では、ダメですか……………」？」

「……………」ハア。で何ですか？」

「ここは、どんなことでも解決してくれるんですか？」蛭原が真剣に聞くので、吉田は真面目な顔で返答する。

「最大1000円の料金、それ以下は基本的に必要経費だけですけど。何かお困りですか？」

「……………」いえ、ただ気になっただけです。」……………」

……………」そうですか……………」困った時はいつでもどうぞ。じゃ行きましょう。

「吉田は立ち上がると、ラジカセのコンセントを抜いた。

「さつきは何の曲を流してたんですか？」

「ポルノグラフィティの『ハネウマライダー』ですが。有名だと思いましたか………」三次の問いに、吉田は少し萎えたようだった。

三次、松本、蛭原が外に出て、吉田は施錠してから言った。

「これから、3人で帰って下さい。僕は後ろから見てますから。

「吉田が言っと、3人はえっという顔をした。

「そのすきにストーカーがやってきたらどうするんです？」蛭原が聞くと、吉田は面倒くさそうに、

「男子が側にいたら警戒して出てきませんよ。あくまで犯人を押さえ、二度としないことを誓わせるのが目的な訳ですから。」吉田が言っても、蛭原は不安そうだ。今度は松本が聞く。

「じゃあ、ストーカーが出たら、助けとか求めていいの？」

「はい。大声を出して、後ろに向かって走って下されば。ま、三次さんの話を聞く限りは犯人は単独ですから。そんなに不安になることはありません。あと、三次さん。向こうの駅で松本さん達と別れた後はいつも通り帰って下さい。僕はずっと後ろから追いますので。」端から見ればどちらがストーカーなのか分からないような結論を述べる吉田。それでも三次は分かりました、と頷いた。

「では、皆さん。出発してください。」吉田が言っと、3人は踵を返して帰路についた。

駅に向かいながら3人はしばらく任務を忘れ、楽しく話していた。15分ほどで駅に着き、定期券（どうでもいいことですが、S u i c a ではありません。まだできてません）を入れてから、3人は不安そうに振り向いた。

「いるんだよね……………」

「……………いると……………思う。」三次の疑念に蛭原は確証なく答える。

「……………」

「……………」

「……………」

3人はしばしば、辺りを見回す。男子学生やサラリーマンがじろじろ見ていたが、それは彼女達が美少女だからなのか、はたまた物凄く挙動不審に見えるからなのかは分からない。

3人はホームに降り立ち、電車を待つ。蛭原が後ろを気にしつつ、松本に聞いた。ホームには人があまりいない。多くの人間は東京につながるJ線を利用するので、ケーブルであるS線を利用するのは少数派だった。

「そういえば、どうして舞は今日遅れたの？」

「部活のこと？」松本が聞くと、蛭原が頷く。

「えっとね、G組の弘毅待ってたんだけど。話し合いが長引いたって言ってた。それで私もとばかり。」松本が言うと、三次は「もしや、という顔になる。」

「話し合いって、もしかしてクラスマッチについて？」

「分からないよ。おかしいなあ、今日は瑞穂（黒澤の名前）と一緒に体育館来たのに。」

「男子だけだったみたいだよ。私が待ってたら、男子の咆哮が聞こえてきたから。それに、話し合いが終わって教室から出てきた

の、男子しか見てないもん。」松本が言うと、蛭原はホッと息をついた。辺りを見回していた三次が言った。

「うちらも何か話し合いしてたね。男子ただけだ。女子もそろそろやろうって言ってたね。」

「週末って言ってた。」松本が答えた。

10分弱無駄話をしていたが、怪しい者の姿は見えず、電車が来た。

車内アナウンスが5分後に発車する事を告げる。

電車で揺られて、25分。一行は無事に駅についた。

「本当に大丈夫？」蛭原が三次に何度も聞くと、三次は苦笑する。

「大丈夫だって。それに美樹達も気をつけて。今日はそっちに行くかもよ。」

「まあね。でもこっちはずっと国道沿いだし、舞の家も結構近いし。」

「親が迎えに来てくれれば良いんだけどね……」松本が言った。3人ともそれぞれの家庭の事情があった。

「ねえ、貴司君ちゃんと来てるの？料金だけもらって帰ったとかないでしょうね。」蛭原が言った。三次が首を振る。

「大丈夫だよ。怜衣ちゃんの時だってちゃんと任務を果たしたって言ってたから。」三次が時計を見る。8時30分。もう既に人通りが少ない。これ以上の無駄話は逆に危険である。松本がバイバイと手をふり、いつまでも粘る原因となった蛭原を引きずって行った。

「よし。」三次は松本が手を振るのをやめるとすぐさま帰路に

ついた。

10分が経過した。家までの道のりが半分になった時、前からヒタヒタという足音がした。

三次は思わず立ち止まる。

すぐさま、電灯の下にその姿は現れた。

フードを被った、背の低い子供のような姿。口元だけが見え、薄ら笑いをしている。両手をコートのポケットに突っ込んでいる。

その姿を見た瞬間、言い様のない、恐怖と悪寒が体に走った。それがストーカーではないと、直感すると同時に逃げなくては、とも思った。

しかし、どういふ訳か足が動かない。  
懸命に動かすが、足は言うことを聞かない。助けを求めようと  
声をだそうとしたが、声も出ない。

突如、その姿はフードを外した。

何の変てつも無い、おかっぱの男の子だった。君の悪い笑みを  
浮かべている。

そして、信じられない行動に出た。

地面を滑るようにこちらに移動し、三次の首を締め付けた。  
あまりの強さに、意識が薄れる。

突如、首の強力な力と、金縛りが解けた。

「ゴホッ、ゴホッ！」涙を少し流しながら、むせる。

「大丈夫ですか?!生きてますよね?!」声の方向を見ると、  
吉田が右手に炎が燃える松明を持ちながら、三次を見ている。

「た、貴司……君………」三次は男の子の方を向く。

その男の子はもはや、薄ら笑いを浮かべてはおらず、吉田を憤怒の表情で睨み付けていた。白眼を向き、歯をむき出し、ウーーーーウーーーー、と唸っている。

吉田は冷たくそれを見返す。油断なく松明の炎を構える。

「三次さん、立てますか?」

「えっ、はい。何とか………」三次はよろよろと立ち上がりながら言った。

男の子は、動こうとしない。吉田は三次に言う。

「よし、ならば家まで走って下さい。」吉田が言うのと、三次は返事をせず、一目散に後方に向かって走り出す。やや、遠回りになるが、男の子のいる道を通れる訳がない。

だが突如、男の子が道に現れた。三次は思わず急停止。男の子

の手がまたしても三次の首に伸びる。

その途端、炎が走ってきて、男の子を縛り上げた。どんなトリックを、と思うが早いか、吉田がやってくる。

「止まらないで！走って下さい！！！」吉田の緊迫した声で我に帰る。三次は走り出す。

吉田はぼろ布のロープで、炎を男の子に巻き付ける。男の子は怨みを表情に全面に出して、吉田に手を伸ばす。

吉田はその手を蹴り返した。触れる事ができるなら、こちらから。男の子は民家の塀に叩きつけられる。吉田が情け容赦なく、松明の炎を胸に刺す。

「ギーーーーーー！！！」人間とは思えない声を発し、男の子は悶え苦しむ。吉田が炎をどけると、男の子はバツタリ倒れた。吉田は急いでその場を離れる。男の子はもはや目を真っ赤にし、姿を消した。

10分後、三次は家に走りついた。緊張の糸が切れたか、その場にへたりこんでしまった。

近所は明るい方で、オレンジや黄色のライトが常についており、

安心したようだ。

後ろから走ってくる音がして、三次はビクツとして、顔を上げる。

吉田が走ってきた。

「速いですね。見失いそうになりました。」吉田は少し息を荒げながら言った。

「貴司君……………さっきはありがとう……………」三次は何とか立ち上がりながら言った。

「いや、依頼人を助けるのが役目ですから。礼を言う必要はありませんよ。」吉田は真顔だ。

三次はちよつと頷くと、吉田に聞いた。

「さっきのあれは何だったんですか？」

「あれとは、何を指してるんです。」

「男の子です。」三次が言っていると、吉田はハツとした表情になった。そしてすぐさまポケットから白い粉末が入ったビニール袋を取りだし、三次の家の外壁や庭にまきはじめた。

「ちよつと。何をしてるんですか?!」三次が思わず慌てる。

「塩を撒いてます。ふう。」吉田は塩を撒き終わると三次に言った。

「さて、この庭に入っていいですか?荒らしたり、家に押し入ったりしませんので。」吉田が言くと三次は頷いた。

そこでも吉田は塩を撒いた。

「さて、三次さん。あれがストーカーだと思いますか?」吉田が三次に向き直る。

三次が首を振る。

「単刀直入に言いますが、三次さん、君は今大変危険な状態です。」吉田の言葉に息を呑む。やおら言った。

「ひょつとして、あれは霊ですか?」三次が言くと吉田が顔をしかめる。

「霊は普通、人間には触れられません。三次さんの首を絞めましたよね？」

「確かに……じゃあ生き霊？」

「……三次さん、意味分かってて使ってます？生き霊というのは、誰かに乗り移った霊をいうんですよ。あんな人が近所にいるんですか？4月の中旬に全身フード？」吉田が言うと三次は弁解がましく言った。

「だって……あんまり詳しくないし……じゃああれは何なんでしょうか？」

「『霊体』だと思います。」

「霊体？」

「そうです。存在としては、霊以上、人間以下って所ですね。やつの場合は手だけは触れられますが、他は空かしますから。」吉田が言うと、三次は不安そうにキョロキョロ辺りを見回す。

「ついてきてませんか？」

「見えませんね。だからといって、ついて来てないとは断言できませんから。ああいう霊体は幼ければ幼いほど強力なのです。大人になれば雑念が混じって怨念が薄れますから。」

吉田の言葉に三次は泣きそうになる。

「なんでそんなのが私に着いてくるんですかあ……」

「……偶然だと思います。」吉田が言うと、三次はとうとうメソメソ泣き出した。

「私はどうすれば……」

「早急にやらなければならず、それさえすれば大丈夫です。……」

……家の中は。」

「はい。何をするんですか？」

「これを撒いて下さい。」吉田がそう言って塩を渡した。しかし、少量。

「家の中にパラパラと。家の中に入れないとは思いますが万が一です。それらが効かずに、奴が現れて首を絞められたら、手を思

い切り叩いて下さい。」

吉田が言うと、三次は不安そうに聞いた。

「貴司君はこれから帰るんですか？」

「もちろんです。終電まで3時間以上あるんですよ。大丈夫ですから。」

「はい、分かりました。」

「では、急いで家に入った方が良いでしょう。」吉田が言うと、三次はお礼を言った。

帰り際、三次は最後の質問をした。

「あなたは何者ですか……………貴司君？」この問いに、吉田は首を振って答えなかった。

4月21日

あれから3日経ったが、三次は平穩無事だった。あれ以来、三次は蛭原、松本にわざわざ遠回りしてもらい、3人でかえるようにしていた。その成果もあり、3日間の間は一度も見えていない。

21日早朝のグラウンド。

練習ができるグラウンドが使えるのは各クラス1回だけ。そんな訳で、小林は全員を召集した。朝4時から全員の家電にかけ、無理矢理起こしたのである。不満どころか、怒りが爆発したG組の面々は、小林をフクロにしようとしたが、小林が大量の18禁雑誌が入った段ボールを見せると、静まり返った。

「女子がいちゃやばいだろ。だから、わざわざ早く起こしたのによ。いいや、いいや。いらないなら今日のオカズに……………」小林が下卑た笑いをすると、本能に近づいたG組の面々はようやく小林を許し、雑誌を一人一冊持って帰る。小林はきちんとカバーまで用意していた。小林は雑誌を取らない吉田や鈴木、さらには海老澤、金子、小橋に雑誌をひけらかす。

「あほ。動かないもんで抜けるか。」鈴木が言う。

「僕、PCあるし。音声無しで抜けるか。」吉田までが言うと、海老澤が急に小林の後に向かって叫んだ。

「おつ、山口さん。お早う。今日は早いね！」

小林は素早く雑誌を鞆にねじ込み、挨拶しようとしたが……………

……………  
誰もいない。

「分かりやすい青春だな。」吉田が言うと、他の4人もため息をついた。

さて、6時15分、野球練習が始まる。キャッチボールはスムーズに行った。しかし、守備練習では、ありとあらゆる問題が浮き彫りになった。守備についた。小林がバットを握り、「行くぞ、コラァー！」と大声をだす。

一球目は、サードへ。サードを守る小橋は軽快に裁き、余裕で

一塁へ正確な送球。一塁に入った大高が難なく捕球する。

次はショートへ。吉田は捕球し、投げた。

が、送球が乱れ……………

「なに、暴投しとんじゃコラア！！取ってこい！！」小林の叫びに吉田は走って行く。

次はセカンド。鈴木も小橋同様軽快に裁き、送球も正確。

次はセンターへ。館へ真っ正面！！

「あら？」館が落球した。グローブ端に当たり、後ろへ。

小林の罵声がした。

次はレフトに飛ばしたが、元野球部の堀江が難なくキャッチ。

その後は鈴木がバットを握り、ライトへ。ライトの小林はあっさり捕球した。

だが、鈴木の高度なバッティングに段々と守備が崩れてきた。

ライナーを卓越した反射神経で確実に捕球する一方で、吉田は3球に1度くらいの割合で暴投した。

レフトを守る、堀江は肩が弱くサードを中継しないと、バックホームが間に合わない。

センター館は肩が強い代わりに頻繁にエラーした。

ファーストの大高はランナーがいなくても関わらずキャンバスに近く、早い打球を捕球できない。

唯一大丈夫なのは小橋で目を見張るような守りを続けざまに見せた。

ちなみに小林は、捕球送球ともに問題がないが、センターの力

バーやら何やら自分のポジション以外は守らないのである。

打撃に移る。

ピッチャーとして、園部がマウンドに上がる。1番の小林がバッターボックスに入る。

園部が投げる。

が！！

小林空振り！！！！

キャッチー山田が思い切り後ろにそらす！！

「……………」沈黙が支配する。

園部が気を取り直し、投げる！

今度はよく見て振る。

それでも空振り！！

やはり山田が取れない！！

「なあ、ちょっと、ちょっと。」見かねた鈴木が入って来た。

「ある程度予測しないと当たらないよ。見た限りだと、130位でてるよ。」

「んな、素人に打てるか！！」小林が言っていると、園部がやや誇らしげに、

「昨日、ちょっとバッティングセンター行って測定したら、最高134だった。」

「あのなあ、練習にならないだろうが……………」小林が言っていると、園部が少々手加減すると言い出す。

30分後。

結果は簡単で済みました。

まず、ヒット打者。

小林、鈴木、吉田、堀江、小橋。

内野ゴロ。

館、山田、大高。

後はバットに当たってない！！

結局、園部のいう手加減は10キロ落とす程度だった。 120

キロの変化球を素人に打てるわけがない。

小林は思わず頭をかく。

全員汚れ、不満たらたらのので、小林は集まってくれたことに礼を言い、今日は終わりにしようと言った。

選手達は小林が素直に礼を言ったことで少しはイライラがおさまったようだった。

2年G組、課題が山積みである。

## CHAPTER 5 襲来

鈴木が教室に入ると、鈴木と1年のときに一緒のクラスだった清水、彼女の友人である田中、和知などがジャージ姿で汗を拭いていた。

「あつ、おはよーあれ？男子も朝練？」清水が言った。鈴木は席に向かいながら言った。

「そうなんだけど……女子も？」鈴木の問いに3人が頷いた。「大変だね。」鈴木が言うと、清水が言った。

「まあね。ウチ、あんま体力ないし。出来ることは限られてるけど、チームに迷惑かけないようにしないと。」清水が何人か入ってきたクラスメイトを見ながら言った。

「責任感強いねー。でもさ、女子は何でそんなまとまりが良いの？朝早くやじゃないの？」鈴木が聞くと、清水は不思議そうな顔をした。

「男子もまとまりいいじゃない。全員教室にはいなかったし、皆参加したんでしょ。」清水が言った。

「いや、俺らは………」鈴木が止まる。18禁雑誌をもらったからなんて言えるわけがない。

「俺らは、何？」清水が先を促した。

「何でもない。で、どうしてまとまりがあるの、女子は？」鈴木が日本語が少し怪しくなる。

「うーん、何でって言われてもね………」清水が考えてしまった。

田中と和知もそう言えば何でかな？という顔をしていた。

鈴木が辛抱強く待っていると、清水が言った。

「やっぱ、後悔したくないからじゃない？」

「後悔？クラスマッチで？」

「うん。やっぱりクラスマッチの目的は勝つことだけじゃ無くて、クラスが団結することに意義があると思うんだ。だから、もしこの機会に仲良くなれないと、学園祭とか歩く会とかも楽しくなくなるじゃん？絶対後悔するよ？」清水が言っていると、鈴木はウンウンと頷いた。

「でもさ、クラスマッチが終わればすぐに団結力が無くなっちゃうわない？学園祭まで1ヶ月半あるし。」鈴木が言っていると、清水は首を振る。

「普段、話さない人とかと話すいい機会にもなるんだよ。新しいクラスで友達ができるのは、良いことだよ……ね……」清水はそう言って、田中と和知を見る。二人はニコニコしながら頷いた。  
「なるほどネエ。今の小林のやり方では駄目だな。もっと全員をクラスマッチにのめり込ませないと。」鈴木がそう言って、クラス中を見回した。

さて、時が平和に過ぎて、昼休みになった。

女子は昼休みになると、直ぐ様体育館に練習に行ってしまった。ちなみに、女子は全員が全員早弁をしていた。

「女子が早弁する光景なんざ、教員してて初めて見た。」と川北先生が呆れていたが、叱りはしなかった。

男子はと言うと、朝練があつたので、他のクラスに場所を譲らねばならないので、昼練と放課後の練習は無しだ。

鈴木は小林の机の隣に立ち、小林に話しかけた。

「なあ、小林君。ちょっとクラスマッチの練習について、提案があるんだけど……」

「……………」無視。

「……………」？そうか。」鈴木がトントんと机をノック。すると小林はイヤホンを外した。

「何か用？」

「ん。クラスマツチについて提案があんだけど。」

「おう。なにに？」小林はiPodを止めて、聞いた。

「練習を専門ごとに分けるべきだと思う。ピッチャー陣はピッチングに重点を置くとか、内野手には痛烈な当たりに慣れさせるとか。一人一人に適した守備位置を決めたんだから、いきなり全体練習ばかりだと、どうしても守備の練習量に差が出んだろ。」鈴木が言うと、聞いていたらしい堀江が入ってくる。

「そうだな。それにバッティングも打順は別として、個々人の強みを生かせる打撃をしないと。」

「例えば？」小林が聞くと、堀江がハキハキ答えた。

「小林君だったら足が速いんだから、どうしても出塁したいときに叩きつけて内野安打にしたり……………そういうことさ。バントは誰でもできるようにしないと。」

「クラスマツチでバントはな……………」小林が言うと、堀江がムツとした口調になる。

「バントを馬鹿にすることなかれ。キューブとかドミニカ野球じゃないんだから。1点を貪欲に取る……………んで守る……………園部君の球なら素人にはかすりすらないさ。」

堀江が近くにいた園部を指差した。

「でも、園部君がずっと投げられるわけじゃなかつた。中5日どころか、中2時間なんだからな。」小林が言う。

「そのために、投手を育てるんだよ！」堀江が言う。

「野手も？」

「当たり前だ……………怪我せずにプレーできる保証なんざどこにもないさ。」堀江が言うと、小林は分かった分かったと頷いた。

「じゃあどう分けて、そのグループリーダーとかも決めないとな。」小林が言った。

鈴木が前に出る。

「みんな、注目してくれ。これからグループをこちらで勝手に決めるが、明日の朝6時に来れない人？」鈴木が聞くと、多くの手が上がった。手をいち早くあげた海老澤が言った。

「俺達、て言うか運動部みんなそうなんだけどさ、総体があるんだよ。バスケは5月の下旬から市内予選だし。朝練今日行けなかったから、昼休みとかなら………」

「なるほど。他の人達は？秋山君は？」

新聞部の秋山が言った。

「俺の場合は、新聞部の編集が夜遅くまでかっから、朝早く起きるのがつらい。放課後は大丈夫。昼休みは話し合いがあるから駄目。25日が切なのさ。」25日は4日後である。鈴木はフンと頷いた。

「じゃあ、グループ分けより先に、練習時間帯を個々人で決めよう。朝がいい人は？」鈴木隣の堀江が『朝』とでかでかと黒板に書く。

手はほとんど上がらない。小林は例外として、手を上げたのは小橋や園部といった地元出身の生徒だけだ。

「じゃあ、昼休みは？」鈴木が言うと、かなりの手が上がる。バスケ部の海老澤、サッカー部の館、テニス部の春日などだ。書くのに手間取り、堀江が書くまで2分を要した。

「じゃ、放課後？」また少ししか手は上がらない。

「よし、どうも。これ参考にして、練習表を無理ないように作ってメーリングで回すから。」

「今、いない吉田くんはどうする？」鈴木が聞くと、小林はニタリと笑って、

「あいつは基本暇だから。」と言った。

## 棋道部室

吉田が音楽を聞き、鼻歌を歌いながら、ライトノベルを読んでいると、10回ノックがあった。

吉田が立ち上がりドアを開けるなり、岩本がすたすた入ってきた。ドアを閉めようとすると、「待ってください。」という声が出た。

三次が吉田を見て、週末渡された塩を入れてあった袋を見せる。吉田が本人と確認できたので、三次を入れ、部屋に入れた。

吉田がドアを閉めると、岩本が不服そうに言った。

「何であたしは10回もノックしなきゃいけないの？指が痛いんだけど？」

「見分ける為ですから。」吉田が言った。岩本はさらに追及する。

「何で、志穂が殺されかけたのに、土日来ないわけ？犯人まだ捕まえてないんですよ。」

「一応はダメージを与えたんで、1週間は再起不能でしょう。土日は他にも依頼があったのです。」吉田が言うと、岩本があまりに似合わない勝ち誇った表情になった。

「聞いた？これだから貴司はダメなんだよ。朝、志穂がまた目撃したんだって。」

吉田が着席しながら、少し目を吊り上げた。

「何をですか？三次さん？」

「はい。今度は、絶対ストーカーではないから気味が悪くて……」

「絶対ストーカーじゃない？なるほど。そこまで確信の持てるものですか。では、詳しく話してください。」

吉田が言うと、三次は岩本の隣に座り、話し出した。

\*\*\*\*\*

今朝の事である。

「ごめんな、志穂。駅まで送ってあげたいんだけど……………」

「大丈夫だよ。今日も、友達来るから。」

「……………うん、じゃ気をつけてな。何かあったら連絡しなよ。」

「

「分かったー」三次が言うと、父親はせかせかと出ていった。

家の中には小6の弟が一人いるだけで、しかもまだ寝ている。

母親は、夜業なので、帰ってくるのは、8時である。現在は6時20分。朝御飯をいつも通りラップし、急いで、戸締まりをする。

それから急いで着替えていると、メールが来た。

『朝、急用ができたので、行けません。先に行つて下さい。

今日は学校にもいけないかもしれません。ごめんなさい。』

これは松本からだ。そして、メールを見ている最中に「メール受信中」と表示される。

『朝、先輩が家の前にいて一緒に登校することになったので、行けません。舞にもそう伝えて下さい。』

三次はため息をついた。二人がいないのは不安だし、単なる寂しさという物もある。今、考えてもしかたないので、三次は急いで鞆に荷物を詰め、もう一度戸締まりをして返答のないのを知りつつ、「行つてきます。」と言つて外に出た。

2件目の送り主の蛸原の事を考えていた、三次はまもなく駅につこうとする時に、何かにぶつかってしまった。

「ごめんなさい。」大した痛みではないので、すぐさま謝れた。しかし返答がない。

「あれ？」三次がすっかり相手を確かめるとベビーカーが置いてある。

「誰がこんなところに置いたのかな……………」？「三次は前に回り込む。赤ん坊が小さな指をくわえて眠っている。そのかわいさ思わず、母性本能が疼く。

「ほつとくわけにはいかない……………」よね？」三次は赤ん坊に聞くが、無論返答はない。もっとも期待してすらないが。

三次はこんな赤ん坊を捨てるなんて、と腹を立てつつ、近くにいた駅員さんのところまでベビーカーを押して行った。

受け付けの窓口をノックする。

「はい、どうしました？」老年の駅員が出てくる。

「あの、駅のすぐそばに、置き忘れてたベビーカーがあつたんで、こちらで預かって下さい。赤ちゃんもいるのに、お母さんはどちらに行ったのか分かりません。」三次が言うと、駅員はへえ、と驚いた顔をした。そして、奇妙な表情になった。

「それは分かりましたが……………」赤ちゃんはどこに？」駅員が言った。

三次はわけが分からなくなる。

「ここにいますよ。ほら……………」三次は赤ん坊を手で指す。依然として眠っている。駅員は少し顔をしかめた。

「君、何の事ですか？君には赤ちゃんがベビーカーにいるように見えるんですか？」駅員が言った。三次は混乱した。

「だって、え？」

「悪ふざけは駄目ですよ。ベビーカーはこちらで預かりますから、早く行って下さい。後ろの方の邪魔です。」駅員の発言に三次は振り向く。確かに何人かが並び、イライラと三次を見ていた。

納得がいくわけのない三次はもう一度、説得を試みようとして、赤ん坊を指差し、固まった。

赤ん坊は依然として眠っていたが、違和感がある。指しゃぶりをしながら「笑っている」。しかも爆笑しそうなのを必死にこらえるかのように小刻みに震えている。

三次がさつと青ざめた。

「すみませんでした。お願いします！！」三次はそう言うと言目散に逃げていった。

反対側のホームからもう一度、ベビーカーを見た。  
赤ん坊はいなくなっていた。

\*\*\*\*\*

「……………」三次が話し終えても吉田は黙ったままであった。何か考えているような、それでいて何か疑っているような表情である。

「あの、貴司君？私は何をすべきなんです？教えてください。」  
三次がそう言うと、吉田はため息をついただけで、何も言わずに本を読み出してしまった。

「！ちよつと、あの貴司君？」三次は焦って岩本を振り向いた。  
岩本も携帯をいじっていてこちらを向かない。

「あの……………」三次が再度呼び掛けると、吉田がゆっくりと話し出した。

「三次さん。僕は作り話に付き合っている暇はないんですよ。  
時間潰しが目的なら帰って下さい。」冷たい声だった。

「え……………え?!」三次が戸惑いの声をあげる。

「やっぱりか。普通信じないよ、そんな話。」岩本もそう言う

と、三次は泣きそうになった。

「違う！！嘘なんかじゃない！！見たんです！！！！本当にいたんですよお！！！！」

三次が叫んでも、冷たい声音は変わらない。

「君の話だけ聞いて信じると？そこに居合わせた人は誰も見てないのに。そりゃ、ちと冗談がきついですよ。」

「志穂、アンタ気分悪くない？幻覚が見えるなんて……………」岩本は同情するような目で三次を見た。三次は顔面蒼白になった。口はワナワナ震え涙が目から溢れだした。自分を絶対に信じてくれるであろう、親友は今日来ておらず、誰にも信じてもらえない。

三次が立ち尽くして泣いていると、吉田が冷たい声で言った。

「何をぼつとしてるんですか？これ以上我々の邪魔をするなら無理矢理叩き出しますよ。」

この言葉はトリガーだった。

信じられない量の涙が溢れ床に水溜まりを作った。三次はその場にうずくまり、哀願した。

「信じ……………て下さ……………い。嘘なら……………もつとまし……………な  
嘘をつき……………ます。本当に……………見たか……………ら……………見た  
……………と……………言った……………だけです。」吉田が本を見ながら言った。

「ほう。そこまで言っただけならとんでもないですよ。いいでしょうそこまで言うなら聞きましょう。それで嘘かどうか判断します。」

三次が頷き、岩本は携帯から目を離した。

「そのベビーカーの色は何色でした？」吉田がゆっくり聞く。

三次は必死に思い浮かべた。

だが。

どうしたことか、いざ言われてみるとはつきりしない。黒？グレー？白？明るい色か、暗い色かもわからない。

1分もした頃、岩本と吉田がイライラと顔を見合わせた。三次はこれ以上黙っているわけにはいかないと判断し、正直に答えた。

「思い出せんせん……………」

「はあ？」吉田がそれはそれは冷たい声を出した。岩本がイライラと舌打ちをした。

「何で思い出せないんですか？少なくとも、ベビーカーそのものは、周りの人間には見えてないんですね。」

吉田がそう言つと、三次は黙ってしまう。

「……………」

5分も沈黙が続いたのち、よろよろと三次が立ち上がる。そして扉に向かう。

「どこに行くの、志穂？」岩本の問いかけに三次は静かに言った。

「ごめんなさい、全部私の勘違いです……………迷惑かけてすみません……………許して……………」そう言いつつ、扉に手をかけた。その時、吉田が「待って下さい！」と大声で呼び止めた。

「はい？」三次が虚ろな目で返事をした。

「君を信じます。君が正直に答えていると分かりましたので……………」

……………」

「え……………」

「志穂。」岩本が立ち上がり、志穂を座らせながら辛い顔をしていた。

「ごめんなさい。でもあなたが志穂じゃなくて、志穂に化けた敵だったりしたら大変で……………確かめなければ駄目なの……………」岩本は申し訳なさそうに言った。

「でも、私は……………何も答えていませんよ……………」

「それが何よりの証拠ですよ。」吉田が三次をこれまた申し訳なさそうに見た。

「別に何色と答えても、僕達にはわからない訳ですから。普通、赤ん坊に意識が向いてしまつて、そんなもん、覚えていないのが普通です。」吉田が頭を下げた。岩本もそれにならう。

三次は疑われた怒りよりも、信用された安堵から、ホッと溜め息をついた。　「三次さん、今朝の話を聞いて、もっと詳しく知りたいのですが……………もう昼休みが終わつてしまします。4時限目をサボる気は？」

「ないです。」

「ですよー、じゃあ、部活は今日は？」

「あります。」

「じゃこの間みたいに戻り寄つて下さい。」

三次がうなずくと、鐘が鳴った。授業開始5分前の予鈴だ。

3人は部室を出る。

「あんなやり方で本当にごめんなさい、志穂。よく協力させられるのよ。」岩本は歩きながら吉田を見た。普段の吉田なら毒舌で返す所だが、ここでは神妙になり、三次を見た。

「すみませんでした。三次さんが偽物かどうか、試すには一番分かりやすい方法だったんです。」吉田が言うと、三次は頷きそうになり、立ち止まった。

「？」吉田と岩本が振り返る。

「どうしました？」

「許しません。」

「え？」

「あなたたちを許さない！！」三次が叫んだ。吉田が珍しく驚き、後退りした。

「あなたたちを訴えます。川北先生に。」

「！！」吉田が驚愕の表情になる。川北先生は吉田達の属する

G組担任である。若手で、生徒に甘いと言われているが、なかなかの柔術師でもある。あんまり、悪印象を持たれても困る。それに、吉田は始業式の一件で川北先生を敬っていた。なので、吉田は謝ることにした。

「すみません、みつ」

「いくら謝ってもダメです。」三次が吉田の声を押し潰し、冷たい声で言った。

「……………では、どうすればいいんです？」

「……………そうですね、じゃあ貴司君のアドレスを教えてください。」

「今日は携帯はわす」

「リュックのポケット。」

「……………何故？分かりました？」

「……………フフ、白状しましたね。さあ。さあ。」三次がニコニコ笑う。黒澤が以前男子に協力するように笑いかけた時と酷似していた。

「分かりました。プロフィールを赤外線送信しますから。」吉田が諦めたように言い、リュックのポケットから銀色の携帯を取り出した。三次も黄色の携帯を取り出した。

「全く……………賢いですよ、君は。」

「嬉しい。」三次はニコニコしながら言った。

「じゃ、今日は放課後に来てくださいね。連れがいるなら前もって連絡して下さいよ。」

吉田が言うと、三次は頷いた。

「じゃ、お待たせ……………うん？岩本さん？」吉田が階下を向くと、岩本がいなくなっていた。

「急ごう。授業に遅れるよ。」三次が先に階段を下りた。

「いつの間にか、敬語でなくなってるし……………」吉田も溜め息をつきながら部室棟をあとにした。

## CHAPTER 5 襲来（後書き）

後書きでは初めてましてです。川田です。もちろんペンネームですが。

2月25日に大学の前期試験があつたので執筆が滞りました。受験生の皆さん！あと少しでうざったい勉強生活から解放されるので頑張りましょう。

お気に入り登録して下さった方々には感謝、感謝です。たくさん感想を書いてもらっている作品と比べると、僕のはまだ未熟……

どうか、僕の作品も感想を書いて下さい。僕は批評だからといって、無視したりするような人間ではないつもりです。

本当に、読んで下さった方々には、「ありがとうございます。」です。

これからも日々成長を心がけて執筆していきますので、「大富豪同好会の軌跡」をよろしく願います。

## CHAPTER 5-1 襲来

M高から20キロ南に行った所に、空き地があった。その空き地は何故か人が近寄らない。良からぬ噂があるのに加え、嫌な雰囲気があった。

例えば、付近の住民がペットの犬の散歩をしていると、犬は必ず空き地の前を通るのを拒否した。人だけが通ると、頭が重くなり、気分が悪くなった。朽ちた「売り地」の看板が未だに立っていたが、誰も買うはずがなかった。

住民の間では、こんな噂が立っていた。

あそこは昔、戦争の被災者を埋めた場所だった。戦争とは第二次世界大戦から戦国時代までの範囲で。成仏できなかった霊が未だに辺りをさまよう。それらの噂は、斬首された野武士の霊を見たとか、防空頭巾を被った女の子の霊を見たとかの証言から来ていた。ほとんどの人はそういったものを信じた訳でなくても、空き地に近寄らないに越した事はないと判断した。一度だけ、心霊スポットとして、某テレビ局が取材に来たことがあった。それをしているのは住民の4分の1くらいで、放送されたわけではないので、人々の記憶から忘れ去られていた。

某テレビ局は、空き地や空き地周辺に定位置カメラを置き、2日間ほど粘って取材したが、心霊現象は起こらなかったのである。それで注目はさらに無くなり、人気はますます消えた。さて、4月21日……詳しくは西暦2008年の……つまりは、M高2年G組がクラスマッチの話し合いをしている昼休みのこと。一人の男子が空き地に向かって歩いていった。

風貌から判断するに、高校生だろう。男子生徒は荷物は鞆のみで、学校があるはずのこの時間帯に何故、ここにいるのだろうか。例えば、昼休みだからといっても、授業に間に合うわけもない。男子生徒は人気のない空き地に入っていた。

空き地には土管が3個ピラミッド状に重なっており……早い話がアニメ『ドラえもん』に出てくる空き地にそっくりである。その土管に隠れ、男子生徒は荷物を下ろした。男子生徒はしばらく鞆をもそもぞやっていたが、

何やら写真を取り出した。男子生徒はドカツと座り込み、辺りに人がいないかどうか確かめた。

そして、何とも生々しい事に、ズボンを若干下ろし、トランクスの中に手を入れて自分のナニをつかんだ。

描写に堪えないので割愛……

男子生徒は時々、土管から少し顔を出しては元に戻る。時々、苛立たしげに写真を換えては、しごき続ける。十分もした頃、男子生徒は呻き声を上げた。

「フウッ。」男子生徒は出したものを、ポケットティッシュを取り出して拭き取り、土管の中に投げ入れた。写真を鞆にしまい、ズボンを元の位置に戻した。

そのまま立ち去るのかと思いきや、そうではなかった。

男子生徒は次に鞆から鋏を取り出した。男子生徒は鋏の刃の部分を持ち、慎重に自分の腕の皮を薄く剥いた。薄く剥いた皮にさっきのティッシュの排出物を浸けた。

どうやら今までの痴態は無駄ではないらしい。

男子生徒は何事かを呟いた。

そのとたんに、男子生徒の周りの空気が変わった。重苦しくてぞつとするような空気だ。男子生徒が、剥いた皮を地面に丁寧に置いた。そして、誰かを待ち受けるかのように、空き地の出入口を見た。どんよりとした空気が広まり、今や誰も外に出れない。何が起きているのかすらも分からないだろう。

男子生徒が土管に腰掛けた時、何かが空き地の前の道路をスーッと飛んでいった。それは途中で曲がり、空き地に入って男子生徒の前で停止した。男子生徒はまだ誰かを待っている様子だった。男子生徒の関心がこちらに向かないので飛んできた『何か』は、男

子生徒の目の前に立ち、声を出した。不自然に低い声だった。

「前道殿。」『何か』が言った。前道と呼ばれた男子生徒はフンと鼻を鳴らし、胡座をかいた。

初めて『何か』を見ると、ニヤリと笑った。

「で、奪えたのか？」前道が言った。低い声で小さかった。

「いいえ。途中で邪魔が入りました。気を失わせる寸前で、男に邪魔されました。」何かは淡々と言った。前道は顔をしかめた。

「邪魔だと？お前は、狼藉が簡単にはれるような場所でわざわざ仕掛けたのか？」

「そこには、十分配慮していました……もつと言えば、時間帶もわざわざ選んだのですが……」

「一体、誰に邪魔されたんだ？」前道は『何か』を睨んだ。『何か』は怯む様子もなく、答えた。

「分かりません。しかし、唯の人間ではありません。私に触れることができました。」

「……」『何か』の返答は明らかに前道の意志に反していた。『危うく、死ぬ所でした。』『何か』が無関心に言った。

「もう、一回死んだらうが。どういう事だ？俺の呼び出した霊体には当然……」

「前道殿しか触れられませんよね？」

「……」前道が考え込む。

「一体、何処で、何処に触られた？」会話だけ聞けば、痴漢処理である。

「……」手首を触られました。『何か』が言った。

「手首？半端な部分だな。手首だと？」

「はい。」

「確かか？」

「はい。」

「ふーん。そうになると、厄介だな。そのお前に触れたやつは、どんな奴だった？」

「前道殿と同じ様な年齢だと思います。私服を着ていました。」  
「私服を着てた？お前は、時間帯を選んだよな？一体、いつ頃だ？」

「夜です。時計を持っていないので、何時かは分かりません。」  
「夜なら、私服を着て外を彷徨いいても、全く不思議はない。何の手掛かりにもならんな。まあ、しくじったのはもういい。邪魔が入ったのは、しょうがない。しかし、あれから3日も経っているのに何故未だに奪えてないのだ？まさか四六時中そいつが居るわけではあるまい。この土日はなにをしていた？」前道が顔をしかめて言った。

「何もしていません。前道殿のお呼びがかかるのを待っていました。」

「は？」前道は『何か』を睨み付けた。

「本気で言っているのか？」

「はい。」

「そうか。」前道はたちあがり、土管から降りた。そして『何か』を思い切り蹴り上げた。

だがしかし。前道の足は空を蹴り、バランスを失って倒れた。前道は訳が分からず、もう一度『何か』を見た。

「そういうことです。ここを見てください。」そう言って『何か』は自分の着ていた服をずらし、胸の部分を見せた。

黒く焼け焦げていた。

「この怪我をして以来、どうやら人に触れられないのです。もちろん物にも。」

「何だって？」前道は立ち上がり、跡をよく見た。

「……………」

「……………」沈黙が続いた。前道は最初は怒りの表情だ

ったが、やがて畏れへと変化した。

「火術師だ……………間違いない！」

10分もしたころ、前道が叫んだ。

しかし、『何か』は黙ったままだ。

「火術師に違いはない……………そうだ。お前！」前道がハタと『何か』を睨んだ。

「何でしょう？」

「そいつは、お前を焼き殺そうとしなかったか？」

「……………いえ、前道殿が言ったように、私はもう一度死んでますので。」

「言葉が不足した。お前を火で攻撃しなかつたか？」

「しました。」

「だろうな。その焼け焦げを見ても分かる。そいつは、ターゲツトである三次と共にいたのか？」

「いえ、私がターゲツトの首を締めた途端、どこからともなく現れ、私を蹴りました。」

「ならばだ。お前はそいつに対して攻撃したのか？」

「あの行動が攻撃のうちに入るなら、そういうことになります。但し、成功しませんでした。」

「だろうな。火術師が相手では。」

「火術師とは何ですか？」

「気にするな。さて、お前はもう霊体ではない。物を掴ことも触ることもできない。はつきり言って使えない。」

「……………」

「もうお前に用はない。消えろ。」前道が冷たく言った。

『何か』は一瞬、無表情な顔に怒りの色がさしたように見えた。だが、前道に皮肉っぽくお辞儀すると、スッと消えた。

「……………」前道はしばらく『何か』が消えた跡を見ていた。

「M高」

「じゃあ赤松君から取りに来てー。」

2年G組ではテスト返しの真つ最中である。先週の金曜日に進級祝い試験があった。大概の高校にはあり、一体どこら辺が『祝い』なのだとクレームがつきそうな試験である。3教科（数学、英語、国語）で今はG組の副担任である、柴崎先生によって、数学が返されていた。赤松、秋山……と名前の順に返される。赤松と秋山の回りから「オーツ」とか「スゲー」とか声が上がる。

喧騒のなか、テスト返しは続き、金子が戻ってきてため息をついた。

「何点？」

「いいのか、悪いのか……」金子はそう言いながら、聞いた隣の海老澤に見せ、後ろの席の小林や吉田にも見せた。51点。

「イチローだ。」吉田が言った。

「ん？ああ、背番号は確かに……」

「まあ、頑張ったんじゃないの？」小林がそう言いながら、答案を取りに行くため立ち上がった。M高は県内でトップクラスである。テストは難しく、数学の平均は大体40点前後だった。海老澤が「勝った」と言いながら、答案を見せた。72点。オーツと唸る金子。海老澤はフンと鼻を鳴らし、金子の隣の黒澤に声をかけた。

「黒澤は何点？」海老澤がちょうど戻ってきたのを見ながら言った。

「えっ、私？」

「そう。」

「ご想像にお任せします。」そう言うと、サッと答案の点の欄を折った。

「エーッ。えびちゃんは？」海老澤が今度は吉田の隣の蛸原に

聞いた。

蛭原は得意気に答案を吉田に渡し、「見ていいよ。」と言った。  
吉田、金子、海老澤が唸る。84点である。

「凄いですね。」吉田が真面目に言いながら、蛭原に返すと、ニッコリしながら言った。

「見せたんだから、貴司君のも見せてよね。」 「僕も少しは自

バサツ!!!

吉田がいかけていた時、小林が戻ってきて答案を吉田の目に押さえつけた。

「何すんだよ。」

「見る。」小林がハイテンションで言った。

「……………」吉田が答案を開いた。隣で見ていた蛭原は目を丸くした。

「93だと?!」海老澤が唸った。金子はもう言葉が出ない。

吉田は乱暴に答案を返した。

「何を勉強したらそうなるんだ?」

「数学。」

「……………」あんな、じゃあどんな勉強をしたら、そうなるんだ?」

「演習。」

「……………」もういいや。」

海老澤が小林に質問をするのを諦めた。

最後の方に、吉田は呼ばれ、答案を持ってきた。小林が無言で手を伸ばす。吉田は無表情に答案を渡した。

「どれどれ。」椅子に寄りかかり、後ろ足だけで立ちながら、小林はテストを見た。

とたんに、小林が引っくり返った。

物凄い音に、周囲が振り返る。音源を見ると、皆笑いだした。

「94……………」まさか……………」1点負けるなんて!」小林が演

技がかった仕草で吉田を指差す。10回中8回くらいの割合で小林がテストでは勝っていた。教科にばらつきはあったが。数学や化学は吉田の方が勝率は良いし、国語や世界史は小林の方が良い。

「凄いね……私に『凄いですね』って言ったのは皮肉だったわけ？」蛭原が笑いながら言った。

全員がテストを返され、柴崎先生が今回の評価をする。

「平均は、今回みなさん頑張ったみたいで60点ぐらいです。」一斉に「高っ！」とか「エーッ！」という声上がる。柴

崎先生は少し声を大きくして言った。

「G組は65点が平均です。さっきのは学年ね。学年………だから文系も含めた平均です。理系クラスの平均は64点。理系クラス4クラスのうち、2位です。1位はB組で66点。なんだけども」柴崎先生は声を低くした。全員が静かになる。

「90点以上は、学年に8人しかいません。このクラスは、言って良いよね？赤松君、秋山君、小林君、堀江君、吉田君。赤松君の98点は学年トップタイです。あと1人います。」

拍手が沸いた。小林は悔しげな……演技臭い、悔しげな表情をしていた。赤松は謙虚に頷いただけ。

「それだけじゃない。このクラスは80点以上があと8人もいます！！蛭原さん、大塚君、小橋君、鈴木君、西野君、春日君、古川さん、山口さん！！！」

さらに歓声が上がる。80を越えたものが13人とは、なかなか起こり得ない。

「なのに平均は65点です。」柴崎先生はニッコリしながら言った。

拍手がわく！！！！

拍手！！拍手！！拍手！拍手………拍手？！

「何でそんな平均が低い？このクラスは41人しかいないだろ

「？そのうち13人が……」海老澤がいかけた時、吉田が吠えた。  
「白玉！！！何点だ？！！」吉田の問いに待ってましたと言わんばかりに白玉が立ち上がった。

「10点！！！！」

「何い？！！」小林が唸った。

「10???10?????じゅうーーーーー?????」

爆笑が渦巻いた。

「あり得ない！！」海老澤が叫ぶ。

「何でそんな点取ってるんだよ。」堀江が怒ったように言った。  
爆笑のなか、何人が怒ったようだった。

「（ハ―ハ）v」白玉がこんな感じでクラスに見える。柴崎先生はため息をついた。

「何で、白玉は………期待してたのに！！！！」小林が叫ぶと、さすがに白玉はばつが悪くなったようだ。

「俺、頭わりの知らない人がいたとは。」白玉が呟く。クラスがだんだん、静かになってきたところで、小林が叫ぶ！！！！

「0点の答案が見たかったのに！！！！」

「それは悪……………えっ？」

「そうだ白玉！！」吉田も吠える。

「うん？」

「何で10点も取ってんだよ？」

「そっちか！！」

「当たり前だ！！」堀江が加わる。

「二桁の点を取るなんて！！許さん！！」

「許さないのかよ！！」

「バカめ！！！！どうせなら、スッキリ白紙による雪原の世界を広めりや良いものを！！」鈴木が叫ぶ！！！！

「何、当てたんだか。赤松、ちよつと見てくれ。」吉田が高校1年からの付き合いがある赤松に言つと、赤松はサツと答案を奪つ

た。

「エーッ、大問１の（１）（２）この式を展開しろ。それと……大問４の（１）。この命題は正か偽か。最後に大問８の（１）このグラフを書け。（２次関数）だな。」赤松が言うと、女子がまた笑いだした。

「中途半端な事を……………」鈴木が呆れると、白玉は隣に座った館を指差した。するとサッカー部の館<sup>たち</sup>が叫ぶ。

「３３点!!」

「ますます半端だな!」

小林が唸った。

館が叫び返そうとした時、柴崎がわって入った。

「解説始めたいんだけど……………駄目?」

「…………サーセン。」館が座り、小林らもおとなしくなる。柴崎

先生は大柄な割に、凄く繊細らしい。

そんなこんなで授業が終わり、放課後になった。

部活に行くもの、帰るもの、勉強して行く者など様々である。

午後４時３０分。生徒会である会議が開かれていた。生徒会長の大束。２年Ａ組で、なかなかの成績ではあるが、かなりプレイボーイであることで知られていた。

生徒会副会長始め、書記や会計やはみんなヤンキー、プレイボーイである。女子に人気があり、傲慢で、金持ちが多かった。

生徒会長は全員が席に着くのを確認し、宣言した。

「では、これより!新設委員会、風紀委員会の設置のための会

議を始めます!!」

## CHAPTER 5-3

### 襲来（前書き）

10000アクセス突破。ありがとうございます。初作品ですが、日々努力して執筆していくので、これからもよろしくお願いします。

## CHAPTER 5-3 襲来

生徒会室の上の棋道部室では、そんなことどこふく風。いつも通りの活動が行われていた。

棋道と言うから、将棋や囲碁な筈なのだが、この部室ではウノ（UNO）による賭けが行われている。

高校生なのでレベルは低い。プレイヤーが参加するときに、10円を出す。で、1抜けしたら全部獲得。普段は100円だが………今日は後輩が初めての参加となるので、10円である。

参加者は3人。吉田と川又、それに1年の後輩、大澤。ベテラの2年二人組に「今すぐ、金くずして来い!!」と異様な迫力で迫られ、わざわざ銀行に行つて1000円を10円玉100枚に代えてきたのだ。それが昨日の日曜日での電話での会話である。

で、今に至るわけだが、吉田と川又は大澤がつく前からUNOをしていた。賭け無しで。大澤が挨拶しながら入ってくると、吉田が不気味に笑いだし、川又が無理矢理大澤の腕を引っ張り座らせた。UNOルールの確認と賭けの仕組みを説明したら、直ぐ様始めた。

「ウノ!!」大澤が叫ぶ。

「ウノなの?」

「ウノだつて?」吉田と川又がニヤリと笑う。

「ドローツ―!」

「ドローツ―!!」

「ぐはっ。」二者のドローツ―を

受け、呻く大澤!

「んで、上がり。」赤、黄、緑の1を三枚揃えて、ウノ上がりする川又は、吉田と大澤の10円を取る。

「次いこ。」

「おk!」2人が言つて、10円を出すと大澤が音を上げた。  
「待つて下さい。」

「待たない。」吉田がそう言いながら、山札をきつて7枚ずつ配り出した。

「弱いな。」川又が配られた手札を見ながら言つた。

「あの、すみません。」

「なんだよ?」さも面倒くさそうに吉田が大澤を見た。

「もう、10円がありません。」

「じゃ、5円玉2枚でも構わん。」

「細かいのがもう……………」

「じゃ、100円で許してやる。」

「何か、掛け金があがつてます?!」

「嫌か。」

「嫌です。」

「上司命令だ。」

「理不尽!」

「世の中は理不尽にまみれている。」

「こんな所で、世の中語らんでももらえますか。」

「腐つてやがる……………」

「……………何かすみません。」

「……………今のネタなんだが。」

「……………え……………あ、あ、ナウシカ!」

「実施に言つたのは参謀だけだな。」

「へえ……………」

「じゃ、100円。」

「はい。」

「じゃ、始めよう!」

「……………ちよつと待つて下さい!」

「だから、待たねえよ!」はい、川又君から。「リバー

ス、リバー。」と言つて赤と青のリバーを出した所で、吉田が

スキップを出す。川又がドロフオー、吉田もドロフオー。「またかー！」 嘆く大澤。川又がワイルドを出し、「赤。」と言う。吉田が赤のリバース。川又が「ウノ」と言いながら、スキップを2枚出し、色が緑に変わる。「すみません、待って下さいまだ終わって……………」 8枚のカードを引きながら、奮闘する大澤。「待たねえよ。んで上がり。」と言いながら、吉田が赤、黄、緑、青の4色の5でウノ上がり！！

「もう、銭がありません……………」

「じゃあ野口さんで我慢しよう。」

「……………もう騙されませんよ！」

「じゃあ1ドル札で我慢しよう。」（当時は100円代）

「……………すみません、用事が。」大澤は電光石火、部室を飛び出して行った。

## ーバドミントン部ー

三次が全ての作業を終え、帰り支度ができたのは、7時前であった。三次は戸締まりをまだ残っている卓球部の主将に任せ、体育館を後にした。

部室棟はまだ7時をまわっていないのに明かりは一つしか点いてない。棋道部室である。しかし、今日は音楽無しである。三次はドアをノックすると、「はい。」と返事があったのになかなか出てこない。よく見ると、部室の中を確認できる扉についた小窓が隠されている。

三次はもう一回ドアを叩く。

「はいはい。誰ですか？」

「三次です。予定より早く来ました。」三次はそう答えた。すると中でじゃらじゃらという音が聞こえた。

「入ってきて大丈夫ですよ。」

「……………」三次はドアをそつと開ける。吉田が金勘定していた。

三次がドアを閉めると、吉田はふんふんと頷いて、金を片付けた。

「今、大丈夫？」

「大丈夫つすよ。」吉田がサツサと片付けた。心なしか、焦っているように見える。

「今日は早いですね。」

「休みが多くて、あまり練習にならなくて。美樹も舞も休みだったし。でも舞は海老澤君と帰るのを見たって人が居るし……………」

「なんか今日は海老澤が落ち着かないと思ったら。あの封筒はチケツトか何かか？」

「え？」

「何でもありません。さて、三次さん。学校は楽しいですか？」  
「楽しいですけど……………」

「それは何よりです。どうかその時間を大事にして下さいね。」

吉田がインチキくさい深い声を出した。

「では。」

「待つてー！」三次は慌てて返答した。

「はい？」

「急を要するから今日はここに呼んだんじゃないの？」

「……………」チツ。」

「舌打ち?!」

吉田は低い声で言った。

「まだ『ジョバイロ』の音程つかめてないのに……………」  
「聞こえてるけど。」

「ええっ??」

「何その異様な驚きは!」

「さて、話題を戻しましょう。」

「貴司君が脱線させたんでしょ。」三次は冷たい声になった。

「三次さん。」

「はい。」

「落ち着いて聞いて下さい。」

「……………」

「三次さんの事を狙っているものがいます。」重苦しい声だった。

「え?」

「君がここ数日で幽霊を目撃しているのは単なる偶然ではありません。」

「そうなの?でもどうやって幽霊を私に目撃させたんですか?そもそも誰が?何のために?狙っているって……………何を?」三次が一気に詰め寄った。

「別に君を殺そうとしてるわけではないですよ。多分。」

「多分?!」

「誰がこんな事をしたか、と言いますと。」吉田はそう言っただけで携帯を操作しだした。吉田はやがて三次に携帯の画面が見えるよう、手渡した。

「これ、誰ですか?」

「霊術師の前道です。」

「……………れい…………?」

「霊術師、霊体を自由に操る力を持つ、人間ですよ。」

「……………はあ?」

「フフン、信じてませんね?そうでしょうとも。君がいきなり魔法を信じてるか、なんて聞かれたら信じてるなんて言う訳がない。たとえ内心信じていたとしても、口にはしないでしよう。」吉田が携帯をしまいながら言った。

「そんなことができるの?」

「そんなことは?」

「幽霊を操ること。」

「幽霊ではありませんよ、霊体です。」

「同じじゃない。」

「違います。幽霊は完全な亡霊です。たまに悪霊や怨霊がいま  
すが。霊体は遺体が完全に見つかっていなかったり、心残りがあつ  
たりすると、地上に残った痕跡が行動を起こし、幽霊を構成しよう  
とします。でも試みは必ず中途半端になり、体のどこかは触れる事  
ができてしまう。」

「うーん……………」三次は頭を抱えて悩みだした。三次が苦悩  
していると、吉田がさらに言った。

「三次さんには乳母車の幽霊が見えたんですね?」

「見えました。」

三次が顔を上げた。

「でも、周りの人間には見えなかった。これは何を示してるの  
でしょう?」

「分かんないです。私、人より霊感が強いとかはないよ。」

「では、ひょっとしたら三次さんに元々の才能があったとした  
ら?」

「元々の才能?」三次が笑いだした。

「そんなの絶対ないって。私、今まで一度も幽霊を見たことな  
かったし。」

「……………確かに。霊術師が三次さんの持つ何かを偶然見つけた  
のか……………」吉田は首を傾げる。三次はさらに言った。

「私は、他人がそんな熱心に奪いたがる物なんて持ってません。  
家にだってありません。」

「……………」となると、三次さんは何故狙われたんだろう?間違い  
?単なる偶然?」

「さっき言った、れいじゅつ?」

「はあ、霊術師ですね。」

「そう。その人は貴司君の知り合い？」三次が言うと、吉田が無表情になった。

「知り合いですが、友ではありません。霊術師はゲシュペント・ガイスト・ビュローの一員です。敵です。」吉田が言うと、三次は困った顔をした。

「何て言ったの？」

「ゲシュペント・ガイスト・ビュロー。」

「やっぱり分かんないや。」

「ドイツ語で『幽霊事務所』という意味です。」

「何それ？」

「R高校にある……って、三次さん。R高校分かります？」

「私は地元出身ですから。」

「なら話は早い。R高校にある何でも屋みたいなもんです。」

「ここみたいな？」三次は床を指差した。

「違います。奴等と一緒にするな。」吉田が乱暴に言った。三次は少し怯えた表情になった。

「ごめんなさい。奴等と言うことは、何人かいるんですね。」

「そうです。『幽霊事務所』は大富豪同好会とは絶対に違います。奴等是我々がやらない事をあつさりやる。」

「……例えば？」三次が興味津々で聞いた。

「我々は依頼内容が悪質なものは受け付けません。喧嘩に加勢してくれとか、何かを奪ってくれとか、アリバイの証人になつてくれとか。奴等はそれをする。金のためなら何でもする。」

「酷い。許されていいわけ？でも、それと霊術師はどういう関係が……？」三次が憤慨した表情で聞いた。

「奴等は全員、何かの術を心がけています。霊術師だけじゃなく、他にもたくさんいます。」

「へえええ。教えて、どんなのがいるの？」三次が聞くと、吉田は顔をしかめた。

「無理矢理にでも僕から聞きたいですか？三次さんがバドミントンの大会で、フェアプレーをしない他校の選手を自ら紹介しますか？」

「そんなこと……ごめんなさい、調子に乗りました。」

「はあ。三次には来るべき時に話します。いずれは知ることになるやもしれません。」吉田がため息混じりに言った。三次は恥じ入った表情で聞いた。

「でも、そんな特別な力をもった霊術師に襲われたらどうすればいいの？」

「……………」

「聞いてます？」

「はい。どうしましょうね？」

「他人事?!」

「僕が居れば、霊術師も手が出せませんが。」

「何でそう言い切れるの？」三次はそう言ったが、吉田の顔を見て、慌てて付け足した。

「もちろん、貴司君が強いのは認めます。でも相手は、……………」

「まさか?!」

「はい？」

「貴司君も何かの術師なの？」三次が称賛の目で吉田を見た。

吉田はフンと鼻を鳴らした。

「さあ、どうでしょう。」

「何それ？教えてください。」

「さて、対策を立てねば。霊術師は三次さんを何故狙うかは分からないにせよ、狙われているのは間違いない。では、どうすれば安全か？」

「シカトされた……………」

吉田は淡々と続ける。

「暗くなつてからは出歩かない。一人での外出は控える。我々が霊術師を捕まえ、打ちのめす、三次さんを追うのをやめさせるか

どちらかまでの辛抱です。」

「分かった。」

「霊術師は霊を扱います。霊は、暗闇や冷たさを好むのです。襲われたらどうします?」

「明かりが有るところに逃げる?」

「不十分ですね。これを持つて下さい。」

吉田がポケットからライターを取り出して、渡した。三次は困惑した。

「こんなの持つてて大丈夫?」

「大丈夫です。ライターの付け方は分かります?」

「分かりますけど、これでどうするの?」

「霊術師に投げ付けて下さい。」

「犯罪じゃない?」

「最悪の場合は。ただ逃げるだけなら脅しに点けてみるのも良いでしょう。」

「そもそも、何でライターなんか持つてるの?」

「さてと。これで、対策は終わりました。霊術師を捕まるまで長い期間を要しますが、我慢できますね?」

「またシカトしたー!。」

「我慢できますね?」

「……………」

「でーきーまーすーよーねー?」

「できます、できます!」三次は吉田が鍛えられた喉を張り上げて声を出したので、思わず耳を塞ぎながら叫んだ。

「すばらしい。では、今日はもう帰りましょう。僕もついて行きます。」

三次はため息をついて立ち上がった。吉田が最後に電気を消し、ドアに施錠するのを待ち、二人は帰路についた。

二人はしばらく無言だったが、三次がやおら聞いた。

「貴司君は、こんな時間まで大丈夫なの?」

「大丈夫とは？」

「この間なんか、家に帰ったの何時くらい？」

「11時くらいでしょうか？」

「すごい、親は何も言わないの？」三次は何の悪気も無しに言  
ったが、吉田はまた無表情になった。

「独り暮らしですから。」

「そうなの。……………って、えっ?!」三次は驚いて立ちどま  
った。

「まさか、ご両親は……………」

「母親は死にました。父さんは生きてます。たまに会います。」

「ごめんなさい……………」三次がまた謝った。

「別に大丈夫ですよ。もう慣れました。」

「えっ、何歳から独り暮らし？」

「7歳……………ですかね。父さんが生活費を振り込んでくれる  
んで。何とか生きてます。」

「そんな……………」三次の声は、太い道路に出たため、車の音  
に掻き消された。

三次が下を向いてしまった。吉田は気にするでもなく、歩き続けた。

5分も経った頃、吉田が言った。

「駅に着きますよ。」

「あ、……………はい。」三次が慌てて顔を上げた。

駅に入るには歩道橋を渡る必要があった。2人は足早に階段を  
上がり、通路に出た。

その時だった。

通路の向こう側から、ベビーカーがやって来た。しかも、ベビーカーだけではない。

「貴司君！！！あれです。私が今朝見たのは！！」三次が吉田の後ろに隠れて言った。

「あれが？でも三次さんはさっき、ベビーカーだけが放置されていたと……………」

今のベビーカーは老婆によって押されていた。こうしている間にも、距離が詰まってきた。

不思議なことに、吉田達以外に通行人はいない。

「止まれ。」吉田が老婆に言った。

老婆はあと2メートルという所で停止した。

老婆は今まで一度も顔を上げなかったが、ここに来て、真っ正面から吉田と三次を見た。

その時、吉田が若干身震いした。三次が絶叫し、闇夜をつんざいた。

## CHAPTER 5-4 襲来（前書き）

春ですね。

まだ寒い日が続いていますが春の陽気は近いはず。皆さん、今年度も頑張りましょう。

老婆は目が片方が無くなり、血が流れていた。口も輪郭が無くなり、鼻も削がれていた。耳だけは正常である。

老婆はガラガラガラと喉を鳴らした。  
どうやら笑っているらしい。

吉田が近くに落ちていた木の棒を広い上げた。

「三次さん、いらない紙があれば下さい。」吉田が冷静に言った。三次は恐怖に震えながらも、吉田にノートの断片を渡した。吉田は紙を受けとると、自分のライターを取り出した。火をつける。

「今日はグレイオスシアンの火がない。その場しのぎだが……」吉田がそう言つて火を木に移した。松明のようになった。

奇妙な感覚が街にも広がっていた。街の人々から先程まで聞こえていた声や音楽が消えていた。おまけに動く者もない。

老婆は松明を向けられ、無表情になった。吉田は老婆から目をそらさず、三次に言った。

「三次さん、動けますか？」三次は恐怖で歩道橋の手すりにすがり付いていた。震えが止まらないらしく、手を手すりから離すと膝が震えているのがはっきりわかった。吉田が顔をしかめた。

「仕方ない。では階段を下り……」いいかけたところで、老婆が動いた。足元の石を拾い、吉田に投げつけた。

吉田が難なく棒で打ち払う。老婆が猛然とダッシュし、吉田につかみかかった。後ろで三次が小さく悲鳴を上げた。吉田は老婆の手を掴もうとした。自分に触れている部分は当然、自分からも触れ

る。

ところが、吉田の手は空を掴んでいた。吉田がぎよつとした表情になったが、老婆が吉田の足を脚ですくいとった。吉田が転倒した。

「何だ、コイツ？」吉田が立ち上がりながら老婆を睨み付けた。老婆は今は吉田との間合いを取り、こちらをただ無表情に見ている。「大丈夫？」三次が吉田に声をかけたが、吉田は反応しない。

吉田が老婆に向かって火棒をつきだした。

「そこを動かぬ。」吉田が脅すように言った。

「脅しをかけられるような立場か？」太い声がした。三次があつと言った。声の持ち主はベビーカーのなかの赤ん坊が発したらしい。但し、表情は赤ん坊のままだ。

「貴司君、見える？」「見えます。」吉田が唸る。赤ん坊はさらに言った。

「お前の手は読み尽くしている。いくらお前が足掻いたところで、時間の浪費にしかならぬ。無用な邪魔立てはやめて、そいつを渡せ。」赤ん坊が手を上げて、握りこぶしで三次を指した。

「赤ん坊のくせに無駄に語彙があるな……………何のために三次さんを？」

「お前に言う必要はないと思うが。」

「ハッ。」吉田が嘲るような声を出した。

「それなら貴様の認識が間違ってるんだな。ただ三次さんに用があるなら本人に話せばいい。それをせずに、誘拐を試みるとは、人に言えない事だろ？」

「誘拐？俺達はそんなことしてないが。」

「失敗しただけだろ。少なくとも未遂だ。」

「いずれにせよ、そいつを渡さないなら……………」

「力づくか？」

「……………」赤ん坊は何も言わない。老婆が前に出てきた。

「誰に雇われた？」吉田が油断なく火棒を構えながら言った。

「自分の欲望に正直、本能に正直、暴力に正直な霊術師か？」

吉田が言くと、微かに老婆の顔に赤みがさした。

吉田が老婆に火棒を射し込む。老婆がかわし、吉田に殴りを入れる。吉田がパンチを受け止めるため、左手を出した。

ガツーン！！

吉田が後ろに倒れた。

吉田の腹に脚が入り、嫌な音がして吉田がふっとんだ。

老婆が火棒を拾いあげ、吉田に突き刺そうとした。

吉田が火のついた先端を何の躊躇いもなく、掴んで火棒を奪い返し、間を取った。

「痛いな。やってくれるぜ、全く。」吉田はそう言いながら火傷した右手で歩道橋の黒くて丸い鉄柵を掴んだ。冷たい鉄柵は火傷の手には心地よかった。吉田が三次を振り返った。

「三次さん、一刻も早くここから離れて下さい。」

「でも、貴司君が…………」

「僕は大丈夫です。早く！」吉田がそう言ったが、三次は動かない。そうこうしているうちに老婆が吉田に接近した。

「さあ、そいつを渡せ。次は火傷じゃ済まされんぞ。」

「理由を教えると言ったはずだが。」

「…………強情な奴め。そいつが何者か知らんのか？」

「ああ？」

「やはりな。もし知ってたら行使するだろうな。」赤ん坊が言った。

吉田がいきなり赤ん坊に向かって燃えてだいぶ小さくなった木

片を投げた。

「バカが。」赤ん坊は動じず、老婆がそれを打ち払った。

「火傷を負いながら、その的を外さぬ投球……見上げたものだ。」

だが、お前もワンパターンだな。いい加減飽きる。」

吉田が言い返そうした時、歩道橋を登ってくる姿が見えた。

老婆も赤ん坊も吉田も三次も介入があるとは予想していなかった。ので、啞然として、その姿を見つめた。

海老澤と黒澤が現れた。

チツと赤ん坊が舌打ちした。

「あれ？貴司君？それに志穂ちゃん？こんな所で何してるの？」  
黒澤が言った。二人が答えず、前方を向いているので、黒澤は目線を追ってみた。口が開いた。

「何か浮いてる……………」

「えっ？」吉田が黒澤の発言に耳を疑う。

「何だありゃ。手か？」海老澤も前方を見つめながら言った。

「あつ、変わった！足か？うわあ！！！！！」

海老澤と黒澤が腰を抜かす。

「生首……………！！！！」黒澤が口を覆う。

「ちつ。思わぬ邪魔が……………何故こいつらはここにこれたんだ？」

「そうか！！この野郎なめた真似しやがって……………！！」吉田が何かに気付いたらしく、怒りを剥き出しにした表情になった。

「今日はここまでだ。さらば、火術師！！」赤ん坊が叫んだ。  
その途端、視界が悪くなった。

5秒もすると、いつもの市街が活動を取り戻していた。

「逃げたか。フツ。」吉田が海老澤を助け起こした。

「ありや、何だっただんだ？」海老澤が聞いた。

「僕にもさっぱり。三次さん、大丈夫ですか？」

「うん……………」三次がようやく足の震えが止まって、立てるようになった。

「何で貴司君が志穂ちゃんと一緒にいるの？」

「別に特に理由は……………」

「黒澤……！良いことを聞いた。貴司よ、お前は何故三次さんと一緒にいた？」

「だから理由は……………」

「ハッハーン……！」海老澤が大声を出したので、道行く人が振り返った。

「三次さあん？何で貴司と一緒にいたんだ？」

「あの、それは……………」三次が吉田を見たが、吉田は視線を合わせない。

「もしかして……………貴司君……！」普段冷静でリーダーシップのある黒澤が頬を赤らめていた。

「付き合ってたんの？！」

「それは違うけど……………」三次が呆れたように言った。

「じゃあもう契りを交わしたか？」

「今すぐ死にたいか？」海老澤の問いに問いで対応する吉田。

「もう、じゃあ何で二人は一緒にいるのよ？」黒澤が混乱したような表情で言った。

「それは……………」

「偶然の一致ですな。奇跡的に知り合いなだけで。」吉田が口ごもる三次を遮って答えた。

「はあ？嘘くさ。」海老澤はそう言うと、「あ、やべ電車が。」  
「言い、3人に別れを告げ、走って行った。」

「帰ろうよ。」黒澤が言った。2人は曖昧な声を出してついて行った。

駅のホームで黒澤はバイバイと吉田に手をふり、明らかに三次を待つ仕草をした。三次は吉田を見たが、吉田は大丈夫というように頷き、踵を返して立ち去った。

「今日美樹が休んでたけど、何か知ってる？」黒澤が吉田を見送った後聞いた。

「何も。」三次が答えた。海老澤、黒澤、三次は同じS線で帰る。

ホームで電車を吉田が使うJ線は3～6番線。S線は1～2番線である。黒澤が時間を確かめる。その時、アナウンスがして、まもなく列車がホームに入ることを告げた。

「やっぱり気になるんだけど、何で貴司君と一緒にいたの？」

「また……。」三次が黒澤を見たが、黒澤は真面目な表情だ。

「実際、俺も知りたい。」後ろで声がした。

海老澤が立っている。

「言えないよ。」三次が短く言って前を向いた。

「どうして？」黒澤が聞いた。

電車が入ってきた。

乗車したが、中は満杯であつた。座れず三人並んで立つ。

「どうして言えないの？」黒澤が尚も聞いた。

「駄目なんだって。部外者には。そう言われた。」三次が言った。

黒澤がイライラとしていたが、海老澤はその返答でピンと来たようだ。

「わかった。同好会に依頼したな。」海老澤が言った。

「同好会？」

「大富豪同好会のことだけど。俺らの学校で同好会なんて生物同好会しかないからさ、略して通用するんだよ。」

海老澤は理解した顔になった。黒澤は失敗したという表情にな

った。

「ダメだ、忘れてた。私も相談したことあったのに。」黒澤が言うと、三次が意外そうな顔で振り向いた。

「何の相談？」

「ストーリー。」

「解決したの？」

「うん、2人組だったけど、田子君が打ちのめして終わり。」

「田子君が？」

田子というのは1年の時に、吉田、海老澤、黒澤と同じクラスだった男子である。大富豪同好会の副会長である。今は三次と同じ2年B組である。　「そうだよ、知らないの？同じクラスでしょ。」

「あんまり、話したことないから……………」

「そう。」

「でもさ、何かあの人達って何か怖くない？話しかけづらいつて言うか。」

「そうか？別に普通だけど。」海老澤が言った。

「海老くんは男だから、気にならないんだよ。正直、あの人達は女とか関係ないって感じだもん。」三次が言うと、黒澤が頷いた。　「確かに。女子に対してはみんな敬語だし。あつちからは一度も話しかけて来ないし。怜衣がいなかったら私も怖くて話しかけれないよ。」

黒澤が言った。

「黒澤が？？嘘つけ、可愛いふりも大概にしごばああああアアアアアア！！」海老澤の腹を黒澤が学習靴で小突いたら、めり込んで結果的に大声を出し、電車の乗客の不快感を誘った。

「まあ、でも。怖いけど、悪い人達じゃないからね。きっと志穂も解決してくれるよ。」

「うん……………」三次が曖昧に返事をした。

「でも……………会長……………の……………貴司が……………こんなに……………も

……付きつきりで……ゴホッ

、ウエホッ！誰かを……保護するのは……ゲハッ、ギャホッ！  
！珍しいこと……なんだよ。」海老澤が腹を押さえて苦しそうに言った。  
「そうなの？会長とかあるんだ。」

「そう。貴司君が会長。副会長がさっき言ったように田子くん。後藤君は書記長だっけ。」

「まあ……他にも会……員はいるみた………いだが………あとは………知らない。」海老澤は腹を押さえながら慎重に言った。  
黒澤が海老澤に聞いた。

「小林君とか、小橋君は違うのかな？」

「違う……あいつらは……ただの………手伝いだ。」

海老澤は知らないだけで、小橋については会員である。軟式野球部と掛け持ちしているの、あまり部室にはいないのである。小林は吉田達の仕事を知っていて、たまに手伝いをする。またとない戦力なので、手伝いを拒否するわけがない。

「ふーん、頭いい人は皆同好会なのかと思った。」

「あの人達は頭いいの？」三次が聞くと二人は耳を疑うという表情になった。海老澤が腹から手を離し、小さな声で言った。

「何いつてんの？秀才ぞろいさ。貴司も、後藤君も。田子くんなんか数学では常に1位か2位だぜ！！」

「そんなに？」

「確かにそんな風には見えないけどね。頭は良いのよ。考えがちょっと変わってるけど……」

「ちよつとどころか、相当変わってるけどな。」海老澤が言う、二次は不安そうな顔をした。

「………」

「大富豪同好会の特徴といえば？」

「規則を真っ向から破り、理由だけは何か正しくて、成績は良

好、運動面もそこそこ。」

「……………ただのヤンキーじゃあ？」海老澤の問いに答えた黒澤が三次をみた。

「でも決定的な欠点がある。」

「？」

「堂々し過ぎてる所だね。」

「訳わかんないんだけど……………」三次が首をふった。

「だから、人前とかを気にしない訳。だからファッションなんかはまるでなつてないし、リア充を嫌うし。」

「リア充？」

「とにかく、奴等が一人でも髪を染めたり、アクセサリを付けたりしてるのを見たことがあるか？または想像できるか？」

「確かにないわ。」

「ふん、そういう事だ。」

「変わってるね。」

「そうだな。大富豪同好会」変人で間違いない。ただ人に迷惑をかけるか、かけないかでヤンキーとの違いは分かる。」

「へえ……………あ、もう着くみたい。」

電車が徐々に速度を落としていた。

電車が完全に停車すると、海老澤が下りていった。

扉がしまり、その後の3駅後に黒澤と三次が下りた。

「大丈夫志穂？」

黒澤が改札を出ながら聞いた。

「何が？」

「何か依頼したってことは、困ってる事があるんでしょ。私で

良いなら相談に乗るよ。」

「……………」三次は黙ってしまった。申し受けたくなる事だ。しかし、三次が答える前に黒澤は言った。

「わかってるよ。依頼は他人には漏らしちゃだめなんだよね。もし、私が私に化けた誰かだったらね……………じゃあ、バイバイ。」黒澤はそれだけ言っと、走って行ってしまった。三次は手を曖昧に振った。

「遠回りだけど……………」三次もそう呟くと、はや歩きで大通りを通過していく。

その姿を悔しげに観察する男子高校生が居ることも知らずに。

翌日、小林達也は誰よりも早く登校した。

小林は鼻歌を歌いながら、呑気に校舎に入りながら、教室に向かう。

1年生は校舎の1階、2年生は2階、3年生は3階。小林が階段を上り、教室が立ち並ぶ廊下の始まりの部分にある、休憩ホールについた。

小林はすぐさま、ホールの壁にやたらとデカイポスターを貼ってる男子に気づいた。

小林が胡散臭げに目を細め、近づいて行った。

男子生徒は振り向いた。どこか小バカにしたような顔だったが、相手が誰だか分かると完全に警戒した表情になり、ポスターを急いで貼って立ち去った。

小林はその姿に見覚えがあった。始業式で校長の話だからどうのこうのと、難癖をつけた奴である。

「生徒会からか？」小林は一旦教室に行き、鞆を置いて戻ってきた。

生徒会、ではなかった。

『学校に必要な無いもの……マンガ、ゲーム機類、音楽機器雑誌等は見つけ次第没収となる。抜き打ちで持ち物検査をするので命じられたら直ぐ様荷物を開示すること。』

（風紀委員会）

で、下の方に

校長認定と、判子が押されている。小林は直ぐ様ポスターを剥がした。

「小学生か。」小林はそれだけ言うと、ゴミ箱に投げ捨てた。その時である。

「器物破損！」女子生徒が小林の前に出てきて、指をビシッと突きつけた。

「風紀委員会の公共掲示物であるポスターを剥がしましたね？」

「だったら何なんだよ。」小林が傲慢に言った。自分より明らかに幼く慎重も低い。小林にとっては生意気なガキぐらいにしか思わないだろう。

「罰金です。金額は1000円。」

「はあ？」小林は嘲るような笑みを浮かべた。

「聞こえませんか？罰金です。」

「ちよつと待つてくれ。」小林が笑いだした。笑ったと言うよりこんなに面白いことはないという笑いだ。腹を抱え、柱に掴まりながら笑った。

やっと発作が収まると、小林は女子に向き直った。

「なあ、教えてくれよ。風紀委員会って何？そんなのあったけ？」

「昨日発足しました。生徒会が最近学校生活の緩慢さが、成績不振を招いていると判断し、生徒達の生活を改善するために作ったのです。」

「ほう。」小林は薄く唇を歪めた。

「分かりましたか？では罰金を。」

「まだ待て。罰金は集めて何に使うんだ？」

「模試代や、教材費などに当てるようです。私がお金が欲しくてやってるわけではありません。」

「ほう。じゃ、お前に警告しておく。」

「？」

「大変、結構な事だ。だがな、ここの校是を忘れたか？自由な校風だろ？現に俺は必要があると判断した授業以外は自由に過ごしている。だから干渉するなら、俺の妨害をするわけだよな？そんなに痛い目を見たいか？」

「今ので、脅迫が加わりましたね。」女子生徒は整然としている。

「痛い目を見るのは、委員長だな。そいつを連れてこい。ここに。」

女子は動かない。

「どうした？」

「それが人に物を頼む態度ですか？」

「……………馬鹿らし。」小林は肩をすくめ、立ち去ろうとした。

「待て。」強固な手が小林の肩にかかった。小林は後ろを振り向いた。

体格の良い男子が小林の肩を掴んでいた。

「誰だ？」

「3年に向かつてその口のききかたは何だ？」男子がドスの効いた声で言った。小林は動じない。

「好きなように口をきくさ。」小林はそう言つと、しゃがみこんで、肩にかかった手を払った。

「お前の名前は？」

「教える必要などないな。俺が誰か先に聞いたんだが。」小林が冷たく言った。

「ならいい。それも一種の答えだ。お前は器物破損に加え、脅迫、さらには、不敬罪だ。今すぐ罰金を払え。さもなくば、職員会議にかける。」

「かければ？これ以上バカに付き合う道理はない。」小林はそう言つと、身を翻した。

「待てと言つたはずだが？」男子が素早く小林の前に回った。

「しつげえな。怪我したいのか？」

「お前が命令に従わないなら。」

男子がいきなり小林におどりかかった。

小林はそれをなんなくかわす。小林が蹴りを入れた。男子の足に命中。

「ちつ。」舌打ちをして、男子生徒が小林につかみかかった。

「何をしている！！」声がした。

二人は離れて、声がした方向を見た。

見ると、生物の豊崎先生がやって来ている。

豊崎先生は1年の半分のクラスと2年B組と2年G組の生物の授業の担当である。

「何をもめてんだ？全く。いい歳して喧嘩か。何か言ったらどうなんだ？」豊崎先生は二人を見た。

「先生、こいつは学校の公共掲示物を破壊し、1年生を脅迫し、3年生である俺に喧嘩をふっかけて来たんです。」

「証拠があるのか？」小林が言った。

「ああ？俺達の目の前でやっておいて、言い逃れか？なあ？」最後に男子は女子に向き直った。女子が頷く。

「お前らが有りもしないことをでっち上げたんだ。証言なんて証拠になると思ってんのか？」

「お前らの証言だけでは、証拠にならんぞ。」豊崎先生が言った。

「あります。証拠なら……あれっ？」女子はゴミ箱を覗き込んだ。空である。

「因縁つけられたんですよ。先生、聞いて下さい。」と小林は携帯を取り出した。

録音機能で、先程のやり取りを記録していたらしい。

だが。

「お前が命令に従わないなら。」という声が聞こえ、携帯に何か重いものがぶつかった音がした。

「ふん、先に手を出したのはお前か。今の音からして、そっち（小林を指差して）がぶつかりにいった音じゃない。」豊崎先生は小林にもう行けと言うように、手をふった。

「二度とくだらんことはするな。お前。」豊崎先生は男子生徒を睨み付けた。男子生徒もにらみ返した。

「今度はただじゃ済まさんぞ。さ、行け。」

小林は急いで教室に戻った。何人かがまばらに登校してきており、その様子を目撃していた。

― 棋道部室 ―

「厄介な事になりましたね、霊術師が。」

「そうだよ、全く厄介だな。」吉田が水に手を浸していた。後藤が水に塩を入れながら聞いていた。

「火術が裏目に出るとは。」

「でも、対戦するのは初めてではないですよね？」

「ああ。一度戦ったことがある。」

「勝ったんですよ？」

「どうかね？止めを刺そうとしたら、すんで逃げられた。感術師だったけな？応援が来たんだ。」

「止めを刺そうとして、殺すつもりだったんですか？」

「まさか。霊術を尽きさせるだけだよ。無意味な殺生はしない。」

「ですね。よし、準備完了です。行きますよ。」

後藤がそう言つて、水に向かって指を広げて

何か言つた。すると、水が凍りついた。

「サンクス。よいしょ。」今度は吉田が手から火を生み出した。

掌の氷が溶けた。

しかし、火傷をした跡には氷が残った。

「これで、処置は済みました。戻りますか。」

「ああ。」

「しばらくは右手が思うようには動きませんね。氷が溶けたら完治ですね。この処置をしないと、指がくっついてしまいかも说不定いんで。」

「分かってるって。」

「今日、私も残りましょうか？」

「いや、2日続けての襲来は向こうが不利だ。霊術は非常に体力を消耗するからな。戦い終わった時はそうでもないが、一旦寝ると疲れがどつと出てくるんだ。それに……………」

「それに？」

「霊術は仏滅の日にしか使えない。」

「仏滅？ 大安とか、友引とかそんなのの奴ですか？」

「そう。だから、今度来るとしたら5日後。向こうは僕がそれを知ってるとは夢にも思わないさ。」 「なるほど、じゃあ5日後に迎え射ちましょう。」 後藤がそう言っ立ち上がった。吉田も

部室を出る。

「また…………… 奴等と激突するんですかね？」 後藤が部室棟から教室棟に通ずる道を進みながら言った。

「かもね。」 吉田が短く答えた。

― 教室棟 ―

「マジしらせるわ。ぶつ殺していいかな？」

鈴木隆徳が小林に言った。小林は携帯から目を離さずに言った。

「殺りたきゃ殺れば？ 俺は助けないけど、殺る理由はしっかりしてるからな。」

鈴木隆徳は今朝、あろうことが、iPodを没収されたのである。その他の生徒は没収されなくとも、朝から注意を受け不快な気持ちになっっている。たかはた鈴木は学校に不要な物として、iPodを風紀委員会副顧問の高畑先生に没収されたのだ。英語のアラフォ―教師で、生徒の間違いをチクチク突く嫌な教師である。

鈴木はイライラしながらも、  
小林の声色から冷静さを取り戻した。

「とにかく、後で奪還しよう。いざと言うときだけ！」ボクシングと軟式野球部を兼部している鈴木は拳を構えた。

「気絶させてくれる。」鈴木が自分の手のひらにパンチを噛ました。いいおとがした。

さて、授業が始まった。古典の関根という教師は50を越えた男性であるが、美声でなおかつ教え方がうまく、生徒は授業を聞いただけで、助動詞の意味や活用を覚えられると、とても評判が良かった。それに加え、古典が苦手な生徒にも簡単な質問をして、分からない事を決してバカにしたりしなかった。更には素で笑える話を盛り込んだりと、かなりの名教師である。

小林も吉田も自分たちが認める教師には多大な尊敬を払っていた。

廊下では自ら挨拶するし、授業は真面目にうける。この反面、尊敬しない教師だと、廊下ですれ違っても、鼻唄を歌いだしたり、内職したりと酷い有り様である。

教師陣はたいがい、小林達を嫌っていた。素直でなく、真面目でなく、その上優秀。妬みの対象になりやすかった。小林や海老澤

などはモテることから更なる恨みを買っていた。

だが、名教師もいた。先程の関根先生、現国の萩谷先生、数学の柴崎先生（副担でテスト返し時の）、担任の川北先生、小林を今朝助けた豊崎先生などだ。それ以外はたいがい敵だ。

古典、数学、生物が終わって次は体育である。

体力テストが始まる。

「今日は種目何だよ？」

「シャトルラン。」

小林の問いに金子が答えた。シャトルランが分からない人のために簡単に説明すると、決まった時間に20メートルを往く。そして返ってくる。20メートルを往復して体力をはかる訳である。但し、決まった時間は徐々に短くなる。

図に示してみる。

クラスメイト一斉に横に並んでやります。

閑話休題。

「だる。」堀江が言った。

さて、そんなこんなで体育の授業が始まった。

簡単な準備運動の後、全く体育会系ではない、体育の教師が5分後に始めるから、それまでウォームアップしてるよう、告げた。

「白玉、何回やれそうだ？」吉田が白玉に聞いた。身長168センチ、体重115キロの男子は答えた。

「10」

「そ。じゃあ僕も適当にするか。」吉田が言ったのを小林が聞き付けた。

「てめえ、本気出さないつもりか？」

「まあ。」

「吉田は本気出すと凄いのか？」白玉が小林に聞いた。小林は何故か遠い目をした。

「中3で137回だっけ？」

「127回だよ。」

吉田が言い直した。

「まあ、俺は140台だったが。」

白玉が感心した顔になった。

「景色も変わらんのにやってられるか。白玉+5回でいいや。」

「何だって手を抜く？」

「僕は文系じゃあないから。」意味不明な解答に白玉が首を傾げる。

話を聞いていた海老澤が割り込んできた。

「文系の奴等は体育の時間に粹がって女子にイトコ見せようとする習癖があんのよ。」

「はあ。」

「僕は」吉田が半袖長ズボンで欠伸をしながら伸びをした。

「意味のないことはない。」

「でも、何で文系の男子なんだ？」白玉が言った。

「アホだな。文系の女子が可愛いからに決まってるだろ。理系

の女子はな……………まあ、幸いこのクラスは例外だけど。」海老澤はチラリと黒澤を見た。彼女はいつの間にか隣に立っていて、聞き耳を立てている気がしたからだ。

「じゃあ、始めるよーー!!」体育教師が告げた。

昼休み。

三次志穂は棋道部室にやって来た。

くくくく

何やらまた歌が聞こえていた。

三次は扉をノックした。どうぞ、と声がかかり、扉を開けた。

「それでもー夜ーが優しーいのは、見てみぬふーりしてくれるかーらあ……………」

「今日は高音域が冴えるな。」

吉田がCDを止めた。三次は目を丸くした。吉田だけでなく、見覚えのある男子がいた。

男子が歌っていたらしく、ぜえぜえと息をし、茶を飲んでいた。

「あれ、三次さん。こんにちは。うん？」吉田が三次を見て、真面目な表情で言ったが、三次が不可解な表情をしているので、吉

田がああという顔をした。

「今のはポルノグラフィティの『ジョバイロ』です。」

「違います！」三次が気にしてるのはそんなことではないらしい。  
だが。

「違くないですよ。確かにポルノグラフィティの……」

「私が気になるのはそんなことじゃないよ。」

「そんなこと？」吉田が目を細くした。

「ああ……ごめんなさい。そう意味じゃなくて、この人は誰かを……」

三次がこう言うと、男子が顔を上げた。眼鏡をしており、顔が縦に長かった。イケメンとはいい難くとも、その男子は親切そうな印象を持っていた。

「大須賀……大須賀……下の名前何だっけ？」吉田が大須賀と呼んだ男子に言った。

「隆太郎だっつうの。」

「そうそう。大須賀りよ、隆太郎だ。」

「今、噛んだの……？」三次が呆れた。大須賀が頭を下げた。

「大須賀です。あなたが三次さん？」

「はい。」

「ほう、なかなか……」大須賀がニッコリする。

「美人だな。」

「ナンパかよ？」

「失礼な。素直な感想だ。」大須賀が言うと、吉田が嘲るような表情になった。

「リア充め。彼女は一人とか言ってなかったか？」

「無論、俺が好きなのは麻耶だけさね。浮気じゃないさ。」その言葉に、三次がピンときた。

「もしかして、麻耶ちゃんの彼氏？」

「露骨だね。そうだけど。」吉田がため息をついた。

フルネーム、川又麻耶。岩本と同じタイプの女子で、良く大富

豪同好会を利用していた。彼女の依頼を請け負ったのが大須賀である。そして、大富豪同好会を辞めた。

「辞めた、というより辞めさせられたんだがな。大富豪同好会にリア充はいちゃだめらしくて。」何故か、モノローグと会話しながら、大須賀が答えた。

「でも、何で大須賀君がいるの？」

「それはですね。」吉田が大須賀の背中をバンと叩いた。

「こいつが例納車……間違えた。霊能者だからですよ。」

「え？霊能者？」

「そうです。三次さんが霊術師に襲われる原因が知りたいので、呼びました。早速始めるか。」

吉田が立ち上がった。大須賀も立ち上がる。

「じゃあ、三次さんには眠ってもらいます。」

「え？どういう事？」

「気絶させます。君を。」

「え？ええ？」

「昼休みが終わる前に済ませませんと。此を早く吸って下さい。」

「吉田が布を渡す。」

「何なの、これは。」「クロロフォルムを滲ませた布で

す。大丈夫ですよ、体に害は有りませんから。」

「……………私が眠ってるからって何をするの？」

「とりあえず、脳を眠らせなければ、分かりません。脳を調べるだけです。」

「どうやって？」

「これで。」大須賀がそう言って頭につけるらしい、コードの束を取り出した。ノートパソコンもある。霊脳者にしか、分からない読み取りがあるのである。

「絶対に変な事しない……………？」

「しませんよ。」

「ほんとに？」

「ああもう。そんなに心配なら、部室に仕掛けてある監視カメラを後で見てください。三次さんが不快に思う事をしてたら、後で賠償しましょう。」

「はあ……………分かったわ。」三次がやっと言った。

三次が布を吸う。

「しばらく嗅ぎ続けて下さい。刑事ドラマみたいにすぐには気絶しませんから。」

1分もしたころ、三次の力が抜け落ちた。吉田が三次を支えて座らせ、大須賀と準備をし出した。

## CHAPTER 6 風紀委員会（後書き）

かなり長くなりました。お気に入り登録して下さった方、大変ありがとうございます。

読んで下さる皆様がいるからこそ、創作意欲も湧きます。これからもよろしくお願い申し上げます。

## CHAPTER 6 12 風紀委員会

棋道部室の下の階の生徒会室では、始まったばかりの風紀委員会の集まりが行われていた。

「没収品は全部で5点、いずれも任天堂DSやPSPといったゲーム機です。」

「手緩い。」生徒会長兼風紀委員長の大束<sup>おおつか</sup>が言った。

「そんな事はどこの学校だってそうだろうが。」

「……持ち主は皆、3年生です。」

「手緩い。」大束がまた言った。

「と言いますと？」

「そんな奴等はどうだっていい。2年の大物を捕まえなくては意味がないぜ。」

「2年の大物？」副委員長の桐原が聞く。

「覚えてる奴は？」

「ハイ。」そう言って手を挙げたのは小林に詰め寄ったあの1年女子である。

「よし、横倉。言ってみろ。」

「2年B組が後藤、田子、松井。C組に阿部。D組に飯沼。E組に大須賀と川又。F組に鈴木。最後にG組に小林と吉田。以上です。」

「素晴らしい。」大束が傲慢な笑みを浮かべる。

「奴等が他の生徒達を触発し、この学校を荒廃させている。もしもこの状態が続いたら学力低下が問題になって、職員並びに生徒会がとばっちりを受けるぞ。」

「それで、まずは生活面からか。」桐原が言った。

「だから、奴等を因縁つけてでも、痛い目を見せないと。大半の先生方は巻き込んだ……サッカー部以外の運動部員の3年の協

力も得られた……あとは、口実だ。何か良い案があるものは？」

こうして生徒会室での暴挙は続いた。

「グランドー

「センターー!!」堀江が叫んでボールをバットでかつ飛ばした。

「うわっ、眩し！」館が顔を上げた瞬間に言った。

そして落球。

「眩しいなら、自分の手で影を作ればいいだろ。」ライトにいた小林が言った。

「慣れてねえんだから。サッカーであんな高い球ゴールキックですらないぜ。」館がイライラしながらこぼれた球を拾った。

今はクラスマッチに向けた練習中である。昼休みは朝練と放課後に時間をとられる運動部がだいたいである。バスケ部は例外だが。

堀江がバッターボックスに入った。

ピッチャーの園部が投球モーションに入る。

投げたあ!!

そして打つ。サードにボテボテのゴロとなる。

軟式野球部の小橋が簡単に捕球し、ファーストに余裕をもって投げる。ファーストの長身テニス部員の春日がこれまた余裕で捕球。

園部がマウンドを降り、サッカー部の大塚に交代する。バッターボックスには、軟式野球部の鈴木が入る。

一球目と二球目はボール。三球目に鈴木が打つ。

左中間を真つ二つ！！ 俊足の館、レフトのハンドボール部の大高が追うが間に合わない。鈴木が3塁に達して、ようやく内野にボールが戻ってきた。堀江がバッターボックスに向かいながらライトの小林に叫ぶ。

「ちようどいい機会だ。小林君！犠牲フライを阻止するんだ！少し深いぞ。」そう言つて大塚に合図する。

大塚がポーンと軽く投げる。堀江が打つ！

小林が少し浅めでキャッチ。鈴木がタッチアップからスタート！

「ぬうつおおおおおつっつ！！」小林が吠えながら全力投球！

だが、しかし。

ボールはキャッチャーのバド部の山田の5メートルも手前で落ち、鈴木は楽々生還。

「小林君、早さよりも正確さだよ。イチローみたいにレーザーしようなんて無理なんだから、キャッチャーに届くよう高く放り投げないと。」堀江がため息をついた。

その時、予鈴が鳴った。

「む、もう終わりか。じゃあ皆お疲れさん。間違ひなく上達した。こりゃ練習してないチームだったらコールドだな。」堀江がそう言つと、皆がクラスに戻り始めた。

― 棋道部室 ―

「どうだ？何か分かったか？」

「何も。」大須賀はそう答えると、パソコンの電源を落とした。  
「なんにも。もしも、霊力があるなら眠らせても、異様な反応が脳波に現れるのに、一般人と変わらん。」

「じゃあ、一体襲撃の狙いは何なんだ？」

「さあな。潜在能力ではないな。そこら辺はお前の仕事だろ？」  
大須賀は立ち上がる。

吉田が三次の背中の数センチ上で手をかざし、何か言った。  
すると不思議な事に、三次が目を覚ました。  
「おはようございました。」

「……………」おはよ……………」三次は伸びをした。

鐘が鳴ったので、3人は部室を出た。

大須賀は部室棟の入り口で友達と話していた川又と合流し、吉田達と別れた。

「分からないのね……………」話の一部始終を聞いた三次は落胆した声で言った。

「何か、すみません。嫌な思いまでさせて無成果で。」吉田がため息混じりに言った。

「いや別に……………」貴司君の事を責めてる訳ではないし……………」

「なら責めるべきです。ここまで依頼主を危険な目に合わせ、何の成果も上げられないのは、間違いなく僕達の……………」いや、僕の責任です。以前僕は自分達より警察はだらしのない的な事を言いましたが、警察より遥かに劣ります。」

「でも、警察に言っても信じて貰えません。」

「それが唯一の救いですけどね。」吉田が言った。どこことなく疲れが混じった声だった。

吉田と三次がホールで別れた。

―別場所―

前回の空き地にあの男子高校生がいた。

「それでは、何故拉致れなかった？」男子高校生が言った。

「邪魔が入ったからです。」ベビーカーの中の赤ん坊が答えた。  
押していた老婆も頷く。

「邪魔？」

「はい、我々の仕掛けた封鎖霊場に入ってきた者が。」

「封鎖霊場にか？」

「はい。」

封鎖霊場とは一時的に現実世界の人間に幻を見せ、人間を寄り付かせないための仕掛けだ。

あの時は、あたかも歩道橋そのものがないように見えていたはずなのだ。

「どういう奴だった？」

「二人組の男女です。」

「ハッ。」男子高校生がせせら笑った。どうやら嫉妬らしい。

「ハハハ………で、どんな妨害をされたんだ？」

「我々の正体を火術師に教えていました。」

男子高校生の顔から笑いが消えた。

「お前らの正体は見えないはずだ、奴等以外は。」

「無論、全体が見えていた訳ではないようで、我々の一部分が見えていたようです。」

「その一部分というのは………」

「はい。具現化されている部分です。」

赤ん坊が淡々と言った。男子高校生は顔をしかめた。

「なんだって具現化された部分を見せたから問題になるんだ？」

お前は、具現化された部分を自由に変えられるはずだろ？」

「そうです。だからこそ問題なのです。」

「は？」

「具現化された部分が次々と変わるのを見せてしまったんです。」

「……………」

「それが火術師にばれてしまった。火術師には全身が見えている訳だから、具現化された部分が変化するのに気付いてなかったんですが、奴等は目に見える部分が腕になったり脚になったりしたのが見えたんすな。」

「火術師にばれたか……………」

「おそらく。」

赤ん坊が少し残念そうに言った。

「噂によると、だ。」男子高校生が唐突に話し出した。

「火術師は何人か仲間がいる。あくまで噂だが、氷術師というのもいるらしい。その他にも仲間がウジャウジャいるとか。もしそれが本当なら仲間が集まる前に倒す必要がある。」

「ならば、殺してはいかがですか？」赤ん坊が言った。男子高校生は冷たく首を振った。

「殺害の意味など全くない。さらに言うなら奴らはそう簡単に殺されるような連中でもない。特異の能力を奪うだけで十分だ。向こうだって、本来あの時俺を殺せたはずだ。それを力を半減させることしかしなかった。火術師は力を根こそぎ奪ったと思っただけだが、それは大きな間違いだった。」男子高校生が自嘲的に笑いながら言った。

赤ん坊は黙ったままだ。

「だから殺す意味はない。警察が本腰を入れて捜査したら、必ずどこかの監視カメラに俺が映っている。ずっと戦闘を見守っていたら、嫌疑がかかるだろ。」男子高校生が言くと、赤ん坊は頷いた。

「じゃ、5日後だな。法則は読まれてないな。」

「大丈夫です。仏滅の日だけでなく、赤口の日にも力を振り絞ってターゲットの前に現れました。予測不能のはずです。」

「なら、5日後だな。その時には必ず火術師を無力化させる。」

男子高校生、前道一成は険しい表情をした。

「放課後の教室」

「……………負けたか。」

教室のパソコンにUSBを繋ぎ、エミュレータでハドソン社の「ボンバーマン5」をやっていた春日がうめいた。

「少しは骨があると思ったんだがな。」対戦相手の吉田がキーボードを捜査し、次のフィールドを用意する。5本先取で5-0とは情けない。

「お前が強すぎるんだ。それにしてもPCでゲームが出来るとはな。」

「まあ、エミュレータは違法だけどな。良い子の皆は真似しないでね。」吉田がサラツと言った。春日がようし、と意気込み、第2ラウンドが始まった。

午後4時、G組教室から聞こえるゲーム音はB組教室まで聞こえていた。

「何の音かな？」茶髪の女子が言った。

「見てくる。」岩本が立ち上がり、教室を出て行った。

B組とG組までは直接廊下で繋がっている。音は賑やかで、教室の明かりが点いているのは、G組だけだ。

C組からF組は真面目な文系クラスなので、教室で遊んでいる奴などいないのだ。岩本達だって、今は勉強ではなく、総体に出場する先輩のために千羽鶴を折っていたのだ。岩本達の所属するハンドボール部は2年生部員はわずか岩本の他に1名しかいない。ハンドボールは外で練習させられていて、今日は雨だから休みなのだ。

Ⅰ G組教室Ⅰ

「今回は頑張ったぞ。」

「わざわざ僕だけ狙わなくとも。」吉田がコントロールパネルから手を離れた。

スコアは5対2。コンピュータを他に3体入れているが、春日は吉田を集中的に狙ったのだ。

「疲れた。少し休憩しよう。」吉田が言った。

「ああ。……………なあ、吉田。」

「うん？」

「お前さ、靈感あるんだって？」春日が言った。

「ああん？誰から聞いた？」

「小林から。」春日が言うと、吉田が冷たく笑った。

「違うな。多分、三次さん 松本さん 海老澤 小林 春日ってとこだ。」

「何だその回路は。」

「小林の連絡網……………情報源だな。マフィアのボスじゃあるまいし。」

「小林が言ってたな。お前、その三次さん？って人と付き合ってたんだろ？」

「そ、そんなことないんだから！！」

「ツンデレ風味？！お前がそんなことになるくらい焦るってことはやっぱり……………」

「ねえよ。」

「だよな。俺より吉田に先に彼女が出来たら立ち直れないぜ。」春日が言った。吉田が肩をすくめた。

「で、何だっていきなり靈感の話なんて始めたんだ？」吉田が言うと、春日は鞆をゴソゴソやりだした。  
そして、やや大きめな紙を取り出した。

「いつか、やってみたかったんだよねー」そう言って春日は50音が書かれた表を取り出した。

「なんだそりゃ？」

「知らねーのかよ。こっくりさん。」

「ああ、レストランの厨房で料理担当の……」吉田がいいかけ………

「それは、コックさん。」

「他人のそら似………」

「そっくりさんか。」

「非常に驚いている様子。」

「びっくり………さんはいいか。」

「簡単に割れる様子………」

「さっくりな。いつまでやるつもりだよ？」

「落ち着き、十分に時間をかけます。」

「ふざけんなよな………」

「『じっくり』」

「あ？………今の解答か！」

「じゃ、そろそろ部室行かないと。」

「何だって？お前今日は部活ないからエミュレータしてたんじゃないのか？」

「実は罨。」

「何の？」

「孔明の。」

「三國志ネタはもういい。本当に知らないのか、こっくりさん。春日が言っと、吉田は首を横に振った。

「知ってるつつの。大概のホラー映画は見た。」

「マジか？呪怨とかは？」

「見た。つまらないよ、ありゃ。」

「つまらない?!」春日が目を丸くした。吉田が冷たく言う。

「ありや、つまらないよ。白にしろ、黒にしろ。理由はいつか説明しよう。」

「……………ああ。」

「本当にやるのか？」吉田が聞いた。

「ああ。」春日が力強く頷いた。

「じゃ置いてくれ。10円……………あつた、あつた。」

春日と吉田が向かい合い、10円玉の上に人差し指をそれぞれ置いた。

吉田が一通りの事をして、問い詰めた。

「こつくりさん、こつくりさん。いらっしゃいますか？」

ぴくりとも動かない。

20分間粘ったが、ぴくりともしない。

「いいや。取り敢えず質問してみるよ。春日。」

「来てないのに？」

「存在しないんだろ。取り敢えず質問だけでもしてみろよ。」

「……………俺が一番得意なスポーツはなんでしょう？」

やはり動かない。

「僕が好きなプロ野球チームはどこでしょう？」

続けて吉田が言うが、何も起こらない。

「腐ってるぜ。馬鹿馬鹿しいことはやめようぜ。」

「……………だな、時間の無駄だった。」春日がそう言い、

ゲームに戻った。

吉田も50音の表を一瞥すると、ゲームに戻っていった。

「しっかし、何でこつくりさんなんかやろうとしたんだ？」

「被恋占い。」

「何だ、それは？」

「俺の事を好きな人を教えてもらおうと思って。だが、所詮は

遊びか。」

「噂だな。現実世界ではあり得ないことだ。」

大音量が鳴り、ゲームが始まった。

## CHAPTER 612

### 風紀委員会（後書き）

こんにちは。川田です。

話が脱線しているように見えますが、全ては事件に繋がる伏線であります。週一での投稿を目指していますが、思うようには行かず、アイデアが枯渇してしまう事がありました。

このCHAPTERを乗りきったあとは、もう考えてあります。どうか、完結までお付き合いして頂けるとありがたいです。

それでは、皆さんごきげんよう。

## CHAPTER 7

### 火術師×靈術師（前書き）

皆さん、こんにちは。川田です。

1週間に1回の更新を心掛けています。今日は朝に書きましたから眠いです。

モバゲーで携帯小説を投稿できると知ったのですが、やりにくいです。

1000文字ごとに区切らなくてはならない所が特に。

それに内容を見ると、「小説家になろう」サイトの方が遥かに優秀な作品が多いです。僕の観念が入ってますが。

これが春かと思える天気が続いてますが、皆さん今年度最初の月を充実させるべく頑張りましょう。

いよいよ、火術師と靈術師の直接対決が始まります。

# CHAPTER 7

午後5時20分

— G 組教室 —

「やつと勝ったぜ！」

「糞が……何でだよ!!」春日が歓喜する傍ら、吉田がキーボードを叩く。

4対5で吉田の負け。春日が対策を考えるため、吉田に休憩を持ちかけたのも一つの要因らしい。

「ああ、気持ちいい。よし、勝ち逃げしよう。」

「あのなあ……まあ、構わんけど。」吉田が呆れたが文句は言わなかった。

その時、教室のドアをノックするものがいた。  
トントントントントントントントントントント。

「**どんだけノックしてんだよ。**」

「岩本さんか。どうぞ〜」

吉田が言うと、怒ったような顔の岩本が現れた。

「アンタは何やってるの？校舎中に響いてるけど？」

「ボンバーマン5です。やりますか？」

「真顔で答えないで！周りの迷惑とか考えたらどうなの？」

「うるさかったですか？」

「はい。」

$$\begin{array}{c} \lceil \\ H \\ m \\ m \\ \vdots \\ \lfloor \end{array}$$

「何よ、その反応は！」

Oops!!!

「だから何で英語表記なのよ！」



「そうそう、厨房であらゆる技で……………」

「また、ぶり返すか。」春日がそう言って遮った。

「何でそんなことを？」

「暇ですから。」

「……………暇も暇ね。で、こつくりさんは来たの？」

「全然。当たり前ですが。」

だよー、と岩本が言ったその時だった。

チャリン、ワワワワワ……………という音がした。

音がした方を見た春日が言った。

「何だ、小銭が落ちたのか。」そう言って、10円玉を戻す。

「明日体育あるよ、ダルいなー」吉田が明日の科目を教室の  
掲示を見ながら言った。

「別に、いいじゃない。楽しいし……………」

「おい、吉田!!」

会話が春日の叫びで中断させられた。

「こっち来い！」春日が手招きした。吉田と岩本が近寄る。

10円玉が勝手に動いていた。

「……………ス。」

「来る前にはテと二を差したんだ。」

「テニス？」

「また動きがある。」岩本が言った。

「ジ……………ヤ……………イ……………ア……………  
ン……………ツ。」 岩本が言う。

「ジャイアンツ？」

ここで、吉田がハツとして言う。

「春日！さっき何て質問した？」

「……………さっき？ああ、俺の一番得意なスポーツは……………」  
そこまで言って黙り込む。吉田が言った。

「僕は『僕の好きなプロ野球球団は？』と聞いた。」

「テニス、ジャイアンツ……………来てるのか？！」春日が真っ青  
になった。岩本が指差した。

「まだ動いてる……………」

もう質問はないはずだ。しかし、10円玉は動き続ける。

「こ……………ろ……………す。」

次の瞬間、電気がすべて消えた。

スイッチを押す音もしなければ、点滅もしなかった。

「何なの！」岩本が怯えた声で言った。

「何か寒気がしてきた……………吉田、どうなってるんだ！」

「知らん。とにかく一刻も早くここを出よう。」吉田が言うと、  
春日は頷き、直ぐ様鞆を持つ。

「春日、悪いが燃やすぞ。」吉田は言うが早い、手から炎を  
出し、紙を燃やして閉まった。続いて10円玉を床に置き、踵落と  
しをする。

10円玉は割れた。

「すげー！」

「悪い、10円は後で返す。」

「別にいいよ。」

「10円を笑うものは10円に泣く。」吉田はそう言いながら、超特急で荷物を片付けた。岩本が教室から出たとき、驚きの声を上げた。

「見て、あれ……………」

「ほう。」吉田も変に感心している。大職員室のある向かいの校舎がガラス張りの廊下から見えるのだが、真っ暗だった。まだ6時になっていないのに、異様に職員が誰もいないのだ。

吉田達のいる校舎も異様に暗い。

「真っ暗だ……………気持ち悪つ。」春日が2人の後ろから言つた。

「岩本さんも早く校舎を出た方が良いです。」

「うん、そうする。」岩本はいくらか慣れているのか冷静だった。

3人はB組教室まで行き、また驚かされた。

B組教室も真っ暗だった。

「友達がいたんだけど……………」

「帰ったんですかね？」

「……………あ、いつの間にかメールが……………」

…『ごめん、早く帰って留守番するの忘れてた。後で穴埋めするから、今日はもう帰ります。』だって。」

本来悲しむべきことだが、今はホッとしているようだ。岩本も素早く荷造りをして、B教室から戻ってきた。

「行きますか。」吉田が早歩きで先陣切つて移動する。

中央ホールに戻ってきた時だった。

1階から何かが上がってくる。ヒタヒタと音がする。

2階に上がりきった所でそれを待ち構えた。

ヒタヒタヒタヒタヒタ……………

やがて、それは姿を現した。唯の教師であつた。

唯の教師は白衣を来ている中年の男性できちんと顔もあつた。暗い顔をしていたが、人間らしい。

岩本がホツとしたらしく、さようならと挨拶をした。

返事はない。

3人がすれ違つた。その時、吉田が床を見た。

真つ赤なラインが出来ていた。暗闇なため、岩本と春日は気付いていない。

吉田は男性の後ろ姿を見た。

背中が真つ赤に染まっていた。

その視線に気付いたのか、男性が振り向いた。

「……………」見た「男性が首だけ回してこっちを見、背中からは相変わらず血が流れている。」

吉田が恐怖というより、興味からじつと見つめていると岩本が階段下から呼び掛けた。

「何やってんの？急ごうよ。」吉田は動かない。

「だから何を……………」岩本がやれやれというように階段を上がつてきて、目の前の者に啞然とする。

「……………」マタ見夕……………」男性が言った。

「は……………」

「何やってんだ？」春日も来た。そして同じように男性を見た。

次の瞬間、男性がこちらに体を向けて歩き出した。

「いやああああああああ！！！！」岩本が叫び、逃げ出した。

「うわあっ！」春日も岩本とは違う方向に逃げ出した。

男性は突如、吉田に向かって猛然と走り出した。考える間もなく、吉田は突進され、倒れた。

男性が白衣の下からナイフを取り出し、吉田に突っ立てようとした。

しかし、吉田が避け、ナイフが固い廊下に全力で当たって刃が折れた。吉田がサッと立ち上がり相手の脚をすくった。男性が転倒した。

吉田は情け容赦なく、男性の髪を掴み、何度も床に打ち付けた。だんだん体から力が抜け、やっと気を失った。

吉田が直ぐ様離れて、二人を探した。

\*\*\*\*\*

海老澤が体育館から忘れ物を取りに教室棟に戻ってきた時にはまだ5時数分前だった。

「電子辞書……………電子辞書……………」呟きながら、教室棟の階段を上がり、2階に来た。海老澤はその時、ふと奇妙な物を見た。赤いインクのような物が廊下に線を引いていた。一旦無視して、通り過ぎたが、インクのような物の匂いが妙に鼻についた。海老澤は不審に思い、液体をシューズの先で触れてみた。

と。

「うわ」海老澤が驚きというより不快感で声を上げた。ローションのようにネトーツとして糸を引いたのである。

海老澤はシューズの先を振って液体をとった。

当初の目的を忘れ、海老澤はG組教室へと続く廊下を直進せず、

左へと折れ、液体を辿った。

液体は階段を上がり、3階に達していた。液体がだんだん、ラインというより点々としてきていた。

やがて液体は理科室へと入っていった。海老澤も入って行った。

電気のスイッチを押したが、点かない。理科室は黒いカーテンがしてあり、暗かった。4月の夕方だというのに、海老澤はどういう訳か寒気を感じた。理科室に入っすぐの地点で液体は途切れていた。海老澤は理科室を一通り回ってみた。ちなみに理科室といっても化学室というべき場所なので、人体模型や奇妙な生き物はいなかった。それらは生物研究室にいる。

海老澤が一つしかない出入口から最も遠い場所にある洗面台に来了。鏡がある。一つ一つを注意深く見て回った。

日常と変わらない。そう思って、最後の鏡を覗きこんだ。

「うおおお！」海老澤が驚いて後ろを振り向いた。ボタンとドアが閉まった。

海老澤が鏡を見たその瞬間、鏡の中で海老澤の後方を白衣を着た何者かが通過したのだ。

そして、今いる場所と正反対の場所に化学準備室があった。そのドアが音をたてたのだ。

『見るな、今すぐ引き返せ。』

こんな声が海老澤のどこで叫んだ。そうだ。その通りだ。別に何で化学準備室に行く必要がある。今は下校時刻でもない。生徒や教師がいても不思議はない。おそらく自分の存在に気付かなかったから、注意も何もしなかったのだらう。

海老澤は急ぎ足で教室の出口へと向かった。嫌が上にも勝手に視線は準備室のドアにいつてしまった。

ようやく、教室の出入口に着き、最後はほとんど走るようにして出た。ドアをスライドさせ、大きな音をたてたがバシンと閉めた。心臓を抑え、教室棟に急いで引き返そうとしたその時。

グサツ、グサツ。

こんな音が隣接する準備室から聞こえた。室内を通しても、廊下を通しても、準備室とは繋がっているのである。

グサツ、グサツ。

何やら音が聞こえる。

グサツ、グサツ。

海老澤はまたしても奇妙な感覚に襲われた。別に見る必要などない。今すぐ引き返せばいい。だが、何かが海老澤を見るように促している。

グサツ、グサツ。

海老澤は準備室の前に移動する。

海老澤がドアノブを握ったその時、音が止まった。いや、止まらなかった。



「春日！！岩本さん！！」吉田が声を張り上げて名前を読んだが、返事はない。昇降口にも行ったが、両者の外履きはあったのだ。そもそも、昇降口が外からも内からも鍵が掛かっていた。少なくとも、外に出たなら内鍵がかかる筈がない。

非常階段は開けば警報がなるので気づくはずだ。

と。

「貴司！！貴司ーーーー！！」声がした。

「む？岩本さん。」

「貴司い。良かった〜」岩本は走ってきて吉田の目の前で息を切らした。

「岩本さん、どこに行ってたんですか？」

「ええ？自分のクラス。」

「ほう。何でまた。」

「だって怖くて……………教室なら入り口が2つあるからいざとなったら逃げられるし。」

「なるほど。春日を見ましたか？」吉田が言つと岩本は首を振った。

「困ったな。岩本さんは先に脱出して下さい。妙な気配がさつきからしてるんですね。危険です。」

「うん……………でも、貴司一人で大丈夫？」

「まあ……………大丈夫ですよ。」

「本当に？」

「はい。」

「でもいいや。あたしも探すのを手伝つよ。」

「……………そうですか。」吉田が素っ気なく言った。

「貴司、顔色悪いよ？大丈夫？」岩本が心配そうに言った。  
「……………大丈夫です。」吉田が顔をしかめ、歩き出した。  
「春日はどっちに行った……………職員室の方に行ったよな……………」  
チツ……………」

「ねえ、本当に大丈夫？」岩本がさらに追求するが、吉田は曖昧に頷くだけ。

「大職員室に行ってみますか。」吉田は頭を振りながら言った。

\*\*\*\*\*

春日は息を切らしていた。

物陰に隠れ、辺りを窺う。

何も起こらない。

春日はほつとため息をついた。4月にも関わらず、校舎は異様に暗い。真っ暗と言って差し支えないレベルである。

春日が座り込んでいた物陰から立ち上がった時。

ピリリリリリリ。

「おっ。」春日は短く声を出し、自分のポケットをまさぐる。

「……………G組のメーリングか。」

春日はほつとため息を付くと中央ボタンを連打して開く。

(non title)

本文

「才前ノウシロ」

春日は思わず後ろを振り向いた。

誰もいない。

「何なんだよ、差出人はだれだ？」春日は呟くと、携帯を操作した。

「誰だよ、これ……………」春日は顔をしかめた。メーリングは差出人がすぐ分かる。本文の上に名前が出るのだ。その名前が……

「死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死」だった。

春日は気分が悪くなり、携帯を強引に閉じた。

それにしても……………あの白衣を纏う男は何者だろう？亡霊か？何かの誤解か？

春日はこっくりさんをやり始めてからこんな事態になったと後悔した。

「はあ。」冷や汗をかいてしまった。

春日はハンカチで拭った。と。

何やらヌメヌメしている。春日は自分のハンカチを持った手を見た。

真っ赤だった。

「おえい！！」春日はハンカチを取り落しながら叫んだ。

ハンカチが真っ赤だ。

「なななな？！」春日は危うく腰を抜かす所だった。  
すると、ハンカチがこちらに飛んできた。

なかなかのスピードだ。

「うわあああああ！！」春日が一目散に逃げ出した。

GWですが、何の予定もない川田です。

こんにちは、皆さん。毎日皆さんからアクセスして頂き、本当に力をもらっています。ありがとうございます。

先日、この小説を同じクラスの女子が読んだらしく、噂になってしまっていました。幸い、アクセス履歴が最後のアクセスだけをカウントするらしく、このサイトを見失ってしまったようで、あまり勘づかれるようなことはないです。

この小説の登場人物は全部が全部ではありませんが、実在する人物の名前を微妙に変えて構成しています。地名が一切登場しないのも個人の特定を避けるためです。

肖像権………はあ。

著作権 これ、たまに、ウザく感じませんか？え

？お前の小説パクっても良いのか？

いや、こんな小説を誰がパクると言うのか？でも考えて見ればそういう事ですね。反省、反省。どうぞ、今回も大富豪同好会の奇跡をよろしく願います。

吉田と

岩本は大職員室がある校舎と教室棟とを繋げる通路を走っていた。春日の叫びが聞こえたのだ。

「なんかあったのかな？！」

「そうでなければ叫ぶ意味がありません。」吉田が冷静に答える。渡り廊下を完全に通過した時、春日が左側の末端から走ってきた。必死の形相だった。

「吉田っ！！助けてくれ！！」春日がこちらに気付いて叫んだ。吉田は春日を追っているものを見てゾツとした。

「ぎゃああああああ！！！！」岩本が叫ぶ。

春日の後ろからほく前進で髪の毛の長い白い服を着た女がハンカチで縛っている脚とともにやってくる。ただし、女は両足とも膝から下がなく、片方は元々らしく、何事もないが、右足は大量の出血だった。ハンカチで傷口を縛っているらしい。春日には見えず、吉田や岩本には見える。吉田はもう、そういう霊能力があるうがなかるうが、否応なしに依頼で経験しているので、見えて当然だが、岩本に見えるということは、岩本自身に霊能力があるのだろう。

呑気に解説してる場合じゃなかった。

春日が吉田の所までやってきた。真っ正面から吉田と女が対峙する。

「こいつ、テケテケだ！」吉田が興奮して叫んだ。すると、女がピタリと止まった。春日と岩本は恐る恐る様子を窺う。

「テケテケって何だよ。」

「都市伝説を知らないのか？」吉田が前を見たまま言う。春日が頷いた。

「口裂け女とか。テケテケは見た通り足がないのだ。」

「何が見えてるんだ？」

「そうか、見えないのか。」吉田はそう言つてテケテケに近づいた。テケテケは吉田を恐ろしい目付きで睨んだ。吉田は怯む様子を微塵も見せず、テケテケの脚の方に回り、手から火を出した。

「えっ?!」春日が驚いた声を出した。

「てい。」 吉田が掛け声とともに火を脚に落とした。

燃え上がった。

テケテケは怒りと痛みに叫び、吉田に向き直り、襲いかかろうとした。吉田はその途端、翳していた右手を振り上げた。突然、火が収まり、テケテケの声も止んだ。出血が止まっている。

「これで大丈夫か？」吉田がテケテケに向かって発言する。テケテケは物凄く微妙に頷いた。

「吉田が幽霊と話してる……………」春日が壁にもたれながら言った。

「オイオイ、こいつは幽霊ではないぜ。召喚された霊体だな。まだ見えないか？」吉田が春日に聞くと、春日は頷く。

「さて、と。」吉田はしゃがみこんでテケテケに言った。春日と岩本は固まっていた。

「君をここに読んだのは誰？」

.....

「教えないなら、脚をまた斬ろうか。」

「おい、吉田………」春日があきれた。一言目には脅迫である。吉田はテケテケの目の前に火を突きつけた。

「コ……イ……」 テケテケはそう言つと、身を翻した。

「なるほど。」吉田は岩本と春日を振り返った。

「二人は今すぐ学校を出た方がいい。職員玄関から出れば、早いだろう。」吉田はそう言ってテケテケについて歩き出した。

「おい、お前はどうするんだよ？」春日が聞くと、吉田が薄く笑った。

「君たちには関係ないことだ。これ以上嫌な目に会いたくなかったら、撤退を勧告する。」

「……………」春日は動かない。が、岩本は全てを察した様子で春日の腕を掴んだ。

「行こう。これ以上は危険よ。」岩本が言った。春日は躊躇いながらも頷き、吉田に背を向けた。二人が立ち去ったもう一度振り返った時には、吉田の姿は見えなくなっていた。

\*\*\*\*\*

海老澤は息を切らして、G組教室に戻る途中であった。

「ハア…………ハア…………」普段は冷静な彼でも非日常を目の当たりにしたのだ。息が切れているだけ、というのもなかなか立派なものである。

「…………先生…………いや、警察に連絡か？」海老澤の口から言葉がついて出てきた。携帯を探る右手が震え、無駄にジャージに皺を作る。海老澤がやっと、G組教室にたどり着くと、もぬけの殻……………ではなかった。

白衣の男がいた。右手には刃渡り20センチはあろうかという刃物を持ち、左手には……………

切断された、人間の脚を持っていた。

[illegible]

「……………」  
海老澤は逃げない。

恐怖で麻痺した訳でもないし、勇敢に立ち向かうつもりでもなかった。海老澤の目はただ一点に注がれていた。

足が透けている。その一点に。

「うりやあああああああ！！！」 刃物を振りかざす男の鼻先でドアを閉めた。

だ  
が。

刃物ごと体が突き抜けて、海老澤の目の前に現れた。海老澤はそれを見て、冷静に判断した。

白衣の男が海老澤に至近距離から攻撃をしかける。

海老澤は鞆で身を守る体勢に入る。刃物が鞆に突き刺さり……

真つ二つに斬った

かに見えたが、刃物は鞆を通過しただけだった。そのまま床をすり抜ける。

白衣の男が笑うのを止め、海老澤を睨み付けた。海老澤は身を翻し、全速力で逃げた。白衣の男が慌てて追いかけた。

\*\*\*\*\*

吉田はテケテケの後について歩き続けた。

テケテケはほく前進で進み続け、理解室に達すると止まり、吉田の方を向いて睨んだ。吉田も止まり、理科室を凝視する。

「ここがどうかしたか？」 吉田は理科室を睨み付けたまま言った

た。

「コ……………ロ……………サ……………レ……………タ……………」  
テケテケの声が妙に高くなった。

「殺された……………」吉田が理科室に近づきながら呟く。テケテケは黙って吉田を見ている。吉田はテケテケを無視して理科室に入り、扉を閉めた。

理科室はカーテンが締め切った状態で、電気を点けようとスイッチをおしても点かなかった。

吉田はつかつかと窓際に歩み寄り、カーテンをガバツと開けた。相変わらず暗いままだ。吉田は顔をしかめ、理科室を出た。

次に理科準備室に向かった。テケテケも吉田の後をついてくる。

吉田は理科準備室のドアノブを捻る。

鍵がかかっていた。

吉田はフンと鼻を鳴らすと、癒えてはいる右手を取手から離し、ポケットをまさぐる。

なんでもないピンセットを取り出すと、それをねじ込んだ。1分かそこらで鍵が開く。吉田はわずかと踏みいった。中には誰もいない。しかし、吉田は入った瞬間、顔をしかめた。理科準備室の中央には大きな机、というよりもテーブルと言った方がふさわしいくらいの大きさの机があるのだが、その上にハエが数匹飛び回っていた。

吉田が近づかずに、背伸びだけで、机の上を見た。

血にまみれていた。

テケテケが後から入ってきて、恨めしそうに机を見つめた。その時、背後から何かが走ってくる音がした。急いで部屋を出ると、階が違うらしく、階下から聞こえた。

吉田がテケテケに頷き、無言で不動の命を下すと、階段を降りた。

と。

「ウオッ！！！！！」

「又アア！！！！！」

海老澤が全速力で走ってきた。そして、吉田と正面衝突しそうになり……………危ういところで両者が左右に別れて避けたので、衝突は回避された。

「何やってんだよ？」吉田が立ち上がりながら言った。海老澤は急いで立ち上がり、20メートルほど先の廊下の交差する場所を指差した。

ダダダダタ！！と音がして、白衣を着た男が現れた。

「ほう。」吉田が息をつき、海老澤は睨みを効かせる。白衣を着た男は猛進してきた。吉田と海老澤は2階にいるため、階段の踊り場で迷った。

「どっちに行く！」

「上だ！！」吉田が答え、3階と2階の中盤の折り返しに来たときに、白衣を着た男が追い付いた。吉田と海老澤はそのまま階段を駆け上がった。

「うわあああああつっ！！！」海老澤が叫んだ。テケテケがいるのを忘れていた。吉田はそのまま海老澤を引っ張りテケテケの後に回り込む。

白衣を着た男が現れた。

「こいつ、何?!」海老澤がテケテケを指差して吠えた。

「味方の幽霊……かな。」吉田が言った。海老澤は啞然として吉田を見つめる。白衣を着た男は階段を上がった所で立ち止まり、テケテケ、吉田、海老澤と対峙する。テケテケが不意に唸り声を上げた。

「力……………エセー……」

吉田がほお、と感心する。白衣の男が吉田を睨む。

「あいつに脚を切断されたのか。白衣の血は返り血か。」

「脚を切断?!」海老澤がテケテケの脚を見てさらに青くなつた。

「カエセ!!!」かなりの大声に吉田と海老澤が黙る。憤怒を表情に出し、今にも殺意で相手を焼き殺しそうだ。白衣の男は白衣を脱ぎ捨てた。

身体中に刺青だらけで、生傷やいわゆる根性焼きの痕などがあった。吉田はそのうちの一つを注意深く見た。

「G」のアルファベットが漢字の「森」「品」のように3つ並んだ焼き痕だ。吉田の表情が変わる。

「お前……………」親の仇敵を見るような目であり、テケテケと同じように声に怒りがこもっていた。

「気付いたのか、火術師?」男が言った。

「その呼び名を知ってるか。となれば、お前の雇い主はどこだ?」吉田が冷たく言った。海老澤は押し黙って聞いていた。男が笑う。

「俺は人間に戻れた。この通り実体があり。声を出せば聞くことも出来る。だから依頼主を裏切るような事はしない。」

「……………嘘だ。」海老澤が言った。

「お前は俺を斬ろうとした時、俺が閉めた扉をすり抜けた。さらには俺を斬った筈の刀は俺を通り抜けた。お前自身どこるか、お

前の所持品すら実体がないだろう。」「海老澤が言つと吉田が啞然とした顔になる。

「確かか？」

「ああ。」「海老澤が当然と言わんばかりに頷く。吉田が男を見ながら言つた。

「さつき足音がしてたよな？」

「……………え？」

「こいつは……………少なくとも目の前にいる『こいつ』は……………霊じゃない。影だつてできてる。」「吉田が指さした方を見ると、確かに真つ暗な中で、非常口を示す緑色の明かりでぼんやりと影ができていた。

男が急に走り出した。

吉田がとつさに火球を投げた。男は当たる。男は何かに当たつた感覚はあるらしく、立ち止まりはしたが、燃えなかった。海老澤が蹴りを入れる。男は海老澤の脚を受け止め、逆に放り出した。

「ぬあつ?!」「海老澤が叫び、吉田にぶつかりなぎたおす。男が猛進する。と。

「ウアアアアアアアアアアアアアア」奇声を発してテケテケが男の脚に絡み付いた。男はテケテケを蹴飛ばし、吉田達に殴りかかる。吉田がテケテケの奇襲の間に立ち上がり、それを掌で受け止める。腹に膝げりを入れ、体を曲げた所で頭を殴る。流れるような動作で男が地面に倒れた。

男がなおも立ち上がるうとするので、海老澤が顔面を殴つた。

男は暫しの間諦めなかった。吉田と海老澤は情け容赦なく蹴りと殴りを入れ返り血を少々浴びながらも、脚の骨を折ることで動けなくした。

「さてさて。」吉田は男の手の傷口の上に靴でふん上る。

「ぐ……………」男が苦痛に呻く。吉田が男の髪の毛を引っ張って頭を持ち上げさせる。

「さて、依頼主は誰かな？」吉田は何の前触れもなく聞いた。

「……………」グウー！」男がさらに大きな声を出した。吉田は傷口の上で靴の踵を回転させていた。

「聞き方が悪かったかな？それとも……………」吉田が言うと、男は信じられない行動に出た。口から何かが出たかと思うと、急に体が重くなった。髪の毛で引っ張りあげていた頭がだらりと下がる。吉田が手を離すとバタリと倒れ、動かなくなった。

「自死した。」吉田が言うと、海老澤がギョツとしたように下がった。

「死んだ？」

「舌を咬んだんだな。」

すると、死体が粉末に変化しだした。その勢いの早いこと早いこと。あっという間に男の亡骸は粉末になり……………」

「おお。」吉田が持ち上げたのは、後に遺された人間の脚だった。

「テケテケの唯一、欠けた遺部だったんだな。これで成仏すりゃいいんだが。」吉田はテケテケの方を見た。テケテケは蹴られて壁まで吹っ飛んで伸びていた。

吉田は海老澤と顔を見合わせるとツカツカと歩み寄り、テケテケの脚の部分に遺部を無理矢理接合させた。グチャと嫌な音がして接合は簡単にできた。

テケテケがガバツと起きた。そのとたん、真っ暗闇だった校舎に電気が点り始めた。テケテケはニタリと笑って、そのまま消えた。ただし、遺言を残して。

「レイジユツシハ、オクジョウニイルハズダ……………」

時計を見ると6時を過ぎていた。

「なあ、今日起きた事は、現実なのかな？」

「リアルだね。」

「あの白衣の男は何だったんだ？」

「僕はまた殺人を犯したわけじゃない。奴はとんでもない能力の持ち主だった。」

「やつぱり幽霊なのか？」

「そうさ。しかも幻肢を自由に使える幽霊だったんだ。自由に人と接触したり、半透明になったり………て具合にな。」

下駄箱に向かう途中、吉田は何故か帰ろうとせずに、トイレに立ち寄っていた。

「じゃあ、あの時、何で俺は斬り殺されなかったんだ？やつぱり触れてるものは半透明にしかならないのか？」

「海老澤よ、お前あん時ドアを締めたらすり抜けて来たって言ったよな？」

「ああ。」

「その僥倖だな。扉をすり抜けて一気にお前を殺そうとしたんだ。ところが肝心な体を具現化されるのを忘れてしまった。だから、刃物は海老澤をかすただけ。そもそも、触れてるものは半透明になるなら白衣やズボンを履ける訳ないだろ。もつと言うならすり抜けると分かかって刃物を突き刺すか？お前は空気を相手にするとき銃で撃ったり、刃物で斬りつけたりするか？しないだろ。最後にお前はなんで校舎にいた？」

吉田に聞かれ海老澤は一部始終を話した。

「血のあとね。もう出しちまった体液は自分では管理できなかったんだろ。テケテケ？？ああ、あれは霊………僕の敵が、送り込んできた刺客さ。ところが、幸運なことに、M高に住み着く霊に脚を切断されてしまった。テケテケは脚を怪我して見えないだけでそもそもはあるんだよ。だから斬られた事でこんな場所に派遣した主人を怨んだんだろうな。最終的には万事解決。後遺症は、春日や岩

本さん、海老澤を巻き込んだことだな。」

海老澤も岩本とは1年の時、一緒のクラスだったし、春日とは2年で一緒になった。海老澤はトイレから出た吉田を慌てて追う。何故か吉田は階段を上がった。

「何処に行くんだよ。」

「屋上。」吉田が答え、ついて来ようとする海老澤に言った。

「昇降口はもう、宿直の先生が閉めてしまっただろう。だから非常口から出な。着いて来るなよ。これ以上お節介を焼いたら、半週間は意識を飛ばしてやるからな。」

「じゃあ一つだけ聞かせろ。」海老澤は2年連続同クラスの付き合いで一度も聞いた事のないセリフを吐く。

「お前は何者なんだ？」

吉田は不意を突かれたように、眉を潜め、鼻を鳴らして答える。

「海老澤と同じ人間だ。変わった人だなとはよく言われるがな。」

「吉田はそう言って階段を上がり姿を消した。」

## CHAPTER 7-3 火術師×靈術師（前書き）

すみません、遅れました。待っていた方々がいらつしゃった場合はすみません、そしてお待ち頂きありがとうございます。

高校生最後の学園祭の準備で忙しくなりました。しかし、これからは週一で投稿できるよう頑張ります。皆さんのアクセス履歴に毎日勇気を頂いております。どうか、大富豪同好会の軌跡、完結までお付き合い下さい。

## CHAPTER 7-3 火術師×霊術師

### 棋道部室

三次志穂は別に行く用がないのに習慣上来てしまい、棋道部にいた小橋と後藤と話していた。小橋は三次とは初対面だったため、後藤の紹介を経る必要があった。

「霊術師がね……………」小橋が話を聞き終えて呟く。後藤は小橋が知らなかった事を責めたりはしなかった。

「吉田君が処理に当たるとはまた珍しいな。普段なら俺達に押し付けるもんだ。」

「場合が場合ですから。霊的相談はいつもそうでしょう。」

「そういう霊的相談は結構多いの？」

「多いですね。警察なんかはそういう事には無能ですから。」

後藤がさばと答えた。

「今日は貴司君は……………非番？」三次がおずおずと言う。

「非番ですね。でも学校には残ってるかも。」

「ああ、エミューレータか……………」小橋がガツクリと頂垂れる。

「エミューレータ？」

「気にしないでいいです。珍しい物じゃないですから。」

「仕事？」

「……………」

「……………」

二人は押し黙ってしまった。

### ―屋上―

吉田が南京錠を簡単に破り、屋上の広い空間に出た。誰もいない。しかし、吉田は屋上に足を踏み入れたその途端に強い怨念のよ

うな物を感じた。吉田は乱雑にドアを閉めた。

「あああああああああああ！！」突如、奇声を発しながら、白い顔をした男児が走ってきた。吉田の冷たくかわし、男児に向けて火球を放った。

「ぐわあああああああああああああつつつつつつ！！！！！！！！」男児が叫び、体が燃え上がった。身体中があつという間に火に包まれ、人体が焼ける匂いとは違う、海草が焼ける匂いに似ている。

男児はあつさり燃え上がって消えた。

「やるな。まさかのための番犬をこうもあつさり焼身死させるとは。」声がした。

「……………名前忘れた。」

「ウソお！！」

吉田が入り口に立ち、屋上の奥に男子が立っていた。吉田と同じくらいの男子でニヤニヤ笑っていた。

「前道……………前道一也ただけだな。忘れんなよ。俺はお前を覚えてるつーのに。」

「雑魚は知らん。追い込まれたのに、遺言は書かなくていいのか？」

「おいおい、殺しは勘弁だぜ。だが、お前は どうしてここが分かった？」

「裏切りの幽霊がいたな。」

「誰がだ……………まあ、いい。」前道は吉田とな間を少し詰めた。吉田は微動だにしない。

「吉田、お前は少々お節介が過ぎる。もうとつくに気付いているだろうから言うが、三次を俺は殺すつもりはない。三次の霊封じを封じなければこちらが困る。」その言葉に吉田が微妙に頷く。

「三次さんがお前にとって不利益な存在になり得るとは分かっていたが……………霊封じとはなんだ？」

「霊封じとは……俺が遣う亡霊を霊眠させることだ。安らかに眠らせるのではない。言わば睡眠薬や麻酔を使って眠らせるのよなものだ。無理矢理、怨みを奪いさるのだ。三次の場合は三次の眼球を直視すると、霊達は見事に成仏してしまう。そんな力は早く奪わないとなあ。」

「ああ、それで三次さんが見た霊は皆顔を隠してたのか。」吉田は一体一体を三次の話を聞いたように思い出した。

青いレインコートの奴……フードを深く被る。老婆は髪で目を覆い、赤ん坊は決して目を開けなかった。テケテケも老婆同様、髪で目を覆っていたし、白衣の奴は最初は俯いて歩いていた。

「何も殺すつもりはないぜ。だから取引しよう。俺はお前とは戦いたくない。」前道が立ち止まった。

「どんな。」吉田が言った。前道はわざとらしく咳払いした。

「うるせえよ。」

「ゴホッ、バフッ!!」何か咳き込み始めた。10秒ほどそうしていた。

「……あのなあ、三次と交わる必要がある。」前道が言った。

「……は?」吉田は理解するのに数分かった。

「だからキスさしてくれ!!!」前道が真剣なので、吉田は呆れた。

「したけりや三次さんに言えよ。好きだつて。」

「三次は……俺とは絶対そんなことはしない。」前道がボソボソと言った。

「何でそんな事が分かる?……って僕は何で敵を慰めてんだ。」

「俺は三次の元カレだ。」

「ほう?」

「三次とは同じ中学校だった。あの娘は中学時代から人気が高かった。お前も好きなんだろ?だから、こんなに一人の依頼者に付

きつきりなんだろう？」

「さあ？どうだろうなあ？」

「フン、で三次に告白したがフラれた。そういう訳で元カレだったのよ。」

「……………カレってそういう定義なの？」

「とにかく！三次に頼んでも無駄だ。だから無理にでもキスさせようと誘拐を試みたが、悉くお前に邪魔された。だから、お前が手を引けばそれでいい。三次とキスさえすれば俺ももう三次をつけ狙いはしないし、お前も負担は減る。どうだ？うまい話だろ？」

「……………」

「……………なっ、どうだ？」

「……………」

「おい……………」

「……………」

「キレイなよ……………」

「ZZZZZZZZ……………」

「寝るな！！！！！」

「わぁ、なんだなんだ。」

「話聞いてた？」

「帰ろ。」吉田は背を向ける。

「おっと。逃がすかよ。」霊術師がパチンと指を鳴らすと、屋上の出入口に数え切れない程の霊体が現れた。

「何のマネだ？」

「さあ、取り引きに応じるな？応じたら、俺は帰るし、霊も払うさ。」

「ふっ。」吉田は鼻で笑うと、霊体に火球を放った。霊が苦しみ出した。

「到底乗れない相談だな。お前については……………」

吉田は霊術師に近寄る。そして近距離から火球を放った。霊術師はかわし、吉田に向かって腕を振る。

すると燃えていた霊が一気に吉田に向かってきた。吉田は距離を詰められない。肉弾戦になれば間違いなく吉田が勝つであろうが、距離を詰められないよう、霊術師の戦い方はあくまで間接的だった。「焼き払うのが、間に合うかなあ？」霊術師は嘲笑うかのよう

に吉田に向かって腕を振るいつづける。

「……………うっ。」吉田を数の暴力が捕らえた。霊体の腕が、吉田の腹に命中していた。

「クソッ。」吉田が一旦霊術師から距離をとる。霊術師の足元から湧き出ているので、距離を取れば、数が多くても問題はない。しかし、それでは膠着状態が続き、体力的に吉田がダウンするであろう。

「オラオラア！」そんな事を知ってか知らずか、霊術師はひたすら霊体を出していた。……………と思いきや、霊体を出すのを止めた。急に何かを唱え始めた。

「うおらっ！」吉田が 火棒を作り、次々と焼き払う。霊体に聖火があたるだけで引火し、体が炎上していく。しかし後から後から敵は向かってくる。吉田は前道に向かって吠えた。

「銃弾はいつか尽きるぜ。日本刀は折れない限りは攻撃力が持続するがな！」そう言って片端から霊体を焼き払う。

前道は無関心にずっと何やら呟いている。その様子を見て、吉田はハッとした表情で霊体に背を向け、落下防止のフェンスに向かった。

「よっ。」吉田は火球を上空に放った。火球は最高到達地点に達すると爆発した。

―棋道部室―

「?!」

「これは……………！」後藤と小橋が慌ただしく立ち上がった。

吉田が書いた部誌を読んでいた三次も顔を上げる。

「何の音？」

「……………あれは！」後藤が部室の窓を開けて校舎の屋上を見ながら言葉を失う。

「三次さん！」

「はい……………？」三次が後藤の迫力に押されながら言った。

「三次さんを狙ってた奴が分かりました。あれは合図です。急いで行きますよ！」

「私を狙ってた人……………！」三次も顔を強張らせる。小橋が先頭をきつて飛び出し、後藤と三次がそれに続く。

小橋が軟式野球部で鍛えられた俊足を飛ばし、1分ほどで、校舎にたどり着く。だが。

「鍵がかつてる！！！」

「任せてください！」後藤が素早く玄関の鍵穴にヘアピンを差し込む。カチャツと音がして、入ろうとする。

「グハツ。」後藤が開かないドアにぶつかった。

「上にも鍵がある。」小橋が見上げながら言った。

「届きませんよ……………」身長164と小柄な後藤には無理な相談だった。小橋でも無理だ。よって……………」

「よっこらせと。軽いな後藤くん。」小橋が肩車する。数秒で今度こそ開く。

階段をドストスかけ上がり、屋上のドアを一気に開けた。

そのとたん、火球が後藤を掠めた。

「おう。」後藤はやはりというように、冷静に避け、吉田を見る。吉田が一旦、戦闘から離脱する。

「ごつつぁんに小橋、それに三次さんも。」吉田がのんびりと言った。

「霊術師はどこに？」

吉田は霊術師を指差す。未だに、瞑想中のようだ。

「チャンスですな。どれどれ……………」後藤が敷居を跨いだ。

そのとたん、全身が真っ白な男児が後藤に向かって走ってきた。  
「ハッ。」後藤は一瞥しただけで、中指で人差し指のように男児に向かって突きつける。後藤が手首を捻った。ピキピキピキ……

男児が凍りついた。小橋が感心した声を上げ、三次が驚愕の声を上げた。  
「今のどうやったの?!」三次が男児を恐る恐る見ながら言った。

「企業秘密です。」後藤がさらりと答えた。

「しかし、厄介ですな。」後藤が吉田の傍らに立ち、霊の群れを見つめた。霊たちは今、吉田達の出方を窺っているようで、何もしてこない。

「ああそう。言うの忘れてた。ここに入ると霊術師が張ったバリケードがあるから、三次さんは入ってこな……………」吉田は三次を見つめる。三次はコンコンと固まった男児を叩いたり、足でつついたりして男児で遊んでいた。吉田が呆れてため息をついた。

「小橋、援護を頼みたい所だが、三次さんの保護をよろしく。」

「できつかな。屋上は植物がほとんどないから嫌いだ。」

小橋はとりあえず、三次の周りに立った。

「じゃあ、行くよこつっあん。」

「はいっ。」後藤が袖を捲った。吉田と後藤が霊達に一步踏み出したとたん、霊達が一斉に襲いかかってきた。

「ううおらあ!!」吉田が火棒を振り回し、凧ぎ払う。後藤は霊体に蹴りを入れて倒し、霊体に近距離で中指を近づけ、何か呟いてはカチコチと固まらせていく。吉田の火棒を勇敢にも掴んだ霊体が、吉田にパンチを入れようとした。吉田はかわして、火棒をその霊体の腹に突き刺し、あっという間に引き抜く。霊体は奇怪な声を出す暇もなく、煙と化していく。仲間を倒されて激怒した霊体達が吉田と後藤に殺到する。しかし、その数はかなり減っていた。吉田と後藤はなおも、敵を倒し続けていた。

と、あらぬ方向から奇怪な声がした。小橋が後ろに三次を庇い、金属バットで敵を倒していた。

「木製バットだったらこんなこと出来ねえよなあ。」小橋が向かってきた敵を一通り倒してから吉田に親指を突き立てる。金属バットから湯気がたっている。

「なるほど、金属バットを熱したんですか。単純で効果的ですな。」後藤がバットをちら見ただけで確認し、今は目の前の敵を倒し続けながら言った。

「小橋に直前に頼まれてな。流石は3番バッター!!」

「誉めてんのか？」

「当たり前だのクラッカー!!」

「死語w」そんなやりとりが交わされ、ほとんどの霊体が消えた。

あと10体をきつたという所で、それまで黙っていた前道が歓喜の叫びを上げた。

「ハッハー!!間に合ったア!!」前道が叫んだ方向を吉田、

後藤が上着を揺らしながら見る。

「なっ……………」

「えっ……………」吉田、後藤が見た先には体長5メートルはある大男が立っていた。

「巨人？」

「……………」巨人の腕の太さは後藤の胴廻りより太い。

「ケツケツケ。」前道は愉しそうに笑った。

「こいつ、大丈夫か？」吉田が素で言う。

巨人が吉田と後藤の真ん前に立つ。

「動かない方がいいな。こいつの腕の長さじゃ何処に逃げても捕まえられる。それなら、待ち構えてた方が賢い。」

「……………」分かりました。「後藤も待ち構える体勢に入る。」

だが。

「やべっ。」吉田の後ろから霊体が襲いかかる。吉田が振り返り、3体まとめて焼き払う。

「吉田君！」後藤の珍しく焦った声が聞こえ、吉田は振り返る。

「はあっ?!」吉田は大男に首を掴まれ持ち上げられる。後藤が大男に蹴りを入れる。何も感じない様子で逆に後藤に蹴りを入れる。後藤はかわす。

「このやろう!!」吉田が上着の内ポケットから刃渡り20センチはあるつかという刃物で腕を斬った。

腕が落ち、吉田も落ちた。

「ふっ。せいぜい頑張りたまえよ。」前道がスタスタと退散する。

「小橋、三次さんと一緒に追え！」吉田がつかみかかろうとする大男の腕を切り落としながら叫んだ。

「分かった。」小橋は怯えている三次を立たせ、前道を追いかける。

「なっ……………」?」後藤が啞然とした声を出した。切り落とすたはずの腕を拾い、くつつけたのだ。

「クッククク……………」吉田が笑い出した。

「吉田君？」後藤が吉田を見て不審そうに問う。 「ク

ツクツク……………」楽しめるぜえ。久しぶりに本気を出せるぜえ。ごつつあん?こいつなら殺しても『殺人』にはならないよなあ?」

吉田の目がギラギラ光る。後藤も目が鋭くなり言う。

「ですね。どうせ死んでるんです。『もう一回』死なせてやりましょう。」

吉田は火棒を捨て、刃物を握り、後藤も氷術で短剣をつくる。

「ウアアアアアア!!!」

「うん!!!」吉田が襲いかかってきた大男に構わず、そして怯まず刃物をフルスイングして、腕を切り落とそうとする。大男がか

わした。しかし、勢い余って、屋上の出入口にぶつかった。  
が。

出入口は無傷だ。

「厄介だな……………また例の奴だ。」

「例の奴とは？」

「体の具現化した部分を自由に換えられるんだ。急に触れられなくなったりするから、ウザイぞ。」

「なるほど……………」

二人は起き上がった大男とにらみ会う。

「これは……………」

「後藤君から。護衛用のもの。早くここから逃げて。」小橋が校門で言う。三次がどうしたものか悩んでいると、前道がやってきた。

「おや？こんなとこで何してんの？」

「前道……………君？」三次が自分の目を疑うというような言った。

「そうだ。覚えてたか。」

「あなただったの……………？この何週間も、私や私の友達に迷惑をかけてきたのは……………」

「フッ、今ごろ気付いたか。お前が大人しくあの時に付き合っていたらこんなことにはならなかったんだよ。」

「……何言ってるの？ふざけてんの？！」

「悪いのはお前だ。」

「フフフ」

?

[illegible]

三次が笑いだした。前道の傲慢な表情が崩れ、小橋の涼しげな顔も強張る。

「分かったよ。付き合っただげる。」

「え？」

「アンタが望んだことだよ。」三次がこんな声を出す日があるとは小橋には思えなかった。

「『拳の付き合いかた』をたっぷり教えてあげる……………」

「……」 三次はそうして、右手をまくりあげた。

この章の投稿までに長い時間がかかってしまった事を深くお詫びします。学校の方が大変忙しくて執筆が遅れ、アイデアも潰れ………と不安定な時期が続いてました。しかしながら、皆様のアクセスを頂き本当に励みとなりました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。ありがとうございます。さて本編ですが、戦いもいよいよ、終結に近づきます。皆さん今度も遅くなるかも知れませんが、どうかよろしく願います。

「ぬおっ！」吉田が危うく大男の殴りをかわした。

「ふっ。」後藤が短剣で脚を斬ろうとした。だが。

「……………」？「後藤が顔をしかめた。」

「また透かしましたか……………」

「本当に厄介な野郎だな……………」吉田は地面に唾を吐いた。

「どうします？」

「そうだなあ。とりあえず逃げ……………」ん？？「吉田の目の前に大男が素早く移動してきた。吉田は驚愕しながらも、なんとか大男の殴りをかわす。急いで間をとる。」

「なんだコイツ?!」

「どうしました？」

「さっきまでそこにいたの……………」なあ?!」

吉田が大男の殴りを危うくかわした。素早い動きで向きを再び返る。吉田と後藤は急いで距離をとった。二人が顔を見合わせる。

「今の動き見えたか？」

「少しだけ……………」本当に間近にならないと見えません。」後藤は顔をしかめた。

「じゃあ、どうやって……………」またか!!」吉田が今度はキレのある動きでかわした。大男が突進してきた。吉田がかわしたので、大男は柱に突っ込むはず……………」

だが。

柱を通り抜けた。

「便利な体だな。どうやって攻撃すりゃいいんだよ。」

「逃げますか。」

「……………」だな。」吉田と後藤が逃げる。

「マテ……………」轟音とともに、大男が吉田達に突進してきた。

後藤がかわし、吉田は棒をさしこんで転倒させた。

「イデ……………」大男は躓き、転倒した。その弾みで、屋上のドアに激突し、出入口が埃で見えなくなった。

「イデ……………ヨケルナ……………ムダ……………」大男は立ち上がりながら、吉田と後藤を睨んだ。吉田が目を細めた。

「逃がしてはくれないか。やはりな。」

「倒すしかありませんね。」後藤が冷たく言う。吉田が火球を放った。

大男は腕でそれを振り払う。大男が突進してきた。

「同時攻撃！」吉田が火球と刃物で一ヶ所を集中攻撃する。

「ア？」大男の脚は具現化されていた。吉田が刃物に体重をかけていたので、大男の脚の肉を抉った。吉田は刃物を引き抜き、素早く離れた。

「両方やればどちらかは当たる。間違いなく、『中間』にはできないからな。」

「でも、体力削りますよ。持ちますかね……………？」後藤が不満げに言う。体力を削ると術の威力が弱まるのは当然である。大男の体力は分らないが、吉田達よりは間違いなくある。

「イデ……………イデエー！」大男は立ち上がるうとして、躓いた。脚が思った以上に負担らしい。

「おっと光明が見えたか？奴の脚は思ったより重症だな……………スビードも落ちんだろ。」吉田は大男が壁に掴まりながら立ち上がるのを見ていた。

「足を切断しましょう。動きを封じてから逃げるなりなんなりしますか。」後藤が答えた。

―校門

「貴方は許さない……………早く謝りなさい？許しを乞うなら今だよ？」三次が言った。

「ちよつ、三次さん？ダメですよ。何する気？」小橋が右腕を三次の前に出して制止する。

「どいて！」

「退かない！」小橋が右腕で三次の腕を掴んで制止する。前道が呆れたように言った。

「マジにやろうとしてんの？俺、抵抗するなら手加減しないよ？」

「うるさい！早く離して小橋君！」三次が暴れるので、小橋は全力で彼女を押さえつける必要があった。なおもがくので小橋はポケットから、ハンカチを取り出した。

「もがっ！ふぁひふんほほはひふん！」ハンカチで口を押さえられた三次がもがく。（ちなみに、何すんのよ、小橋君。）前道は小橋の行動に訳がわからず、キョトンとしている。やがて、三次の体から力が抜け、バタリと倒れた。

「よし。」小橋はそう言うのと、鋭く口笛を吹いた。

「うるさっ！！さっきから何してんだ、うおっ！！」前道に何かが飛びかかった。犬だ。

「ようし、ボブ、そいつを足止めしとけ。間違っても。」小橋は犬に向かって言う。

「食い殺すなよ。」小橋はニヤリと笑って、三次をおぶって校門から外に出た。

「待ちやがれ！」前道は追おうとするが、前に立ちふさがる生き物がいた。前道は奥歯をぐつと噛み締める。

体高１メートルはある、マスチフが唸り声を上げて、睨んでいた。

―屋上―

「うえいつ！」吉田が刃物で背中を切りつけた。脚を斬ったことで、間違いなく具現化したり、透明化したりする力が衰えていた。

「だあつ！！」後藤が氷で手を斬った。これも命中。

「一体、何回やりや良いんだよ！」吉田が腹立たしげに吠えた。スピードは衰えていたが、退路は修理しなければ逃げられない。敵に背を向けて退路を修復するのは本末転倒である。吉田も後藤もそれなりに体力を消耗していた。術の威力が弱まっているので、肉弾戦に持ち込んでいるわけだが、それを悟られて、透明化して攻撃されると明らかに不利になる。

「ふんっ！」吉田が火球を放った。火球が大男に命中したが、燃えはしなかった。吉田が顔をしかめた。

「せっかく透明化したのに残念だなあ。弱ってきたぜ。」

「まずいですね……………吉田君。」

「何？」

「ちよつといいですか……………」後藤は吉田に耳打ちした。

「ええ……………大丈夫かよ。逆の方がよくないか？」

「無理です。火術だからこそできるのです。」

「……………分かった。」吉田はそう言い、後藤に向かって頷くと、出入口に向かって走り出した。後藤は大男を見つめる。

「マテ……………ドコニイク……………」

「頼みましたよ、吉田君……………いつまで持ち越えられるか……………」

## 校門

「小橋か？」

「おおっ。海老澤君。」小橋は三次を背負ったまま、急停止した。

「誰？それは。」海老澤は小橋が背負っている女子を指さして聞いた。

「俺の友人。ちょうどいい。海老澤君。」小橋は丁寧に三次を地面に下ろした。

「目が覚めるまで側にいてやって。」

「は？」

「じゃ、頼んだ。」小橋はそう言うなり、走っていった。

「おまつ――おいつ――!」海老澤が叫ぶのに構わず、小橋は走り去った。

「はあ……なんなんだ、アイツ……って、三次さんじゃないか！ どうしてこんな顔してるんだ……？」 普段は温厚で優しく、美少女という言葉がとても似合う三次が憎しみを浮かべた表情をしていた。海老澤は立ちすくんでいた。

「てめっ！このクソ犬！！」前道は腕から出血していた。術を  
使おうとするたび、マスチフに邪魔され、思うようにいかず、拳げ  
句の果てにナイフで戦っていた。マスチフは腹に切り傷があつた。  
マスチフは表情を変えず戦っていたが、出血死するかもしれなかつ  
た。

「犬！覚悟しろ！！」前道がナイフを振りかざす。マスチフは素早く避けようとして、腹の苦痛に呻き、倒れた。

「貰ったあああああああああああああああ  
あああああああ」前道が叫んで、ナイフを降り下ろす。

「うぐあっ！」 前道の呻き声が響いた。

「俺のボブに何をする。」低い声がして、小橋が現れた。小橋が丸太を抱えていた。丸太で突き飛ばされた前道は逆上した。

「貴様、何者だ。丸太を突っ込んできたのは貴様か？」

「ちがうな。丸太が突っ込んだんだ。」

「……は？」 前道が唸った。

「ふん、分からないか。」小橋はそう言うと、近くのメマツヨイグサに触れた。

途端、メマツヨイグサがみるみる長くなり、前道に襲いかかった。前道はギャツと叫んで、かわした。しかし植物はどんどん伸び

てきた。

「このっ！！」前道はナイフで植物を切った。

「とまあ……………」小橋が言って植物から手を離れた。

「こんな感じよ。分かった？」

「……………てめえ、何者だ?!」

「2回目だな。まあ、教えてやろう。」小橋は丸太をドンと金棒のように突いた。

「大富豪同好会、序列5位、『緑術師』小橋だ。よくおぼえとけよ。」小橋が不敵な笑みを浮かべた。

「聞いたことないぜ……………新入りか？」

「いや？発足時からいたが？」小橋はどうでもいいという口調だ。

「そうか……………屋上には植物がないから……………」前道は奥歯をぐつと噛み締めた。

「さあて」小橋が、再びメマツヨイグサに触れた。

「チッ。」前道は校門から出られず、再び校舎に戻っていった。

## 屋上

「ドコダ？」

「は！」後藤の氷の短剣が鋭く背中を抉った。

「イデー！」大男は呻き、倒れた。後藤が着地し、素早く間を取る。

「ドコダ、ニゲルナ！」大男が叫び、辺りを探りだした。後藤は急いで物陰に隠れた。

「早くしてくださいよ、吉田君……………」不満をボソツともらしたその時、大男の腕が伸びてきた。後藤はそれを見るなり、切りつけるが。

「なにっ？」後藤が僅かに表情を変えた。

「しまった…幻術が使えるのか！！」後藤は顔をしかめた。

「ミツケタ……………」大男がじわじわとやってきた。後藤は陰から飛び出し、一目散に逃げた。

「ニガサナイ。」大男はそう言って、柵の一部を掴んだ。そして、一部を力づくで引き抜いた。

「なっ……………」後藤は焦って、新たな物陰に身を潜めた。その途端、ものすごい音をたてて、柵が吹っ飛んでいった。後藤は息を殺して潜伏する。

「ドコダ……………」マタイナクナツタ。「大男はキヨロキヨロしながら後藤を探す。後藤は警戒しながら、氷細工で、槍を錬成し始めた。槍投げの方式で、遠投して

攻撃するのである。しかし、時間がかかるので、距離を取らなければならなかった。後藤は残念なことに幻覚を見破る事が出来ないのである。物陰に隠れていて、正しい判断ができないと自滅することになりかねない。危険な賭けだった。

「寒い空気が幸いだな。それに雨上がりで水溜まりもある。」

後藤は水溜まりに触れ、一瞬で凍らせた。そこから何か呟き、細長いものを作り出した。透明に光る槍の形が出来上がった。後藤はそれを握りしめ、力を込め始めた。外見は変わっていなかったが、どうやら硬化しているようだ。なかなかスピードが遅かった。大男が歩き回る気配が感じられた。

後藤は息を殺して錬成を続ける。その時、遠くでパンという音が鳴った。

「……………」後藤ははやる気持ちを押しさえつけ、錬成を続けた。

「ミツケタ……………」大男が叫ぶのが聞こえ、続いてゴ—という音が聞こえ、大男の苦痛の叫びがこだました。

「ごっつあん早く……………」

吉田が叫ぶ声が聞こえた。

後藤は30秒ほどしてから、物陰から飛び出した。

「吉田君！」

「そこか。急げ！」吉田が叫んだ。見事に修復された出入口の下で手招きしている。

「ニガス力……………！！」大男がまだ追ってくるので、後藤は槍を遠投した。

「ガアアッ！！」目に命中！！大男はフラフラしながらのたち回った。やがて……………

バギン！！という耳をつんざく音と共に、大男は屋上の鉄柵を破り、10メートル以上の高さから落下し、数秒後、ドシンという嫌な音がした。吉田と後藤は冷たい目でそれを見届け急いで屋上を離れた。

―校門―

小橋が繰り出す植物を利用した攻撃に前道は翻弄されていた。

「グオッ！」

「ほう、なかなか良い反射神経だな？」小橋は近くの枝に触れる。枝が鋭く伸び、前道を襲う。

（霊術を使えない……………！！）前道がよけるのに精一杯で霊術を使えないのは見越していた。というか、氷術や火術には緑術は相性が悪いだけで、霊術のような術を発動するのに時間がかかるタイプの術には最高に相性が良かった。

「テメツ！！」前道は怒りに歯軋りし、石を拾って投げた。小橋は避けもせず、植物のつるで弾いた。

「さあて、仕上げと行こうか？」小橋は植物に寝そべる。途端、植物の蔓が前道に10本も20本も向かう。前道は悲鳴を上げて、逃げ出したが、捕まり、木に吊るされた。

―敷地外―

「あつ。」三次が目を覚ました。

「ん？」携帯を弄っていた海老澤がこちらに顔を向けた。

「起きました？」海老澤は携帯をパタンと閉じながら言った。

「……………あつ！」三次は敷かれてい

たビニールシートの上から跳ね起きた。

「小橋君に殴られた……………」

「は？小橋に？」

「あれ？海老澤君？」

「……………うん、そう。」

「舞の彼氏君だね。どうしてここに？」

「後に話します。」

「ふーん。」三次はそれだけ言つと校門の方に向かって歩き出した。

「ちよ、どこに行くんだよ？」

「学校！やらなきゃならない事があるの！」三次は走り始めた。

海老澤も追いかける。

その時、校門で激しい声がした。

「ウォーッッッッ！！」小橋の声だ。

「小橋君？！」三次が叫びながら、校門から入った。海老澤も続く。

小橋が腕から出血した状態で、木にもたれていた。

「全く、手間かけさせるんじゃないよ。」聞き慣れない声がした。海老澤、三次、小橋が見た方向に日本刀を持ったすらりと背の高い女子が立っていた。

女子は前道を縛っていた蔓を斬った。

「全く、ホントに世話がやけるなあ、アンタ」

「フン。」前道は礼も言わず、地面に着地した。

「さて、坊や？随分この子を可愛がってくれたね？礼をしなくちゃなるまいね？」女子がそういうと小橋に向かって突進する。

「ちっ」小橋は舌打ちしながら植物に触れた。

「無駄、無駄ア！」女子は向かい来る植物を全て風ぎ払い、小橋に向かって突進し続ける。小橋は逃げを決め、攻撃をかわした。

「逃げられるかね？」女子は直ぐ様方向を変え、小橋を襲う。小橋は腕を庇いながらも逃げる。だが。

「ぬおっ？！」小橋を前道が後ろから押さえつけた。

「ナイス、前道。」女子は小橋の前に立ち、腕に刀を這わせる。

「便利な力ね。腕を切りはしないけど、筋を斬らせてもらっわ。」

「止める！」小橋が暴れるが、前道の力に押し潰された。

「じゃ、うちひしがれなさい。」女子が日本刀を小橋の腕に突き刺した。

「ヌアッ！」小橋が悲鳴をあげる。

「ゴオオオオオ！！！！！！！！と大音量がしたかと思うと、女子を業火が襲っていた。

「奴ね。」女子は驚くでもなく、刀で業火を吸収した。

「僕の仲間は何をするつもりだ？」校舎から吉田と後藤が現れた。

「ちっ……………」前道が二人を見て舌打ちした。

「残念でした、あんな大男じゃ足りないな。で」吉田は海老澤や三次が驚愕する前にも関わらず、追求した。

「『剣術師』の上久保が何の用だ？」

「こいつの帰りが遅いんでね。刺青に埋め込んである虫を辿ったのよ。」

「ふっ、邪魔が入ったな。帰ってくんないかな？そいつが僕の友人に無礼な真似をしたんだ。おまけにまだ狙いがあるとか？早め

に討滅したいんだが？」

「アンタたちこそ、こいつの邪魔したんじゃないの？あんたらを肅清したいのはこっちなんだが？」

「ほう？愚かな。我々にケンカを売るか？」

「いかにも。」そう言うと、上久保は剣を構えた。

「ふっ、いい度胸だ。」吉田が火棒を取り出した。 「うっ

っあん、そっちは任した。」

「分かりました。」後藤が答え、小橋に向かって頷き、自分は前道に向かって歩き出した。小橋は海老澤と三次に向かって走り出した。

「二人とも、巻き添えをくらいたくないなら急いで脱出だ。」

「おう……………」

「……………」目の前の光景を興味津々で見つめる二人を無理矢理歩かせる。上久保が何か叫びながら突進してきた。

「何をするつもりだ？え？」吉田がにやつきながら言った。

「一度本気で殺って見たかった……………」

「あんたこそいい度胸だよ。気に入った。アンタなら殺し甲斐もありそうだ。」上久保が日本刀を吉田に向けた。二人の目から火花が散るのを海老澤達は見届け、急いで学校を離れた。

## CHAPTER 7-5

### 火術師×靈術師（前書き）

このCHAPTERだけやたらと長くなりました。当初の計画より長くなりましたが、そして遅くなりましたが、章は完結です。アクセスして戴いた方はありがとうございます。これからもどうかよろしくお願いします。

- 校舎外 -

「小橋、大丈夫か？！あいつらは一体誰なんだ？何しに来たんだ？貴司達とケンカしてるのは何故だ！どうして手から火が出るんだ？」海老澤は一気に捲し立てた。小橋は何も言わず二人を駅の方へと案内した。

「おつて話す。今はなるべく学校から離れることだ。」小橋はそれ以上は何も言わなかった。

- 校門付近 -

吉田と上久保が刃物を目にも止まらぬ速さで振り回していた。

「流石は会長？いい腕してんな？」上久保は間が離れた所で言った。

「そいつはどーも。」吉田は冷たく言った。

「尚更、切り殺すのは惜しい。だが！！」上久保は再び突進してくる。距離を詰めなければ吉田の火術の餌食になるからだ。吉田は逆に逃げる。吉田は十分な足の速さを持つてはいたが、上久保はそれなりに俊足だった。以前、後藤と闘った時、足の速い後藤ですら、距離を詰められた。

「うおおおおおっつつつ！！！！」上久保は雄叫びを上げて突進してくる。吉田が火球を投げつける。鋭い送球だ。しかし、上久保は刀で風ぎ払う。

「そんな重いものを振り回せる力があるとは。女子とは思えないな。」吉田がこういう間に上久保は吉田との距離を詰め、脚を狙う。

「フン。」吉田は逆に脚で、刀を握る手を蹴った。

「ウツ。」上久保は小さく呻き、前のめりに倒れた。

「ウラッ！」吉田がさらに膝げりを腹に入れ、蹴り飛ばした。

「ガハッ！！」上久保は咳き込み、距離を取らされた。

「喰らえ」吉田が火球を放つ。

「なっ……………」上久保は焦って刀を持ち直したが、吉

田の火球をもろに食らう。

「あつつ、あちっ！！あつつうつうつ！！……！」体が燃え上がった。吉田は冷酷な目付きで見つめる。

「あああああああああああああああ……」上久保は叫びながら地面を転がり回り、火を消した。

「どうだ？まだ抵抗するか？今度は本気で焼き殺すぞ？」吉田は冷酷な声で言う。

「貴様あつ！！……！」上久保は吠え、銃を取り出した。

「むっ。」吉田は急いで近くの草むらに伏せた。ほふく前進で移動する。その際、校庭の校門付近で後藤と前道が戦っているのが見えた。戦っているというより、一方的ないじめと言う方が正確かもしれない。後藤が次々と氷の短剣で繰り出す攻撃をくらうか逃げるかのどちらかだ。どうやら霊術の討滅に成功しそうだ。

「死ねえ！……！」その時上久保が叫び、吉田を撃つ。

「下手くそ。」吉田は草むらでほくそ笑んだ。元々剣術師なのだから銃の扱いに不馴れな事くらい簡単に予想できたことだ。

パン、パン……………

銃声が止み、吉田は草むらから火球を放った。

「ガハッ、あああああああああああああ……」上久保の悲鳴が大きく響いた。

「駅」

「大富豪同好会の宿敵？」三次が目を丸くした。

「そう。俺らのやることを芳しく思わない連中がいるってこと。

「小橋が駅のベンチに腰掛けながら言った。

「その一味なのか？さっきの奴らは。」

「そ。」

「何て組織なんだ？」

「名前はGGGっていうんだ。………知らんよ、

そっぴや何の略だらうな？やつらの体の何処かにGが『森』『品』  
みたいに3個書いてある刺青があるんだよ。」

「何で大富豪同好会を芳しく思わないの？憎まれるようなこと  
したとか………」

「………3Gも俺らみたいに依頼を受けてそれに応える  
所謂何でも屋みたいな感じなんだ。だから、依頼が被る時がある。  
例えば、『AからBを取り返して欲しい。』とCが俺らに依頼した  
としよう。それに対して、Aが『CからBを死守して欲しい』との  
依頼を3Gにしたらどうなります？俺らが戦うことになるよね？そ  
ういう訳だよ。」

「だから邪魔な訳………商売敵みたいなもの………？」三  
次が言つと小橋は苦笑した。

「商売にしちゃ、利益が無さすぎですね。高値な依頼は3Gが  
引き取るから。」

「え？どうして？」

「評判の違いだよ。」

「どういうことだ？何故評判が悪いんだ？安値で解決率の高さ  
は校内でも有名だぜ？」

「ふ、そうか。そりゃありがたい。だが、俺達は何でもかんで

も依頼を引き受けるわけじゃない。」小橋は二人を見た。二人が黙っているの、小橋は先を話した。

「俺達は犯罪協力や理不尽な連中の依頼は受け付けない。『誰かを怪我させる』とか『アリバイの証人になつてくれ』とかの依頼はシャットアウトです。3Gはそれをも受け入れるんだよ。」

「裏金の証拠揉み消しとか、不利な犯罪歴の抹消とか。そういった奴らはいくらでも金を積む。だからこそ、大盤振る舞いもでき、評判も上がるのさ。分かった？」

「だけど、構わんよ。校内生からは信頼されてるなら助かるし、少なくとも……………」小橋は二人を見た。

「依頼者や協力者はありがたい存在です。」

「あつ……………」

「クックク……………」なかなかくさいぜ、小橋よ。」

「ありがとうよ。」小橋が礼を言った。

「……………」ねえ、小橋君。」

「ん？」

「学校に戻っていい？」

小橋は信じられないという表情をした。

「俺を困らせたいの？会長が逃がせと言ったのに、ノコノコ戻るなんて……………」

「ううん、吉田君や後藤君、もちろん小橋君にもおれいが言いたい。お願いします。」三次が頭を深々と下げた。

海老澤はニヤニヤしながら、小橋を見ている。

「……………」ッ、駄目なものは駄目です。頭を上げてください！」

「良いって言うまで上げません！！」三次の声は前道に掴みかかるうとした時の声と一緒にだった。小橋は数分粘ったが遂に根負けした。

校舎

「さあ、最終通告だ。」吉田は上久保の真つ正面に立ち、冷たく言った。上久保はボロクソだった。

「拍子抜けも良いところだ。かつて上久保は僕をかなりの所まで追い詰めた……………今回はどうした？やられっぱなしで反撃もなし。つくづく哀れな奴め。」吉田が地面にペツと唾を吐いた。

「……………殺すのか？」 上久保が憎々しげに顔を上げて唸った。

「なんで、貴様みたいな奴の為に手を汚さなければならぬんだ？ 貴様をどうこうするつもりもない。貴様が女だからといって乱暴する趣味もない。」吉田が言うと、上久保はけたたましく笑い出した。

「アハハハハハ！！！！この人は何言つてんだろね！！手を汚さなければならぬ？アンタの手は血まみれだよ！今更何を躊躇う？！何人もの不良を陰で本当に殺してきながら、動きの鈍い女一人すら殺せないなんて滑稽！！！！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ぎゃああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」吉田は上久保に迫り、肩を斬つた。切り落とすてはいない。

「日本刀を握れる日がまた来るといいな。虫けらが。」吉田は上久保の日本刀を鞘にしまい、両手で鉄棒のように握り、膝げりを入れて叩き折った。

「虫けら……？」

上久保はピクリと反応した。

「貴様のような弱い奴は……」

「違うな。」

「あ？」

「私が弱くなつたんじゃない。アンタが強くなつたんだ。」

「……慈悲の乞い方は学んどけ。」

「前に戦つた時は、私の打突を受け止める力があんなに強くなかつた。」

「……」

「何があつた？強くなる要因……」

「さあな。」吉田は上久保に背を向けた。

「助かるかな？それとも、出血死になるかな……？」吉田

は残酷な笑みを浮かべ立ち去ろうとした。

「待て。」

吉田が止まり、振り返つた。

「逃げさせてもらう。」前道が後藤の衝撃をいくつか受けて、血まみれになりながらたつていた。

「……ごつつあんは？」

「気絶してる。」

「まさか……！」吉田は先程まで後藤がいた場所を見た。

確かに小柄な体が倒れていた。

「貴様、どうやって……ン？」吉田が空を見上げた。数分

の思案のうち、笑いだした。

「ハッハッハ。自爆したか。」吉田は前道を見た。

「霊力を使いきつたな？あ？全く気配が感じられないんだが。」

「ちっ。」

「最後の力を振り絞つて、ごつつあんを殺そうとしたな。甘いぜ。そんでなくても弱つたお前が、ごつつあんを倒す？」

「……」

「いいぜいいぜ。逃げれば？討滅に成功した訳だ。なら文句なしだ。貴様らのボスは貴様らを人質に取つた所で切り捨てるに決まつてんだろ。」吉田がこんなに歓喜に満ちているのを初めて見た二

人は校門から歩き去った。

「フ……………さて。」吉田は後藤の所まで歩いていき、後藤の意識を冷まさせた。

「ん??あ、吉田君……………しまった、前道は?!」

「討滅に成功した。だから逃がした。」

「……………!!逃がした?!」

「駄目だった??」

「前道は靈力を使いきつんですよね?」

「そ」

「……………ならいいんですが。」後藤はようやく安心したようだ。

「貴司君……………!!!!」

「……」その時、校門から三次が叫びながら走ってくるのが見えた。

「ありや?逃げてなかったのか……………」吉田は苦笑しながら言った。

「はあはあ、怪我は……………ない?」三次が肩で息をしながら言った。

「大丈夫ですよ。どうやら三次さんをつけ狙った奴も滅ぼせたようです。」

「ホント?!すごい!!」

「さっき前道が上久保を抱き抱えて俺らの脇を素通りしたな。二人とも血のレールこしらえてたな……………」

「小橋、病院行った方がいいんじゃない?出血がひどいぜ。」

「ん。ああ……………行くさ。後で。暫くは……………」

「?」

「?」

「野球が出来ないかも。」

「なっ……………！」海老澤が絶句した。

「お前、クラスマッチはどうするんだよ。」

「ああ、部活の事言っただが……………H m m、そっちも休むようかも。」

「あのなあ、そんななくても硬式野球部員がいなくて困ってんのに、軟式野球部員まで休んでどうすんだよ？」

「俺が出てても足手まといになるだけだな。この肩じゃ、打つだけで精一杯だ。」

「まあまあ。」吉田が割って入った。

「これから練習にも参加するさ。小橋だって、クラスマッチまで1週間以上あるんだぜ？」

「本調子には戻らないだろうな。少なくとも、フル出場は危ぶまれるな。」

「サードだっけ？小橋は？」

「そっ。そうだ、海老澤君。サード俺と兼用しよう。」

「……………ああ？」

「怪我した代役はお前だろ？忘れたんじゃないだろうな。」

「スマン、忘れてた！！」

「謝った割には堂々としてるな。」

「そうか？サーセンw」

「テンション高いな。」

「あの……………」三次がいつまでも雑談している吉田達に向かつて言った。

「帰らないの？」

「……………ヤベ。」海老澤はそう言って、携帯を取りだし、電話をかけ始めた。

「どうした？」

「親。」海老澤は短く答えると、電話越しに弁解を始めた。

「三次さんは大丈夫？」

「帰るのいつも9時くらいだから、大丈夫。貴司君達は大丈夫？」

「……………大丈夫ですよ。」

「右に同じです。」

「？……………そう？」後藤と吉田の満足気な顔に曇りが走った気がして、三次は戸惑った。

「ふ……………やれやれ。もうこんな時間か。」海老澤は携帯をポケットにしまいながら言った。

「親に電話したら、夕食待つてらんないから食ってこいとか言われた。誰が行かないか？」

「フム、ファミレスならOK。」小橋が言った。

「たまには良いかもな。戦勝祝い？」吉田も言う。後藤も頷く。「うん、私も行きたいけど……………ゴメン。」三次が言った。

「っと……………そりや残念。」海老澤はガックリと肩を落とした。

「一人で大丈夫？」海老澤が粘る。

「うん、今日は皆ありがとう。」

「……………いや、お礼には及びません。まだ奴らは死んだわけじゃないので……………」

「ううん、そんなこてじゃないの。」

「……………？」吉田、後藤、小橋、海老澤はそろって首を傾げる。

「誰も相談にのってくれないような事や、警察が無視してしまう事までお世話になって……………上手く言い表せないけど、本当にありがとう。」

「フツ、どういたしまして。」吉田がクククと笑った。

「じゃあ、駅までは一緒に行きますか。」後藤はそう言って、立ち止まった。

「荷物を部室に忘れた……………！」

「俺もだ！」小橋と後藤が走り出した。

「先、行ってるからな~~~~！！」吉田が言つと、海老澤と三次が笑いだした。」

夜の校舎に笑い声が響いた。その笑い声とは裏腹に憎々し気な顔をした男が立って吉田達を見つめていた……………

## CHAPTER 8-1

### 開戦、クラスマッチ（前書き）

初めての感想を頂きました。投稿して下さった方、ありがとうございます。創作意欲が沸々と湧いてきたので、すぐに次話投稿となります（笑）ようやく暑く、夏らしくなってきました。部屋にエアコンをバンバンに効かせて、執筆に励むという、良いんだか、悪いんだか分からない生活を送っています。皆様、これからも大富豪同好会の軌跡をよろしく願います。

4月24日。

三次は朝登校すると直ぐ様部室棟へ向かった。

棋道部と書かれた表札を確認しドアをノックした。無言。

「いないかな……………」？「三次はつまらなさそうに、部室の前の壁にもたれた。手には、バスケットがある。」

数分後。

「ギリリギリリと軋みながらも、それでもまた再び動き出す。こんな声が聞こえてきた。」

「何の歌？聞いた事はあるんだが……………」別の声がした。三次は壁から離れた。部室棟の2階に位置する棋道部室に向かって聞きなれた声が階段を上がってきた。

「ポルノグラフィティのシスター。そんなのも知らんの？」吉田が現れた。

「ふむ？三次さん。」

「おはよー！」

「おはようございます。」小橋が吉田の横から現れながら言った。途端に三次が顔をしかめた。二人のジャージは汚れ、汗臭かった。

「何してたの？」

「クラスマッチの野球の練習。肩が思うように動かんし、痛いよ。」

「小橋が肩を自分で揉みながら言った。」

「三次さんは何を？」吉田が聞いた。三次は気を取り直して言った。

「お礼です。クッキー焼いたから、皆で食べてね？」

「ふむ？手作り？」小橋が興味津々で聞いた。

「そうだよ。」

「三次さん……………」吉田が三次を見つめた。三次は少し赤くなって、目を落とした。

「何か盛ってないでしようね？」

「……………」なんでそうなるの！！失礼な！！」三次は怒りだした。しかし、吉田と小橋はその反応で満足したようだ。

「どうやら、安全なようです。ちょうどいい。三次さん、貴方にお話することがあるので入ってください。」

「……………」

「？どうしました？」

「……………」着替えるのに邪魔じゃない？」三次は嫌そうに言った。

「フム？確かに。じゃあ着替え終わるまで……………」

「ちよつと今時間ないの！そう、週番だから！昼休みでいい？」

「……………」構いませんが。」

「ありがとう。じゃー！」三次はそう言うと言姿を消した。

「どうしたんだろ？」小橋が言った。

「さっぱり分からん。」

「ハアハア……………」いくら貴司君達でもあの汗臭さは勘弁……………」

「……………」三次はサツと教室に戻った。

―教室―1時間後

「小橋の肩が使えない？！ああ？」

「ああじゃねえよ。」小林に小橋の負傷を伝えた所、小林はもえだした。吉田が冷たく返す。

「どーすんだよ、誰がガードを守るんだあ？」

「無駄にドスを利かすな。替えがいるだろ？」吉田は無駄に顔を近づけてきた小林を押し返す。

「うん、小橋が守備できないならヤバイぜ。あの完璧な捕球、送球、そして、打撃！！替えはちなみに誰？」

「俺。」そう言つて、二人の前の海老澤が振り向いた。とてつもなく眠そうな顔で目は真つ赤だ。１時間目の地理の授業で白玉、立枝といった爆睡常連と共に、海老澤も寝ていた。担任であり地理教師の川北先生は同情なのか憐れみなのか嘲りなのか分からない笑みを浮かべて授業を続行していた。そのせいで女子は涙目、男子は震え、恐怖の授業となつた。吉田や小林でさえ、何度も顔を見合はせた。

てな訳で、海老澤は確実に成績に響きそうだが、そんなことは今は些細と、元気に後ろを向いた訳だ。

「よだね。」

「ぬっ？」吉田に指摘されて海老澤がじゅるりと拭った。

「海老澤か。海老澤クラスマッチは恐らく、スタメン出場になるからな？おK？」

「良いの？おっしや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
あああ！！！！！」

「ふんふん」

「グフッ?!」海老澤が吉田と小林の視界から消えた。

「全く、スタメンになれただけで満足な訳？結果を残さなきゃ、クビよ。」女子バスケ部の黒澤瑞穂が海老澤を殴ったらしい。

「あのな！」海老澤は唇から流れる血を拭きながら言った。

「試合に出ることがどれだけ難しいか分からののか？男子は2人もいるし、野球はそれに対して何人だ？ああ？」

「分かった分かった分かった分かった分かった分かった分かった分かった」黒澤は蠅を追いかうかの仕草で言った。

「貴司君は出るの？」隣でやり取りを見て笑っていた蛭原が吉田に聞いた。

「出ますよ？ ショートで。」

「へえっ、頑張つてね！」蛭原が優しく笑ったが、吉田は素っ気なく頭を下げただけだ。

「女子はどうなん？優勝行けそうか？」小林は黒澤に向かって言った。

「優勝行けないようなチームじゃない。」

「助詞が抜けてるな？焦るなつて。ハハハウグツ？！」茶化した報いに海老澤の鳩尾に黒澤の鉄拳が入った。

「とにかく、負ける気でやるわけないでしょ？やるかには優勝よ。」黒澤は小林に向かってビシツと言った。

「ほう？なるほど。」小林はそれ以降は何も言わず、2時間目の化学の予習を始めた。

―昼休みの部室―

三次が部室に行くと、またしても大音量で音楽が流れていた。しかし、大音量から逃れるように後藤が部室の前の壁にもたれ、携帯をいじっていた。

「後藤君。」呼びかけた。答えない。無理もない。大音量にかきけされて、声なんぞ聞こえないのだ。

「後藤君。」三次は後藤の真ん前に出て言った。ようやく通じたらしく、後藤が手をあげ、部室等の壁を叩いた。すると音楽が止んだ。

ガラガラガララー！！！！

ドアが勢いよく開いた。音楽も止まった。中には吉田しかいない。

「いらっしやい。どうぞどうぞどうぞどうぞ。」吉田がパイプ椅子を指さし、座るよう言った。

「三次さん、調子はどうですか？」

「はい、大丈夫です。」三次がしっかりと答えた。

「そりゃ良かった。先日、我々を襲った組織を詳しく知りたが

つていると、小橋から聞いたのです。」吉田は真向かいに座り、本棚から書類をだした。

「さてさて……………」吉田が整理してるのに構わず、三次は聞いた。

「あいつは……………前道は死んだの?」

「え?まさか。三次さん見なかったんですか?三次さん自身がすれ違ったはずですが。前道と上久保を。」

「見ました……………でも……………」三次がどもった。

「海老澤君にも、小橋君にも言ったんだけど、私は、前道しか見てないの……………上久保って誰?」

「……………」吉田が突如立ち上がった。

「何の冗談です?」

「冗談じゃないけど……………」?

「……………!まさか……………」吉田はそう言ったきり、部屋の中を歩き回りだした。不審な顔をしていた後藤も何か物思いに耽っているようだ。

「はあ、なるほど。」吉田がやがてそう言っ、席に戻ってきた。

「こりゃ、驚いた。三次さんが居なければ、とんでもないことになってた。」吉田が笑いだした。

「ハッハッハ、やってくれるなあ、前道も!」吉田が言った。

「一体何が……………」

「幻覚だ。」

「は?」

「上久保の事だ。前道が僕らに幻影を見せてたんだ。だからあんなに弱かったんだよ。刀だってあんな簡単に折れたし。ハッハッハ。」吉田が余りにも笑うので三次が不安な顔をした。

「しかし、何で三次さんだけには幻影が見えなかったんでしょう?」

「先日の戦いの前触れとして、屋上や理科室で戦ったろ?その

時、霊を目撃………じゃない、接触してないのは、三次さんと小橋だけだ。しかし、小橋は会員だからな？前道と面識が有ったかどうかは知らんが、会員ということですからマークしたんだろうな？だが、三次さんに幻影のカス………だから屋上で目撃した霊体や理科室の白衣の男な？それがついてなかったんで、三次さんに幻影を見せられなかったんだろ？幻影を見せるには対象に霊的なものを見せる必要があるから。そういう訳さ。」

「ほう？では前道は何故我々に幻影を見せたんですか？それと刀は何処から………？」

「あの弱さに薄々怪しいとは思ってたんだよ。だから、わざわざ鞘に入れてから膝蹴りした………。そしたら簡単に折れた………。模造刀だな？霊体と同じ仕組みだから、刀を持てた。意識によって対象を操作してたから、小橋と戦った時は善戦してたが、目を離れた途端、つまり僕と戦った時は弱かったわけだ。わざわざ上久保を見せて殺したように見せかけるのが魂胆だ。ごつつあんが気絶した時点で霊力は使い果たしたわけだ。」

「はあ………。やっぱり前道の単独行動か………。」

「当たり前だな？突如、上久保が出るなんて余りにもあり得ないことだからな。」

「上久保って人はじゃあ偽者………実在する人でもあるの？」

「実在します。だが昨日のは………。言わば映像みたいなもの？です。考えてみりゃ、銃を使うことも怪しいな。」吉田が笑った。

「ねえ、もっとその組織について教えて？」

「相手組織の話は前しましたよ？詳しく話すのはこれからですが。」

「3Gだっけ？それって何の略？」三次がこう聞くと、吉田と後藤が笑いだした。

「これが笑えるんですよ。前にも言っただけど、正式名は『ゲシユペント・ガイスト・ビューロー』ドイツ語で『幽霊事務所』の意味なんです、頭文字はGGGなんですよ。それをバカにして我々

がGGGって言うてたら向こうが採用したんですよ！逆輸入つつやつ？ハハハハ！」吉田と後藤は少ししなれば笑いが止まりそうにない雰囲気だ。「では、組織の詳しい内容を………」そう言って吉田は書類を捲った。

「『前道一成』こいつは霊術師。霊や霊体さらには幻覚を見せて相手を惑わす野郎だ。まあ会ったんだから分かるよね？『上久保雅美』剣術師と呼ばれる女だ。主に棍術が得意だ。容姿は、昨日前道が見せたやつと一緒に。」

「他にもいるの？」

「そりやもう、たんまりと。」後藤が皮肉った。

「『清水弘宣』感術師。人の感情を操作できる………過去  
の嫌な思い出を思い出させたり、心が読めたり………いやあ、便利だ。」

「会った事あるの？」

「いや、ないです。この書類はごつつあんが本拠地のR高校に忍び込んで調べた事ですから。よく生きてたな？」

「他人事ですか。」

「『埴圭吾』獣術師。一般動物から空想動物までも作り出し操るとな？マジ？ごつつあん。」

「はい。」

「ふーん。」

「空想動物なんて作れるの？」三次が聞くと吉田が思案顔になった。

「どうですかね？合成獣なら記録がないわけじゃないですが………まあ、普通に考えれば、空想動物を作るには体力が相当必要  
そうですね。」

吉田は使い終わった書類をトントンと机で叩いて揃えた。

「『橋本千尋』造術師。この女とは接触済みですね？物に命を吹き込むという反則技の持ち主ですよ？果たしてどういう理論なのか？」

「え？理論とかあるの？」

「そりやそうですよ。魔法使いじゃないんですから。必ず科学的根拠があります。」

「じゃ、貴司君達も？」 「当然です。今は説明を……………」

「あ、ごめんなさい。」

「いえいえ…………… 前は僕と小橋が対峙しました。勝ったかな？けど逃げられました。」

「逃がしたんですか。」

「車輪のついた椅子に命を吹き込んで猛スピードで逃げた。」

「なるほど。」 後藤は妙に納得したようだ。

「『脇田尚樹』闇術師。闇の空間を自由に作り出し、あとは体術。以上。」

「いつになく早いね。」

「フム、3Gの中では最弱と書いてある……………マジ？」 吉田が聞くと後藤が頷いた。

「『中鶴武人』水術師……………か。」 不穏な空気が現れた。吉

田と後藤から表情というものが消えたのだ。

「この人とも接触済み……………？」

「……………接触済みです。対峙しました。そして……………」

……………」

「負けたんですよ、わたくし達が。」 後藤は自分と吉田を親指と小指で器用に指しながら言った。

「相性と言えば聞こえはいいですが、単なる言い訳です。あの時、小橋が来なかったら……………」 吉田が言葉を切った。ひどく重い空気が流れた。

「これで全員？」

「いや、この7人の上に上司的存在が3人いますが、特殊能力も分からなければ、名前や容姿すら分かりません。だからこれ以上はもう何もするべきことはありません。」 吉田が書類を片付け始めた。

「貴司君は何の術師なの？」

「……………知ってて聞いてませんか？」吉田が聞くと、三次が悪戯っぽく笑った。

「火術ですね？ごつつあんは氷術、小橋緑術……………ってみんな見たでしょう？」

「3人だけ？」

「んな訳ないでしょう。他にもいますが、言えません。」

「どうして？」拗ねたような声を出した。

「ククク、三次さんが相手に捕らわれて拷問された時に話さないためです。」吉田がクククと笑った。

「……………はい。」三次が頷く。

カーンカーンカーン。と鐘が鳴り、吉田達は部室を出た。

「そんな奴等を相手をしとたなんて知らなかった。すごいね？」

「フツ、そうですか？ありがとうございます。ああ、そうだ。」

吉田がクククとまた笑った。

「困ってる人を見かけたら、我々を紹介して下さい。少しは稼ぎがないと……………」

「？」

「我々もやってられませんから。」吉田は自嘲的な笑みを浮かべた。しかし、三次は力強く頷いた。

## CHAPTER 8-2 開戦、クラスマッチ（前書き）

日常が戻ってまいりました。閑などどこにでもある風景…なのでしょうか？

少し遅れましたが、無事投稿。皆様これからもよろしく願います。

―教室―

「まもなく、クラスマッチの本番ということで……明日の体育は男子はF組男子と、女子はF組女子とそれぞれ練習試合だそうだ。」小林が言った。

「明日？」

「そつ。」黒澤の問いに小林は断言した。

「練習はこれまで大量にしてきた。だがいざ試合をしてみるとなかなか思うようにいかないのが常識だ。だから、練習試合らしい。但し怪我はすんなよ？」

「いいね？俺らの実力を思い知らせてくれる！」堀江がそう言つて、拳を掌に打ち込んだ。

と鐘が鳴り授業開始を告げた。

「じゃあ、赤松君。この類題をお願いします。」G組の副担人にして、数学の教師の柴崎先生が楽しそうに言った。

「みんなさ、『フェルマーの最終定理』って知ってます？」柴崎先生は赤松が解いてるのを見ながら言った。何人かが曖昧に頷いた。

「フェルマーは実はそんな有名、実力のある数学者ではなかったのです。アマチュア、と言った所です。彼が残した最終定理とは $(x^n + y^n = z^n \text{ 乗 } n \text{ の時、 } x、y、z \text{ を満たす整数解は存在しない})$ です。」言ってる事は分かるが、なぜ突然言い出したか分からなかった。

「フェルマーは証明に関しては（私はこの命題に対する驚くべき証明を持っているが、余白が狭すぎて書けない。）のメモしか残していません。あまりにも長い期間を費やし、オイラーやパスカル

といった有名な数学者すら苦しめました。1993年によやく解かれますが、それまでに何人もの挑戦者をなぎ倒したこの法則。実は……」柴崎先生が一拍おいた。

「実はフェルマーが証明を持たず、単に思い付いただけという可能性があるという噂があるという噂があるという噂があるという噂があるという噂があるのです！」

「ちよい！」何人かが叫んだ。柴崎は含み笑いをして言った。

「ですから、皆さんもこういう賢さを学びましょうね？ありがとうございます、赤松君。」赤松が解き終わるのを見届け、柴崎が言った。その後は淡々と授業を続けた。

「貴司君、次当たるんだけど、分かる………？」吉田の隣席の蛭原が問題集を見せてきた。

「なんでここで円を使うの……？解説読んでも分からなくて……」

「はい？」吉田は自分のノートから顔を上げ蛭原から問題集を受け取った。

「ここ。」蛭原はシャーペンで指した。

「………」吉田が考え始めた………と思ったら、すぐに顔を上げた。

「軌跡が円になるからですよ？ひょっとして、長方形で考えてませんか？」

「………」蛭原は黙って吉田から問題集を受け取り、解き直し始めた。数分後、ホツと一息ついた所を見ると、図星らしい。

「貴司君、次当たるんだけど、教えてくれない？」

「顔近い。キモい。自分でやれ。」吉田はそう言って前から後ろを振り返った海老澤の顔を押しした。海老澤はちつと舌打ちをして、言い直した。

「ここ分からんから教えて」

「最初からそう言え。気色悪い。」吉田が海老澤の指す部分を見た。

「……………お前、軌跡を長方形で考えてないか？」

「違うのか？」

「違うな。4箇所からでる等距離の線だから。……………やつぱり。」

吉田が海老澤のノートを除き込んで、作図を見ながら言った。

「なるほど、サンクス。」

「ねえねえ貴司……分らない所が……」

「腐れ。」吉田が右隣の小林を一蹴した。

「酷いな。明日のスタメンお前3番でいい？何番がいいのか分からなくて……」

「わざとらしく『分からなくて』を付けるな。リーダーなんだからどうぞ自由にな。」

「そう？じゃあそうさせてもらう。」小林は机の上に顔を戻した。よく見ると、ノートには明日のスタメンと守備位置が書いてある。それでよく学年のトップクラスにいられたもんだ。

授業が終わると何人かは部活へ、何人かは委員会へ行った。小林はバッテリーセンターに行くとかで、鈴木や小橋などと10人くらいででて行った。吉田も誘われたが、部活と言って断り、小林もあつさり認めた。

「もう5月か。」海老澤が部活のジャージに着替えながら言った。同じバスケット部の金子が苦笑した。

「早いよね？俺勉強ほとんどしてないからヤバイんだよね。授業ちんぷんかんぷん。」

「まずいな、そりゃ。でもまだまだテストまで時間があるし今は目の前の事をやらんと。」海老澤が言い切った。

「貴司は1日にどれくらい勉強してんだ？」

「日によつてばらばら。0か3時間くらいか。」

「そんなんであの成績かよ？」金子が言った。

「成績ねえ……ぶっちゃけどうでもいいんだよね。学校のテスト

なんざ暗記で点取れるし。」

「やっぱり東大とか狙ってんの？」

「狙ってない。東京には行かない。あんな人がウジャウジャ居るところにいたら身が持たないよ。じゃ。」吉田は荷物を詰め終わり、教室を出ていった。教室に残っているのは海老澤と金子だけとなった。

― 体育館 ―

「じゃあ、もう志穂が被害にあうことはないのね？」

「うん。大丈夫だよ。」三次が答えると松本舞は考えるような仕草をした。気になることがあるようだ。

「凄いねー大富豪同好会。それなのにどうして、同好会なのかな？」

「部の方が上だよな？確かに何でだろ？部費も出るのに。」

「ああ、部費出ないんだっけ。だから、研究費を取ってるのかな。」

「賄えるのかな？1回1000円って言ってたけど、普通に交通費とかで消えちゃうよね？部室は棋道部室だから関係ないかな……？」

「何か考えがあるんじゃない？」

「悪口じゃないけど、あの人達の考えなんて分からないもん。」

「そうだね。何考えてるか正直分かんない。」三次と松本は笑った。

「だけど、ちゃんと解決には辿り着くからすごいよね。」

「うん。」

「志穂、なんか表情が明るくなったよ。」松本が微笑んだ。女子の三次すら思わず見とれてしまった。それくらい魅力的だった。

「そう？ありがとう。なんかね………楽しい。」

「楽しい？今まで楽しくなかったの？」

「……………うん……………なんかただただ毎日を過ごしてる感じがしてね。つまらなかった。でも今は……………楽しい。」

「…良かったね。」松本はそう言つて、ネットを張りおえた。

二人はそれ以上は言わずにバド部の活動に励んだ。

# ―棋道部室―

「ヒハッ！…！」吉田が大声で入った。案の定、本を読んでいた大澤はびくつき、本を取り落とした。

「先輩か…こんちはー」落ちた本を広い上げながら大澤が挨拶した。

「よう。」吉田は荷物をドカッと下ろすと、おーいお茶のペットボトルに詰めた冷却水をごくごくと飲み始めた。

「暑いな？」

「結構暑いですね。窓開けます？」

「よろしく。」吉田が言うと、大澤は立ち上がって窓を開けた。

「大澤……………」

「はい？」吉田がペットボトルの蓋をしながら言った。

「飛び降りろ。」

「はい？」

「飛び降りろと言ったんだ。」

「何故？」

「大澤……………人間はいつか死ぬよな？」

「……………はい。」

「それだけだ。飛び降りろ。」

「意味不明なんですけど。」

「大澤……………」

「そんな哀れな者を見るような目で見ないで下さい」「最後噛んだな。句点がないぜ。」

「誰に説明してるんです？」

「うるせえな。」

「先輩が言い出したんでしょー！」

「腐ってやがる……………」

「ナウシカですか。」

「黙れ小僧！！」

「美輪さんですか。」

「そこで何してる！」

「……………ネタですか？」

「当たり前だ。ラピュタ。」

「……………そんなシーンありましたっけ？」

「親方がパズーに呼びかけるシーンだな。かなり序盤。」

「すみません、分かんないです。」

「身を投げろ。」

「ええっ?!」

「さあ」

「『さあ』って！」

「とまあ、『冗談はこれくらいにして。』

「ホッ」

「自ら手を下すか。」

「ちょw結局死ななきゃならないんですか！」

「死ななきゃならないって…当たり前だろ。」

「うう……………」

「人間はいつか死ぬんだから。」

「なんかこのやりとりが周回する気がするんですが。」

「疲れた。」吉田はそう言つて、漫画に手を伸ばした。

「ハガレンの18巻そっちにないか？」

「……………ありました、ハイ。」

「サンクス。」吉田は呑気に漫画を読み始めた。部屋にいるのに部活である将棋や囲碁をやらないのはどうかと思われるが、大澤

はもう慣れていた。

「先輩。」

「なんだ、グラトニー。」

「なんで俺がグラトニー（英語で暴食の意）なんですか?!」

「体型。で、なんだ。」

「体型で。いや先輩に聞きたいんですが、クラスマッチ出ます?」

「出るよ?」

「自ら進んでですか?」

「うーん、違うかな。友達が推薦したのを何の躊躇もなく了承したから……なんとも言えんな。」

「そうですね……自分から立候補してハマしたら、ヤバイですかね。」

「立候補したいなら、すれば? チームプレーであるからには誰が悪いとかは無いんだがな。エラーはな……まあ、恨まれるな。いや、怨まれるな。」吉田はケタケタ笑った。

「はあ……俺どうすればいいっすかね?」

「知るか。自分で決めな。だがな、クラスマッチの意義をよく考えろよ。」吉田はそう言っただけ、口を閉ざした。この話はこれで終わりだと完全に言い切った、口調だった。

「……………」大澤も将棋の本に目を戻した。  
と。

「ゴルフ……!」勢いよく扉が開き、同じ2年の棋道部員の川又が入ってきた。

「うい。」吉田が漫画から顔を上げ、手を上げた。川又も手を上げる。

「ハガレンか。俺も俺も。」川又はそう言つと、13巻を拾い上げて読み始めた。

「川又君よ。川又君はクラスマッチ出る?」

「でるよ。人数不足。」川又は苦笑いした。吉田は川又が女子の多い文系のE組である事を思い出した。

「なるほど。出来るの?」

「出来ない(笑)だが、俺一人が下手な訳じゃないし。それに参加できるだけで充分じゃん?」

「まあね。クラスマッチで勝ったら出るのは……金くらいか。」

「俺は出たかったから出た。文句いうやつはぶちのめしてくれ。」川又は拳をさすった。

「おいおい。」吉田は呆れた顔を作りながら苦笑した。川又はニヤツと笑った。

「クラスマッチで金を賭けたがために殆んどどのクラスが本気だから……主旨が失われないか?」

「確かに。川又君が言う通り、親睦……を深められるかね?敗退したら責め合うクラスが殆んどだろうな。主旨を間違えてるぜ。」

「俺のクラスも金に飢えてんな。勝てればいいが、負けたら修羅場だな。吉田くんの所は?」

「案外そうでもないんだよ。勇気ある男子の一人が、女子に聞いたんだ。何のために一生懸命練習してんのかって。そしたら、『みんなで仲良く学校生活を過ごしたいから』だとき。いやはや、拍手したくなったね。きれいごとじゃないのを証拠に、毎日のように楽しく話してるしな。口には出さないが、あのクラスは凄いよ。」

吉田が言った。川又がほつと息をついた。

「美しい話だな。」

「全くだ。どこまで理想論が現実に沿うかね?」

「ま、面白くていいよな?楽しいぜ、そういうのを援護するのは。」

「だな。」吉田と川又がランプを出してポーカーをやりはじめた。

「賭け金は?」

「ノーレートで頼む。金欠状態だ。」川又が言った。

「つまらんな？まあ、いいさ。交換は2回な。」

「先輩。」吉田がカードを配り始めた時に、大澤が鞆をもって立ち上がった。

「すみません、今日は退かさせていただきます。」

「……そうか。」

「お疲れ様。」吉田と川又は適当に手を上げて挨拶した。大澤が急いで出ていった。足音が階段を下り、聞こえなくなった。

途端に、吉田と川又は椅子から立ち上がり、部室のドアを開け、左右を確かめ、ドアを閉め、鍵をかけ、出窓に覆いをし、電気を消し、窓を閉めた。

「……………つたく、川又君よ。聞いてたな？」

「さすがアイコンタクトで分かったな？」

「ああ。だがな、大澤は何をしにいったんだろ？」

「ラノベなら、クラスメイトを集めて、『金より友情』みたいな言って皆も承諾してくれるんだがな。」

「なんにせよ、大澤はこれで金の亡者にはならんだろうな。」

「クラスメイトに殺されなけりゃいいけど。」

「殺人の苦しみを知らない人がそう言うこと言わない。」

「スマン。」

「さて続きやるか。」吉田が椅子に座り直した。川又がドアの鍵と覆いを退け、吉田が窓を開けた。

暑いです。

僕が執筆を初めてから、1年と5か月が経ちました。最近自分でも読み返して満足のいく……………とまでは行きませんが、納得のいく作品にはなっています。僕の友人達が小説を読んでくれているらしく、メールでアドバイスをくれたり、学校で直に言ってくれたりします。だが、誰一人としてお気に入り登録や感想を書いてくれない……………（笑）

それが全てではないのは百も承知ですが、やはり執筆たるもの、読者からの声というものは書く原動力になります。ので、皆様、お気に入りになりましたら、どうか感想を寄せてください。今回はこの辺で。

小林達也がバッティングセンターで意味もなく文句を言っていた。

「何で130キロがないんだよ。」そのバッティングセンターには最高速度は120キロのゲージしかなく、小林や鈴木、小橋といった面々には余裕で打てる球だった。

「じゃしょうがないな。」鈴木はそう言って定位置より2歩前進した。

「これくらいかな？」鈴木はバットを構えた。ボールが飛んでくる。打った！しかしライナー的な当たりだった。

「一気に打ちにくくなったぜ。これならいい練習になるな。」小林が鈴木に変わり、やって見たが確かに快音は出なかった。

「フム……だがこんな球を投げてる奴がいるかね？」鈴木が言つと、傍観していた堀江が首を振った。

「まあバッティングセンターに来る機会も少ないしな。いい経験だ。」

「明日のスタメンは決めたのか？」小橋が言った。

「決まってる。打順は、俺、隆徳（鈴木）、貴司、館、海老澤、小橋、春日、堀江、大塚でいく。」

「投手は大塚？」

「そ。園部君は怪我したら困るからな。」

「俺はいいのか。」

「もちろん。」小林は何いってんだ、コイツという表情で大塚を見た。大塚はため息をついた。

バッティング練習はまだまだ続く。

― 駅南 ―



「どうぞ……」吉田はやる気のない声で言った。

「来たよ……」岩本怜衣が手を擦りながら入ってきた。

「お疲れ様です。」吉田はパソコンから顔を上げずに労った。

「何の用事？貴司に呼び出された覚えは後にも先にも初めてだよ？」

「そうですね。岩本さんに依頼があるんですよ？」　「ふん、良いけど高いよ？」

「……………」

「や、じよ、冗談に決まってるでしょ！そんな暗い顔しないで！逆に怖いよ！」

「嫌な女だな……………ハア……………」

「！！冗談だってば！」

「とか言うのを全部録音……………」吉田は腰ポケットからテープレコーダーを取り出した。

「冒頭のみ録音しました。」吉田はそう言って再生させた。岩本の「高いよ？」の部分だけ録音されていた。

「なっ！ズルい！あたしちゃんと冗談だって言ったけど！」

「テープレコーダーは嘘は語らぬ……………明日にでもようつべに流そう……………」

「……………」

「やられたくなければ、ロハでよろしくwww」吉田が言った。最初からそのつもりだってば。」

「流石、お嬢様。」吉田はそう言うと、ゴミ箱にテープを放った。

「で依頼って何？」

「フム、実は下見に行つて欲しいんですよ。」

「下見？」

「依頼が来て曰く付きの家を調査するよう言われたんですが、生憎手がいっぱいできて……………」

「下見ねえ……………危険はないんでしょうね？」

「そりやもうたくさん。ありまくりですよ。曰く付きの家ですから。」吉田はそう言ってパソコンの画面を指した。岩本が覗き込むと、新聞記事の画像がたくさんあった。

『一家惨殺……凄惨な現場』『解体作業直前……交通事故で2名死亡』『頭部切断……父親が猟奇殺人』『食い止められ無かったのか……家族全員無理心中』

「もう止めて!!」岩本が顔を背けた。吉田はパソコンを閉じた。

「すみませんね。僕が行くのはこういう場所なんですよ。岩本さんに下見に行ってもらうのは危険ですし、出来ればそんなことはしたくない。」

「じゃあ何であたしに頼むの？」

「岩本さんには僕よりも霊能力があるからです。」「あたしに？」

「そう。僕は元々霊能力がないから僕と比較するのは間違いなんです。岩本さんには僕よりも遥かに能力があり、悪霊や怨霊の気配には敏感なはずなんです。」

「んまあ……確かに墓地とか心霊スポットで不穏な気配は感じるけど。」岩本がしぶしぶ答えた。

「でしょう?だから潜在能力なんです。岩本さんならどんな霊がいるか察知できるし、そういう奴らを退けられる。ですから安全です……………」

「?!ねえ今の……………」の間にボソツとハズって言わなかった?!!」

「言ってませんよwww」

「笑うなっ!」

「サーセンw」

「きちんと謝れっ!」

「いやいや、これまた失礼をいたしました。岩本さんには財力においても公力（警察や公務員を操る力）においても日頃から大変



「なるほど……………」岩本は妙に感心しながらいった。

「岩本さん。岩本さんは家の1階部分を見て下さい。そうしたら僕に連絡して下さい。僕も合流したら2階に行きましょう。」

「2階がそんなに危険なの？」

「ヤバいですよ？家に関わって謎の死を遂げた人々の多くは2階で見つかってますから。」

「分かった……………」

「行ってくれますか？最後に確認しますが、岩本さん、貴女には拒否する権利がありますよ？」

「大丈夫。あたしの意志だから。ただ死んだら、貴司を惨い死にかたに追い込むまでは怨み続けるから。」

「怖っ！！じゃあ………… お気をつけて。」

「行ってくる。」岩本はそう言つと、部室をでていった。

― 曰く付きの家―

岩本は玄関のドアを開ける前に吉田に電話した。コールを10秒ほどしたら吉田が出た。

「はい？」

「あたしだけど……………これから行くんだけど、電波大丈夫？」

「大丈夫ですが、随分賑やかですね？」

「えっ……………」

「足音や、子供の声が近くでしてません？」

「……………」

「……………まさか、もう現象が起こっているのか……………」

「貴司、やっぱり一人で入るのやめていい？怖いよ。」

「岩本さん、それだけじゃなさそうだ……………今すぐそこから離れて下さい。」

「え？」

「早く！駅に向かって帰ってきて下さい。僕も行きます。」

「分かったよ……………」岩本は電話を切った。

「全く……………行けと言ったり帰れと言ったり……………」岩本はそう言  
って携帯から顔を上げた。

その時だった。今まで誰もいなかった筈の家の窓からこちらを  
じっと見つめる人がいた。人とはいえない代物かも知れない。それ  
は、生気というもののや感情といったものが何も感じられなかった。  
人形、といえばあつてるかもしれないがこんなに人形らしくない人  
形は見たことがない。岩本は目を見開き、それを見ていた。

ふと人形のような子供が動いた。それにつられ、岩本も我に帰  
る。

「あわわわ……………」岩本は唇が震えていたものの自力で敷地内か  
ら出た。

来る前にはたくさんいた帰宅途中のサラリーマンや学生達の姿  
は全く見えない。

岩本は違和感を感じながらも、駅に向かって走り出した。

10分は走った。ようやく、人混みに合流することができた。  
未だに心臓がドクドク言っていた。

「あつ、岩本さん！」吉田がはや歩きでやって来た。岩本は吉  
田の姿を見ると、ヘナヘナと座り込んでしまった。

「む？岩本さん？」

「……………貴司い……………怖かったよう……………」

「ほう。すみませんでした。電話越しに殺気の声やら気配やら  
感じられる程でして……………完全な想定外でした。」

「……………」

「立ってください？」吉田はそう言うと無理矢理助け起こした。

「僕自身が下見に行くべきでした……岩本さんも感じました？」

「……分らない……でも『この家に入るな』って心が叫んでた。岩本はげっそりと言った。」

「やはり……これはとんでもない依頼を引き受けてしまった……」

「拒否すれば？」

「したいですけどね。生憎と、前払いで払ってくれるくらい依頼されてるんで……それを犠牲にしますな？」

「命が危ないような仕事でしょ？やめたほうがいいって……」

「それで依頼人が代わりに死ぬと？なるほど、それなら保身と共に依頼人が死んで証拠も隠滅……って考えですか？」吉田が冷たく言った。岩本はギョツとして首を振った。

「さてっ今日は帰りますか。」吉田が改札に向かって歩き出した。

「あのさ貴司……」

「はい？」

「……ごめん、何でもない。」岩本も改札に向かって歩き出した。吉田は？という表情になったが、何も言わずに背を向けた。

「家の敷地内に入る前に必ず自分の体に塩を吹きかけて下さい。その後、火で自分を1分以上温めて下さいね？」吉田がいつになく心配そうな声で言った。岩本はただただ頷くだけだった。

駅から南へ10キロ。荘厳な屋敷が1軒建っていた。岩本家の屋敷にも匹敵する大きさだが、雰囲気はどこか違った。岩本家の屋敷は手入れがどこまでも行き届き、走ることすら躊躇するほどののだが、この屋敷は違った。草は伸び放題、窓ガラスは数枚割れ、家壁には蔦が巻き付いていて、もはや廃墟にしか見えない。灯りが点いているから、廃墟ではないことが分かるが、それだとしても、決して人は近寄らなかった。

「では前道は半討滅されたか。」声がある一室でした。

「はい」

「仕方ないやつだ。」……………」

「何のために宣戦したのか全く分からんな。アレには単独行動を赦しては駄目だ。お前は見張りの任務を怠ったことになるな。」

「申し訳ありません。」「そんな言葉が聞きたいんじゃない。」男のものと思われる低い声が言った。声の出所は、こちらに背を向けた、背もたれの高い椅子の方から出ていた。その発言で今まで頭を下げていた女が顔を上げた。

前回、前道が力を振り絞って見せた女子生徒の幻影と瓜二つ……だった。その女子は長髪を後ろで束ね、長身から放たれるオーラが周囲を圧倒していた。整った顔立ちは間違いなく美少女というより美人の部類に入る。そんな彼女……上久保雅美その人は全くの無表情だった。

「私に何をご所望ですか？」

「最近の奴らは我らとあまり関わろうとしてこない。」声が言った。

「前道の件にしても、無理矢理戦いを挑んでいなければ、奴ら

は別の手法を選んだはずだ。」

「はい。そうでしょうね。」

「そして前道一人を討滅するために、何故に複数出てきたか。答えは単純明快だ。」

「……………」 「奴らは戦いを避けている。

力を見る限りは明らかに衰えていると聞く。さらに言うなら、奴らはモチベーション自体が下がっている。」

「それなら害がないのでは？」

「そうだ。だから上久保、チャンスでもある。奴らは、お前が奴らに倒されたと錯覚しているうえに、戦意戦力共に落ちている。だから」 声は上久保が口を開いて反論するのが分かっているかのように、だからを強調した。

「今度我らの邪魔立てがあれば容赦するな。殺しも場合によっては許可する。」

「……………」 分かりました」

「よし。前道を呼んでこい。」 上久保は見られてもいないのに深々とお辞儀をした。

上久保が出ていき、部屋には椅子だけが残された。

## CHAPTER 8-4 開戦、クラスマッチ（前書き）

かなり遅れてしまいました。

戦闘が無くなってしまうと途端に書きにくくなり、日常生活を  
淡々と綴った作品がいかにも優秀かを思い知りました。

なかなか難しいですが頑張って執筆していきますのでよろしく  
お願いします m (——) m

翌日。教室に一番乗りでの登校を果たしたのはやはり小林達也だ。  
小林は鞆を適当に自分の机に放り投げると、着替えを始めた。

ガラガラ……………

と、着替え始めて1分もした頃、ドアが開いた。黒澤が入ってきた。

「おはよ……ッ?!」黒澤は小林が下着一枚になっているのを見ると、いつもの堂々とした格好よさはどこへやら、脱兎のごときスピードで教室から飛び出した。

「…………… オイオイ。」小林は嘆息しながらも着替えを続ける。

小林が着替え終わり、数分してからドアがノックされた。小林がどうぞ……と言うと黒澤がそろそろと入ってきた。

「あの…… さつきはごめんなさい。」

「いや、別に……」小林はそう答えて、サッサと教室を後にした。教室には黒澤だけが残された。

「おはよ……」

「うわっ?!」黒澤が入ってきて、黒澤が全く女子らしくない叫びを上げた。案の定、黒澤は顔をしかめた。

「人の顔を見て、『うわっ』って何?嫌がらせ?」珍しいことに黒澤は怒っているらしい。

「美樹…………… いや、何でもないの。何でも……………」

「妙に動揺してるね。何かあったの……………?」そう言って、黒原は教室を見回す。教室には何も無い。小林の着替えはきちんと置かれて置いているし、どこぞのアニメのように、妙な疑いを受けることはなさそうだ。

「朝から、変なの。今日朝練するんでしょ？」 「！！そ  
うだった、そうだった。早く行かないと……！美樹、悪いけど先行  
ってる、着替えないといけないから！！」黒澤がそう言うと、蛭原  
の制止を振り切って荷物を置くと教室をでて行った。

「……………」 蛭原は不審に思いながらも、荷物  
を置いた。自分も体育館に移動しようとしたが、何か気になる。

「……………」 蛭原はさっきの黒澤をよく思い浮かべる。

妙に慌てた素振りが全く彼女らしくない……今まで彼女が取り  
乱した所など見たことがない。あまりにも突拍子もない光景だ。二  
コ厨の小林とか、優しい笑顔の吉田とか、痩せた白玉とかと同列だ  
wwww

「？」 蛭原が怪訝な顔をして辺りを見回した。……………最後の筆  
者の忍び笑いが聞こえたか……

蛭原は思い直したようで、教科書類を机にしまい始めた。

「あれ？美樹。早いね。」 不意に声がして、教室に三次志穂が  
入ってきた。

「あれ？志穂。」

「おはよう……」 三次は手を振りながら上機嫌に挨拶した。

「何か私によろ？」 蛭原は笑顔を取り繕って言った。三次は首  
を振る。

「ううん。用はあったんだけど、無くなったというか、何と言  
うか……………」 三次はチラッと教室の様子を見た。

「？」

「何でもない。じゃあまた。」 三次は残念そうに帰って行った。

「変なの……………」 蛭原はポツリと呟いた。

ガラガラ……と今度は後ろのドアから入室者が来た。

蛭原が振り返る。鈴木が入ってきたのだ。

「おはよう……」蛭原はおずおずと話しかけた。

「ざーす。」鈴木は右手を上げて適当な返事をしながら座席についた。

蛭原は男子も早いな、と内心思いつつ、自分も体育館に移動すべく、教室をあとにした。

蛭原はそこでバツタリと後藤に会った。

「あつ、おはよう……え?!」蛭原は思わず声を上げた。後藤が何やら男を引きずっていた。後藤は無表情に運んでいたが蛭原を見ると笑顔を取り繕った。　「おはようございます。」後藤はそのまま非常階段に向かった。

蛭原は思わず声をかけた。

「後藤君、それは誰?」　「え?」後藤は一瞬、悩んだ顔になったが、すぐさま取り繕う。

「私の祖父です。」

「お爺さん?」

「そう。訳あって学校まで来たのですが、昇降口を過ぎた辺りから生気がないので引きずりました。何、ツルツルな床ですから怪我はしませんよ。」後藤はヨイシヨと老人をおぶった。老人はぐっすり寝ている。

「そうなんだ……大変だね……」蛭原が言った。後藤は微笑を浮かべると非常階段に消えた。

―棋道部室―

「何だよ、じゃあ近づいてすらいらないじゃんかよ?」小橋が言った。

「野暮だな。危険と分かっているうえにこちらの戦力不足にも

関わらず、特攻するのは、自死に等しいんだよ。」

「自慢気に言うな。」小橋がバシツと言った。

「だから、今日ごつつあんのお祖父さんに来てもらうことになった。小橋も念のためについてきな。」

「そう言うと思った。親に連絡しないと。」小橋はそう言うのと、両手で携帯を操作しはじめた。

「怪我はどうだ？」吉田が素っ気なく言った。

「悪いな。手がたまに意味もなく震える。上手く力が入らんときもある。しばらくすりや治るさ。謝るなよ？」小橋は吉田が口を開きかけたのを見て、小橋は遮るように言った。

「元々、危険は承知だった。俺があいつをしつかり絡めとればそんなことは起きなかった。」

「そうか」

「なんだなんだ？情が沸いたか？」小橋はニヤリと笑って吉田を見た。

「怪我した使えぬ戦士はゴミも一緒だ。戦場においては倒れた仲間がたとえ身内でも見捨てる。それが基本だろ。」

「僕に3Gのようになれと言うのか？」

「いんや？ただその妙な優しさが致命傷にならないといいな。」

「……ああ。」吉田がそう言った時、部室をノックするものが居た。

「後藤です。じいさん付きの。」後藤が何やら苦しそうな声をだした。

「大丈夫。本人だ。」吉田が言う和小橋がドアを開けた。

「おはようございます〜そらよつと。」後藤は部室に入るなり背負っていた老人を床に放り出した。

「偽じゃなかるな。」吉田が疑惑たつぷりな目で老人を見た。

「歴とした霊媒師ですよ。」

「死んでないよな？」小橋が老人の脈を取りながら聞いた。

「無論。寝てるだけだ。」

「今日霊媒師を呼んだってことはまたあの家に携わるわけだ。」  
小橋が老人を見ながら言った。

「嫌なら下りて構わん。」吉田が言うと小橋は舌うちをした。  
「俺を臆病者と勘違いしてないか？あり得ん。」小橋はイラついた口調で言った。

「吉田君、一体どういった場所なんです？その曰く付きの家とは？」後藤が聞くと、吉田は無言で開いてあるパソコンを指差した。パソコンには以前岩本に見せた過去に曰く付きの家で起きた事件の新聞記事が表示されていた。

「ほう……………見るからに何かヤバそうですね。」しばらくして後藤が言った。

「そうだな。岩本さんに昨日行って貰ったが、敷地内に入るだけで、悪寒を感じたって言うてたし、電話したらかなり多くの声が……………というよりざわめきが聞こえた。」

「そんなあからさまなのかよ……………呪い殺されるかも。」

「ああ。映画の『呪怨』みたいだ。」

「『白い老女』ですか？」

「ああ、それ。」

「見たことねえな。どんな話なんだ？」

「そうだな。要約すると、受験に落ちた……………何回もな？奴が、両親や祖母、妹や姪を殺して自分も死ぬ事件に携わった人の経験を書いた話かな。」

「その人たちはどうなるんだ？分かるきもするが。」小橋が言うと、吉田は冷たく言った。全員死んだ……………いや大体は死んだ。」

「何で死んだんだろうな？呪いの中身がいまいち分からないんだよな……………例えば、精神異常で自殺とか？」

「殺された人間は大体が死んだ人間に直接手を下されて死んでる。」

「は？」

「だから首を絞められるなり、殴られるなりだろう。描写が原

作にもない。ただ白い服を着た髪がバサバサな女が走ってきて、悲鳴を上げる。で『その声が　のだした人生最後の声になった』で締めくくってあるんだから。」

「曖昧だな。」

「全くだな。それを現実挑む僕らは大変無謀な訳だ。二人とも……小橋は2回目になるが、下りるなら止めはしない。今回の依頼は今までのどんな霊関係の依頼よりも遥かに危険だ。」

「……俺のさっきの発言はスルーか？」

「もう一回言ったらキレます。」

「フツ」吉田はニヤリと笑った。

「よし、一切責任は負わないからな。遺書とか書いても僕が焼き消すから無駄な事だからやめとけよ。」吉田はニヤニヤしながら言った。

「うーん……………」

「……………」

今までずっと黙っていた（寝ていた）老人がいきなり目を覚ました。後藤と吉田は視線を交わすと、後藤が抱え起こした。

「じいさん、目は覚めたか？」後藤が言った。

「フニヤ……モガ……」

「ダメらしいな。」

「ったく、ラノベの幼なじみみたいな反応して……」

「じいさんが起きた描写がなけりゃ、よかった……」

「だよなあ？フニヤフニヤ言ってるのが老人だからな……………」

「ええい若造！！今何と言った！！」

「うおっ？！」

吉田と小橋がマニアックな話をしていると老人が割り込んできた。いつの間にか目が血走って、シャキツとしていた。

「今、何と言ったああああああああああああああああああああああ……」

「ん、だから……………忘れたw」小橋が言った。

「老人と抜かしたな！！」

「老人で抜いた？うわー、気色悪いな。熟年でしかもゲイだな  
んて……………」

「うるせえ」吉田が小橋を軽く蹴った。

「そうですね。確かにとんでもなくみすばらしくて、ひもじ  
うな雰囲気が出てて、皺だらけだし、染みだらけだし、1日14時  
間は簡単に寝るし、年金はないし、貯金はないし、要介護2だし、  
家もないし、世話してあげなきゃならないし、パチンコで作った借  
金が50万ほどあるし、ヤミ金に危うく手をだしそうに…………いや出  
したっけな？まあヤミ金に関わるし、振り込め詐欺にひっかかりそ  
うになるし、起きてる時はネットゲばかりやってるが、私の祖父です。」

「馬鹿にしてるだろ！！！」老人が言うと、後藤は怒ったよう  
に言った。

「まさか！！」

「じゃよな……………」

「コケにしてるのです。」

「謙介！！」老人は両手を地面に付いた。

「ぬおっ？！」小橋が叫んだ。老人の後ろから大量の人魂（青  
白い炎）が現れた。そして3人に向かって、襲いかかってきた。

「熱い？！」小橋がまた叫んだ。

「さあ逃げますよ！！！」後藤が扉を開けて走り逃げた。吉田  
と小橋が慌てて部室を飛び出す。

「待てゴルァ！！」老人が老人とは思えない速さで追ってきた。

「部室の施錠！！！」

「馬鹿野郎、オートロックだ！！」吉田が小橋に吠え返した。

「どりゃあ！！！！！！！！」

「させるか！！」吉田は部室を出て校庭に出た所で、人魂に向  
かって蹴りを入れた。

「ヤバッ！！」人魂はつぶれて、吉田のズボンが燃え始めた。

「何かを核にして燃えてるわけじゃないのかよ!!」

「当たり前ですよ!本物の人魂ですから!」

「流石は霊媒師!」吉田は火を叩いて消すと、さらに間を取る。

「私の祖父は……70を越えてますが……」

今度は老人は信じられないスピードで小橋に迫った。

「ケンカはまだまだ負けませんよ!!」

「危なっ!!」小橋に向かって老人が包丁を胸元から取り出して、振りかざした。小橋は危うく避けた。

「ちっ!」小橋は近くの茂みに飛び込んで、蔓系の植物に触れた。蔓が一瞬にして伸び、老人を絡め取った!」

「よし!」

「どこら辺がよしなのかな?」老人は唖れた声を出した。老人の後ろに控えた人魂が蔓に触れた。

蔓が燃えだし、蔓を伝って小橋のいる方向へと逆に向かった。

「ヤベッ!!」小橋は急いで場を離れた。間一髪、小橋がいた地点の茂みが燃え出した。

「謙介!!」

「つとつとつと!!」老人は素早く後藤に向かって走り、包丁を振り上げた。後藤は氷細工の短剣で受け止める。背後から人魂が襲いかかってきた。

「しまっ……!!」後藤が片手で短剣を精製する前に人魂は襲いかかってきた。

「ウラァ!!」吉田が割り込み、火棒で人魂を弾き飛ばした。

「よし、火術棒なら燃えないな。」吉田がホッと息をついた。

「後藤君!!なんか君のじいさん暴走してないか!!」

「したんじゃない、させたんですよ!!」後藤は小橋にそう言うのと、おもいつきり、老人の包丁を押し返した。老人と3人の間が充分に広がった所で、小橋が口を開いた。

「何で怒らせたりしたんだ?」

「吉田君が……」

「んなこと言っただけ？」

「直接ではありませんが。昨夜、私に言いました。『連れてきたらすぐに力を見せてほしい』と。」

「それと怒らせることに何の関係があるんだよ。」小橋は唸った。

「祖父が霊媒師としての力を発揮できるのは、怒りの感情が沸き起こってる時だけ、それも寝起きの後と決まっています。」

「ペテン師かそいつは。」

「吉田君が火術師であるように、歴とした霊媒師ですよ。」

「それに増してもケンカが異様に強くないか？」

「フム、元々、空手の師範代でしたから。」

「呑気だな。一体どうやって止めりゃいいんだよ。」

「決まってます。気絶させるんです。」

「老人相手にケンカしろと！」

「そうです……っと!!」

後藤がそういいかけた所で、老人の単語が聞こえたのか、後藤の祖父が襲いかかってきた。

「ぬう!!」小橋が包丁の残撃を避ける。

「ッ!!」吉田が腹に向かって蹴りを入れたが、交わして、包丁を今度は左手で操り、刺そうとする。

ガキン!!!!

吉田が内ポケから短剣で受け止める。後藤が氷の短剣で脚を狙う。しかし、老人は吉田とも後藤からも離れ、小橋に襲いかかる。

「ちっ!!」小橋は苦無でそれに応じる。

「ごっつあん!!」吉田がその隙を借りて後藤に何やら吹き込む。

「……………よし、分かりました。やってみましょう。」後藤がそう言うが早い、二人して老人に向かって走り出す。

「老人に対して1対3とは我ながら情けない。」吉田が呟く傍

ら、後藤が小橋の後ろ側から殴りかかる。老人は小橋を突き放し、後藤の脇腹に肘鉄を喰らわそうとする。後藤が素早く右に動いて交わし、脚をかけようとした。

だが、老人は信じられない行動に出た。大きく跳躍したかと思うと、後藤の背後に着地した。

「なっ……！」後藤があわてて振り返るが遅かった。

バン！と快音がして、後藤は蹴られた。後藤が10メートルほど飛ばされて着地した地点で踞る。

「やるな！」吉田が老人に向かって石を投げつけた。老人は難なく抜う。吉田は構わず投げ続けた。老人は抜い続け、膠着状態が続いた。

その間に生き返った後藤が小橋に何やら吹き込む。

「うまくいくんだろうな？」

「確信はないです。」

「……………ギャンブルは好きじゃないな……………」

「じゃあお願いします。」

「人の話聞いてんのかお前は。」

「いいから……………」

「何気に本音出しやがった。わかったわかった」小橋が草むらに向かって走り出した。

「おい、ジジイ！！！！」小橋が暴言と共に植物に触れ、蔓が老人に向かって走る。

「無駄だ」老人は何もせず、指を鳴らす。

人魂が再び姿を現し、蔓に飛び付いた。火が瞬く間に燃え上がる。

「知ったことかああああああああああああああああああああ」小橋が叫び、火が伝うのも構わず、蔓を伸ばし続けた。蔓の先端は焼け落ちていない。

「なんだと……………」老人の元に蔓がたどり着いた。すぐさま老人は叩き斬るが、後から後から蔓は増えてきた。

「熱……」小橋の手にはたくさんの植物によるカバーが人魂の火から守っていたが浸透しつつあった。

「うわっ！！」老人の脚が遂に掬われた。

「そこだ！！」吉田が一瞬のチャンスを逃さなかった。飛び膝蹴りで後頭部を強打した。

老人は一瞬恨ましげな顔をしたが、ガックリと動かなくなった。  
「フウ……」後藤がため息をついた。

「まだ分かんぞ。気絶した振りをしてるかもしれん。」吉田が言ったが、後藤は人魂があつた場所を指差した。

「人魂が消えたんでそれはないです。」

「ハア………とんだ霊媒師だな。」

「でも力があることは証明されたでしょう？」

「証明方法が狂ってんな。」

「今日行くんですよね？」

「ああ」

「それならこのまま寝かせておきます。小橋君おぶつて。」

「ハイハイ。つて重っ！！！」小橋がよろめきながらも老人をおぶり、3人は部屋へと引き上げた。

## CHAPTER 8-5

### 開戦、クラスマッチ（前書き）

川田です。なかなか書く時間が取れないのに、構想（妄想ともいう）が膨れて爆発しそうになります。

早く、本格的な戦いを書きたいと思いつつ日々の日常を綴るのは難しいことでした。

今回久々に恋愛もようを取り入れました。

ん？確かこの小説のジャンルに小説が入ってた気が……

てな訳で今話もよろしくお願いしますm（——）m

「グランドー

「ん？あれ小橋じゃねーの？」

「本当だ。貴司もいるな。」鈴木の疑問に小林が即答する。二人の他にもサッカー部員の大塚や館、バスケ部員の海老澤と金子もいる。

「本当だ。何遊んでんだあいつら。こっちを手伝わないか。」海老澤がイライラと言った。

やがて向こうから小橋と吉田が歩いてきた。

「おい！！」小林が叫ぶ。吉田と小橋が振り向いた。

「ライン引き手伝ってくれ！」

「……………ああ、今朝練か。」小橋が言った。案の定、忘れている。

「そうだ。だから集まる前に、ベースやら、設置しなけりやならんのだよ。」

小橋は吉田と目配せした。

「残って大丈夫だ。僕が連れてくから。」吉田がそう言つと、小橋は背負っていた老人を吉田に引き渡した。小橋の属する軟式野球部部室は側にあるので速攻で着替えに行った。

「棋道部室ー

「しかしな、いつ目を覚ますんだ？目を覚ました時がチャンスならそれなりに調整の必要が出てくるよ。」

「かなり波がありますよ。」後藤が椅子に老人を腰かけさせながら言った。

「何時間から何年間とか？」

「30分くらいから、1日くらいですかね？」

「大波だなおい。今回はどれくらいか予想つくか？」

「それが全然。」

「参ったな……無理矢理起こすしかないか。」

「ですね。でもそれだと本来の力の半分しかだせないんですよ。」

「……………何で」

「寝起きが気持ちいいから力を発揮できるんですよ。それを無理矢理妨げたとすると……………」

「だってこれって気絶してんだぜ？」

「そのうち、厭かきはじめますよ。」

「厄介な霊能者だな。」 「霊媒師です。」

「あ、そ。」 吉田はジャージに着替え終わってから言った。

「なるべく早く済ませたいから今日の放課後、僕とごっつあんとお祖父さんで行こう。」

「分かりました。」

「あ、そうそう。岩本さんにはくれぐれもバレないようにな。」

「ああそう言えば……………岩本さんも霊感が強いんですたっけ。」

「それが逆効果だったな。まさかあんなに霊気が強いとはね。」

逆に神経を参らせてしまったかもしれないな……………」

「まあ……大丈夫だとは思いますが、注意しませんとね。家に入っていたらもつとヤバかったでしょうから。」

「そうだろうな。僕らも用心しないとダメだな。」

「これから朝練ですか？」 後藤が老人を床に寝かせながら聞いた。

「ああ。ごっつあんは野球出んの？」

「出ますよ。」

「やっぱりね……………」

「野球はあんまりやったことないんで、自信ないですよ。」

「とか言いながら、スタメンだったりして。」

「スタメンですよ。」

「何気無く誇らしげに言ったな。B組と当たったら、容赦は無用だな。」

「ハハハハ。そうですね、私としては、G組と当たらない事を願います。施錠任せて大丈夫ですか？」

「ああ。お疲れ様。」

後藤が去っていった数分後、吉田も足早に立ち去った。

―教室棟―

「えっ、居なかった……………」

「うん、来てなかったって美樹が……………」

「おかしいなあ、だって今朝駅で見かけたよ。教室に居なかっただけじゃない？」

「貴司君の席、荷物なかったよ。」

「部室かなあ……………」

「ついさつき舞からメールが来て、棋道部室の施錠がしてあったって。中もいつものサイン出しても無反応。」

「え…………どこ行つたのかな、貴司は。」

「貴司君に何の用があるの？」

「う…………ごめん言えない。」

「あ……………」三次は慌てた。私的な事以外の依頼や、部活の内容は他人に話すな、と吉田が前に言っていたのを思い出したのだ。

「いや、そんなことじゃない。」三次の話し相手がようやく顔を上げた。岩本が苦笑している。

「ちよつと話したいことがあっただけ。」

「ふ…………ん。まさか……………」三次が悪戯っぽく笑った。

「？」

「脅迫？」

「何でそうなるの!」

「えっ、だって人には話せないって言うてたし……………」  
「何であたしが犯罪者みたいなことしてんのよ？」  
「違うの？」

「違うに決まってるでしょーがー!!」

「フフフ、3日前のことを入れても？」

「な、何を……？」

「駅で男を3人も殴ってた。」

「あ、あれは……！」

「しかも救急車来てたよ」

「仕方ないでしょ！」岩本が立ち上がった。顔が真っ赤だ。

「あいつらがしつこいんだもん！一緒にカラオケ行かないとか映画行かないとか！しつこいし、お尻触られたから、そいつを殴ったら気絶したやうし、他の奴らは逆ギレするし！」

「でもそれって男子とかがやることでしょ？ 怜衣は格好良すぎだなぁ」去年バレンタインデーに女の子から本命もらったりして」

「あたしは百合じゃなああああああああああああああああい！！！！

絶叫！！！！

「耳が痛い~~~~何て声出してんの!!」 三次が怒っていつ

「フン！志穂が変なこと言うからでしょ！！」

「百合なんて一言もいってないでしょ!!」

「人を同性愛みたいに言って……あたしには彼氏だって……」

岩本が突然黙った。

「あつ……」 三次も黙った。嫌な沈黙が流れた。

「ごめん……………」 三次がやがて言った。

「ううん、大丈夫。」岩本が椅子に座った。

.....

「ごめん、ちよつと手洗い行ってくる。」  
岩本が立ち上がった

教室をなかば走るように出ていった。

「怜衣……………」三次は罪悪感に苛まれた。

―体育館―

「じゃあ、美樹一緒にやろうか。」

「うん。お願い。」蛭原は快く山口の申し入れを受けた。

「最近、なんか美樹テンション高いよね？」リベロ役の低身長  
の二人が、トス練習を初めてからしばらくして、山口が言った。

「え？どうしたの、急に？」

「ちよつと気になってね。なんか良いことがあったの？」

「良いことがあったって言うか……………悩み事がなくなったか  
な。」

「へえ…………良かったね！それでテンション高いんだ。」

「別にそんな大袈裟じゃないから。」蛭原は微笑んだが、トス  
をミスって、顔にボールが直撃した。

「いたっ。」

「うわっ、美樹、大丈夫？！」山口が急いで駆け寄る。蛭原が  
鼻を擦った。

「イタタタ…………大丈夫だよ。」蛭原はボールを取りに行つてし  
まった。

「ねえ、美樹。」

「何？」再びトス練習を始めた所で、

「悩み事ってあの事……………？」山口が小指を立てた。

「……………」この行為が蛭原にとんでもない変化をもた  
らせた。突然、目の光が失われた。そしてワナワナと震え始めた。

「えっ？…………美樹……………」これには山口だけでなく、黒澤も  
走ってきた。

「美樹、どうしたの？！」黒澤が聞くが、何も答えない。



「貧血……」吉田は空を見上げた。晴れてはいるが、今日は風があつて涼しい。ちらりと体育館を見ると、上階の窓も、本階の窓も開いている。

「どうしたの？私も様子見に行くから、またね……」

「山口さん、ちよつと。」吉田が呼び止めた。

「？」

「何か、蛸原さんが貧血を起こした原因に心当たりは……」

「……？」

「……ない。」

「本当に？」

「……」

「……」

「……そう言えば……」山口は重い口を開いた。

「……美樹に彼氏がいるんだけど……彼の事聞いた

とたんに、叫んで……倒れちゃった。」

「え？」吉田が訳が分からないという表情で山口を見た。

「だから……んもう、本当なんだから仕方ないでしょ？私も行くからまた後でね。」山口はそう言つて吉田の脇をすり抜けて行つた。

吉田はしばらくその姿を見つめていた。

が。

「つと、練習、練習。」吉田は素早くグラウンドに移動した。

「ん？」吉田ははたと足を止めた。何やら練習している様子ではない。

「貴司、おせえよ。守備には間に合つたから許してやるが。」

吉田が声のした方を見るとグラウンドの脇のベンチに小林と鈴木、館などがいた。

「あれ？練習は？」

「なんだかF組の奴らが俺たちも使いたいとか言うからさ、口論になったら、誰かが合同演習にすりゃよくね？みたいな事言ってる。今攻撃中だ。」小林が言った。

吉田はスコアボードを見た。

1回表で既にG組が2点を先制していた。

「俺がヒット打ったらあっさり隆徳（鈴木）がランニングホームラン打つてな。」

「すげえな……」吉田が言うと鈴木は満足げにニヤリと笑った。  
カキン！！

快音がした。見ると、小橋が一塁に向かって走っている。が  
「こりゃ外野をも抜けたな。」小林がベンチにふんぞり返りながら言った。確かに小橋は2塁ベースをまわった所で、早あるきのベースになった。

「今何番？」

「6番。4番の山田もヒットで出塁してたから2点だな。」

「ああ……そう……」小橋がホームインしながら山田とハ  
イタッチするのを見ながら吉田が言った。次の長身の春日が打ち取られ、守備交代。

先発のマウンドにはサッカー部の大塚が上がった。小林がライ  
ト、小橋がサード、吉田はショートについた。

「打たせるぞい！」大塚が高らかにいい放つ。

F組の先頭バッターは大塚のゆるゆるな球をカキンと打った！  
いい当たりだ。抜ける！

バシッ！

と思いきや、サードの小橋が飛び付き、サードライナーで1アウト。

「ナイス!!」大塚が歓喜した。小橋が親指を突き立てた。

結局、2人目3人目をすべて内野安打に打ち取り、2回に入る。

まず、堀江があつさりと2塁に進んだ。ピッチャーの大塚が足で稼いで内野安打し、小林が四球で歩き、鈴木が犠牲フライで1点、吉田がバスケ部金子に代わり3番に入り、シングルヒットで1点、4番のバドミントン部山田が犠牲フライでもう1点、館がランニングホームランで3点を入れ、小橋が適当に空振り三振でチェンジになった。

2回裏も3人で終了。

3回までという取り決めだったので、小林は1000という大差を考えて、2軍（文化部が中心）を出した。

小橋と鈴木、バスケ部の海老澤以外は文化部員が無所属である。

吉田はベンチに腰かけて野球を眺めながら小林に言った。

「なあ、小林？」

「あん？」

「小林には彼女いるか？」

「ん?!」小林はたちまちベンチにふんぞり返るのをやめた。

「何だつて?!」

「彼女いないの？」

「なんか、ムカつく言い方だな。てか、いきなりどうした？」

「いや、男が女に与える影響を知りたくてな。」

「はあ？」

「えっ？」

「さっぱり意味が分からんぞ。本当に大丈夫か？」

「いや、だから例えば……」

「ちよつと待て。」小林は無造作に吉田の首に触れた。

「なんだよ。」吉田がはらった。

「いや、狂ったかと思つてな？ 正常なだけに気持ちわるいな。

何かあつたなら話して？」

吉田が山口から聞いたことを話した。小林は話し終わつてもしばらく何か考えているようだった。

「どう思うよ？ 気絶は偶然かね？」

「ないな。」小林は三者凡退でチェンジになるのを見ながら言つた。

「嫌なことでもあつたんじゃないか？ 彼氏と。」

「だから、それくらいで気絶するものなのかね？ それを知りたい。」

「うゝん、分からない。どうなんだろう？ しかし、蛭原さんが彼氏いるとは知らなかった。」

「……………お前が？」

「うん。てか、俺が知らないのに山口さんが何故知ってるんだろ？ 変だな。」傲慢な言い方だが、確かに小林はこの手の情報には強い。ファールボールが跳んできて、吉田がベンチから立ち上がつて拾つてF組ピッチャーに投げ返した。「それにてつきり俺は蛭原さんは貴司の事が好きなのかと思つた。」

「……………は？」

「だつてなんか積極的じゃないか？ 席が隣だというだけな割にはよく話かけてくるし。」

「それだけで分かるもんなの？」

「……………お前なあ、せつかく女の子に好かれてるって言われてんのに少しくらい嬉しく思わんの？」

「だつて小林の意見だろ。」

「俺の意見」結果だ。俺が太陽が三角だと言つたら三角なんだよ。分かつたか？」

「…………流石だな。」吉田は肩をすくめた。

「とりあえず、本人に聞くしかないだろ？保健室にでも後で行ってきたら？」

「どうせしばらくは起きないぜ。」

「なんだなんだ？そこを利用して襲うつもりか？」

「斬るぞ貴様。」

「冗談だ？まあ、教室に帰ってきたら聞いて見ろよ。俺が聞いてやってもいいんだが、蛭原さんは貴司に聞いて欲しいかも知れないから自分でやれ。」

皆さんこんにちは。川田です。

今回は短めの文章になりましたが、いよいよ第2の戦いに向け、新たな術師が出てきたり、学校生活もだいぶ賑やかになっていきます。

「なかなか開戦しないじゃん、クラスマッチ」との意見を頂き、ハッとしたらもう既に8-16……のおおお！！いや、本当にすみません。

前置きが長くなりましたが、クラスマッチは高校ではよく行われる行事で、男女が別れたり、別れなかったりするのも様々です。

次話からいよいよ、本当に始まりますので、お楽しみに。

なんか、今年は暑いなあ……………（笑）

## CHAPTER 8-6 開戦、クラスマッチ

12年B組教室―

「怜衣…大丈夫？」教室に戻ってきた岩本を三次が迎えた。

「……………」岩本は無視か気付かないのか、無言で席についた。

「ごめんね、嫌な事思い出させて……………」三次が謝ると岩本はため息をついた。

「違う……………そんなんじゃない。」

「え？」

「正貴の事は忘れないし、思い出したくないなんて思わないし

……………」

「??」

「違うの。何か違う。志穂が恋バナをしだした時から胸が苦しかった。……………今は平常だけど。」

「ええっ！わたしが話したから？」

「志穂のせいじゃないよ……………これは、もしかしたら……………」岩本が遠くを見るような目付きをした。

「……………もしかしたら？」

「ねえ、志穂。さっきG組教室に貴司も小橋君もいなかったんだよね？」

「えっ、二人とも居なかったよ？美樹しか居なかったし……………」

「ああもう……………！」

「どうしたの？」

「なんでもない。後藤君でいつもどれくらいに学校来てたっけ？」

「えーと、必ず授業開始5分前に来てるって部内では言われてた。」

「……………分かった。どうもありがとう。話してたら、モヤモヤも取れた。」

「そう？よかった。なら……………」

「え？」

「今日授業で当たるから教えて。予告されたから……………」三次が数？の教科書を出した。

「はいはい。」岩本は机を寄せた。

12年G組教室―

「ガハハ圧勝？」

「優勝できる件について。」

G組教室は勝利の余韻が、機嫌がよく、テンションも高かった。女子はまだ帰ってきておらず、男子は着替えたり、飲み物を買に行ったり、賑やかだった。

その喧騒のなか、小林は吉田が突如、恋バナをし出した意味を考えていた。

当の吉田は部室に居て、今はいない。

「達也。」

「ん、なんだ。」鈴木が話しかけてきたので小林は向き直った。

「いや、戦略の話で考えを聞きたくてな……………」

「ん？」

「……………なんか気になることでもあんの？」鈴木は小林の「ん？」の調子だけで微妙な心情を読み取ってしまったらしい。小林は内心舌を巻きつつ、鈴木に聞いてみる。

「隆徳は蛭原さんと1年の時同じクラスだったけ？」

「ん？そうだよ。」

「体、弱い方かね？」

「蛭原さんが？いや、普通だと思うが。弱いなんて印象受けたことないし、長距離走は俺より早いぞ。」鈴木が言った。

「そうか……」

「なんでそんな事聞くんだった？」

「ああ……」小林は吉田から聞いた一部始終を話した。鈴木は聞けば聞くほど、信用できなくなっているようだった。

「蛭原さんが倒れた？嘘じゃないよな？」

「そんなすぐバレるような嘘つかんよ、貴司は。」 「まる

で、バレない嘘ならつくみたいない方だな……それで、吉田君は理由について何て言ってた？」

「いや、分からなかったみたいだ。だから、俺に彼女がいるのか聞いてきたんだな。びつくりしたぜ。」

「ふむ、俺も初耳だ。蛭原さんに彼女がいたなんて。」

「だよな？」

「ああ。蛭原さんは結構告白されることは多いみたいだが、したことはないそうさ。帰りは女友達や部員と帰ってるらしいし、登校も朝早いからな……」

「意外に浮わついた話は聞かないよな……」

「意外で。まあ、確かにそんな感じはするけど……」鈴木は苦笑した。

「とりあえず、隆徳にもいないんだよな？」小林はそう言って小指を上げた。 「いねえな？残念ながら。」鈴木はクックツと笑った。

「仕方ないな、海老澤にでも聞くか。」

「授業には間に合うのか？」鈴木が言つと、小林は首を振った。

「倒れたんなら、しばらくは復帰できんだろつよ。俺なら昼間では寝てんな。」

「あ、そ。でさっきの野球の件なんだが……」

「おうおう。」小林はしばし、この問題を忘れることとなる……

―保健室―

「じゃあ、3時限目からでるんですね？授業を担当する先生方には先生から伝えておきます。」

「お願いします、先生。」

「すみません……………」蛇原が謝ると、担任の川北先生はいいやと言つて、さつと退室した。

「ごめんね、瑞穂も結香も……………」

「気にしない気にしない。授業がサボれたら良かったんだけど……………」

「あのね。」山口が黒澤をじとつとした目で見た。

「冗談だよ、冗談。本気にしないでよ。」黒澤が笑った。

「美樹、無理しないでね？大事な戦力なんだから。」軽く頭を叩きながら言った。

「うん……………」ありがとう。」

「じゃ、私達行くから。」黒澤が立ち上がると、山口もそれに倣う。

「うん、ありがとう。」

「じゃ、お大事に……………」2時限目終わったらまた来るから。」

「うん。」来訪者が居なくなると、校医の先生が、吞ませてくれた薬はすぐに効いてきて、蛇原は眠りに落ちた。

―棋道部室―

「ほう、蛇原さんが？」

「そつ。」

「へえ……………」小橋は吉田が着替えている間、部室に置いてある「鋼の錬金 師」を読みながら、反応した。

「なんか気になることでも？」

「いや、考えすぎだとは思うが……………」吉田は顔をしかめた。小

橋は無言。

「もしかしたら、霊を連れてきたのかも。」

「あああゝなるほど。」小橋も顔をしかめた。

「それかね？確かに今日この爺さんが来てから急につて言う風に考えられなくもないが……………」

「果たして、何の関係もない蛭原さんに作用するもんなのか？」

吉田は首を傾げた。

「だよな。貴司や岩本さんに作用するなら分かるが、何故に蛭原さん？やっぱり偶然じゃ？」

「たぶんな……………」吉田は着替えを畳ながら言った。ちらりと老人を見たのを小橋は見逃さなかった。

「今日行つて蹴りつけなきゃならない理由が増えたな。」小橋は漫画に目を戻した。

「ああ。もし本当だったら厄介だぜ。」吉田は窓を開けた。涼しい風が入ってきた。朝早く登校し、まだ授業開始には余裕があった。

「……………フツ」

「気持ち悪いな。なんだよ、その笑みは。」

「いや、……………なんか知らないが、楽しい。」

「楽しい？」

「そう。」

「何でこんな忙しいのが楽しいんだよ。」

「小橋には分からんかもな。凡庸が好きって感じるし。」

「んなことはない。変化しない日常は嫌いだよ。だけど、今の

状況を楽しいなんて言えるお前が分からない。」

「そうか。」吉田は満足気な顔をしていた。

「そろそろ戻るか。」

「……………うい。」二人が部室から立ち去った。

―保健室―

2 時限目の授業が終わり、黒澤と山口が保健室に来た時、蛭原はまだ寝ていた。

「あれ？薬の効果は2時間くらいだつて先生言つてたよね？」

「うん……………」黒澤はあまり覚えていないので、言葉を濁した。

「どうする？起こそうか？」

「うーん……………」ますます、言葉を濁す黒澤。山口はそんな黒澤から目を離し、蛭原の寝顔を見た。……………」

思わず、みいつてしまう。自分は普段から友達として色々な面を知っているから、忘れがちだが、仮にも何人もの男子から告白を受けてきた美少女である。

カシャッ。

「何してんの？」

「あつ……………」知らず知らずのうちに携帯カメラで撮影していた。

「……………」もぞもぞと蛭原が動き出した。「起き

たかな……………」蛭原はパチツと目を開けた。

「……………」おはよ。「山口は気まずそうに言った。

「……………」ん…今何時？」

「えっと、2、3の休み時間だよ。」

「よく寝れた……………」蛭原は満足気に伸びた。

「授業でるの？」

「うん。大丈夫。たくさん寝たからもう寝れないから暇だし……………」

「そつ……………」じゃ行こうか。保健の先生は？」

「隣。挨拶してくるからちよつと待ってて。」蛭原はそう言うのと、ジャージ姿のまま、保健室の隣へ行く。

三人が教室に戻っていくと、途中で川北先生に会った。

「む。蛭原さん、もう調子はいいいのですか？」

「はい。大丈夫です。」

「良かったです、山口さん、黒澤さんもご苦労様です。」先生が頷いて見せたので、3人は揃って頷いた。

「では、先生は地歴科職員室にいますので、何かあったら言ってください。」川北先生が去っていくと、授業開始5分前を示す鐘が鳴った。

蛭原達が後ろのドアを開けて教室に入ると、途端に何かとぶつかった。

「ウツ……………すみません……………」女子の声だ。

「すみません……………」

「あれ？美樹。」

「あ……………」岩本が立っていた。

「倒れたんだって？大丈夫？」

「大丈夫……………なんか私に用事？」

「違う。貴司にちよつと報告があっただけ。授業始まるしまった。……………」岩本がするりと蛭原の脇をすり抜けて行ってしまった。

「蛭原さん。」立て続けに声をかけられ、蛭原はビクツと反応した。

「た、貴司君……………」

「ちよつと聞きたいことがあるんです。」吉田は席に座って蛭原を見上げながら言った。

「何？」やや緊張しながら聞くが、

「……………」やっぱりにします。「吉田はそう言うマジロリと右隣の小林を見た。明らかに聞き耳を立てていて、吉田にあっさり気付かれたことにも全く悪気がなかった。

「堂々と言えよ。堂々と。」小林が囁し立てる。

「聞かれてはマズいんだよ。」

「……………」……………「……………」クラス中がこの言葉に反応する。吉田は気付いていないが、蛭原は赤くなっていた。

黒澤や山口も何やらニコニコしている。

小林は吉田の言葉の真の意味を理解しているが、他を宥めるほどお人好しでもない。

「そう言うなよ。敢えてここで言ってみんなに……ああ……ある種の……協力？公認？まあ、言葉はなんでもいいや。とりあえず、知ってる人が増えて損はない。」

「いやマズイつてのに。これは僕だけじゃなくて、蛭原さんにも関わることなんだがな。」

吉田のこの言葉でますます、教室はヒートアップする。

「吉田って積極的なタイプだったのか？！」

「てか、ああいうキャラだっけ？！」

「しかも、皆の前で言うなんて……『俺達を邪魔できるもんなら、してみる！』みたいな？！」

勝手に騒ぎ始めると、止まらないのが高校生である。そして教室全体が騒がしい場合、徐々に声が大きくなるのも常である。

「貴司、俺はよく知らないが、相手が既にいる女子を抱き込むのは至難の技だと思うぞ。」小林の声は喧騒のなかをぬって、しっかり蛭原と吉田に届いた。

「まあ、せいぜい……間に合わせるさ。」吉田が言うと、蛭原に向き直った。

「これを……」

「……はい。」蛭原が怯えたような声を出したので、吉田は目を細めた。

「まだ熱でも、あるのでは？顔が赤い気が……」

「気のせいです……！！」蛭原は叫ぶ。

「先ほど言いかけてましたが……これを……」

「あ……はい。」吉田は紙切れを差し出していた。

「ここでは、読まないで、しかし昼休みまでには必ず読んで下さいね。後で、僕に返すか、自分で処理すらかで、返答を判断しますんで。」

「……………」

「蛭原さん？」

「あ……はい！分かりました！」

「？お願いしますよ。」吉田は前を向いてしまった。蛭原が女子と混じって話始めるのを見ると、小林は吉田の背中をバシリと叩いた。

「吹いたぜ、貴司……………俺はアニメとかよく見ないが、ファンタジーな勘違いってのは本当に起こり得るんだな。」

「意味が分からんぞ。」吉田は耳を書いた。

「そのうち、分かる。だがいつか俺の参考になるかもしれないな、今のこ……………いや、なんでめない。うっかり喋りそうになったwww」小林がここまで愉悦に浸るなんて、と吉田は思いつつ、授業開始の鐘と共に大きく伸びをした。

## CHAPTER 8-7

### 開戦、クラスマッチ（前書き）

かなり投稿に間が空いてしまいました……

今章は苦しかったです……とにかく、骨組みはしてあるのに、納得のいく執筆ができない。

とりあえず次からはCHAPTER 9に移行しますが、今章はとにかく自信がないです。

が!!!!!!!!!!!!読んで頂けるとうれしいです。

それにしても、今年は秋がない気が……（笑）

―昼休み―

―棋道部室―

「何か心当たりはありませんか？」吉田が鋭く聞くが、蛭原は首を振った。

「……………じゃあ、やっぱり偶然なんですかね……………まあ確かに貧血の原因が心理的なものとは……………」

「うん……………」

「……………」

「あの、貴司君？聞いていい？」

「はい？」

「なんか心理的な原因だとマズイことがあるの？」  
「あるんですよ……………いや、蛭原さんに問題があるんじゃないですかね。」

「吉田は首を振った。」

「感情に負担……………岩本さんから聞いたかも知れませんが、最近霊的気配が蠢いているのですよ。だから、もしかしたら蛭原さんが倒れたように色々な人に作用したら困るのです。」

「聞いてないけど……………なんとなく分かった。」  
「……………」

「まあ、疲れからの貧血なら大丈夫です。」吉田はふと蛭原を見た。

「なんかストレスとか溜まってます？」

「えっ！」

「なんか疲れてるように見えなくてもいいですね。目の辺りが。」

「ああ……………気のせいだよ。」昨日夜遅くまでメールしていたことは話さないことにする。

「よく寝てなかったりしたらそれが原因かもですね。」

「……………」

「とりあえず、靈的氣配のせいでなくて良かったです。」

「……………」

「？」

「……………」

「……………」あの、どうかしました？」

「別に。」蛭原はサツと立ち上がった。

「もう、用は済んだ？出てもいい？」

「大丈夫ですが……………」なんか怒ってます？」

「別に。」蛭原はまた行って出ていってしまった。……………」

……………」どうしたんだか」

蛭原は部室棟を出ながら、腹を立てていた。

まるで自分の身よりも、靈的なんたらによる被害を心配しているようで勘に触ったのだった。

「さて、僕も行きますか。」誰もいない部室をサッサと吉田は去っていった。

数分後……………」。

トントントントントントントントントントント。棋道部室のドアが叩かれたが、答えるものはいない。

「あれ……………」？」岩本がいつも予鈴がなるまでいる吉田の不在に首を傾げていた。

―屋上―

立入禁止どころかM高の場合、屋上に通ずる階段すらない。それなのにM高校の屋上には2人の男女がいた。

「じゃあ、バレてないわけだね。」

「ああ。間違いない、奴等は気付いてない。」そう答えて長髪の女は腰元の刀を鞘を通して撫でる。

霊術師前道が時間稼ぎに吉田たちに見せた幻影と変わらない。一見美少女だが、口調は男口調とまではいかないものの、ハキハキとしており、それに加えて長身長髪の女だった。

剣術師、上久保は隣に立つ背の低い男を見下ろした。お世辞にもイケメンとは言えない顔立ちに短髪の茶髪に鎖がじゃらじゃらと体に巻き付いている。眼鏡をかけているその男は上久保を見上げて言った。

「今日の午後、わざと霊とは無関係だと気付かせる。」

「……………は？何故だ？」

「奴等が低能過ぎて面白くない。」

「……………確かにな。」上久保はクツクツと笑う。

「だから、わざと気付かせるわけだが……………問題ないか？」

「ああ、ない。後藤をこの手にかけるのは私だ。邪魔をするなよ？一生後悔と共に生きていく羽目になったらまずお前をストレスの捌け口にするからな。」

「あいよ。」

「私は駅に戻る。夕方また会おう。」

「はいはい。」

この会話の実行例はすぐに現れた。

―放課後―

棋道部室のドアが激しく叩かれた。

「貴司……！いる？！」ドンドンドンドンドンドンドンドンドン。

「ドアが破れますよ。」吉田は冷たく言いながらドアを開け放った。

「貴司……！」

「はいはいはいはい。何ですか？」

「あの家が……」

「え？」

「あの家を取り壊されたんだって……！」

「あの家って、昨日行った家ですか？」

「そう。だから急いで知らせに来たんだよ。あそこに住み着いてた霊はどうなっちゃうわけ？」

「……ちょっと待って下さいよ？」吉田はノートパソコンを開け、メールアドレスを開いた。

「??」岩本が怪訝な顔で覗きこむ。

数分後、吉田は妙な笑いを浮かべて言った。

「踊らされてましたね。」

「えっ？」

「いやはや……ハッハッハ。」

「なに……霊は大丈夫なの？」

「霊ね……いや、大丈夫ですよ？」吉田はやや思案顔のまま言った。

「ごつつあんが来るまでちょっと話せませんが……そうです……」吉田は自分の耳を意味ありげに指差した。

「……！」何回かその行動を目撃している岩本は意味を理解した。

「分かった……またあとで。」岩本は伝えることは伝えたいといった感じで出ていった。

「感術師……………」吉田がそう呟いたのを

4月27日

「我々選手一同は……………」少々長い選手宣誓が終わり、M高体育館ではクラスマッチ女子バレーの1回戦第1～3試合が行われようとしていた。

2年G組は第5試合のため、次の40分に出場する。

「40分で1セットって終わるもんかな？」

「終わるだろ。高校生のバレーなら1球10秒続けばいいほうだからな。」吉田の問いに小林は答えた。体育館は混雑を避けるため、応援にしても試合中のクラスの生徒しか入れない事になっていた。

吉田や小林が外に出ると、蛭原と山口にバツタリとあった。

「あ……………」

「?どうも。」吉田が微妙に頭を下げ、小林が手を上げると二人は、微妙に頭を下げただけで行ってしまった。

「緊張してるなあ……………」

「そこまで気負う必要があんのかな？」吉田は首を傾げた。

「そりゃあ当然。」

「そうなの？」

「ああもちろん。何せあの女将軍が……………」小林が言った。

「黒澤さんか……………」吉田はいつも同バスケット部の海老澤を殴り飛ばしている女子の姿を思い浮かべて言った。

「そつ。人は見かけによらん……………」美人な顔して、暴力派とは。」

「金子ね顔にやや傷があるのはもしかしたら……………」  
「もしかしたら？」

「……………」

吉田と小林は電光石火、後ろを振り向いた。黒澤瑞穂が世にも恐ろしい微笑を浮かべていた。

「匠（金子の名前）の顔の傷はもしかしたら？ん？」

「もしかしたら……………」

「なあに？」

「見かけ以上におつちよこちよいなんじゃないかな……………」と。

吉田が動揺を無理に押さえ付けた声で言った。

「そうかもね……………」

「……………あの黒澤さん。」

「なに？貴司君。」

「絶対優勝してくださいね。」

「期待してるから。」小林も激しく頷く。

「ありがとう。任せてよ。」黒澤はようやく普通の笑顔に戻る  
と脇をすり抜けて言った。

「……………暑いな。」

「ん……………ああ、暑い。」吉田と小林は額の汗をそつと拭  
った。

―屋上―

「今日は暑いな。」

「そりゃ、コンクリートの上に寝そべってたらそう感じるだろ  
うよ。」長髪長身の女は冷たく男に言った。

「楽な姿勢がこれなんだよ。」男は寝そべってた体勢から胡座  
をかいて座った。

感術師……………清水弘宣（CHAPTER 8―1 参照）その人は頭  
をかいた。

「何のために見張りしてるんだよ？俺達に攻撃をさせない命令  
を出しながら、なんでまた見張り？」

「知らん。私でなくあの方に直接聞けば良かっただろう。」上久保はフンと鼻を鳴らした。

「奴等もこつちのこと気付いてるんだろうに。あからさまにやりすぎたか？もしかしたら、俺の仕業だとあまりにも露骨過ぎるから罷だとか考えてるんじゃないだろうな。」

「火術師も氷術師もお前がそんなに頭のまわる奴じゃないことくらい知ってるだろ。相手にしてないのかもな。」上久保は鼻で笑った。

「ひでえ言い方だな。だからと言ってお前の相手に忙しいわけじゃないだろうな。」

「……………確かにな。」上久保は前道の愚策を恨んだ。

先日の戦いにおいて、時間稼ぎのために大富豪同好会メンバーが面識があるなかでは、最も脅威を与えている上久保……………剣術師に怯むことなく、勝負を仕掛けてきていた。

しかも、相手が幻影だと気付いていない段階である。そしてあっさり倒してしまったのだから、今後はただの術師くらいにしか思わないかもしれない。最も、清水が言ったように弱さが露骨過ぎて幻影だとばれた可能性が高いのではあるが、植え付けられた先入観により、大富豪同好会の過度な緊張を誘うアドバンテージは無くなってしまった。

「俺らが『ここ』に居ることは知ってるんだろうな？」

「多分な。いくらお前が学校の管理人や廊下でバッテリー会った奴等に学校の関係者だと思いつましても時間が経ったら意味がないからな。」

「じゃあ、お前が初めから駆逐してたって変わらねえじゃねえか。」

「あんな。敵は大富豪同好会だけじゃないだろ？」

「誰が居るんだよ。」

バサッ。

上久保は答える代わりに書類を清水に放った。  
暇潰しにも成りうるし、と清水は読み始めた。

「要注意人物……………」

「それだ。」

「『小林達也』……………火術師の幼なじみ！！！！火術師より  
ケンカが強いつて書いてあるぜ。」

「いたな、そんな奴……………」

「『鈴木隆徳』……………ボクシング部のキャプテン。」

清水は書類から顔を上げた。

「どうした？」

「鈴木隆徳……………鈴木隆徳……………ボクシング部のキャプテン  
……………」

「……………」

「確かボクシングの県大会優勝はうちのクラス（R高校）に居  
るしな……………しかしどっかで聞いた名前なんだよな……………」

「……………別に今思い出す必要はないだろ？」

「まあな、大して有名でもないはずなのに、なんで聞き覚えが  
あるんだか……………」

清水は無理矢理首を振り、書類を捲った。

「『海老澤弘毅』…バスケット部のキャプテン。なんだこのリスト  
は？」海老澤の下に、他の2人は見られなかった名前のリストがダ  
ーッと書いてあるのである。

「今月に入って妙な怪我で病院で治療を受けた奴等のリストら  
しいぞ。重傷ではないはずなのに、精神的打撃が凄まじいそうだ。  
ん？」

「返す。」清水は立ち上がった。

「お前が正しいことは分かったよ。ちょっとコンビニ行つてく  
るから見張り頼むわ。」

「分かった。」上久保は驚くでもなく、書類を受け取り、剣を  
地面に突き刺しその上に手を置いて不動の体勢で立ち続けた。

川田です。

皆さん久しぶりです！また投稿が空いてしまった……（・・・

リアルが忙しすぎるんですよ、この季節！

とはいえ、いよいよ書きやすい部分である、クラスマッチや戦闘シーンに入ったので、ホツとはしているんですが。

それにしても、今年は季節が怪しい。なんか寒いんですけど。夏が過ぎたら、秋が無くて、冬にいきなり突入した感じがします。

皆さん季節の変わり目は風邪に気をつけましょう！

では今話もよろしく願いします。

―体育館―

体育館では既に第2試合が始まっていた。

「来――――い――――い――！！！！！！」G組のサーブを受ける、2年B組が声を張り上げていた。

美術部の清水が入れるだけ、といった感じの緩いサーブを入れた。

と。

B組女子のコートのちょうど中間に落ち、1点が入った。

「おお~~~~」小橋と鈴木が拍手する。

「明らかに予想外と言った顔してんな。」吉田が苦笑した。

「うん、してるしてる。」小橋は対照に面白くて仕方ないといった感じた。

G組チームは運動部と文化部をわざと混合してあった。それでいて、トスとサーブだけを特化させたのが、文化部員で今のよう緩いサーブときついサーブを混ぜて打たせたため、B組は当然文化部員が運動部員かで判断していたので、サーブを受けることが困難な状況であった。

そんなわけで、試合開始10分でスコアは12-2。サーブだけで点数が決まると言ういかにも高校生らしいバレー試合が展開していた。

清水がまた引っかけサーブを打ったが、今度はB組女子が反応した。

「おっ……………」 拍手が向かいのB組から上がった。

岩本が黒澤にスパイクを打ち込み、真つ向勝負に黒澤は怯むことなく受けてボールは相手コートに返ったが、勢いがよすぎた。結果アウトになった。

「ほお……………やるね、岩本さん。」

「さすがはハンドボール部。ジャンプ力が凄いから球を打つ力も強くなるわな。それにしてもよく跳ね返したな、黒澤さんも……………」

……………吉田がまた苦笑した。 「恐るべきだ。」

「全くだな。」 小橋も頭を振った。

B組は岩本の周りでハイタッチが行われてるのに対してG組ではただ、頷き合う だけ。

女子のやることとは思えなかった。

「美しいですね。」 スッ

「おっ、先生。」 吉田と小橋が頭を下げ、川北先生も頭を下げ

た。

「美しいです。」

「何がですか？」

「あれですよ。」 川北先生はそう言つてコートを指差す。

「戦う女性とはあんなにも美しきものなんですね。」

「うつくしいですか？」 小橋がやや吹き出しそうに言った。

「はい。特に……………」 黒澤を指差す。

「美しい。」

「さつきからそれしか言いませんね。」

「勝敗なんてどうだっていいんですよ。いかに美しくなれるか

……………」

「勝敗は気にしますよ……………明後日は絶対勝つて見せますから。」

「私が言ったのは女子の話です。男子は勝たなければ美しくありません。」

「差別だ！」

「それに。」川北先生は二人に背を向けて歩き出した。

「君達に4万円懸けました。」

「教師がやることじゃねEEEEEEEE」

「私だって人間だもの。」

「みつをww」川北先生はスタコラ去ってしまった。気付かないうちに、G組が20点を挙げていた。

「B組強いかなと思ってたけど、岩本さん以外機能してないね。」

「うん。相手が強すぎて戦意喪失だよ。」吉田が首を振った。  
その時。

「おい。」小林だった。

「どったの？」吉田が聞くと小林は目の前に紙を突きつけた。

「Dグループ組み合わせ表……………」

「たった今、野球の抽選をやって来たんだ。」

「ああ。そういや、リーグ戦予選＋決勝トーナメントだったか。」

「俺達は2年A組、3年C組、3年E組とあたることになった。」

「なんだその片寄ったリーグは。」

「仕方ないだろ、くじ引きなんだから。シードも調整もないの。」

歓声に消されないよう小林は声をやや大きくした。

「1位通過で決勝トーナメントだ。決勝トーナメントは6チームだが、そのうち上位2チームは失点率が低い順に決まるみたいだ。」

「失点率？」小橋が首を傾げた。

「2006年のWBCで採用されてたじゃん。第2R1組が日本、アメリカ、メキシコが1勝2敗で並んでさ。失点数をイニング数で割るわけよ。日本とアメリカは同じ失点数だったんだが、日本が後攻が多かったから、失点率がアメリカを下回ったんだよ。そし

て優勝したわけだ。」吉田が淡々と説明した。

「へえ……来年だっけWBC？」

「そういや来年3月だったな。まあ2連覇できるかね？それより北京五輪に期待する。」

「どうだっついていい！」小林が割って入った。

「どうだっつてよかねえよ。3年だろうが負けないように練習させてきたんだろ？」

「当たり前だ。だが小橋が使えない以上……………」小林は小橋の右手を見た。

「一抹の不安はあるんだよ。」

「おっ、勝った。」G組がハイタッチしていて、クラスメートの男子達が拍手していた。

「こうしちゃいられない。隆徳と作戦を整理しないと。」小林は少しだけ拍手すると、足早に去っていった。「瑞穂……凄かったよ。」金子が幼なじみの黒澤に声をかけた。

黒澤はパイプ椅子に座りながら、アクエリ阿斯を飲んでいたが、金子の声にやや面倒くさそうに答えた。

「まあね。弱い相手じゃなかったけど、練習量の違いが明らかだったよ。レシーブを思うようにできてなかったみたいだし。」口元は満足げに緩んでいた。

「ウェーイー！」サッカー部の館や大塚はテンション高く、女子とハイタッチしたりしていた。その脇で、春日をはじめとする男子たちが女子達をうちわで扇いでいた。

「あ……………」蛭原さん。「吉田が黒澤の元にやってきた蛭原をみて呟いた。

「あ！貴司君！みててくれた？」

「はい……………」体調は大丈夫なんですか？」吉田は少し顔を曇らせながら言った。

「もう、気にしすぎだよ、みんな。昨日はちょっと寝不足も絡んだと思うし……………」

「そうですか……第2試合も頑張って下さいね。」

「うん、ありがとう！」蛭原はニコリと笑うと黒澤の隣のパイプ椅子に座った。

吉田はしばらく蛭原と黒澤の会話の様子を眺めていた。

昼休みを挟んで第2試合が行われていた。

吉田と後藤は棋道部室にいた。

「つい先程、心術師が校内に入り込んだそうぞ。」「感術

師だつての。なるほど、随分と大胆に來たもんだな？ケンカうつてんのかね？」

「そうですね、考えられます。」

「まだ、敷地内にいるかな？」

「いますね。出ていったら、形跡が残りますので。どこにいるかは分かりませんが、間違いなくいます。」

「今のところ攻撃してこないようだが、牽制しておくか？動き出されたら厄介だぞ。」

「場所が分からないんだから、無駄骨ですよ。我々が動き出すのを待っていて、誰も居なくなつた体育館を襲撃されたらそれこそ厄介ですよ。」

「そうか……しばらくはここを動けないわけか。」

「この部室からなら体育館に10秒で行けますからね。しばらくはここで待機しましょう。それにしても……」後藤は吉田を見た。

「G組は強いですね。」

「えっ？……ああ……」吉田は苦笑した。

「モチベーションの問題かもな。賞金目当てではないみたいだし、単に勝利に固執している。」

「マジですか？そんな風に勝利に拘っているようには見えな

「つたんですけどね。」

「それでいて極めて冷静だったな。あの女子達はなかなかの精神力だな。」

「ハハ……それなら心……いや感術師が現れても大丈夫そうですね。」

「確かに。」

「それより応援に行かなくていいんですか？」

「この後の試合でベスト8かどうか決まるさ。その次でベスト4をかけて……んまあ、今日の日程はそれで終わりだ。」

「なるほど……しばらくは気が抜けませんね。」

「厄介な時に来てくれるよな……」吉田と後藤は苦笑した。

小橋が、「それ」を見かけたのは、第2試合が始まってまもない頃だった。

「あの女……」小橋は目を細めた。

「なんでここに？」小橋はスツと立ち上がり、屋上に通ずる外階段を見た。長髪、長身の女が階段を上がっていく。

「……………」小橋は眼鏡をずらして目をこすった。

小橋が今すぐに行くべきかどうか一瞬悩んだ。だが、霊術師の幻影にすら完敗とついていい、敗北を喫した後だし、何より屋上においては植物がないので、剣術師の圧倒的優勢は初めか決まっていた。

小橋は吉田の姿を探した。だが、当然見つからない。

「……………チッ。」ひよつとして、もっと前から気付いていたのか。だからもう行動を起こしているのか。

小橋はやや迷った後に、そっと体育館を抜け出した。校舎の方

に來ると、屋上に通ずる外階段へは近づかず、校門へと向かった。

どうやって侵入したのか、興味があつた。靈術師が堂々と校門から侵入して以來、吉田と後藤と小橋は、M高の学生証を持たない徒歩の人間を映像で残せるよう、小型カメラをしかけていた。

その映像は後藤の携帯に届くようになっていた。だから、後藤を探すより直接テープを見た方がよかつた。

小橋は校門に着くと、直ぐ様チェックを始めた。持参した別のビデオカメラで映像を2倍速で見はじめた。

## ―屋上―

「そろそろ気付いたかね？」 感術師清水が言った。 「……

……」 上久保は顎を細い指で掴んだ。

「……おい！」

「気付いているが、無視してる。」

「なんだと？なぜ気付いているといえる？」

「緑術師が私を見たはずだ。」

「緑術師が？」

「ああ。わざと見せたから間違いない。」

「なんだってわざと見せた？まさか居場所も知られたんじゃないだろうな。」

「我々の存在に気付くかどうか……私の容姿を知っているかどうかを調べるだけだ。居場所もここはばれているはずだ。」

「お前な！」 清水が怒って立ち上がった。

「俺らを確実に殺るために、数十人で来られたらどーすんだ！大富豪同好会以外にも敵がいるって言ったのは誰だよ！！」

「騒ぐな。私はそんな浅はかではない。何のためにこの日を選んだんだよ？そして我々がここにいる理由を思い出せ。そして、そんなに戦うのが嫌なら今すぐ帰れ。」

「チッ……………」清水は座り直し唾を吐いた。

「……………」

「なぜ、無視してるんだ？無駄な交戦は避けたいからか？」

「そうだろうな。だからと言ってこっちがわから仕掛けるつもりもない。冷戦状態がしばらくは続くな。」

「……………」清水が黙り込んだ。上久保も無表情なその裏に苛立ちを隠しながら、体育館を見つめていた。

―体育館―

「じゃあ、最初のサーブは田中さん、よろしく。」

「分かった。」黒澤の指示に、吹奏楽部の田中はてきばきと答えた。

試合が始まり、G組にとっては第2試合が始まった。

田中がサーブを打つ構えをする。

ぐつと構える相手チーム。相手チームは3年C組であり、一番背の低い選手が、G組で一番背の高い田中と同じである。不利極まりない最中、サーブを放つ田中。田中のサーブがネットを超え………すぎ……………」

ようとした所で、ギリギリのラインでコート内に落ちた。3年C組チームはアウトだと思って眺めていたので、誰も取れなかった。

「オウエーイー!!」G組の男子が、盛んに相手を威圧するような声を出した。

続いて、田中のなんでもないサーブを、3年後方のライトが受けたものの、真横にずらして、センターの女子の顔にぶつけた。

ヒヤヒヤ……………とG組男子から冷たい笑い声が盛んにした。

「ドンマイ!ドンマイ!」負けじと相手チームの男子達から声が沸いた。

相手チームは仮にも先輩なのに、全く躊躇のないG組である。

10分後……………

3年C組がタイムを取ったところで、G組も選手を交代する。スコアは9ー1……………田中がサーブを6回目にミスした後、4点連続で相手のスパイクミスを誘ったとき、たまらず相手はタイムを取った。

―校門付近―

「……………見つけた。」小橋はビデオカメラを握りしめた。長身の女が校門から堂々としてきていた。M高は共学で自由な校風が売りなので、校門付近に警備員がいたりはしなかった。今回の監視カメラ設置も誰にも言うておらず、「盗撮」と言われればそれまでではあった。

「……………」小橋は念入りにテープを確かめた後、直ぐ様監視カメラを元の位置に戻すと、校門から離れた。

「むっ……………」上久保が運良くその様子を見ていた。

「おい、見る。緑術師だ。」

「ん、どれどれ。あの眼鏡の奴だな。」

「手に何か持ってなかったか?今は背中に隠してしまっている

が。」

「俺はお前より目え悪いのになんでそんなんが見えるんだよ。」

「……………武器とかそういう類ではなさそうだが……………」

「ならいいじゃねえか。お前の足跡でも探してたんじゃないのか？」

「違うな。既に我々の潜伏に気付いていながら、なんでそんな面倒なことをする。まさか、校門を封鎖したとかじゃないだろうな？」

「なんだってそんなに気にするんだよ。さっきお前が言っただろうが。『無駄な交戦は避けたい』ってよ。」

「戦いを挑んで来ないとしたら……………なんなんだ、この胸騒ぎは。」

上久保は長身長髪に似合う、豊かな胸に手をやった。

「……………少し撤退の時間を早めるか？」

「……………そうだな。」

「滅茶苦茶に悩みやがったな。」

「15分だ。」

「早めるってことか？」

「ああ。」

「まあな、これだけ時間を与えておいて、残り15分でどうこうするってことはないだろうよ。」

「……………そう願いたいな。」上久保は苦々しく言った。

― 部室 ―

ガチャ！―つといきなり鍵が回り、扉が開かれた。

「？」吉田がすき家の牛丼を頬張りながらこちらを向いた。

「吉……………田。」

「来たついでに茶取って。」吉田がやや手前の500mlペツ

トボトルを指差した。

小橋は何も言わずに渡した。

「騒々しいな。なんなんだよ。」

「気付いてるか？」 小橋は指で天井を指した。

「あの二人のことか？へえ、屋上に居たんだ。それ以外は知っ

.....

「違う！ 奴等の背後だよ、背後！」

「背後だと？」 吉田は冷たく小橋を見た。

「何の話をしてるんだよ。」

「これだ……ほら。」小橋はビデオカメラを差し出した。吉

田が無言で受け取り、再生させた。

「ほう……正門から堂々と……！！！！！！！！！！」

「見たか？ いや、見えたか？！」

映像には上久保が移動する様子がよく映っていた。そしてその背後に……

「こいつは確か……………3Gの三柱臣の一人か？」

「三柱臣ではなかった。確か、俺と後藤が前に戦った、「変術師」だ。」

「だが、7人の術師の中にはそんな奴は居なかった。」

「利用してるんだ。独立した術師だが、お世辞にも俺らの味方とは言えまい。まずいぜ。」

「体育館に戻った方がいい。」吉田は牛井を一気に掻っ込んだ。

「小橋、お前は屋上の二人の監視を頼む。万が一変術師が二人と交戦して感術がこちらに影響するようなら、早めに対策を打っておかねば。」

「分かった！」吉田と小橋は、部室棟から飛び出し、熱狂する体育館へと走って行った。

お久しぶりです。川田です。

（・・・）非常に怠慢で投稿が遅れてしまいました……

秋らしくて過ごしやすい日が続いていていいですね〜

僕の住む所はまだ暖房要らずです。

夏が猛暑なだけに、冬も暖冬なのかな……？

暖冬より冷夏が好きです。寒いのは耐えられるけど、暑いのは無理……………ま、適切が一番いいんでしょうけど。

では、皆さん、今話も読んで下さってありがとうございます。

これからもよろしく願います m (——) m

今回はこの辺で。

## CHAPTER 9 12 狙い通り

小橋が校舎に行つたのを見届け吉田は走つた。体育館に着くと、G組の生徒が小躍りしていた。

スコアは……………2219……………

吉田は3年相手にここまでやれる同級生に呆れるも、まだ何の異変も起きていないことに安堵した。

一方小橋は屋上に行くべく、非常階段のある校舎に入った。

「おっ。」

「むっ。」見ると鈴木と小林が、校舎から出てきた。

「小橋。」鈴木が声をかけた。

「何してたんだ？」

「明後日の野球相手の情報収集さ。いや。」鈴木が首を振つた。  
「別に、女子バレーを

ほつたらかして訳ではないんだよ。ただ、一方的な勝ち試合つて分かつてるからさ、暇つぶしに……………小橋はどうした？」

「んあ……………えつと。」小橋は小林に話すのは構わないと前に吉田から言われていたが、鈴木の前で話すのは憚られた。

「同好会の仕事か？」小林が事情を知つてか知らずか、聞いてきた。

「まあ…そんなところだ。ちよつと注意する必要がでてきたんでね。」

「ほう……………で、敵が校舎にいるのか？」

「屋上にな。」小橋が言うと、小林と鈴木は顔を見合わせた。

「敵って……………不審者とかそんな感じ？殺人とかしちゃう系？」鈴木が聞くと小橋は微妙な顔をした。

「殺人はないが、少なくとも危害は加える可能性がある。クラ

スマッチが始まった時から、ずっといて傍観してたから見てもぬふりしてたけど、もしかしたら、動き出す可能性があるから、見張りに、な。」

「ヤバイやつらか。クラスマッチ中止させた方がよくね？」

「理由がないだろ。正直に言っただけで信じられるわけじゃないんだから。」

小橋はそう言うと、階段を上り始めた。

「待ってくれい。」

「なんで追ってくるんだ。」

「俺は戦力になるぜ。暇つぶしにもってこいだ！」

「おいおい……………」鈴木までついてくる。

一行は3階に来た。ここから非常階段に出て屋上に行くつもりだ。

と。

ガシャンと音がして、近くの教室のドアが閉まった。

3人はそちらを注視する。

「誰だ？今はクラスマッチ中なんだが……………」

「お前が言えた口か。」鈴木が小林に突っ込むのを無視して、

小橋はそっと、小窓からその教室を覗き込んだ。誰もいない。

「誰もいないな。」

「教卓とかに隠れてんじゃね？掃除用具入れとか……………」  
その時だった。

ガラスとドアが開き、ナイフが特攻してきた。

侵入者が教室にいる事を知らなかったら、まんまと奇襲は成功していただろう。だが、警戒していた小橋はいとも簡単にかわした。それどころか、獲物が釣れたことに、満足していた。 「ナイフが浮いてる。」 鈴木がナイフをみて叫んだ。

そう。ナイフが特攻してきたのだ。侵入者の姿は見えていない。

ナイフが動きを止めたのをみて、小橋が言った。

「変術師だ。」

「なんて言った？」

「変、術、師だ。」 小橋が繰り返す。

「少し変わった人間を術師って呼ぶんだが……………っと。」

小林に向かってナイフが向きを変えた。鈴木は表情が動揺しているが、どこか余裕が感じられた。

「どんな能力をもった術師なんだ？」

「吉田君から術師については聞いたな？」

小林が首を縦に振り、鈴木は横に振る。

「話して大丈夫か？」 小林が聞くと、小橋はあっさり頷いた。

「やむを得ないってやつか。術師ってのはうおっ……………」 ナ  
イフが特攻してきた。小林は避けた。だが。

「うおおお?!」悲鳴が上がリ、鈴木が顔を庇った際に前に出した右腕にナイフが深々と突き刺さった。

「隆徳!!!!!!」小林が叫んでナイフの柄を蹴った。

ナイフが勝手に抜け、小林に今度は向かってくる。

小林がかわす。しかし、ナイフは直ぐ様体勢を立て直し、小林を狙う。

「隆徳、大丈夫か?ハンカチあるか?!」小橋が駆け寄り、激しく出血している、右手を見た。

「いつてえ…………マジ殺す、あの野郎!!!!」鈴木がらしくもなく激怒していた。

「ナイフが生きてんのか?」

「違う。ナイフを持つてるやつが姿を消してるんだ。」鈴木の傷口をハンカチできつく縛りながら小橋が答えた。

「小橋!お前もその術師なのか?何か特殊能力はないのか?」

「あるにはあるが…………屋内ではまず無理だな。相手は姿が見えないだけで、ただの戦闘員と考えれば……………まだ楽だろ?」

小橋はそう言つて、ポケットからやや刃渡りが長いナイフを2本取りだし、鈴木に放った。

「屋上」

「騒がしいな。」

「生徒が戻ってきてるのを何回か見たから、そいつらだろ。」  
上久保は興味を示さない。

「ふーん。」清水はつまらなさそうに携帯をいじり出す。  
上久保も必要以上のことは喋らず、黙って直立していた。

と、

「うおおお?!」という叫びが聞こえた。

「なんだ?」清水はギクリとして言った。

「……………痛いとか何とか叫んでるのは聞こえたな。事故かケン力だろ。」上久保は興味をやはり示さない。

「……………確かに、罵り合ってる声が聞こえたような……………」

「だろ。血の気が多くていいな。」

「いいのかw」清水が苦笑しながら、携帯操作に戻った。

―体育館―

「おおおおお!!」2年G組が、25―14で快勝。吉田もやや緊張を緩め、祝福の輪に加わった。

「流石だ……………」

「つええ……………」などの称賛を

「ありがとう皆!」の一言でお礼を言う黒澤はじめ、他の女子も誇らしげであった。

「勝ちましたか。」いつの間にやら川北先生もいる。

「はい!」嬉しそうに蛭原が得点版を指した。 「美しい

……………」川北先生はメガネを吹き出した。

一方破れた三年生チームは通夜のような雰囲気でも喋ろうとしない。男子は夢中で携帯をいじるか、寝るか、外を見ていたし、女子は飲むか、扇ぐか倒れるかしていた。

そんななか、吉田はふと気が付いた。

「大塚。」サッカー部の男子を呼んだ。

「ん?」大塚は笑顔のまま反応した。

「小林と鈴木君は居ないの?」

「…ああ、さつき教室棟に行くって言ってたな。」 「なん  
でまた。」

「三年生の情報を盗むためだとき。」

「マジか………それいつぐらい？」

「昼休み直後だったかな………」

「なるほど。どうもね。」

「いやいや。」大塚が祝福の輪に戻るのを見てから、吉田は校  
舎へと向かうことにした。  
と。

「ごつつあん。」

「おお。勝ったみたいですね。」後藤とばかり会った。

「まあ………それよりごつつあん。少々まずいことになった。」

「はい？」

吉田は敷地内に、新たな術師が紛れ込んでいることを手短に話  
した。

「小橋に見つけたら連絡するよう言っているから、大丈夫だと思  
う。」

「校舎にいるとは限りませんよね？ここなんか、狙われたら厄  
介ですよ。だから今まで居たのさ。それで」

ブ~~~~~ブ~~~~~ブ~~~~~

「あ。」吉田が携帯を取り出す。

「メールですか？」

「ああそうそう。………小橋からだ。」吉田の目が鋭くなる。

吉田がメールを開き、後藤は横から覗き込み………驚愕する。

「現れた。」

―教室棟3階―

ガキン！！！！ガキン！！！！

激しい金属音が鳴り響いていた。小林と小橋がナイフ単身と戦っていた。小林が怪我の鈴木を気遣い、鈴木を殴って気を失わせたので、2対1での戦いだった。

「そこかつ！！！」小林がナイフを持っているだろう腕があると思われる部分にナイフを降り下ろすが、空振りした。

「チツ！」その反動で、バランスを失いヨロヨロとした所を、ナイフ単身が襲う。

すかさず小橋が割り込み、ナイフを受け止め、腹と思われる部分に蹴りを入れるが………また空振りする。

思いつきりナイフを受け返し、間を取った。

「どんな体型してんだ、こいつは。」小林がイライラと言った。

「普通だよ。」

「ていうか、見たことあんのかよ？」

「あるさ。ペンキをぶっかけてな。全身血塗れみたいだったが、声も聞いたし体型も見た。ただ、真の顔は見えなかった。だから、例えこいつが姿さらして何食わぬ顔で入ってきてても、分からなかった。」

「じゃあ何でこいつが入り込んでいるって、わかったんだよ？」

姿を消すか、元々の顔を知らないならよ。」小林が唸る。こうして話している間、変術師はナイフをだらりとたれていて、休んでいるようであった。「フツ……………言えないな。っと、なんで叩くのだ。」

「もう、ある程度の事は知ってるから言っても差し支えないだろ?」

「吉田から話すのはな。俺から話すのとは違う。」小橋は断固として言った。

「それより、どうする?」小橋が追及を許さず言った。

「ペンキなんてないしな……………あつ」

「どうした……………?」

「昨日の宿題持ち帰るの忘れてた……………」

「……………こんな時に

!!」小橋が妙に長い間をもって言った。

「さあて、そろそろ。」小林が上着を着た。

「……………」

「斬られないようにするんだよ。」小林が冷たい目をした小橋を見る。

「戦闘シーンで上着を脱ぐのだけが格好いいと思ったら大間違いだぞ。」

「ハイハイ。」二人が構える。変術師も休憩終了のようで、ナイフを構えた。

「こんな広い所で戦うから不利なのかもな。相手がどこに行つたのか想像しづらい。」

「なるほど!!」小林がそう答えた時にはナイフが向かってきていた。

小林達はそれから逃げて、教室に逃げ込んだ。

ナイフは鈴木に構わず、特攻してくる。

小橋がそれを受け、ナイフで力の押し合いになる。

「だあぁっ！！」小林がナイフを持つと思われる変術師の頭めがけてナイフを投げる。

しかし、何にも当たらず、黒板に突き刺さった。

小林は急いで回収し、ナイフ単身を小橋と共に挟む。

「……………」

「なっ……………」

どこからともなく、ナイフ単身が2本に増えていた。

「二刀流ができるか……………2対1でも厄介だな。」小林はそう毒づき、小橋はナイフを握る手にいつそう力を込めた。

## CHAPTER 9-3

### 狙い通り（前書き）

こんにちは川田です。

今年もあと3週間程になりました。あつという間の一年でした。投稿もなかなかままならなくて、残念でした…（・・・）

ですが、ここまで書き続けていられるのは、他ならぬ読者の皆さんが居たからです！

本当にありがとうございますm（――）m

さて、今話からは安泰だと思われていた大富豪同好会メンバーの予想外の出来事にみな翻弄され、少々厳しい情勢に立たされます。果たして、学校の行事の最中に起こる事件に無事対処できるのか？

どうか、今後ともよろしくお願いしますm（――）m

「屋上」

「おい……………」

「ん……………」上久保は清水が口を開いて話だそうとするのを首を振って止めた。

「ケンカか……………」

「ちよつと見てくる。」上久保はスツと立ち上がった。

「おい、あれ。」清水が下を指差した。

二つの影が校舎に入って行った。

「火術師……………」それに氷術師も。」

「ひどく急いでんな。それに……………」清水はガキン、バキンという金属音に眉を潜めた。

「今日は私達以外に居ないよな？」上久保が言うと、

「ああ。居たら『感情の流れ』でわかるはずだ。特に俺らは流れが一般人より遥かに強いからな。」

「だよな……………」

「奴等を攻撃すんなって命令されてんのに危険を冒してまで破る奴がいるか？」

「……………」上久保は何も言わず、屋上の階段を降りていく。

「上着を脱ぐのが当たり前だと思っただら間違いだぜ。」

「……………」上久保は一人の男子が床に倒れ、緑術師と先程から話題に出ていた火術師の親友……………小林がナイフと戦っているのを見た。

そのうち二人は教室へと戦場を変えた。

そこにタツチの差で火術師と氷術師がやってくる。 「さっ

きから小橋の声がしてたが……………」

「どっかの教室に入りましたかね？」

「別校舎に逃げたかも知れない。」

「手分けして探しましょう。見つけたら、叫んで知らせあいましょう……………」

「そうするしかないか……………」吉田は顔をしかめながら別校舎へと移動した。後藤はこちらへと向かってくる。

ちなみに、校舎は

A B C

H G F E D

非常階段

後藤

吉田

別校舎

となっている。

非常階段から微妙に上久保が覗き込み、A組の教室に小林達が居る。後藤はそれに気付かず、D組から探し始めた。

上久保は今こそ、氷術師を倒すべきかどうか迷った。命令とはいえ、1対1の滅多にないチャンスである。

「……………」上久保は目を閉じた。氷術師を見ていると、命令云々より、沸々と沸き上がる殺意を優先して斬りかかってしまいそうである。氷術師達が自分達の存在を知らながら放置していることを忘れてはいけない。

「そこに居るのは誰です？」

「！」上久保は慌てて全身を引っ込めた。しかしそれこそが仇となった。

ガシャン！！！！氷の塊が飛んできて、上久保は不意をつかれた、

塊が弾けたかと思うと、鋭利な無数の針のようになり、上久保を襲った。全く何の防御も出来ずに、上久保は晒していた両手足に傷を負った。顔は幸い、無傷だ。

「貴様ああああ！！！」上久保は激昂して、非常階段から姿を表した。

「貴方でしたか。オーイ！！！！！」後藤は小さい体からは想像もできない大音量で叫んだ。

## Ⅰ A組教室Ⅰ

「つと！！」小林が机に手をつき、跳躍してナイフをかわす。

ナイフは鍵を閉めた扉をかけ上がり、恐らくはバク天して、向きを変え突っ込む。小橋がかわして、後ろから特攻する。ナイフが振り向き、バキングキンと攻め合いになる。

「フッ！！」小橋が蹴りを入れる。腕で受け止められる感触がして、さらに足に力を入れる。

「おっ？！」小橋が足をはられ、バランスを崩して転倒。

「うおおっ！！」小林が斬りかかり、ナイフが受け止めた。それでもう一方のナイフが小橋に斬りかかる。胸を狙っている。

小橋が何とか避け、ナイフが床に刺さった。抜こうとするが、なかなか抜けない。

「どうっ！！！」小林がナイフの柄よりやや上の部分を蹴ろうとする。

「と見せかけて……………」小林が突如足を止める。

「ここだ！！！！」それより左に右手でパンチを打ち込む。

「うあつ……」初めて聞く声がして、ロッカーに激突した。柵の上から、黒板消しやらチョークやらが落ちてきて、変術師の頭に当たった。

端から見ると、黒板消しやチョークが突如軌道を変えているように見える。

「だあああああああああ！！」小橋が叫んでナイフで特攻する。受け止められた。

ニヤリ……小橋が凶悪に笑った。

「くらえ。」小橋は背に隠していた物を左手で……ぶちまけた。

「！！！！！！！！」

「よくやった！！」小林が叫んだ。

「！！！！！！！！」変術師は真っ黒になって姿を完全にさらしていた。

「なかなか落ちにくいぞ、この墨滴は……」

書道に使う墨の液を誰かのロッカーからだして、全部をぶちまけたのだった。

「さあて……」小林はもはやナイフすら一本失った変術師に近寄る。

変術師は立ち上がり、まだ戦うという意志を示した。

二人はそれを見て、気を引き締め直した。

―体育館―

「達也はまだもどってないのか？」

「……ああ。そっぴや貴司が呼びに行ったみたいだが、遅いな。」大塚が答えた。

質問した大塚と同じサッカー部の館は顔をしかめた。

「つたく、遊んでやがるな。今日の練習フリーだから来るかどうか確認したいのによ……」

「メールしたのか？」

「１回だけだがした。困るなあ、何人来るか分かんないと、参加するべきかどうか分からん……」

「ま、少人数だからって、筋トレも面倒だからな。」

「川北先生。」館は担任教諭を呼んだ。

「この後は……もう俺らは試合ないんですが、解散でいいんすか？」

「……」川北先生は答えない。

「先生？」

「……」

「先生……」館は見かねて川北先生の前で手を振った。

「……ん」

「先生、聞いてますか？」

「いいですよ。」

「えっ？」

「だから、いいですよ。」

「どういう意味ですか？」館は困った顔をした。

「解散していいか、と聞いたのは館君じゃないですか。」

「気付いてたのか！」無視された事に怒る館。

「解散するのは構いませんが、全員に伝えて下さいよ。」

「分かりまし、た」館は皮肉っぽく言った。

川北先生は気にせずスタスタと去っていった。

―校舎３階―

「久しぶりだねえ、火術師に氷術師。」上久保は薄く笑いながら二人と見えた。二人は冷たく見返した。「再会を喜びあうような仲じゃないだろ。」吉田が冷たく言つと上久保は更に薄く笑う。

「なんでかねえ…………私は嬉しいよ。最も、色沙汰より、『ここであつたが100年目!』という感じはするけどね。」

「お前、戦闘目的に来てたのか……………」

「……………7つの大罪って知ってるか?」

「は?どうした急に。」吉田が不愉快な笑い方をした。

「知ってるかと聞いたんだが?」

「ハガンで散々読んてるから知ってるよ。人間が生まれた時から持っているとされる、罪……………犯罪の際には必ず何かが作用するらしいな。」

「私はその中でも『憤怒』の感情が強いのだ。他の感情がないわけじゃないがね。」

「へえ……………それがどうしたって?」吉田は冷たく言った。対する上久保も無感情に言う。

「だから、たとえ上から命令が出ていて戦いを禁じられていたとしても、自分の感情に流されることが稀にあるんだよ。稀に、な。」

ドタッ。

何かが着地する音がして感術師、清水が姿を現した。

対峙する、火術師氷術師と剣術師感術師。

誰も口を開かず、時間だけが経過していく。

13年A組教室―

「ふうんっ!!!」小林が正確な蹴りを変術師に入れる。変術師がなんとか交わし、横に跳ぶ。

小林はフツフツと言いながら、パンチを、蹴りを、反撃を全く

許さずに放つ。

変術師は徐々に隅へ追い詰められる。

壁に背が触れた時、一か八かでナイフで小林を狙った。

だが、かわされ、むしろ小林にナイフを持つ腕を掴まれる。

「！」

小林は腕を自分の方へと引っ張り、変術師を手繰り寄せる。襟首を掴むと、後方に思い切り投げた。

机をいくつかなぎ倒し、椅子をどかし、大きな音をたてて、変術師は机の中に埋もれる。

傍観していた小橋は鼻で笑った。

「姿が見えるようになった途端、目に見えて弱くなったな。2対1でやってたのがバカらしい。」空になった墨汁の容器を弄びながら嘲笑する。

姿を見せてからというもの、一般人たる小林に一発のパンチすら入っていなかった。それどころか、息をきらすことさえ儘ならない。

「降伏しろ。手をつきだしてひれ伏せ。」小林は冷たく投降を呼び掛ける。

「……………」無言でナイフを構え直す、変術師。

目にはまだ諦めていないように見える。小林は鼻を鳴らした。

「アホだな。」単純に言い切る。

「そもそも、お前は何が目的で来たんだ？何で強行手段に出た？そしてお前はなんなんだ？」小林は一気にまくしたてる。

「答えれば、休戦にしてやってもいいのだが。答えなければ、お前が誰も傷つけられないように、最低でも腕一本くらいはいたかくぞ？」

「話した方が得だぞ？」小橋も冷たく言う

「……………」

「……………」

「……………」沈黙が訪れた。変術師は窓や、ドアに素早く目を走らせていた。小橋や小林は全く焦っておらず、逃げられるものなら、逃げてみる、のオーラを放っていた。

「……………」チ「変術師がナイフを落とした。」

「まだあるだろ？」小林は殊更に冷たく言った。

「……………」ツ！！「変術師は諦めず、胸元からナイフを更に出して小林に襲いかかる。」

「ハッ。」小林はナイフを持つ手をガシッと掴み、一気に背負い投げする。

ドンツ！！と痛々しい音がして、小林は変術師にのしかかる体勢になった。

「グアア……………」変術師の肩を小林が切り裂き、さらに首を狙った。

「終わりだ！」小林は叫び、変術師が無我夢中で叫んだ。

「話すからやめろ！！！！」と。

小林はのしかかったまま、ナイフを首を突きつけたまま、変術師にニヤリと笑いかけた。

―校舎3階廊下―

唐突に、感術師が動いた。清水が、口笛を吹いたのだ。

途端、清水と上久保の背後から、3人の男子生徒が、包丁を振り上げて、襲いかかってきた。

「！！」吉田は短剣を取りだし後藤は水道に走る。ガキン！！！！バキン！！！！と激しい音がした。

吉田が3人を一気に相手取り、かつ冷めた顔で感術師清水に呼

び掛けた。

「お前に部下がいたとはな。驚きだ。」

「まあ、どちらかと言うと『下僕』だな。火術師を殺したい、若しくは怪我させたいと感情を操作すりゃあ簡単さ……………」  
「下卑た笑いをする、清水。」

「さて。」上久保は刀を鞘から抜いた。清水は壁にもたれ余裕の表情。

「いつまでも遊ばせはしないよ？」

「……………」

後藤が水から錬成した氷刀ひやうを両手に構えた。 「……………」

途端、上久保が飛んできた。そうとしか思えない敏捷さで後藤との間合いを一気に詰めた。

後藤は大太刀を両刀で受け止めたが、腹ががら空きとなった。

「うっ！」後藤の腹めがけて上久保の蹴りが放たれた。後藤は左手の氷刀を下ろしたが、衝撃を殺しきれず、バンツと鈍い音と共に飛ばされた。

「……………」

「フッ！」上久保が斬りかかる。吉田がすかさず斬撃を受け止めた。

力を入れて押し返す。上久保が後方に跳んだ。

「ごつつあん、こいつら頼む。」吉田は上久保から目を離さず、後藤に清水の部下3人を指差しながら告げた。

「はい。」

「こいつは僕に。」

「いいねえ、火術師。」上久保はクククと笑いながら言った。

「非常にいいね。純粹に本気で戦える相手は久しぶりだよ。」

「本気出すのかよ……………いい迷惑だ。」吉田は笑ったが、苦い笑いだった。

「ああ。お前の筋がいいことは知ってるし、見くびったところ

で、得るものなんて何も無いしな。ああそれと。」

「あ？」

「こいつは」清水を親指で指差した。

「ここに一般人が立ち寄ることのないように、『感情操作』してるからな？この近くに来ると、急に帰りたくなるように操作してるから、誰も来れない。どうだ？被害者がなくて万歳だろ？だから、間違ってもこいつを攻撃するなよ？清水も攻撃しないことを誓う。」

それを聞いて、吉田の笑いはさらに苦くなる。

「被害者が出ないと言うより、助けが来ないようにしたんだろうが。まさか殺しまでさせるつもりなのか？だったら今すぐ断る。」

「火術師としての力を奪うだけさ。だがその過程でもしかしたら、私の手が『滑る』かもしれないだけさ。」

「言ってくれるな…この戦闘狂いが…ッ！」

清水の部下の一人が後藤との戦いをすり抜け、斬りかかってきた。

相手にこちらの短剣に触れることすら許さず、蹴りを入れて、突き放す。

ただだ、と音がして上久保が突進してくる。

「！！」吉田が、上久保の一振りを二刀流で止めた。

上久保は力みもせず、声も出さず、無言で頭をめがけて次々と刀を振るう。

受けることすらできず、吉田は避けることに専念する。

刀が空を切る音がいやというほど聞こえてきた。

「っと！」上久保は足蹴りも入れてくる。吉田がかわす。上久保は全く休まず、次々と蹴りと突きを入れてくる。

「！」吉田が壁際に追いやられた。

バキン！！と音がして、上久保の剣が吉田に蹴られた。そしてあるうことか、天井に突き刺さる。

「ム！」上久保は吉田の上がった脚を掴むと、プロレス技より

更に軽々と投げ飛ばした。

「ほっ、ほっ。」吉田は背中を丸めて首を経由して、地面を転がって一回転して立ち上がる。全く無傷のようだ。

「なるほど。」上久保は天井から刀を抜いた。

「流石だな？　なかなかダメージを与えられない奴は久しぶりだ。」

「どーも。」吉田はぺつと、唾を窓から吐いた。

後藤が後方で一人を倒し、1対2となっているのが見えた。

「さて。」上久保がチャキツと刀を構える。

「今度は踊ってばかりもいられないよ。」上久保が再び突進してくる。

「少しは休ませろよな……」

ガキン！バキン！と激しい金属音がした。

「ぬおっ！」上久保は脚めがけて刀を振るったかと思えば、ジャンプしてかわした所を腹めがけて突きを入れてくる。仕方なく、両剣で受けるが、手が痺れた。

「フヌツ……」上久保が刀を一旦寝かせ、突っ込んで来た。

「チツ……」吉田は刀に構わず、上久保の腹部めがけて短剣を滑らせる。

上久保はサツと避けて、飛び上がり突きを入れる。左の短剣で受け、右の短剣で頭部を狙う。

「甘い！」上久保は一連の動作を読みきっていた。

頭を引っ込めてかわすと、頭突きをしてきた。

「！！」意外な行動に動きを止めた吉田の腹に上久保の頭突きが入った。

「ぐっ……！！」

上久保の背中めがけて短剣を振り下ろすが、上久保は後ろに跳躍して、あっさりとかわした。

「痛いかい？」嘲笑うように上久保が言った。

「ピンでもつけときゃよかったか？　鳩みそに入らなかったのは残念

だ……。」

「やってくれるな、全く。」吉田は腹を押さえていたが、立ち上がった。

ズキズキという痛みは徐々に退いていたが、隙が出来やすくなっていた。

「さあて、回復しちゃう前にどんどん行こうか。」

「く……………」吉田は上久保が突進してくるのを見て、無理矢理自分を奮い立たせなければならなかった。

激しくぶつかり合う金属音が校舎中に響いていたが、誰も三階に姿を現す者はいなかった。

## CHAPTER 9 4 狙い通り（前書き）

こんにちは、川田です。

今年も残すところ、今日を入れて3日になりました。皆さんにとつて2010年はどんな年ですか？僕はなかなか嫌な年でした（笑）

さて今話も急展開となっており、術師の戦いが激しさを増して行きます。

非日常と日常が入れ替わってしまうのではないか…

なんてね（笑）

大富豪同好会の活動が徐々に全校へと知れ渡ることになります？

てな訳で今話を読んでくださってありがとうございますm（

）m

「3年A組教室」

「やけに賑やかだな。俺達以外にもケンカしてるやつがいんのか？」

「吉田君と後藤君だ。」小橋は窓から教室の外を見て言った。

「何？お前の味方か？」小林は変術師に聞いた。

「……………違う。」

「お前の単独行動か？」……………ああ。」

「ほう。ではなぜ俺らを狙った？俺は一般人だぞ？いきなり斬りつけてきたからには気分で、なんて言ったらそれこそお前を障害者にしてやるからな。」

「……………命令された。写真がある。」

「あ？」

「襟の裏だ。」

「気をつけろよ。」小橋が割り込んできた。襟の裏に猛毒が塗ってあるかも知れん。」

「なるほど、なら。」小林は変術師の腕を捻ったまま持ってきた。

「何か言い換えることはあるか？」

「ない。」少々イライラした声であった。

小林が写真を取り上げた。

「なんだこれは。」

「依頼主に頼まれてお前ともう

一人を殺せと言われたが……………」

「言われたが？」

「逆探が聞かない電話ごしにだ。依頼料は家の郵便受けに直接入れられていた。」

「だが、失敗したわけだな？依頼主は知らんと。じゃあ用無し

だな。」

小林は変術師の首にナイフを少し刺した。変術師は微動だにしないが、血が滲んだ。

「始末するか。」小橋は鼻を鳴らした。

「だが」

「？」

「変身の力を無くさせるだけでいい。こいつの場合、どうやって周囲の景色に同化しているか分かるか？」

「分からないな。だが、大抵の場合は頭に猛打撃を与えて記憶ごとしばらく飛ばすのが一番よからうな。」

「そうか。そうと決まれば。」小林は襟首を掴んでひっくり返させた。

「小橋、邪魔が入らぬ内に早く。」

「やめろ！！！」怒声が響いたが、変術師は全く動けなかった。

ボコツといやな音がして、変術師は頭から血を流してのびていた。

「死んでないよな？」

「ああ、こめかみを触れば分かる。」

小林は触れてみた。動いている。

「こいつを引きずりだそう。まあ、廊下の交戦が終わってからだな。」

「助太刀に行かないのか？」小林が驚いたように聞いた。

「彼らは1対1や1対3の方が殺りやすいんだよ。味方の事を案じなくて済むからな。」

「へえ〜」

「だから、しばらくは待機。ベランダから飛び降りるなら話は別だが……………ん？」

今までに聞こえなかった、叫び声が唐突に聞こえてきた。

「……………」小橋は静かに移動し、教室のドアの小窓から外を見た。

「しまった！……！」

「えっ？！」

「鈴木君を忘れていた！！」

―3階廊下―

「又アアッ！！」気合いの掛け声と共に、高く跳躍して、踵落としを仕掛ける吉田。上久保はそれを腕を交差させて受け止めると、蹴りあげようとする。

吉田が自由な右手でそれを止める。上久保は構わず脚で押すようにして突き飛ばそうとするが、やや後退しただけで吉田は停止。タタツ、と上久保は間合いを再び詰め、斬りにかかる。吉田も避けようとせず、日本の短刀でお互いに切りあいになる。

ガキン！！ガキン！！と激しい金属音が響いていた。

「フム。なかなか扱いづらいな、短刀相手も。」上久保は一旦退いた。

「近づきたいが、短刀の斬撃範囲に入るのは厄介だな。」

「だろうな。」

「この刀も重いからな。体力的にはこちらが危ない。」

「あつそ。」

「だからこそ、お前は私を寄せているんだろ？自ら間合いを埋めないから気付かれないと思ったたら大間違いだ。」

「……………」

「とは言っても」上久保は刀を見つめた。

「こいつの斬撃範囲に入らなきゃならないからな？肉を切らせて骨を絶つ、か……………」

「お前らの目的はあくまで監視だろ？一時休戦にしないか？僕が嫌々戦ってるのを知ってんだろ？」

「遠回しに『自分は本気を出していない』とでも言うつもりか？どちらにせよ、『まだ』退かない。」

「まだ？」吉田が顔をしかめた。

「ああ。」上久保は一瞬後藤に対して2人でかかる清水の手下を見た。

「決まった時間に報告せねばならんなのでな。」

「お前らって組織化してたっけ？」吉田が嘲るように言った。

「黙れ。」チャツと刀を吉田に向けた。

「結束力や団結力はこの際関係ない。個々人が実際に戦う以上、私が強ければなんの問題もない。」

「浅はかだな。」吉田がせせら笑った。

「理論武装によつて自分を保身する。要は現実から目を背けるつて訳だ。」

「お前に言われたくないな。下手物にしか興味のないオタクに。」

「

上久保が言うと、吉田の目が殊更に冷たくなった。「オタクを見下す一員か。ではオタクに前回踏まれ、斬られ、蹴られ、殴られ、拳げ句の果てに殺されかけたお前は一体なんなんだろうな？」吉田がそう言つて嘲笑する。

「だから」もう上久保は喋るよりも武力に物を言わせようとしていた。

「お前に復讐に来た。」刀を握りしめる。

ダダダと走り出した。

「ほうほう、厄介だね。」吉田は待ち構える体勢を取った。

「ハアッ！！」気合いの掛け声と共に上久保が刀を降り下ろした。吉田が右剣で軽く受け止め、左剣で刺そうとする。だが。

上久保は次の瞬間、刀を振り回すように、楯円を描きながら力任せに叩きつけ始めた。さながら剣道未熟者が竹刀を振り回すのに似ていた。

だが、上級者たる上久保がやるからこそ、吉田は完全に不意をつかれた。

「おつとつと、つと、つと、つと――！」

吉田は後ろに跳躍するが、上久保は走りながら振り回すという、自分もなかなか危なげな行動を取りながら攻撃してくる。

「このつ――！」壁際に追い込まれて、吉田もかなりの大振りに対応せざるを得ない。

より激しい金属音が響き渡った。

「フム。たまには、こういう大振りみ悪くない……な！」

吉田の短刀が弾かれた。

「――！！！」

「そこ――！」上久保は空いた左手目掛けて刀を振る。吉田が、右剣で庇う。

狙っていたかなように上久保は右腕を空いている左手でつかんだ。

「――！」右腕を引っ張る。そして襟首を掴んで、吉田を有らん限りの力で投げ飛ばした。

「危なっ――！！！」吉田が受け身の体勢を取って事なきを得たが、剣を再び拾い上げた時には息を切らしていた。

「ハッ。私の投げに転がらないのか。流石だな。」 「なん

だその余裕は。まったく、気に食わないな。」

「私はただ誉めただけだぞ？それを……………」

それ以上、言葉はいらなかった。

吉田は一瞬なぜ、上久保が話すのをやめたのか本気で分からなかった。だが、事態に一瞬遅れて気が付いた。

清水の手下2人と戦う、後藤。目を瞑り、手を前で胸の合わせで何かを唱える、清水。後藤に倒され気絶するもう1人の手下。吉田と対峙する上久保。それ以外に動くものがあつた。いや、今まで居たのにまるで気が付いていなかった。

上久保はこれまでにない勝ち誇つた表情を浮かべていた。

鈴木が目を覚ました時には、周りには誰もおらず、しかし見知つた顔が日常ではありえない行動をしていた。

吉田が何者かと交戦している。

よく見ると、少し離れた所で小柄な少年も2人を相手に戦っている。

さらによく見ると、吉田が対戦してる相手は自分を斬りつけた相手……………」

「ッ……………」傷口がじわりと傷んだ。  
起き上がった。

途端、吉田とその対戦相手の動きが止まつた。それも数秒、対戦相手がこちらに向かって突進してきた。

「逃げる隆徳！！！」どこからか小林達也の掛け声がした。

「えっ……………」

気がつくと対戦相手が目の前に居た。日本刀を振り上げて。

「！！！！！」

「隆徳！！！」

ザバツ！！！！！！！！！！

嫌な音と共に何か覆い被さってきた。痛みはない。だが、又メ又メとした生暖かい何か腹に伝った。

「うおおおおおおあああああああ！！！！！」吉田が吠えながら、対戦相手に突進し、引き離れた。

覆い被さってるものは一向に動かない。

「!」どかしてみようとして気付いた。

小林だった。

脚から尋常でない出血を起こしている。あまりの出来事に脳が現実として映像を受け入れる事を拒否している。

「ごつつあん! 清水を殺れ!! 助けを呼ぶんだ!!」

「てめえ!! それは無しだと始めに言っただろうが!!」吉田と対戦相手がそんなやり取りをしていたが、そんなことは鈴木には関係なかった。救急車を呼ばねば。

後藤は対戦相手が鈴木に気を向けた一瞬をつき、1人を倒して1対1にもちこみ、ようやく計3人を倒した。

「フッ!」

後藤が投げた氷細工が一直線に凄い速さで清水に向かう。

「このっ！……グッ……！」

「余所見の余裕があるとは見上げたもんだな……！」上久保が氷細工を払おうとしたが、吉田が阻む。

グサッ！

「痛い……！！！」清水の額に当たった。

「……………」ん「清水は一瞬ふらつき、気を失った。

途端、階段を上がる音が大量に聞こえてきた。

「おや？」

「先生、大変です。達也が大怪我をしました……！見てください！」鈴木が訴えた。

彼らの担任、川北先生その人は冷静に小林を見た。

「鈴木君も怪我してますね。救急車呼んだ方がいいかも知れませんがね。」

「そうしてください……！」

「でもどうしてそんな大怪我を……………ああ。」吉田と上久保を一瞥してから頷いた。

階段を上がってきていた3年生達の声も急に止んだ。  
きこえるのは金属音だけ。

小橋が、変術師を引きずりながら後藤、小林、鈴木の元にやって来た。

「誰か殺られたか？！」血を見るなり言った。鈴木が目を見張った。

「お前どこから……………そいつは誰？」

変術師を指差す。

「さて？小林君！」

「大丈夫ですよ。死んではいません。」後藤が脈を取っていた。

「私が小林君を運びましょう。警察と消防署に連絡しときましたので。」

「消防署？……………あ救急車か。」生まれてこの方、救急車など呼んだことのない鈴木が言った。

「いい加減、去れ！」

「誰が！！！」吉田と上久保が激しく戦っていた。

「さ」川北先生は小林をおぶった。

「先生！あれなんなんですか？！」

「助けなくていいんですか！！」それまで固まっていた生徒達が騒ぎだした。川北先生は鈴木と変術師を引きずる小橋を連れて立ち去って行った。

後藤は3年生の前に立ちほだけり、上久保の奇襲に備えた。

「チッ！！！」それから二人は疲れを知らないかのように戦い続けたが、上久保が間合いを取って時計を見ながら舌打ちをした。

「クソッ……………」

「時間か？ちょうどいい。去れ去れ去れ」吉田が嘲笑うかのよう  
に手をふって追い払うふりをした。

上久保は非常階段付近に倒れている清水をむんと掴んだ。  
刀はもう鞘にしまっていた。

「仕方ない。とんずらしてやるよ。」

その一言に吉田がニヤリと笑った。

だが。

階下の声の上久保が反応した。

野次馬ばかりかと思つて階下には誰もいないはずだった。

「そうか。」上久保は清水を放り出し、非常階段をかけ降りた。

「上久保！！！！」吉田が吠えたが遅い。猛スピードで追うが、  
間に合わなかった。

しかし悲鳴も何も聞こえない。

「……………」吉田がゆっくり2階の自分の2年G組教室前にたどり着いた。

「!!!!!!」

「いやっ!!!!」悲鳴がした。

上久保が岩本の背後から首を絞め、刀を突きつけていた。

蛭原と黒澤と金子と海老澤もいるが、4人とも、壁に体を預けていた。

金子に至っては腰を抜かしている。

「動くな火術師。」上久保が言った。

「何が目的だ。」吉田の声には紛れのない怒りが籠っていた。

「取引しようか?」せせら笑って岩本により刀の切っ先を突き付けた。軽く頬に触れた。岩本が足を踏みつけようとした結果、上久保は警戒を強めたらしい。

「武器を捨てろ。」

「断る。」即答。

「貴司……………」岩本が絞り出すように言ったが、上久保が黙らせる。

「時間稼ぎは通用しない。お前の考えはせいぜい膠着状態を続けて時間切れ狙いだろう?見え見えだ。」

「動くな!!」吉田が海老澤に向かって言った。海老澤はこういう体験が始めてではないので、助けを呼びに行こうとしたらしい。そのまま海老澤は凍りついた。

「何が狙いだ。」

「武器を捨てると言ったのだから？」

「……………殺す気か。」

「さあ？急がないと……………」

「いつ……………」岩本の肩に刃をあて、そこから血が伝っていた。

「私は本気だ。早くしろ。」

「貴司……………ダメ……………私は大丈夫……………」

「グッ……………」

「そこだ!!!!!!」

突如、上久保が吉田に岩本を投げた。

「なっ!!!!」抱き止めた。

「貴司!!!!!!」岩本がなぜ叫んだのかほんの一瞬分からなかった。

「ハアッ!!!!」上久保の気合いの掛け声で事態に気付いた。

「!!」吉田は岩本を強引に退かして、短刀で応戦

できなかった。

勢いを殺しきれなかった。ほんの一瞬、事態を把握できなかったミスが最大の皺寄せとなった。

ゴバツ！！！！

文字で表すならこのような音がした。

「くあつ……………！！！！！！」吉田が歯を食い縛る。左脇腹を刀が貫き、切っ先から出ていた。

上久保は刀を一気に引き抜いた。

失血。

一気に気が遠くなり、バタリと倒れた。

「これで終わりだ！！！！！！」トドメを刺そうとする上久保。

が

ポフツ、と音がして上久保の顔に黒板消しが当たった。

「ウエツ、ゲホツ！！」目に粉が入る。鼻から口から粉が入る。立ち往生した。

海老澤はよしっ、と言うと上久保に体当たりを食らわした。目の開かない上久保には防ぎようがない。

「ぐああっ！」

吉田が立ち上がり、逆に背中に短刀をグサリと刺した。

「お前っ！！！」上久保は刀を落としてしまった。

「先生こっちです！！！」

「！」

蛭原と黒澤と金子を先頭に教師達が駆けつけていた。もう勝負はついた。

「くっ！！！」上久保は刀を拾い上げ、微かに目を開けて逃げ出した。

「動くな！！！」先生達が、猛スピードで追って行ったが、上久保は清水を掴み、2階から飛び降りると、一目散に校門へと走っていった。

吉田は動けず、徐々に意識が薄くなっていた。 「貴司！

！死ぬな！！おいつ！！起きろ！！！」

「貴司！！！！目を開けて！！！！貴司いいイイイ！！！！！」

海老澤と岩本の声もはや届かない。吉田の肘から上も完全に床にくっつき、吉田は動かなくなった。

## CHAPTER 9-5

### 狙い通り（前書き）

お久しぶりです。

1か月以上投稿が滞ってしまったこと、申し訳ない限りです。

少なくとも1か月に1話の投稿を心がけていたのに、有言実行できませんでした。

次話からはこのような事が起きないように徹底しますのでどうか  
よろしく願いますm（――）m

「……………」

……………

……………

……………

……………

静寂……………

囁き声が僅かに聞こえる気もする。

「む……………」

寝ていたのだろうか。酷く瞼が重い。無理矢理瞼を開けると真っ白な世界だった。

「は？」吉田は異変に気づき、ガバツと起き上がった。

「痛っ……………」吉田は呻いた。

シャーッ、と音がした。

「吉田君！起きましたか！！」聞き慣れた声だ。

吉田はそれに応える余裕がなく、ベッドに戻った。よく見るとカーテン、天井、脇の棚には水差しや花瓶や、テレビなどが置いてある。

「ごっつぁん……………」吉田は呼びかけた男子を見た。

「いや……心配しましたよ。生きててよかった……地球に生まれてよかった……」

「ここどこ？」吉田は後藤を無視して聞いた。

「病院ですよ。」

「病院……………」

「服を見れば分かります。」

吉田はそう言われて下を見た。入院着を着せられている。

「あれ……………」

「記憶が飛んでますな。刺されたのを忘れたんですか？」そう  
言くと、後藤はどこかへ行ってしまった。

「……………」

校舎。非常階段。2階。人質。戦闘。日本刀。女。…………

「……………」吉田は一気に思いだし、起き上がろうと上体起  
こしのように跳ね起きた。

途端に、脇腹に激痛が走った。

「ぐう……………」改めて刺されたかのような痛みに吉田は起き  
るのを断念し横になった。

「貴司……………」叫び声がした。吉田が振り向くより早く、  
何かが覆い被さってきた。

「むっ……………」

「貴司い……………」よかった……………」よかったよう……………」

よく見ると岩本であった。普段は笑顔に溢れる彼女が安堵から  
か泣いている。その後に、川北先生と後藤が現れた。

「目覚めたようですね。」

「はい……………」僕は気絶してたんですか？」

岩本がガバツと起きて離れた。

「うん……………」とにかく凄く血が出て……………」呼んでも反応がな  
いから、本当に……………」本当に……………」岩本は吉田から目を背けた。

「思い出しました？」後藤が気遣わしげに聞いた。 「断片  
的には。」吉田は目頭を押さえた。

「僕は何時間くらい、意識を失ってた？」

「うーん…………えつと…………80時間くらいですかね？」後藤は悪戯っぽく言った。

「えつ…………なんだって？僕は…………あー、3日も気を失ってたってこと？」

川北先生と後藤が頷いた。

「お陰でクラスマツチ男子と混合はぼろ負けですよ。あんなに欠員を出して勝てたら奇跡ですけどね。」川北先生は苦笑しながら言った。

「あんなに欠員を出す…………？」

「小林君と鈴木君と、小橋君と吉田君です。一体君達は何をしてるんです？全員…………小橋は違うが…………入院するなんて。」

「入院しなかった小橋君も、怪我してますからね。」

「いや…………えつ、小林達が入院？！」

「彼らも重傷ですよ？入院するに決まっていますよ。」川北先生は苦々しく言った。

「えつ…………えつ！」吉田はガバツと起き上がった。途端、激痛に襲われる。

「ぬっ……………」

「落ち着いて下さい。みんな命に別状はありませんから。一番重傷なのは君なんですからね。弁解は後にして下さい。」川北先生は丁寧にはつきりと言いつけた。吉田は罪悪感に溢れた表情になったが横になった。

「まあ、一般人を巻き込んでしまいましたからね。謝らなきゃならんでしょう。私は既に謝りましたが、『自分達が首を突っ込んだことだから』って言ってましたよ。」

「……………そうか……………」

「ご両親には一応本当のことを言いましたが、どうやら何かの刑事事件に巻き込まれたと思ったらしいです。」川北先生は一步下がった。

「目が覚めたなら警察の人が君に話があるそうです……………今す

ぐでも大丈夫ですか？」

「警察……？ああ……あ……大丈夫です。」吉田は顔をしかめた。

「すみません、岩本さん。心配おかけして……」吉田はそう言ったが、顔をそらしたままの岩本は何も言わずに頷いただけだった。

「じゃ、また後で。」後藤が頷き、3人は出て行った。

「……………ごめん、小林、鈴木君、小橋……………」罪悪感が込み上げてきて、自分が情けなく感じられた。

\*\*\*\*\*

「殺しはしてないんだな？」

「はい。生きている確認が取れました。今は 病院で治療を受けています。」

とある、高校の倉庫。長身の女が見える。しかし話し相手は奥にいるためか見えない。

「しかしだな、俺は手を出すな、と言ったはずだが？殺るなら殺るでしっかり始末をつけなかったのは何故だ？中途半端な試みのせいで、警察が動き出してしまったではないか。そこをどう釈明する？」

「殺るつもりでしたが……………思わぬ邪魔が多数入り、止めをさしたと思った一撃を心臓ではなく腹部にもってかれたのです。援軍が集まりつつありましたので、清水も私も逃げるしかありませんでした。」

「よからう。しかし命令違反は命令違反だ。」

「……………」

「主に齒向かうとどうなるか、今一度その体に覚えさせよう。」

「……………」

カチッ。



「ふう〜。」

1時間強の質問が終わり、ようやく横になる。試しにトイレに行くのに立って見たところ腹の激痛は全く癒えていなかったので、諦めて大人しくしていた。

「終わりましたか。お疲れ様でした。」後藤が入ってきた。吉田は天井を見たまま言った。

「ごつつあん、学校ではどうなってる？やっぱり騒ぎになったかね？」 「そりゃあ事件が事件ですからね。話題にならない方がおかしいでしょう。富豪同好会が関わってきたことや、どんな仕事をしてきたか、とかもばれたて思いますね。」

「……………そうか。」

「……………いつかはばれたとは思いますがね。生徒会が黙ってませんよ。棋道部の部費をそんな仕事に使ってたなんて。」

「別に改ざんしてないぜ？何に使ったかを書く報告書に『努力費』って書いたんだから。」

「……………それでよく通りましたね。」

「我らが棋道部の文系の川又君の詭弁には目を見張るぜ。フハハ……………痛っ！」笑った瞬間、腹に痛みが走った。

「全治2か月らしいですよ、傷。」

「なんだと。」吉田は顔を上げた。

「2か月？」

「なんでも大腸を貫通したらしく、完全に塞げる体力も無ければ、費用もない、だとか。吉田君には。」

「しまった……………やべ！とにかくこの痛みがあつたままでも良い

からここを出よう。」 「はあ？何を言い出すんですか。」

「入院費がいくらかかると思ってるんだ。」吉田は吐き捨てるように言った。

「払えるわけ無からう！奴に賠償させることすら不可能だろう。だとすればどうやって捻出できるのだ？バイトもできないのに！！」

「……………そうですか。」 「……………フム。胃を貰かれるのはまた違った痛みだな。」吉田は上体を起こした。

「無理を言ってるのは分かってる。こないだの入院だって、半分も居ないで無理矢理出たんだ。」

「……………そうですね。」 「……………仕方ないさ。貧乏人なのは自分の責任だしね。」

「でも怪我が悪化しますよ……………」

「傷口を無理矢理縫ってもらおう。抜糸も後回しだ。」

「マジですか……………」後藤が苦い苦い笑いを浮かべた。

「ま、前回よりはマシさ。」吉田は軽く言った。前回の怪我は腹を貰われる大怪我で、自分が死んだと思ったほどだ。胃が直るまで何も食べることができず、二次災害的な苦痛に比べれば、痛みだけの今回はまだマシだった。

「さてと。」吉田はふいに起き上がった。

「どうしました？」

「小林達んとこに行く。岩本さんや先生は？」 「帰りましたよ。あんまり寝てなかったみたいで疲れてましたから。」

それを聞いて吉田は顔をしかめた。

「まあ……………過ぎたことです。あとで謝った方が良さそうですね。」

「それで済めばいいけど……………」

起き上がりかけて顔をしかめた。

「ああほら。車椅子で送りますよ。」

「いや、いいよ。」

「ほう？では無理矢理車椅子に座らせることになりますね？今

なら私は負けませんよ。」「後藤はフッフッフと笑った。吉田は呆れたような、困ったような顔をした挙げ句、「お願いします。」と言った。

入院している階が違ったので、車椅子を押してくれたのは幸いだった。

小林と鈴木はそれぞれ包帯をしているだけで、寝転んで漫画を読んでいた。

「よう、貴司。」小林はこちらを見たあと、また漫画に目を戻して言った。

「ん……いや二人とも無事？痛みは？」

「自分より重傷な奴に言われるとはな。」「小林がクツクツと笑った。

「いやそりゃそうだけどさ……二人とも本当にごめん。変なことな巻き込んだじゃって。」「吉田の珍しく殊勝な態度に面喰らったのか、小林は呆氣にとられた顔をしている。対して鈴木は二カツと笑った。

「気にしてないけどさ。教えてほしいな。犯人は誰で、何のために俺らを殺そうとしたのか。警察に聞かれても、分かりませんか言えなくて、怪訝な顔されたぜ。」「

「いや貴司が、何でも屋みたいな活動してんのは知ってつけどさ。いくらなんでもありやなんだ。お前敵居すぎじゃね？」小林が言うと、吉田は苦笑した。

「商店の客取り合戦みたいなもんかな？鈴木君を襲ったやつはその一人だ。」

「なんでまた俺なんかを。」

「僕を黙らせるためだろう。」吉田が言った。

「暴力団と同じ手口でさ。標的を攻撃し復讐したりするのに、家族や友達を攻撃するんだよ。あの場に、鈴木君が居るのに戦い始めたのは迂闊だった。鈴木君を人質にとめることは目に見えていたのに。」

「……………」

「だから、あんまり奴らと関わりあわせたくないから、なるべく目立たないようにしてるのさ。二人が殺されでもしてみろ、僕は二人の友人や家族にどんな顔をして謝ればいいのか、想像もつかないよ。だから今回の一件だけで……………」  
「手を引けてならお断りだ。」小林が素早く遮った。

「悪いが、俺は俺で復讐したいんでね。『交渉より報復を』だ。」

「いや逆だろ……………」

「だから貴司がどう思おうが、感じようが知ったこっちゃない。と言うわけで、詳しく教える。名前やら、住所やら。」

「……………本気か。」

「無論。」

「……………」吉田は振り替えて後藤を見た。後藤は肩をすくめて首を傾げて見せた。鈴木も小林も真剣な顔だった。

「少し、考えてみるわ。これは僕達だけの問題じゃないからね。」

「吉田がそう言う二人は顔を見合せ、不満そうな顔をしたものの、頷いて見せた。」

こんにちは。皆さん地震は大丈夫でしたでしょうか？

僕自身は震度6強の災害にあいました。

幸い、命も家も家具も無事でライフラインも昨日復旧しまして、日常にいち早く戻ることができました。

しかし東北の方たちが日常に戻るにはまだまだ日数がかかるかもしれません。

しかし日本人全員の力を合わせればこの困難を乗り越えられると思います。

皆さん、心を一つに！！思いを一つに！！

被災された皆様には心からのお見舞いを申し上げますm（――）

m

―病室前―

小林達に全てを語った吉田と後藤は病室に戻ってきていた。

「あーあ、こんな厄介なことになるとは……………」話し疲れたのか、ついぞそんな愚痴が吉田からこぼれた。後藤は苦笑しながら言った。

「さすがに奇襲してくるとは思っていませんでしたからね。」

「控えめに活動してたのに、その努力も水の泡だね。」

「……………ですね。」

「あ、居た……………」

「始めから部申請して部費を受けとれば……………って、ん？」

吉田が愚痴っていると声がした。

「こつち……………」

「あ、蛭原さん？」

病院の窓から強力な夕陽が射し込んでいたために目に入らなかつたらしい。

「怜衣ちゃん……………」

「ん？美樹？どうかした？居た？」聞き覚えのある声がした。

「あ……………貴司！！」

「岩本さん？」吉田はややうんざりした声を出した。後藤が車椅子を回して二人に向き直った。

「貴司……………具合は？」

「微妙です。」吉田がいった。

「何もしなければ痛くないんですが、立って歩くと痛みます。」

「それって、微妙なの……………？」蛭原が顔をしかめた。

「そうかそうか。それは重傷だ。」

「……………」吉田と後藤が絶句した。

長身の男が岩本の後ろに立っていた。

「やあやあ？ 久しぶりだね。」

「あなたは…… 岩本さんのお父上！」 後藤が目を見開き、頭を下げる。吉田もほぼ同時に頭を下げる。

「いやあ、そんな畏まらんでも。むしろ、お礼とお詫びを言わなければならぬのはこちらですからな。」 岩本の父たる岩本浩二はすかずかとこちらに歩み寄り、突然土下座した。

「すみませんでした！！ 娘の命を守ってくれたお相手にこのような深傷を負わせてしまい！！ すみません！！」

吉田と後藤はびっくり仰天した。

「いやいやいや、悪いのは僕です！ 岩本さんを巻き込んだ張本人が助かって岩本さんに何かあつたらそれこそ……」

「そうです。ですから顔を……！！」

「いや！！ 君達に申し訳がたちません！！ 聞くところによると君達の他にも何名かの生徒にご迷惑をおかけしたとか……」

「違います！！ 発端は自分たちですから……！！」

岩本浩二はようやく顔を上げた。病院廊下の遠くで看護婦や患者達がじろじろ見ている。

完全な土下座で心からの謝罪だということがよく分かった。ほうつておいたら腹を切るかもしれない。

「分かりましたから、やめて下さいよ。やめてくれないなら許しません。」 吉田がフツフと笑って言った。後藤も頷いた。

ならば、と岩本氏は立ち上がった。

「君は入院費を工面できないのではないかね？」

「……………」 吉田は苦り切った顔になった。蛭原が割り込む。

「貴司君自身が言っただことじゃない。後藤君に。」

「立ち聞きしてたんですか？」

「そんなこと…… 後藤君が教えてくれたの……」 蛭原が赤くなりながら答えた。

「いつの間に？」吉田が顔をしかめて後藤を振り返った。

「ポケットの中で携帯を操作しました。」悪びれる様子を見せない。吉田は相変わらず器用な後藤の手口に呆れつつも感心したようだ。

「そこでだ。」岩本氏が言った。

「娘を助けてくれたのは原因が何であれ事実だ。私が君の治療費を負担しよう。」

「いや、それは。」吉田は首を振った。

「受け取れませんよ。それでなくとも岩本さんには会費として依頼をしてくれてるんですから。今回は自業自得ですから、受取る理由がないじゃないですか。」

「君、君。」岩本氏は首を振った。

「理屈がどうこうではないのだ。私は大人としても、言っているのだ。子供はそもそもお金の心配なぞするもんじゃない。君が苦勞してきたことを考えれば尚更だ。」

「今までの苦勞があつたにしても、それは岩本さんには責任はないんですよ？学校にもいけなくなりますし……」

「入院から通院になるのはそうかからんと思う。今無理して傷をひどくしたら、それこそ皆に迷惑だ。」

「そうは言っても……」

「だああ、聞き分けのない子供だ。怜衣！」

「うん。」岩本が進み出てきて吉田にナイフを突きつけた。

「何の真似ですか？」

「受けとるって言つて。じゃなきゃ、目を刺すよ？」

「脅迫とは手が古いですよ？岩本さん。」吉田は岩本を冷たく見返すだけ。

「お辞儀するだけでいいから。」

「断ります。」

「じゃあ、えいつ。」柄を突如、傷口に押し付けた。

「痛っ！」不意をつかれて、吉田は思わず体を曲げた。

「よし、お辞儀した。」

「えっ？ いやいや岩本さんが無理矢理させたんでしょ！」

「なんで？ あたしは目を刺すつもりだったのに、手が滑ってお腹を押しちゃっただけだよ？ 見てたよね、後藤君。」

「はい……見てました。」

「笑いを堪えてんじゃねえよ！ 貴様どっちの味方だ！」

「まさか吉田君ともあるう者が約束を破るのかね？」 岩本氏が顎髭を撫でながら言った。

「顧客との約束は遵守だろう？」

「ニヤニヤしないで下さい！！」

「貴司君がそんな人だったなんて……」 蛭原が芝居がかった仕草で俯いた。

「小林君達に言わないと……私そんな人の隣に居られない……」

「だああ！！ 分かりましたよ、お辞儀しました！ しましたから

！！」

吉田が頭を振った。

「そうと決まれば、早速受付に行ってしまうおう。いや、礼はいらない。じゃあ後藤君、吉田君を任せたよ。」 岩本氏はさっさと行ってしまった。

「さあ戻りますか。」 後藤が回り込んで車椅子を押した。

「なあ、ごつつあん。」

「はい？」

「普通に歩ける、という造作をするまでにどれくらいかかると思う？」

「うーん、そうですね、1週間くらいじゃないですか？」

「そんな早くはないよ。」 岩本が横から言った。

「歩けるようになっても病院は絶対、外に出したりしないよ。

それで悪化したら意味ないでしょ。」

「……………確かに。」 渋々吉田が頷いた。

寝室に辿り着くと、吉田は自力で立ってみた。

「やっぱり痛いな……どっちの足に体重かけても変わらない。」

「……その重傷ですからね。」

「ごつつあん、同好会の方は任せるよ。」

「え……」

「え……じゃないだろ！僕も副もないんだから、ごつつあんがまとめい！」

「分かりましたよ。」それを聞くと吉田は横になった。

「歯痒いな……僕らの留守を狙って、ということになるかもしれないからね……」

「……警戒は十分にします……」

「……今何時？」

「6時過ぎです。」後藤が答えると、吉田は窓を見やった。

「少しまだ明るいな。ごつつあん、明日からは来なくて大丈夫だよ。」

「えっいいんですか？」

「同好会の仕事がありすぎるよ。僕は一人でも大丈夫だからさ。」

「あの。」唐突に声が上がった。吉田と後藤は声のした方を向いた。

「もし良かったら、私が……私が色々と貴司君の荷物をお届けします！」

「えっ……でも蛭原さんには部活があるでしょう？」同じバド部員の後藤が言った。

「早めに切り上げるくらいなら……」

「僕は、蛭原さんにそうしてらう理由がないように思いますね。」

「吉田が言った。」

「蛭原さんに迷惑がかかるじゃないですか。」

「私はそんな……迷惑だなんて……！」

蛭原が手を振った。と急に思い出したように言った。「そ

れに、私貴司君の隣の席だし、先生に言われたし……！」

「手伝ってもらったら、貴司？」

「そうですね…… 蛭原さんが悪くないと言ってくれたら、私も助かりますしね……」後藤が頷く。

「助けが必要な時は助けてもらいなよ。」岩本が言った。

「…………… 本当がいいんですか、蛭原さん？」吉田が言った。

「私は全然……………！役に立てて嬉しいです。」蛭原はやや顔を赤らめて言った。 「本当にありがとうございます。必ずご恩に報いるようにしますね。」吉田は徐に立ち上がり、深々と蛭原に頭を下げた。

「そんな……………！」蛭原があわてて手を振り、岩本がじゃこれで、と言って無理矢理蛭原を病室から連れ出した。

―学校―

「血の跡が凄いな……………」

「色が変色してるからまだマシだよ…………… 見るんじゃないかったかな。 あんな真っ赤な血の海を見なきゃよかった。」バド部のジャージを着た三次が言った。

「そうだね…………… あれ消えないのかな？」松本が廊下の一角を差した。黄色いテープが張り巡らされ、立ち入り禁止になっていた。

「消せるには消せるんじゃないかな？でも時折警察の人達が居ることを考えると、やっぱり消しちゃダメなんじゃないかな？」

「…………… 吉田くんの血なんだよね？」

「うん……………」

「……………」

「……………」

「大丈夫だよ、志穂らしくないなあ、無事だつて聞いているじゃない！―」

「そうなんだけどね、貴司君にしても、弘毅君にしても、危な

いことに関わり過ぎるんだよ。麻衣は心配じゃないの？」松本の方を向きながら三次が言った。

「……………弘毅の場合は吉田くんと違って無鉄砲な所があるからね…………心配だけど今は無事だから、これに懲りて、と願っちゃうかな。」怪我してるのに、それを喜んでるみたいでいまいちだけど、と松本は苦笑する。

「……………」三次は黙って血溜まりの跡を見据えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1122g/>

---

大富豪同好会の軌跡

2011年10月5日18時44分発行